秋田県文化財調査報告書第310集

江原嶋1遺跡

――県営ほ場整備事業(北阿気地区)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書――

2001・1

秋田県教育委員会

江原嶋（えばらじま）１遺跡

――県営ほ場整備事業(北阿気地区)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書――

２００１・１

秋田県教育委員会

1　江原嶋１遺跡遠景（南東から）

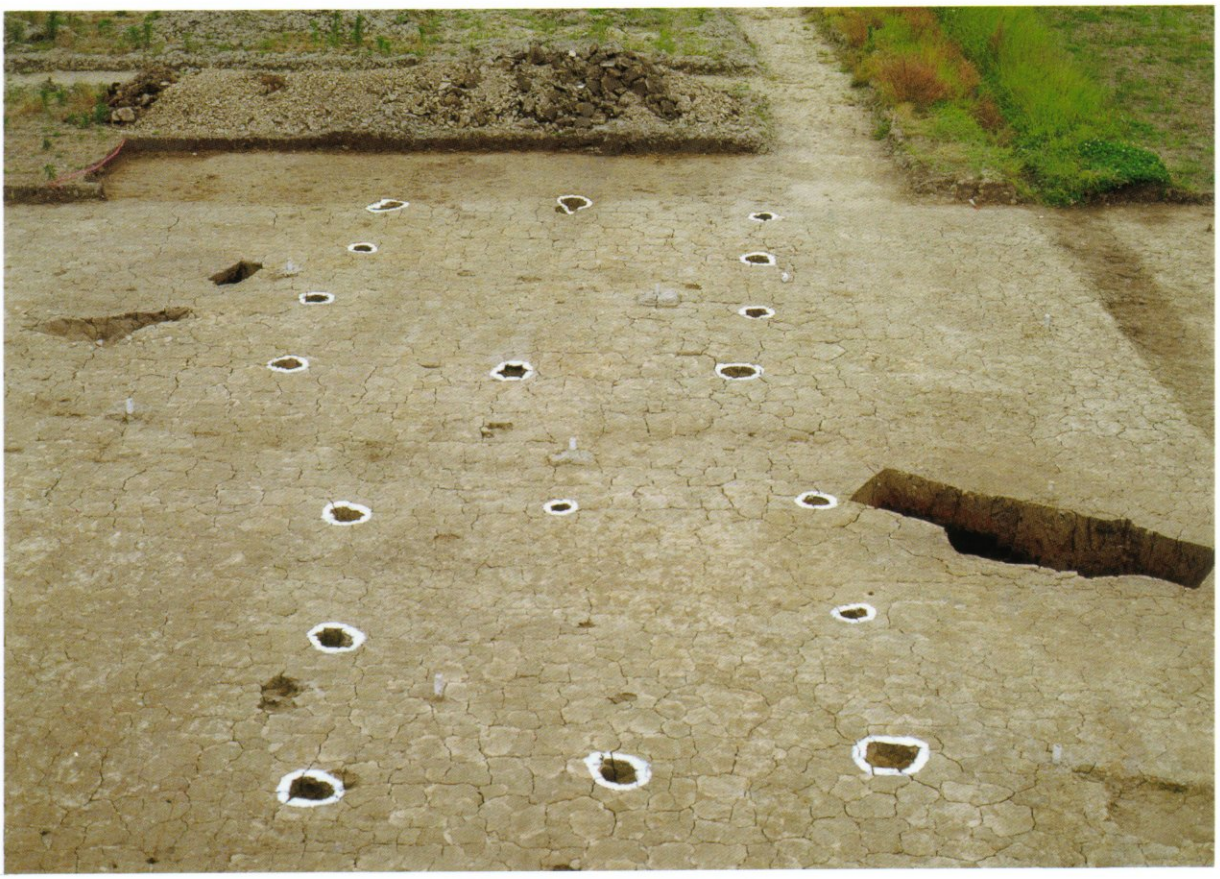
2　江原嶋１遺跡近景（東から）

1　江原嶋１遺跡調査区（上が北北西）

1　SK 1017(左)・SK 1044(右)土層断面（南西から）

2　SK 1127確認状況（北から）

1　調査区中央北側の掘立柱建物跡群（南東から）



2　SB23（奥）・SB24（手前）（北から）

序

秋田県ではこれまでに約4,500箇所の遺跡が発見されており、先人の尊い遺産である埋蔵文化財が豊富に残されています。「最良の予言者は過去である」という言葉がありますように、これらの埋蔵文化財は、歴史や伝統文化を理解し、未来を展望した豊かな郷土文化を創造していくうえで欠くことのできない大切なものです。

いっぽう、農業分野においては、農業を取り巻く内外の厳しい情勢に対処するために経営規模拡大を軸とする基盤整備が急務となっており、ほ場整備事業の推進によって農業経営のさらなる効率化が求められていることは言うまでもありません。

本教育委員会では、従来より県内各地のほ場整備事業にあたり埋蔵文化財の保護と地域振興との調和に鋭意取り組んでまいりました。

穀倉地帯として知られる県南部の平鹿郡大雄村では、その一環として、江原嶋１遺跡の発掘調査を実施いたしました。大規模調査の結果、平安時代の建物跡や溝跡、土器溜などの遺構と当時の遺物が数多く見つかり、古代における村の全体像が明らかになりました。さらにその下層からは縄文時代の土坑墓や多くの土器・石器、祭祀に関わる遺物などを発見しました。これらの遺構や遺物は、この地域の歴史を解明するうえでたいへん貴重な資料です。

本報告書は、発掘調査成果をまとめたものです。本書がふるさとの歴史資料として広く活用され、郷土への誇りと埋蔵文化財愛護の一助になることを願ってやみません。

最後になりましたが、発掘調査ならびに本報告書の刊行にあたり、御援助、御協力いただきました秋田県平鹿農林事務所(現、平鹿総合農林事務所)、大雄村、大雄村教育委員会、大森町教育委員会、雄物川町教育委員会はじめ関係各位に心から謝意を表するとともに発掘作業、整理作業に参加された多くの方々の労苦に感謝します。

平成13年１月

秋田県教育委員会

教育長　小　野　寺　清

例　　言

1．本報告書は、県営ほ場整備事業(北阿気地区)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．本報告書は、平成10年度に調査した秋田県平鹿郡大雄村字東阿気所在の江原嶋１遺跡の調査成果を収めたものである。

3．江原嶋１遺跡の調査成果については、既にいくつかの発表・報告等を行っている。が、いずれも調査・整理の途中段階でのものであり、本書の記載内容と相違がある場合は、本書が優先するものとする。

4．執筆は以下のように分担した。第１章・第２章第３節・第３章(第４節の２を除く)・第４章第３節・第６章「江原嶋１遺跡における古代集落について」の項は吉川孝、第２章第１節・同第２節は佐々木政任、第３章第４節の２・第４章第１節・同第２節・第６章「縄文時代の遺構・遺物」の項は榮一郎である。また、第５章第１節は五十嵐典彦氏(秋田県立秋田工業高等学校教諭)による。編集は吉川孝と榮一郎が行った。

5．土層断面図等の土色の表記は、農林水産省農林水産技術会議監修財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』に拠った。

6．本報告書に使用した地形図および地勢図は、国土地理院発行200,000分の１地勢図「秋田」「新庄」、同50,000分の１地形図「大曲」「浅舞」「六郷」「横手」、同25,000分の１地形図「角間川」「浅舞」「金沢本町」「横手」および秋田県平鹿農林事務所(現、秋田県平鹿総合農林事務所)提供の工事用図面である。

7．自然科学的分析は以下の機関に委託した。なお、紙数の関係で本文中に引用記述するにとどめた。

テフラ分析 …… パリノ・サーヴェイ株式会社

放射性炭素(^{14}C)年代測定 …… 株式会社　古環境研究所

樹種同定 …… 株式会社パレオ・ラボ

珪藻分析、寄生虫卵・花粉分析、種実同定 …… パリノ・サーヴェイ株式会社

8．本報告書で使用した航空写真の撮影はハイマーテック株式会社に委託した。

9．江原嶋１遺跡の発掘調査における水準測量はミズホ測量設計株式会社に委託した。

10．発掘調査および遺構・遺物の整理にあたって、五十嵐典彦氏、県内の教育委員会・諸機関のほか、以下の方々および諸機関から御指導・御助言を賜った。記して感謝の意を表する次第である(五十音順、敬称略)。

穴澤義功　飯村均　稲野裕介　井上喜久男　今津節生　大庭康時　尾野善裕　加藤民夫
鎌田祐二　亀田博　木村泰彦　久保智康　賈建成　庄内昭男　高橋憲太郎　田中広明　土橋誠
仲野浩　原山充志　平尾政幸　村上伸之　森本朝子　百瀬正恒　八重樫忠郎　渡部均
愛知県陶磁資料館　有田町歴史民俗資料館　北上市立埋蔵文化財センター
京都市埋蔵文化財研究所　長岡京市埋蔵文化財センター　奈良県立橿原考古学研究所
福岡市教育委員会　宮古市教育委員会

凡　　例

1．本報告書に収録した遺構実測図・グリッド配置図の方位は座標北を示す。座標北とMA50における磁北との偏角は、西に7°40′である。

2．層序は、基本層位にローマ数字(Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ……)、各遺構の堆積土にアラビア数字(1・2・3……)を用いた。

3．各遺構・遺物に付している略記号は以下のとおりである。

遺構	SB－掘立柱建物跡	SKP－柱穴	SI－竪穴住居跡
	SA－柱穴列	SD－溝跡	SK－土坑
	SN－焼土遺構・屋外炉	SQ－配石遺構	SR－土器埋設遺構
	SKI－竪穴状遺構	SX－性格不明遺構	
遺物	RP－土器・土製品	RQ－石器・石製品	RW－木製品・木材
	RM－金属製品	RC－陶磁器	S－自然礫
	C－炭化物		

4．グリッド設定による4m四方の方眼区画を「区」と呼称する。区の名称は方眼区画南東の測量杭の名称を以てこれに当てる。

5．遺構番号は面的に調査を行った部分では01、3本の排水路工事対象部分については1001(Ⅰトレンチ)・2001(Ⅱトレンチ)および3001(Ⅲトレンチ)から始まる2桁以上の通し番号を検出順に付した。柱穴は原則として区単位で1から始まる通し番号とし、区名と柱穴番号を組み合わせることで遺構の名称とした。ただし、Ⅰ～Ⅲトレンチ調査では、他の遺構と共通の通し番号を付した。

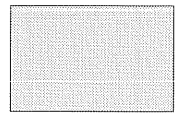
　なお、遺構精査・遺物整理の段階で欠番となったものがある。また、調査の結果、複数の遺構の重複であることが判明した場合、Aから始まる細別記号を付して区分した。

6．本報告書に収録した遺構実測図の縮尺は1／50・1／40および1／20を主としているが、適宜異なる縮尺を用いている。遺物実測図の縮尺は1／3・1／2を主としているが、異なる縮尺も使用した。いずれの場合も、挿図にはそれぞれスケールを付している。

7．挿図中のスクリーントーン、シンボルマークは以下のように使い分けた。これ以外のスクリーントーン、シンボルマークは各図中に凡例を示した。

遺 構	焼土・礫被熱痕			
遺 物	須恵器(断面)		黒色処理土師器	B(処理面に)
	浅い敲打痕		盲孔状敲打痕	

磨面



8．遺構実測図において、複数の遺構が切り合う場合、当該切り合い部分は原則として新しい遺構の形状のみを実線で表現した。また、遺構間の前後関係が不明な場合は、当該切り合い部分は任意の一遺構の推定形状のみを一点鎖線で表現した。

目　　次

巻頭図版 …… i
序 …… v
例言 …… vii
凡例 …… viii
目次 …… x
挿図目次 …… xi
表目次 …… xx
図版目次 …… xxii
付図一覧 …… xxiv

第1章　はじめに …… 1
　第1節　発掘調査に至るまで …… 1
　第2節　調査要項 …… 3
第2章　遺跡の位置と立地 …… 4
　第1節　遺跡の立地 …… 4
　第2節　地理的環境 …… 4
　　1　本遺跡周辺の地形 …… 4
　　2　本遺跡周辺の地質 …… 8
　　3　本遺跡周辺の土地利用 …… 9
　第3節　歴史的環境 …… 9
第3章　調査の概要 …… 22
　第1節　遺跡の概観 …… 22
　第2節　発掘調査の方法 …… 25
　第3節　発掘調査の経過 …… 26
　第4節　整理作業の方法 …… 28
　　1　原則および方針 …… 28
　　2　縄文土器分類と時期区分 …… 28
　　3　古代土器の分類 …… 29
　第5節　整理作業の体制と経過 …… 29
　　1　体制 …… 29
　　2　経過 …… 30
第4章　調査の記録 …… 32
　第1節　遺跡の層序 …… 32
　第2節　縄文時代の遺構と遺物 …… 42
　　1　検出遺構と出土遺物 …… 42

2　遺構外出土遺物 …… 89
第3節　古代以降の遺構と遺物 …… 294
1　検出遺構 …… 294
2　出土遺物 …… 313
第5章　分析結果 …… 498
第1節　江原嶋1遺跡の掘立柱建物跡に関する若干の考察 …… 498
1　掘立柱建物群の配置 …… 498
2　掘立柱建物の規模 …… 498
3　掘立柱建物の検出 …… 500
第6章　まとめ …… 511
縄文時代の遺構・遺物 …… 511
江原嶋1遺跡における古代集落について …… 516
報告書抄録 …… 543
あとがき …… 544

挿図目次

第1図　江原嶋1遺跡の位置 …… 1
第2図　範囲確認調査トレンチの位置と遺跡推定範囲 …… 2
第3図　江原嶋1遺跡発掘調査地点 …… 5
第4図　江原嶋1遺跡周辺の地形 …… 7
第5図　横手盆地の主要遺跡分布 …… 17
第6図　江原嶋1遺跡周辺の遺跡分布 …… 18
第7図　調査区とグリッド設定の方法 …… 23・24
第8図　縄文時代・古代の微高地推定位置 …… 34
第9図　Ⅰトレンチ土層断面(1) …… 35
第10図　Ⅰトレンチ土層断面(2) …… 36
第11図　Ⅰトレンチ土層断面(3) …… 37
第12図　Ⅰトレンチ土層断面(4) …… 38
第13図　Ⅲトレンチ土層断面(1) …… 39
第14図　Ⅲトレンチ土層断面(2) …… 40
第15図　Ⅲトレンチ土層断面(3) …… 41
第16図　検出遺構(1)　(SI1510) …… 91
第17図　検出遺構(2)　(SK1002A・1003・1005・1089、SKP1002B・1090・1091・1092・1093) …… 92
第18図　検出遺構(3)　(SK1008・1010・1011・1097、SKP1006・1160・1161) …… 93
第19図　検出遺構(4)　(SK1017・1018・1019・1044) …… 94
第20図　検出遺構(5)　(SK1030・1040A・1040B、SKP1036) …… 95

第21図　検出遺構(6a)　(SK1043B・1127・1130・1139・1300・1308、SKP1043A・1146・1167・1168・1194) …… 96
第22図　検出遺構(6b)　(SK1043B・1127・1130・1139・1300・1308、SKP1043A・1146・1167・1168・1194) …… 97
第23図　検出遺構(7)　(SK1074・1081・1083・1087、SKP1135) …… 98
第24図　検出遺構(8)　(SK1111・1136・1150・1173、SN1054) …… 99
第25図　検出遺構(9)　(SK1151・1214・1329・1346A・1346B・1347A・1347B、SKP1158・1159・1328) …… 100
第26図　検出遺構(10)　(SK1225・1226A・1228A、SKP1226B) …… 101
第27図　検出遺構(11)　(SK1260・1262・1266・1268、SKP1259・1261・1265・1267・1289) …… 102
第28図　検出遺構(12)　(SK1270・1274・1285A・1285B・1288、SKP1271・1277) …… 103
第29図　検出遺構(13)　(SK1292・1299・1315A・1315B・1358A・1361A、SKP1263・1291) …… 104
第30図　検出遺構(14)　(SK1365A・1365B・1366・1416・1417、SKP1362・1367) …… 105
第31図　検出遺構(15)　(SK1375・1386・1387・1411、SN1376) …… 106
第32図　検出遺構(16)　(SK1393・1441B・1445・1462、SR1441A、SKP1430・1452) …… 107
第33図　検出遺構(17)　(SK1463・1464・1470・1475) …… 108
第34図　検出遺構(18)　(SK1486・1488・1506) …… 109
第35図　検出遺構(19)　(SK1487・1495・1499) …… 110
第36図　検出遺構(20)　(SK1496・1497・1500、SR1570、SQ1491) …… 111
第37図　検出遺構(21)　(SK1512・1521・1582) …… 112
第38図　検出遺構(22)　(SK1527・1538) …… 113
第39図　検出遺構(23)　(SK1540・1541) …… 114
第40図　検出遺構(24)　(SK1562A・1563・1564) …… 115
第41図　検出遺構(25)　(SK1566・1573) …… 116
第42図　検出遺構(26)　(SK1575・1576・1581・1583) …… 117
第43図　検出遺構(27)　(SK3019・3026・3030・3033A・3047、SKP3028・3029・3033B) …… 118
第44図　検出遺構(28)　(SK3037・3038・3040・3049・3054・3072、SKP3086) …… 119
第45図　検出遺構(29)　(SK3058・3064・3071・3076・3077、SKP3080) …… 120
第46図　検出遺構(30)　(SK3084・3092・3099・3101・3108・3109) …… 121
第47図　検出遺構(31)　(SK3111・3121・3127・3128・3139・3140、SKP3110) …… 122
第48図　検出遺構(32)　(SK3145・3151・3153・3155・3156・3157) …… 123
第49図　検出遺構(33)　(SK3165・3173・3177・3179B、SKP3179A) …… 124
第50図　検出遺構(34)　(SK3186・3188・3196・3203・3206) …… 125
第51図　検出遺構(35)　(SR1571・3006・3015・3181、SN1037・1041・3182) …… 126
第52図　検出遺構(36)　(SN1211・1327・1444・3007・3008・3009) …… 127
第53図　検出遺構(37)　(SN3010・3011・3012・3016・3017・3018・3217) …… 128
第54図　検出遺構(38)　(SQ1045・1213・1224・1229) …… 129

第55図　検出遺構(39)　(SQ1384・1483・1530・1531・1532・1533、SKP1385) …… 130
第56図　検出遺構(40)　(SQ3004・3005・3014、SKP1072・3053) …… 131
第57図　Ⅰトレンチ遺構配置(1) …… 132
第58図　Ⅰトレンチ遺構配置(2) …… 133
第59図　Ⅰトレンチ遺構配置(3) …… 134
第60図　Ⅰトレンチ遺構配置(4) …… 135
第61図　Ⅰトレンチ遺構配置(5) …… 136
第62図　Ⅰトレンチ遺構配置(6) …… 137
第63図　Ⅰトレンチ遺構配置(7) …… 138
第64図　Ⅰトレンチ遺構配置(8) …… 139
第65図　Ⅰトレンチ遺構配置(9) …… 140
第66図　Ⅰトレンチ遺構配置(10) …… 141
第67図　Ⅰトレンチ遺構配置(11) …… 142
第68図　Ⅲトレンチ遺構配置(1) …… 143
第69図　Ⅲトレンチ遺構配置(2) …… 144
第70図　Ⅲトレンチ遺構配置(3) …… 145
第71図　Ⅲトレンチ遺構配置(4) …… 146
第72図　Ⅲトレンチ遺構配置(5) …… 147
第73図　Ⅲトレンチ遺構配置(6) …… 148
第74図　遺構出土土器類(1)　(SI1510、SK1044・1081・1127・1130・1136・1173・1214) …… 149
第75図　遺構出土土器類(2)　(SK1225・1226A・1228A・1260) …… 150
第76図　遺構出土土器類(3)　(SK1262・1268・1285A・1288・1292・1300・1308①) …… 151
第77図　遺構出土土器類(4)　(SK1308②・1315A) …… 152
第78図　遺構出土土器類(5)　(SK1315B・1329・1346B) …… 153
第79図　遺構出土土器類(6)　(SK1358A・1361A・1365A・B) …… 154
第80図　遺構出土土器類(7)　(SK1365B・1366・1375・1386・1387) …… 155
第81図　遺構出土土器類(8)　(SK1393・1411・1416・1441B・1445) …… 156
第82図　遺構出土土器類(9)　(SK1462・1463・1464・1475) …… 157
第83図　遺構出土土器類(10)　(SK1486・1487・1488) …… 158
第84図　遺構出土土器類(11)　(SK1495・1496・1497・1499①) …… 159
第85図　遺構出土土器類(12)　(SK1499②・1500) …… 160
第86図　遺構出土土器類(13)　(SK1506①) …… 161
第87図　遺構出土土器類(14)　(SK1506②) …… 162
第88図　遺構出土土器類(15)　(SK1506③・1521・1527・1540①) …… 163
第89図　遺構出土土器類(16)　(SK1540②) …… 164
第90図　遺構出土土器類(17)　(SK1540③・1541・1562A) …… 165
第91図　遺構出土土器類(18)　(SK1563①) …… 166

第92図　遺構出土土器類(19)　(SK1563②) …… 167
第93図　遺構出土土器類(20)　(SK1563③・1564・1566①) …… 168
第94図　遺構出土土器類(21)　(SK1566②) …… 169
第95図　遺構出土土器類(22)　(SK1573・3019・3026・3030) …… 170
第96図　遺構出土土器類(23)　(SK3038・3047・3049・3054・3058・3064・3071) …… 171
第97図　遺構出土土器類(24)　(SK3077・3101・3121・3157・3165・3179B①) …… 172
第98図　遺構出土土器類(25)　(SK3179B②・3196・3203) …… 173
第99図　遺構出土土器類(26)　(SR1441A) …… 174
第100図　遺構出土土器類(27)　(SR1570・1571・3006) …… 175
第101図　遺構出土土器類(28)　(SR3015・3181) …… 176
第102図　遺構出土土器類(29)　(SN1037・1041・1054) …… 177
第103図　遺構出土土器類(30)　(SN1211・1327・1444) …… 178
第104図　遺構出土土器類(31)　(SN3007・3008・3009) …… 179
第105図　遺構出土土器類(32)　(SN3010・3011・3012・3016・3017①) …… 180
第106図　遺構出土土器類(33)　(SN3017②・3018・3182・3217) …… 181
第107図　遺構出土土器類(34)　(SQ1045・1213・1224・1229) …… 182
第108図　遺構出土土器類(35)　(SQ1483・1491・3004・3005、SKP1029・1050・1051・1052・1053) …… 183
第109図　遺構出土土器類(36)　(SKP1061・1075・1116・1296・1302・1307・1309・1310・1321・1323A・1324・1328・1347B・1349・1352・1362・1367・1369) …… 184
第110図　遺構出土土器類(37)　(SKP1392・1400・1402・1408・1409・1414・1420・1424・1429・1432・1440・1442・1443・1448・1450) …… 185
第111図　遺構出土土器類(38)　(SKP1451・1452・1453・1457・1458・1461・1465・1468・1477・1516・1524・1536・1539・1551・1554) …… 186
第112図　遺構出土土器類(39)　(SKP3020・3033B・3044・3050・3053・3063・3086・3100・3133・3158・3161・3187・3189・3198) …… 187
第113図　遺構出土土器類(40)　(円盤状土製品・三角柱状土製品・三角形土製品) …… 188
第114図　遺構出土石器類(1)　(石鏃・石錐・石匙・石篦) …… 189
第115図　遺構出土石器類(2)　(スクレイパー①) …… 190
第116図　遺構出土石器類(3)　(スクレイパー②) …… 191
第117図　遺構出土石器類(4)　(二次加工ある剥片①) …… 192
第118図　遺構出土石器類(5)　(二次加工ある剥片②) …… 193
第119図　遺構出土石器類(6)　(二次加工ある剥片③・石核) …… 194
第120図　遺構出土石器類(7)　(凹石類①) …… 195
第121図　遺構出土石器類(8)　(凹石類②) …… 196
第122図　遺構出土石器類(9)　(凹石類③) …… 197
第123図　遺構出土石器類(10)　(凹石類④) …… 198

第124図　遺構出土石器類(11)　(凹石類⑤) …… 199
第125図　遺構出土石器類(12)　(凹石類⑥) …… 200
第126図　遺構出土石器類(13)　(凹石類⑦) …… 201
第127図　遺構出土石器類(14)　(凹石類⑧) …… 202
第128図　遺構出土石器類(15)　(凹石類⑨) …… 203
第129図　遺構出土石器類(16)　(凹石類⑩) …… 204
第130図　遺構出土石器類(17)　(凹石類⑪・石皿①) …… 205
第131図　遺構出土石器類(18)　(石皿②) …… 206
第132図　遺構出土石器類(19)　(石皿③・台石) …… 207
第133図　遺構出土石器類(20)　(石錘・磨製石斧・砥石・礫器) …… 208
第134図　遺構出土石器類(21)　(石棒・球状石製品・円盤状石製品) …… 209
第135図　遺構外出土土器類(1)　(縄文土器①) …… 210
第136図　遺構外出土土器類(2)　(縄文土器②) …… 211
第137図　遺構外出土土器類(3)　(縄文土器③) …… 212
第138図　遺構外出土土器類(4)　(縄文土器④) …… 213
第139図　遺構外出土土器類(5)　(縄文土器⑤) …… 214
第140図　遺構外出土土器類(6)　(縄文土器⑥) …… 215
第141図　遺構外出土土器類(7)　(縄文土器⑦) …… 216
第142図　遺構外出土土器類(8)　(縄文土器⑧) …… 217
第143図　遺構外出土土器類(9)　(縄文土器⑨・円盤状土製品) …… 218
第144図　遺構外出土土器類(10)　(土偶・三角形土製品・土製耳飾り) …… 219
第145図　遺構外出土石器類(1)　(石鏃) …… 220
第146図　遺構外出土石器類(2)　(石槍①) …… 221
第147図　遺構外出土石器類(3)　(石槍②) …… 222
第148図　遺構外出土石器類(4)　(石槍③) …… 223
第149図　遺構外出土石器類(5)　(石錐・石匙①) …… 224
第150図　遺構外出土石器類(6)　(石匙②) …… 225
第151図　遺構外出土石器類(7)　(石匙③) …… 226
第152図　遺構外出土石器類(8)　(石箆①) …… 227
第153図　遺構外出土石器類(9)　(石箆②) …… 228
第154図　遺構外出土石器類(10)　(石箆③) …… 229
第155図　遺構外出土石器類(11)　(石箆④・打製石斧) …… 230
第156図　遺構外出土石器類(12)　(スクレイパー①) …… 231
第157図　遺構外出土石器類(13)　(スクレイパー②) …… 232
第158図　遺構外出土石器類(14)　(スクレイパー③) …… 233
第159図　遺構外出土石器類(15)　(スクレイパー④) …… 234
第160図　遺構外出土石器類(16)　(楔形石器・二次加工ある剥片①) …… 235

第161図　遺構外出土石器類(17)　(二次加工ある剥片②) …… 236
第162図　遺構外出土石器類(18)　(石核) …… 237
第163図　遺構外出土石器類(19)　(凹石類①) …… 238
第164図　遺構外出土石器類(20)　(凹石類②) …… 239
第165図　遺構外出土石器類(21)　(石皿①) …… 240
第166図　遺構外出土石器類(22)　(石皿②) …… 241
第167図　遺構外出土石器類(23)　(石皿③) …… 242
第168図　遺構外出土石器類(24)　(石錘・磨製石斧) …… 243
第169図　遺構外出土石器類(25)　(砥石①) …… 244
第170図　遺構外出土石器類(26)　(石棒) …… 245
第171図　遺構外出土石器類(27)　(石刀・石剣・不明石製品・有孔石製品) …… 246
第172図　遺構外出土石器類(28)　(球状石製品①) …… 247
第173図　遺構外出土石器類(29)　(球状石製品②) …… 248
第174図　遺構外出土石器類(30)　(円盤状石製品) …… 249
第175図　検出遺構(41)　(SB23) …… 322
第176図　検出遺構(42)　(SB24・57) …… 323
第177図　検出遺構(43)　(SB28) …… 324
第178図　検出遺構(44)　(SB33) …… 325・326
第179図　検出遺構(45)　(SB54) …… 327・328
第180図　検出遺構(46)　(SB55) …… 329・330
第181図　検出遺構(47)　(SB53) …… 331
第182図　検出遺構(48)　(SB56) …… 332
第183図　検出遺構(49)　(SB58) …… 333・334
第184図　検出遺構(50)　(SB59) …… 335・336
第185図　検出遺構(51)　(SB59) …… 337
第186図　検出遺構(52)　(SB60) …… 338
第187図　検出遺構(53)　(SB61) …… 339・340
第188図　検出遺構(54)　(SB82・93) …… 341・342
第189図　検出遺構(55)　(SB62・81) …… 343
第190図　検出遺構(56)　(SB116) …… 344
第191図　検出遺構(57)　(SB135) …… 345
第192図　検出遺構(58)　(SB136) …… 346
第193図　検出遺構(59)　(SB152・153) …… 347・348
第194図　検出遺構(60)　(SB161) …… 349
第195図　検出遺構(61a)　(SI63B、SKI63C・63D) …… 350
第196図　検出遺構(61b)　(SI63B、SKI63C・63D) …… 351
第197図　検出遺構(62)　(SI63B) …… 352

第198図　検出遺構(63)　(SKI64·65) …… 353
第199図　検出遺構(64)　(SK42·43) …… 354
第200図　検出遺構(65)　(SK51) …… 355
第201図　検出遺構(66)　(SK78·94) …… 356
第202図　検出遺構(67)　(SK99·139·140) …… 357
第203図　検出遺構(68)　(SK1065·3055) …… 358
第204図　検出遺構(69)　(SK3191、SN68) …… 359
第205図　検出遺構(70)　(SK08) …… 360
第206図　検出遺構(71)　(SK39、SD01A) …… 361
第207図　検出遺構(72)　(SK35·39、SD01A) …… 362
第208図　検出遺構(73)　(SK25·34、SD01A) …… 363
第209図　検出遺構(74)　(SK05、SD01A) …… 364
第210図　検出遺構(75)　(SK05、SD01A) …… 365
第211図　検出遺構(76)　(SK52、SD01A) …… 366
第212図　検出遺構(77)　(SD01A·B·C·D·92A) …… 367
第213図　検出遺構(78)　(SKP) …… 368
第214図　検出遺構(79)　(SKP) …… 369
第215図　柱穴配置図(1) …… 370
第216図　柱穴配置図(2) …… 371
第217図　柱穴配置図(3) …… 372
第218図　柱穴配置図(4) …… 373
第219図　柱穴配置図(5) …… 374
第220図　柱穴配置図(6) …… 375
第221図　柱穴配置図(7) …… 376
第222図　柱穴配置図(8) …… 377
第223図　柱穴配置図(9) …… 378
第224図　柱穴配置図(10) …… 379
第225図　柱穴配置図(11) …… 380
第226図　柱穴配置図(12) …… 381
第227図　柱穴配置図(13) …… 382
第228図　柱穴配置図(14) …… 383
第229図　柱穴配置図(15) …… 384
第230図　柱穴配置図(16) …… 385
第231図　柱穴配置図(17) …… 386
第232図　柱穴配置図(18) …… 387
第233図　柱穴配置図(19) …… 388
第234図　柱穴配置図(20) …… 389

第235図　柱穴配置図(21) …… 390
第236図　柱穴配置図(22) …… 391
第237図　柱穴配置図(23) …… 392
第238図　柱穴配置図(24) …… 393
第239図　柱穴配置図(25) …… 394
第240図　柱穴配置図(26) …… 395
第241図　遺構出土土器類(41)　(SB28·33·55·58·59·60·61) …… 396
第242図　遺構出土土器類(42)　(SB53·59·SD01A) …… 397
第243図　遺構出土土器類(43)　(SB59·SD01A) …… 398
第244図　遺構出土土器類(44)　(SB59·SD01A) …… 399
第245図　遺構出土土器類(45)　(SB59) …… 400
第246図　遺構出土土器類(46)　(SB59·81·136、SKP) …… 401
第247図　遺構出土土器類(47)　(SI63B) …… 402
第248図　遺構出土土器類(48)　(SKI63C·64) …… 403
第249図　遺構出土土器類(49)　(SKI65、SK99·140·3055·3191) …… 404
第250図　遺構出土土器類(50)　(SN68、SK08) …… 405
第251図　遺構出土土器類(51)　(SK05) …… 406
第252図　遺構出土土器類(52)　(SK05) …… 407
第253図　遺構出土土器類(53)　(SK05) …… 408
第254図　遺構出土土器類(54)　(SK05) …… 409
第255図　遺構出土土器類(55)　(SK05) …… 410
第256図　遺構出土土器類(56)　(SK05) …… 411
第257図　遺構出土土器類(57)　(SK05) …… 412
第258図　遺構出土土器類(58)　(SK25) …… 413
第259図　遺構出土土器類(59)　(SK25) …… 414
第260図　遺構出土土器類(60)　(SK25) …… 415
第261図　遺構出土土器類(61)　(SK25) …… 416
第262図　遺構出土土器類(62)　(SK25) …… 417
第263図　遺構出土土器類(63)　(SK25) …… 418
第264図　遺構出土土器類(64)　(SK25) …… 419
第265図　遺構出土土器類(65)　(SK25) …… 420
第266図　遺構出土土器類(66)　(SK25) …… 421
第267図　遺構出土土器類(67)　(SK25) …… 422
第268図　遺構出土土器類(68)　(SK25) …… 423
第269図　遺構出土土器類(69)　(SK25) …… 424
第270図　遺構出土土器類(70)　(SK25) …… 425
第271図　遺構出土土器類(71)　(SK25) …… 426

第272図　遺構出土土器類(72)　(SK25) …… 427
第273図　遺構出土土器類(73)　(SK25) …… 428
第274図　遺構出土土器類(74)　(SK25) …… 429
第275図　遺構出土土器類(75)　(SK25) …… 430
第276図　遺構出土土器類(76)　(SK25･34･35) …… 431
第277図　遺構出土土器類(77)　(SK35･39) …… 432
第278図　遺構出土土器類(78)　(SK39) …… 433
第279図　遺構出土土器類(79)　(SK39) …… 434
第280図　遺構出土土器類(80)　(SK52) …… 435
第281図　遺構出土土器類(81)　(SK52) …… 436
第282図　遺構出土土器類(82)　(SK52) …… 437
第283図　遺構出土土器類(83)　(SD01A) …… 438
第284図　遺構出土土器類(84)　(SD01A) …… 439
第285図　遺構出土土器類(85)　(SD01A) …… 440
第286図　遺構出土土器類(86)　(SD01A) …… 441
第287図　遺構出土土器類(87)　(SD01A) …… 442
第288図　遺構出土土器類(88)　(SD01A) …… 443
第289図　遺構出土土器類(89)　(SD01A) …… 444
第290図　遺構出土土器類(90)　(SD01A) …… 445
第291図　遺構出土土器類(91)　(SD01A) …… 446
第292図　遺構出土土器類(92)　(SD01A) …… 447
第293図　遺構出土土器類(93)　(SD01A) …… 448
第294図　遺構出土土器類(94)　(SD01A) …… 449
第295図　遺構出土土器類(95)　(SD01A) …… 450
第296図　遺構出土土器類(96)　(SD01A) …… 451
第297図　遺構出土土器類(97)　(SD01A) …… 452
第298図　遺構出土土器類(98)　(SD01A) …… 453
第299図　遺構出土土器類(99)　(SD01A･92A) …… 454
第300図　遺構出土石器類(22)　(SK05･25、SD01A) …… 455
第301図　遺構出土石器類(23)　(SD01A) …… 456
第302図　遺構出土石器類(24)　(SD92A) …… 457
第303図　遺構出土木製品(1)　(SB33･54) …… 458
第304図　遺構出土木製品(2)　(SB54) …… 459
第305図　遺構出土木製品(3)　(SB54･93、SK94･3191) …… 460
第306図　遺構外出土土器類(11)　(土師器・須恵器・かわらけ・陶磁器) …… 461
第307図　遺構外出土土器類(12)　(陶磁器) …… 462
第308図　遺構外出土土器類(13)　(陶磁器) …… 463

第309図　遺構外出土土器類(14)　(陶磁器) …… 464
第310図　遺構外出土土器類(15)　(フイゴ羽口・土錘)・遺構外出土石器類(31)　(砥石) …… 465
第311図　遺構外出土石器類(32)　(有孔石製品・印章)・遺構外出土金属製品(鏡片・銭貨) …… 466
第312図　掘立柱建物配置図(中央部のみ) …… 499
第313図　掘立柱建物柱穴配置(1) …… 501
第314図　掘立柱建物柱穴配置(2) …… 504
第315図　掘立柱建物柱穴配置(3) …… 506
第316図　掘立柱建物柱穴配置(4) …… 509
第317図　古代遺構変遷図 …… 522

表目次

第1表　横手盆地の主要遺跡一覧(1) …… 19
第2表　横手盆地の主要遺跡一覧(2) …… 20
第3表　江原嶋1遺跡周辺の遺跡一覧 …… 21
第4表　縄文時代出土石器類一覧 …… 90
第5表　柱穴一覧(1)　(縄文時代) …… 250
第6表　柱穴一覧(2)　(縄文時代) …… 251
第7表　柱穴一覧(3)　(縄文時代) …… 252
第8表　柱穴一覧(4)　(縄文時代) …… 253
第9表　柱穴一覧(5)　(縄文時代) …… 254
第10表　柱穴一覧(6)　(縄文時代) …… 255
第11表　柱穴一覧(7)　(縄文時代) …… 256
第12表　柱穴一覧(8)　(縄文時代) …… 257
第13表　柱穴一覧(9)　(縄文時代) …… 258
第14表　遺構出土土器類観察表(1) …… 260
第15表　遺構出土土器類観察表(2) …… 261
第16表　遺構出土土器類観察表(3) …… 262
第17表　遺構出土土器類観察表(4) …… 263
第18表　遺構出土土器類観察表(5) …… 264
第19表　遺構出土土器類観察表(6) …… 265
第20表　遺構出土土器類観察表(7) …… 266
第21表　遺構出土土器類観察表(8) …… 267
第22表　遺構出土土器類観察表(9) …… 268
第23表　遺構出土土器類観察表(10) …… 269
第24表　遺構出土土器類観察表(11) …… 270
第25表　遺構出土土器類観察表(12) …… 271
第26表　遺構出土土器類観察表(13) …… 272

第27表　遺構出土土器類観察表(14) …… 273
第28表　遺構出土土器類観察表(15) …… 274
第29表　遺構出土土器類観察表(16) …… 275
第30表　遺構出土石器類観察表(1) …… 276
第31表　遺構出土石器類観察表(2) …… 277
第32表　遺構出土石器類観察表(3) …… 278
第33表　遺構出土石器類観察表(4) …… 279
第34表　遺構外出土土器類観察表(1) …… 280
第35表　遺構外出土土器類観察表(2) …… 281
第36表　遺構外出土土器類観察表(3) …… 282
第37表　遺構外出土土器類観察表(4) …… 283
第38表　遺構外出土土器類観察表(5) …… 284
第39表　遺構外出土土器類観察表(6) …… 285
第40表　遺構外出土土器類観察表(7) …… 286
第41表　遺構外出土石器類観察表(1) …… 287
第42表　遺構外出土石器類観察表(2) …… 288
第43表　遺構外出土石器類観察表(3) …… 289
第44表　遺構外出土石器類観察表(4) …… 290
第45表　遺構外出土石器類観察表(5) …… 291
第46表　遺構外出土石器類観察表(6) …… 292
第47表　遺構外出土石器類観察表(7) …… 293
第48表　柱穴一覧(10)　(古代以降) …… 468
第49表　柱穴一覧(11)　(古代以降) …… 469
第50表　柱穴一覧(12)　(古代以降) …… 470
第51表　柱穴一覧(13)　(古代以降) …… 471
第52表　柱穴一覧(14)　(古代以降) …… 472
第53表　柱穴一覧(15)　(古代以降) …… 473
第54表　柱穴一覧(16)　(古代以降) …… 474
第55表　柱穴一覧(17)　(古代以降) …… 475
第56表　柱穴一覧(18)　(古代以降) …… 476
第57表　柱穴一覧(19)　(古代以降) …… 477
第58表　柱穴一覧(20)　(古代以降) …… 478
第59表　柱穴一覧(21)　(古代以降) …… 479
第60表　柱穴一覧(22)　(古代以降) …… 480
第61表　柱穴一覧(23)　(古代以降) …… 481
第62表　柱穴一覧(24)　(古代以降) …… 482
第63表　柱穴一覧(25)　(古代以降) …… 483

第64表　土器類(坏等)観察表(1)……484
第65表　土器類(坏等)観察表(2)……485
第66表　土器類(坏等)観察表(3)……486
第67表　土器類(坏等)観察表(4)……487
第68表　土器類(坏等)観察表(5)……488
第69表　土器類(坏等)観察表(6)……489
第70表　土器類(坏等)観察表(7)……490
第71表　土器類(坏等)観察表(8)……491
第72表　土器類(坏等)観察表(9)……492
第73表　土器類(坏等)観察表(10)……493
第74表　土器類(坏等)観察表(11)……494
第75表　土器類(甕等)観察表(1)……495
第76表　土器類(甕等)観察表(2)……496
第77表　土器類(甕等)観察表(3)……497
第78表　縄文時代土坑墓一覧……513

図版目次

巻頭図版1
1　江原嶋1遺跡遠景(南東から)
2　江原嶋1遺跡近景(東から)
巻頭図版2
1　江原嶋1遺跡調査区(上が北北西)
巻頭図版3
1　SK1017(左)・SK1044(右)土層断面(南西から)
2　SK1127確認状況(北から)
巻頭図版4
1　調査区中央北側の掘立柱建物跡群(南東から)
2　SB23(奥)・SB24(手前)(北から)
図版1
1　Ⅰトレンチ完掘状況(西から)
2　Ⅲトレンチ完掘状況(南から)
図版2
1　SⅠ1510土層断面(北から)
2　SK1225確認状況(北西から)
3　SK1346B遺物確認状況(北から)

図版 3

1　SK1462遺物確認状況(南西から)

2　SK1487(奥)・SK1499(手前)礫群確認状況(北から)

3　SK1506遺物確認状況(西から)

図版 4

1　SK1538礫群確認状況(東から)

2　SK3037確認状況(南から)

3　SR1441A確認状況(南から)

図版 5

1　SN1444半截状況(北から)

2　SQ1045確認状況(東から)

3　SQ3004確認状況(南から)

図版 6

1　SB53・54・82(南東から)

2　SB54　4号柱穴柱材確認状況(東から)

3　SB55　9号柱穴柱材確認状況(東から)

図版 7

1　SB59・60(南東から)

2　SB59　2号柱穴(右)・SB60　10号柱穴(左)・
　　MI101SKP 9 (中央上)確認状況(北西から)

3　SB59　3号柱穴確認状況(北西から)

図版 8

1　SB59　4号柱穴確認状況(北西から)

2　SB59　4号柱穴半截状況(北西から)

3　SB59　11号柱穴半截状況(北西から)

図版 9

1　SB93・SK94(北から)

2　SB135(東から)

3　SB136(東から)

図版10

1　SI63B完掘状況(北から)

2　SI63Bカマド(西から)

3　SKI65調査状況(北から)

図版11

1　SK51半截状況(北から)

2　SK51完掘状況(北から)

3　SK94礫確認状況(北西から)

図版12

1　SK05(右)・SD01A(左)土層断面(南から)

2　SK25遺物確認状況(北から)

3　SK39(右・左)・SD01A(中央)完掘状況(北から)

図版13

1　SD01A(奥～左)・SD01B(手前)(北西から)

2　SD01(右上)・SD92A(中央～左)(南東から)

3　SA83(中央)・SD01A(左)(南東から)

図版14

1　遺構出土縄文土器

図版15

1　遺構出土縄文土器・土製品

図版16

1　遺構出土須恵器・土師器

図版17

1　遺構出土土師器

図版18

1　遺構出土須恵器・石製品、遺構外出土石製品

付図一覧

付図1　江原嶋1遺跡遺構配置図(1)　(古代以降)

付図2　江原嶋1遺跡遺構配置図(2)　(古代以降)

第1章　はじめに

第1節　発掘調査に至るまで

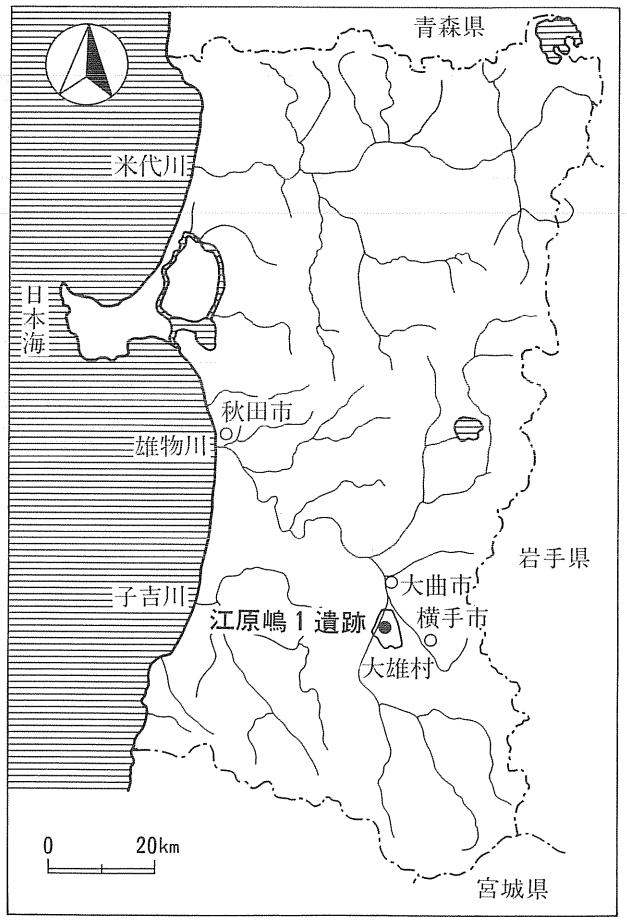
県営ほ場整備事業(北阿気地区)は、水田の規模を拡大して区画を整備し、農業経営の効率化をはかる目的で策定された。当初計画面積は320haである。

秋田県農政部平鹿農林事務所は、工事に先立って、秋田県教育委員会に事業計画区内の埋蔵文化財の有無について調査を依頼した。

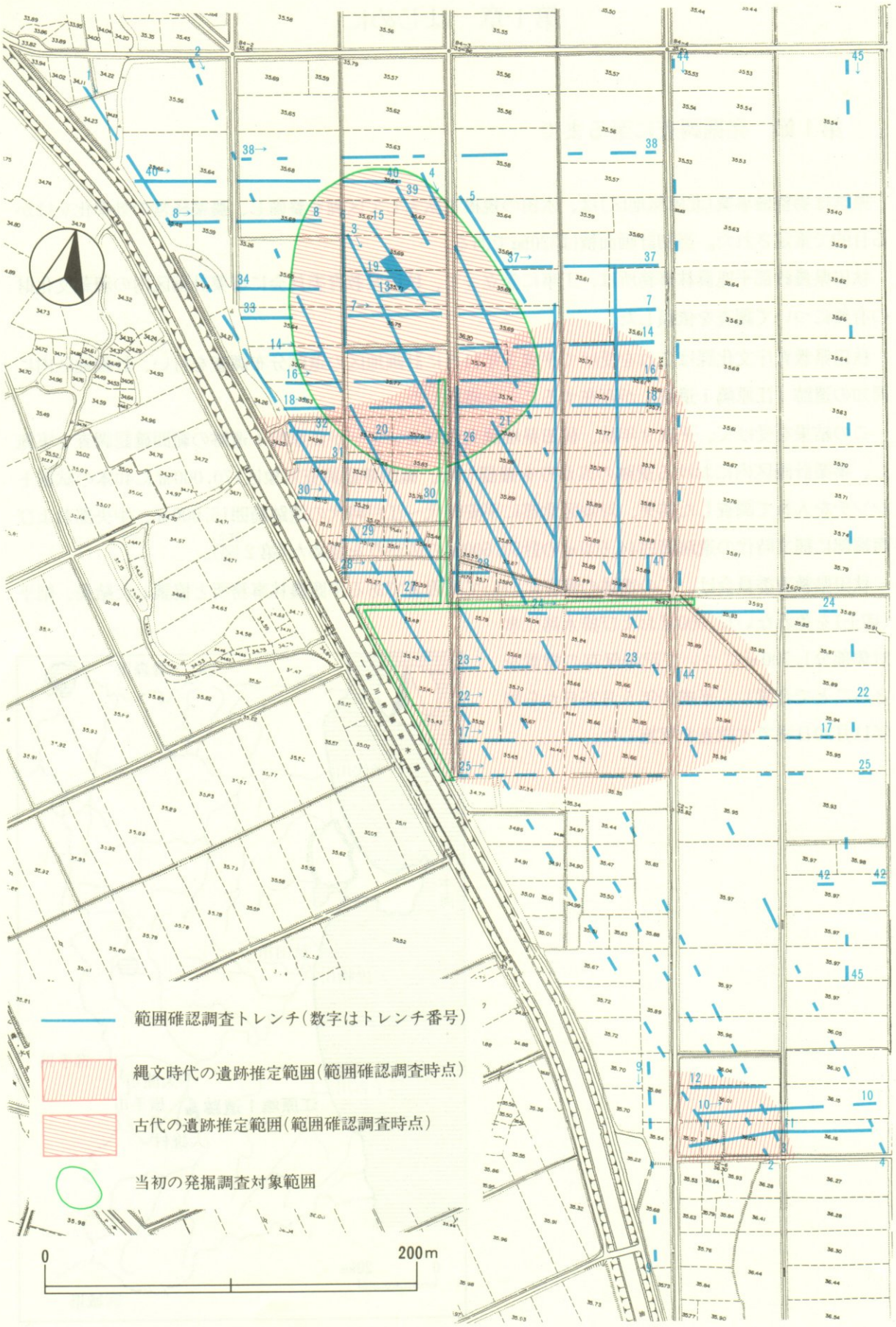
秋田県教育庁文化課はこれを受けて平成7年11月に計画地区の遺跡分布調査を行い、計画地区内に周知の遺跡「江原嶋1遺跡」が存在することを確認した。(註1)

この結果を受けて、平成9年秋、秋田県埋蔵文化財センターが江原嶋1遺跡の範囲確認調査を実施し、事業計画区内における遺跡の広がりを確認した。範囲確認調査対象区170,000㎡に40本の試掘トレンチを入れて調査した結果、対象区北部に平安時代～江戸時代の遺跡範囲15,000㎡、中央部および南端部に縄文時代の遺跡範囲44,600㎡の計59,600㎡の広がりを認めた(第2図)。(註2)

秋田県教育委員会は、この遺跡の保存について原因者である平鹿農林事務所と協議した結果、削平(切土)を免れない15,000㎡および排水路工事対象部分1,700㎡について記録保存の措置をとることで合意し、平成10年5月25日から同年11月20日まで本調査を実施した。



第1図　江原嶋1遺跡の位置



第2図　範囲確認調査トレンチの位置と遺跡推定範囲

第2節　調査要項（※職名等は発掘調査当時のものである）

遺　跡　名	江原嶋（えばらじま）1遺跡（略号；8 EBJ－ 1）
所　在　地	秋田県平鹿郡大雄村字東阿気（あげ）132外
調査期間	平成10年5月25日～11月20日
調査面積	16,700㎡
調査主体者	秋田県教育委員会
調査担当者	榮　一郎（秋田県埋蔵文化財センター調査課調査第3科学芸主事）
	吉川　孝（秋田県埋蔵文化財センター調査課調査第3科学芸主事）
	佐々木政任（秋田県埋蔵文化財センター調査課調査第3科非常勤職員）
	菊地　誠重（秋田県埋蔵文化財センター調査課調査第3科非常勤職員）
	亀井　崇晃（秋田県埋蔵文化財センター調査課調査第3科非常勤職員）
	黒澤　幸子（秋田県埋蔵文化財センター調査課調査第3科非常勤職員）
	安原　誠（秋田県埋蔵文化財センター調査課調査第3科非常勤職員）
総務担当者	菅原　晃（秋田県埋蔵文化財センター総務課主査）
	佐藤　幸嗣（秋田県埋蔵文化財センター総務課主事）
	八文字　隆（秋田県埋蔵文化財センター総務課主事）
調査協力機関	秋田県平鹿農林事務所土地改良課
	大雄村
	大雄村教育委員会
	大森町教育委員会
	雄物川町教育委員会

註1　秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第267集　1996（平成8）年

註2　秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第281集　1998（平成10）年

なお、最終的な調査範囲等は第3章第3節を参照されたい。

第２章　遺跡の位置と立地

第１節　遺跡の立地

平鹿郡大雄村は秋田県南東部、雄物川の上・中流域に広がる横手盆地のほぼ中央に位置する。北を大曲市、東を横手市、西を大森町、南を雄物川町・平鹿町と接し、面積26.35㎢、人口約6,000人の水田中心の純農村である。

遺跡は大雄村の西部、北緯39°20′54″、東経140°28′29″に位置し、JR奥羽本線横手駅から西北西へ約9.3㎞、阿気集落の東側に立地する。同集落の中央で大きくＳ字状に蛇行しながら北流する油川は、乗阿気・高津野の両集落の西側を流れ、大雄村の西の境界となっている雄物川に、大曲市角間川字門ノ目で合流する。

なお、主要地方道横手大森大内線は阿気集落南端をかすめ東西にのび、それに直交するかたちで同湯沢雄物川大曲線が雄物川とほぼ平行しながら同集落を貫通している。

遺跡周囲では昭和30年代に人力による耕地整理が行われたが、大幅な地形の改変はなかったと考えられる。しかし、遺跡の形成に影響を与えたと考えられる旧油川は、油川幹線排水路として昭和40年代後半に大幅な改修を受けている。(註１)

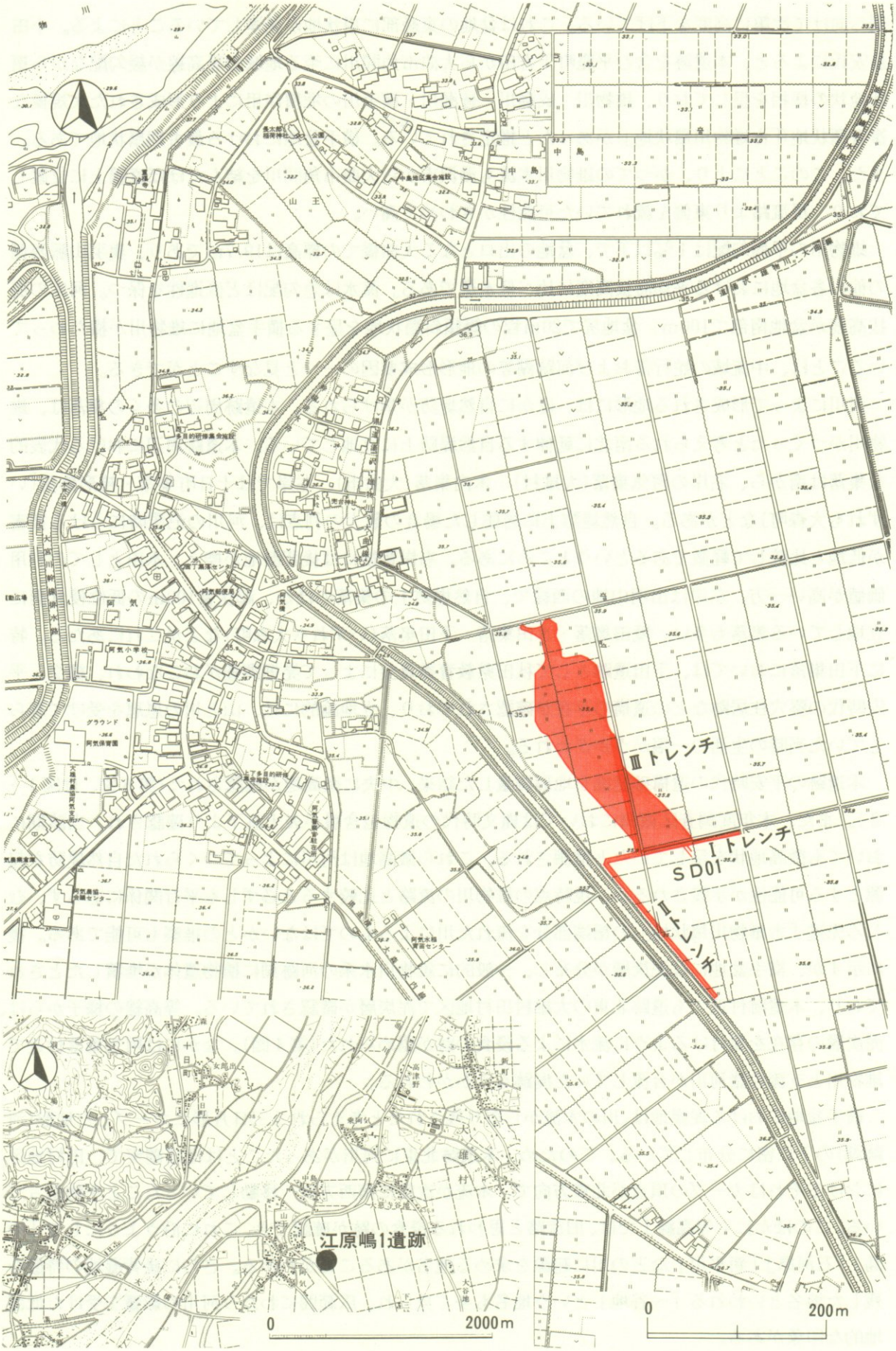
第２節　地理的環境

１　本遺跡周辺の地形

横手盆地は西奥羽盆地列中最大の盆地で、南北の長さ約60㎞、東西の幅約15㎞と南北に狭長な形状をなしている。横手盆地の東縁は、真昼岳断層崖によって和賀岳・真昼岳・焼石岳・栗駒山など標高1,000ｍを越える山々の連なる奥羽山脈に接する。奥羽山脈は第四紀の大規模な地殻変動による隆起地域であり、侵食量も大きく急峻な地形を呈している。西縁は姫神断層崖・大黒森断層崖によって丘陵性の出羽山地に接している。盆地北部では分離段丘が多く、南部の国見岳断層崖と東鳥海断層崖もきわめて明瞭である。こうした周囲の地形との対比から、横手盆地が断層を伴った構造盆地であることがわかる。また、横手盆地の南東に接する金峰山山地の南端からは、その支脈である中山丘陵が北西方向にのびている。横手市の中央西端で盆地面下に埋没しているが、大雄村田根森字新町の北東700ｍ、標高37.1ｍの三角点においては、埋没しきれずに露出している。

横手盆地は、他のほとんどの日本の平地同様、河川の運搬・堆積作用を起源として成立した沖積平野である。横手盆地主要部を形成したと考えられる雄物川は、現在、盆地の西縁を北流し、皆瀬川・成瀬川・横手川(旭川)・丸子川・玉川など、源流を奥羽山脈に求める諸河川をあわせながら、出羽山地を先行的に横断し日本海に注ぐ。

盆地の大部分は、上記諸河川によって形成された複合扇状地と、西部の沖積低地とからなっている。やや大型の扇状地は丸子川扇状地、成瀬川・皆瀬川扇状地など９を数えるが、これらのうち南部の成瀬川・皆瀬川扇状地、西馬音内川扇状地をのぞくと、現成扇状地である。横手盆地は東側が高く、西



第3図　江原嶋1遺跡発掘調査地点

側へ向けて次第に高度を下げている。これは盆地の東縁部に扇状地が発達していることによる。小田島宏氏によると、本遺跡を含む平鹿町下吉田から大曲市角間川に至る地域の等高線が緩勾配ながら扇状地状の様相を呈しており、雄物川・成瀬川・皆瀬川・横手川の堆積作用により形成された大規模な複合扇状地(「古雄物川扇状地」)があったと推定されている。(註２) 横手盆地における最古期扇状地である。また、このことにより、かつての雄物川本流も湯沢市から大曲市角間川を結んだほぼ直線上に位置しており、現流路より東側を流れていた可能性がきわめて高い。

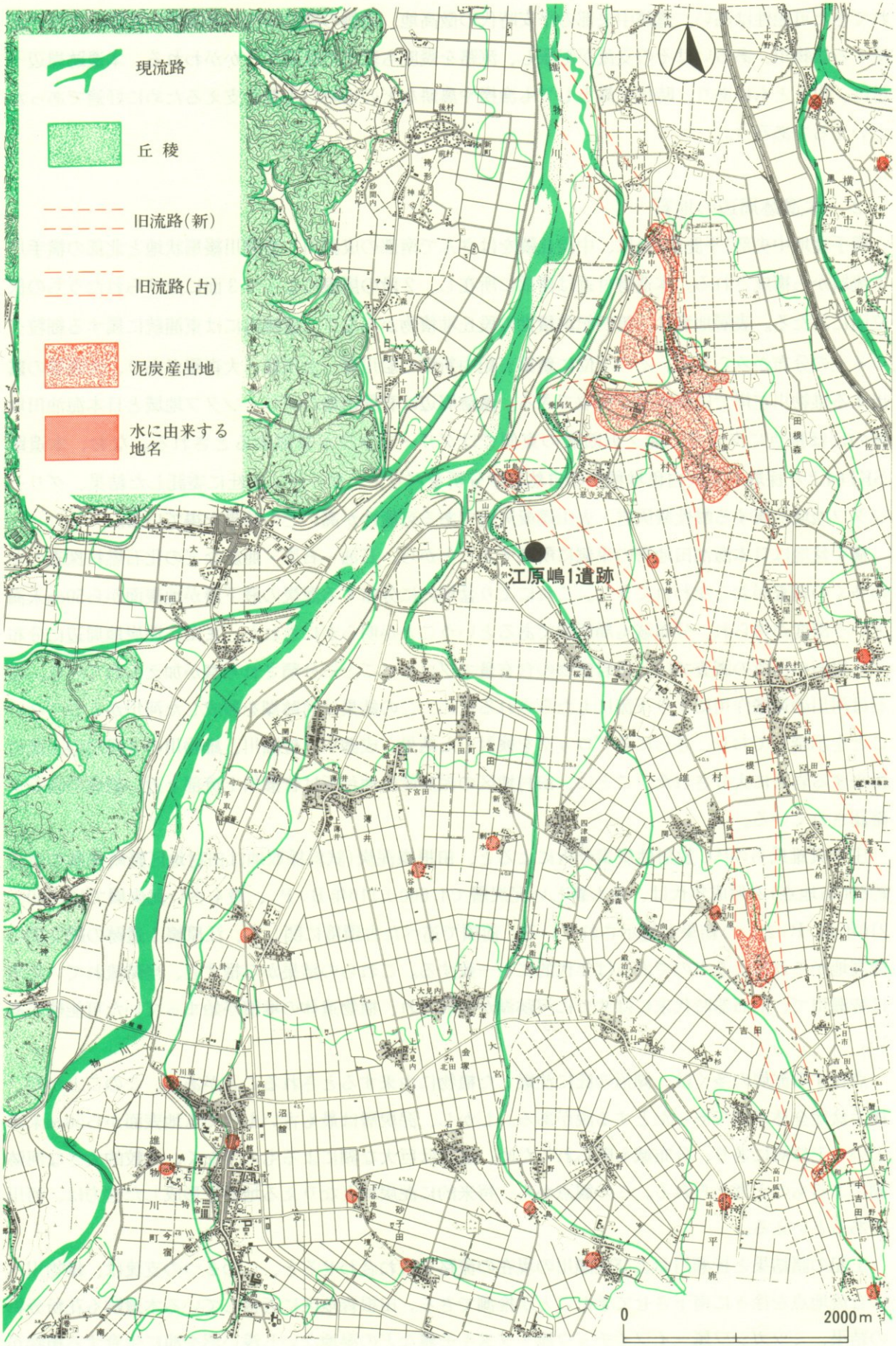
雄物川の平均勾配は１‰以下で、盆地の出口となる大曲橋での標高は19.7mであり、奥羽山脈西側の他の各盆地における平均海抜高度に比べ低水準である。流水は急勾配ほど直進性を保つ。河床の海抜高度が盆地南部で100m、盆地尻で20m程の緩傾斜扇状地を呈する横手盆地に雄物川が横たわっていることは、中流域の蛇行帯および河跡湖等の地形形成要因の一つと見なすことができる。

河川によって形成される地形には、ほかに自然堤防が挙げられる。本遺跡周辺の多くの集落は、雄物川がつくったと考えられる南北に延伸する自然堤防上に立地している。本遺跡周辺における代表的な集落は南から、右岸の阿気集落(大雄村)・木内集落(大曲市)、左岸では十日町集落・袴形集落(いずれも大森町)などがある。自然堤防上に居住した場合の最大の利点は、河川の氾濫時にうける被害が低地と比較して軽微であるというところにある。右岸背後には後背湿地が控え、水田としての利用価値が高い一方、左岸は出羽山地の西縁で、自然堤防上の集落のほか、起伏量100mの低位侵食面に立地している集落も多い。境田集落・水田集落・下田集落(いずれも大森町)などがこれにあたる。特に下田集落においては、下田遺跡として秋田県教育委員会によって発掘調査がおこなわれ、縄文・平安時代の竪穴住居跡などの遺構の存在が確認されており、立地論的には、山と川の恩恵を受けて暮らしていた当時の生活の一端がうかがわれる。

本遺跡の平安時代の遺構確認面を地形測量した結果、中央に微高地が確認された(第８図、付図１・２)。また、本年度調査区南側においては縄文時代の遺物包含層が表土直下より確認され、当該期においても微高地状を呈していたと推測される。これら微高地は河川によってつくられた自然堤防を起源とする可能性が示唆されるが、現時点の雄物川の流路と比較すると必ずしも平行関係にあらず、むしろ先述「古雄物川扇状地」の扇端部分を流れた川によるものではないかとの推察も可能である。後に示すが、横手盆地には泥炭層が分布し、一般的に雄物川水系の河跡湖に植物遺体が堆積したとされており、本遺跡付近でも遺跡北東の大雄村田村地区で泥炭層が確認されている。等高線の様子からは、泥炭層の存在を裏付けるように流水による侵食の跡が認められた(第４図)。なかには阿気集落付近で雄物川と支流の諸河川が合流していた痕跡もうかがわれる。

横手盆地における泥炭地は、川の本流から取り残されたと考えられる三日月形にカーブした地形(河跡湖)の下に密に分布している。このため、本遺跡北東に河川があったことはほぼ確実で、田村地区におけるそれはカーブの頂点が北東方向で、本流が次第に南西方向へ移動していったことを物語っている。このほかにも等高線上では、旧流路と思われる侵食の跡が確認でき、これに沿うようにして「中島」「石河原」「新平川」などの川に起源を求める地名があることがわかる。さらに後背湿地の特徴を残した地名といわれる「～谷地」という地名も多く見られ、広範囲にわたり河川の影響を受けた低湿地的な印象がある。

これらのことから、本遺跡付近が雄物川だけでなく、古環境において存在した数々の支流に干渉さ



第４図　江原嶋１遺跡周辺の地形

れてきた可能性は高い。遺跡中央部の平安時代の微高地、南側の縄文時代の微高地の存在により、近接する雄物川、あるいはその支流が氾濫し、流路を幾度も変えた経過がうかがわれる。本遺跡周辺一帯は、川とともにあり、時代を異としても漁撈や農耕などの当時の生業を支えるために好適であったといえるであろう。

2　本遺跡周辺の地質

横手盆地中央部(平鹿郡域)は、中山丘陵をはさんで南部の成瀬川・皆瀬川緩扇状地と北部の横手川下流域から構成される。本遺跡付近は南部に所在し、2段の崖線によって3面に分けられたうちの低位面にあたる。表層地質は、第四紀洪積世の段丘堆積物からなり、遺跡内には東浦統に属する細粒グライ土の分布がみられる。その下位に新第三紀中新世の船川層・女川層・大森層があり、大森層の露出する雄物川左岸では凝灰岩が採取できる。遺跡周辺は脊梁山地のグリーンタフ地域と日本海油田地域のほぼ接点にあたり、滝ノ沢断層の東側ではグリーンタフが卓越するとされる。なお、本遺跡SKI 64より採取した灰白色堆積物の自然科学分析をパリノ・サーヴェイ社に委託した結果、グリーンタフ地域に属する酸性凝灰岩・火山礫凝灰岩である可能性が高いとの結果を得ている。

横手盆地は日本海油田地帯の東側に所在することから、石油・石炭・亜炭などの化石燃料探査のため多くの調査がおこなわれてきた。これにより盆地内に分布する泥炭の最下層が地表面から50cm未満という深度が得られ、分布域も局所的であるということが明らかにされた。また、泥炭地周辺に分布する岩石の出所の調査では、造岩鉱物の含有量でブロックごとに分類され考察が加えられている。(註3) 岩石は河川の運搬作用により下流にもたらされるため、この結果は河跡湖を形成した河川が1つでないことを示唆しており、さらに各ブロックを検討した結果、成瀬川、皆瀬川、雄物川の3河川の上流に由来する岩石に大分された。ことに、田村地区の泥炭産出地付近は皆瀬川上流部と近い組成の岩石が確認されている。

庄子貞雄氏らの^{14}C放射性炭素分析(註4)によると、田根森泥炭(試料採取地は田村地区野崎集落の東方約600m地点)の形成年代は、最も新しい泥炭層で4,600±110年B.P.、最も古い泥炭層で12,880±210年B.P.という結果が提示されている。前項で述べた古環境に関して、江原嶋1遺跡の縄文期の微高地がこれによるものであれば年代的にも一致する。これらの結果から推すと、当時流れていた川は皆瀬川で、旧石器時代末にはすでに河跡湖が形成され、植物遺体の堆積が始まっていた可能性が高い。

点在する泥炭の多くは、湖沼の底に沈殿した植物に由来するとされることがある。このことから、横手盆地全体が湖であったとする説がある。しかし、泥炭層は最も古いものでも地表面から50cm未満という上位層にあり、分布域も限られるため、成立は巨大な湖によるものでなく、比較的大きな河跡湖によるものと考えられる。この観点から、将来的に泥炭地となりえる地形を形成した営力は、河川であるといえる。

上記の諸結果と皆瀬川および成瀬川の現在の流路を重ね合わせると、この2つの支流は、雄物川への合流地点を徐々に南下させてきたことが推測できる。田根森地区に近接している本遺跡も花粉分析の結果、ミツガシワ属－イワイチョウ属・タヌキモ属などの湿地ないし浅い沼や池に生育する植物が生い茂っていたことが判明した。この結果により本遺跡は、雄物川および各支流が形成した自然堤防

上、あるいは後背湿地に立地する可能性が強いといえる。

3　本遺跡周辺の土地利用

秋田県は全国有数の米どころで知られる。県南部の横手盆地西側に位置する大雄村も例外ではなく、水稲耕作を主とする農村地帯が広がり、これに由来する土地利用が村の大部分を占めている。単位面積あたりの米の収量は全県でも常にトップクラスである。本遺跡の西側は雄物川の谷底平野(河川敷)で、畑地としての利用がみられるほか、草地など自然河川の景観を残した区域も多い。泥炭層をかかえる田村地区では、野崎から耳取にかけて、水田よりも畑地・針葉樹・広葉樹、わずかであるが果樹栽培も確認でき、稲作に適さない土地への地域住民の適応がうかがわれる。

横手盆地では、北から大曲市南部の角間川より大雄村南東端の根田谷地にかけての地域、大雄村南西部の三村より雄物川町東部の高野にかけての地域、雄物川町南西部と十文字町北西部にまたがる谷地新田の3箇所に泥炭が分布している。いずれも南北に細長く、河跡湖によって泥炭が形成されたとする説に調和的である。ことに大雄村田根森の泥炭は「田村根ッコ」と呼ばれ、樹木に乏しい平野部の燃料として用いられ、かつては品質に等級をつけて出荷するほどの知名度があった。藩政期には、近隣の村だけでなく、雄物川の舟運を利用し、久保田の給人に送られた例もある。

村名の由来ともなった雄物川は、奥羽本線開通以前は舟運がさかんだったことが知られており、郡山・角間川・大保・大曲・刈和野などは河港として繁栄した。現在の大雄村にあっては阿気と田村に河港があったとされている。かつての雄物川はまた内水面漁業もさかんであり、サケ・マスなど遡上魚の漁がおこなわれていたという記録があり、横手盆地にあっては扇状地扇端部の湧水を利用した養殖を凌ぐほどの地位を占めていたというが、今日では河川改修等の影響で生業としては成立困難な状況となっている。(註5)

第3節　歴史的環境

以下、本遺跡〈42、64－1〉の所在する横手盆地とくに沖積地の歴史的環境について、既に発掘調査の行われている遺跡を中心に略述する。なお、本文中〈　〉内に記した遺跡所在地を示す番号のうち、Roman体(例；42)は第5図および第1・2表の、Arial体(例；64－1)は第6図および第3表の数字に対応する。

旧石器時代の遺跡は村内では未確認であり、盆地縁辺部の台地上もしくは河岸段丘上に小出Ⅰ遺跡〈10〉・小出Ⅳ遺跡〈12〉・中山Ⅲ遺跡〈40〉・台処館遺跡〈50〉・小吉山遺跡〈51〉・小田Ⅴ遺跡〈66〉・新道遺跡〈87〉・矢櫃遺跡〈93〉・新成遺跡〈100〉・五把出山遺跡〈106〉等が立地する。

縄文時代草創期の遺跡には、横手川生成の河岸段丘(南郷Ⅲ段丘)上に岩瀬遺跡〈68〉がある。現在のところ県内最古の土器と目される隆起線文土器・爪形文土器のほか国内最古級の石匙や両面調整石器等を含む当該期の多量の石器が出土しており、竪穴状遺構1基・炉跡8基を確認している。

早期では、国指定史跡の岩井堂岩陰遺跡〈115〉が著名である。遺跡は雄物川最上流部の右岸にあり、第四洞窟では無遺物層を挟んだ4つの層から早期前半から末葉までの各型式に属する土器が出土

している。虫内Ⅰ遺跡〈67〉では早期末の竪穴住居を検出しており、上猪岡遺跡〈59〉の土坑覆土からは貝殻腹縁文の施された土器細片が出土している。

前期では、下田遺跡〈39〉で表館式期新段階並行および後続期の土坑・竪穴状遺構が、根羽子沢遺跡〈84〉では大木４・５式期の配石遺構を伴う土坑墓が、保土森遺跡〈47〉では大木６式期と推定される竪穴住居跡が確認されている。全体的には早期同様、小規模な集落が多い。そうしたなかにあって秋田平野との狭窄部に位置する上ノ山Ⅱ遺跡〈１〉は大型住居33軒を含む竪穴住居跡72軒等より構成される大規模集落である。

中期に入ると遺跡数が増加するとともに集住傾向が一般化し、平野部における集落形成が進展する。一丈木遺跡〈24〉は４次にわたる調査の結果、２回の建て替えを伴い、中期全体を通じて営まれた遺跡であることが判明している。小吉山遺跡では中期前半の土坑群が調査された。中杉沢遺跡〈48〉・大保中台遺跡〈73〉はともに中期前葉～中葉に位置付けられる。また、中期末葉の竪穴住居跡が内村遺跡〈25〉で15軒、太田遺跡〈36〉で14軒検出されており、ともに住居内の炉は複式炉の形態をとっている。

後期に入ると集落は縮小し、大規模な墓域が出現する。八木遺跡〈89〉は中期および後期初頭から後葉にかけての一大墓域である。同遺跡では土坑墓573、組石遺構33、土器埋設遺構１、掘立柱建物を構成する柱穴79等を確認しており、立地や遺跡性格、土器構成等の面で本遺跡との共通点が多い。虫内Ⅰ遺跡は、後期末葉の瘤付土器様式期から大洞BC式期にかけてを主時期とし、隣接する虫内Ⅱ〈68〉・虫内Ⅲ〈69〉・小田Ⅳ〈65〉の各遺跡とともに推定範囲20,000㎡を越える広大な墓域を形成する。また、梨ノ木塚遺跡〈91〉は晩期大洞BC～同A′式期の、平鹿遺跡〈90〉は大洞C２～同A式期の墓域であることを確認している。なお、オホン清水A遺跡〈56〉は後期後半～晩期前半の墓域を含めた集落遺跡であり、鐙田遺跡〈109〉では主として大洞A′式に属する晩期の土器や中空土偶・耳栓・独鈷石・環状石斧等が出土している。

弥生時代になると遺跡数は減少し、遺構が明瞭に確認されているのは上猪岡遺跡の竪穴住居跡１軒・土器埋設遺構１基、小出Ⅳ遺跡の竪穴住居跡１軒等にすぎない。中都遺跡〈78〉では田舎館式平行期に属する土器や石庖丁が、手取清水遺跡〈55〉・オホン清水北遺跡〈58〉・十三塚遺跡〈81〉等でも遺物の出土はみられるが、遺構の明瞭な検出はみられない。なお、宇津台遺跡〈35〉では1960～61年に興野義一氏によって採取された遺物があり、それについては須藤隆氏によって報告がなされている。(註６)

古墳時代の遺跡は全県でも数箇所と非常に少ないが、横手盆地ではオホン清水B遺跡〈57〉と田久保下遺跡〈62〉の２遺跡が確認されている。前者では、５世紀末～６世紀初頭の竪穴住居跡を検出し、脚部に３箇所の長方形の透かしをもつ短脚の須恵器有蓋高坏および南小泉式期の土師器が出土している。後者では、６世紀代の土師器と須恵器蓋坏のほか、鉄製品が副葬された土坑墓８基を検出しており、この埋納形態は北海道の続縄文時代の土坑墓と類似している。資料数は僅少ながら、これら遺構・遺物の存在は畿内王権との結びつきと北方からの影響がともに認められ興味深い。

古代前期にあっては、年子狐遺跡〈76〉・中藤根遺跡〈77〉・下藤根遺跡〈78〉が奈良時代から平安時代初期にかけての集落跡と考えられている。当該期に至って中央政府の横手盆地への進出も顕著となり、横手盆地南部では須恵器生産が始まっている。田久保下遺跡・西ヶ沢窯跡〈60〉・郷土館窯

跡〈61〉・富ヶ沢窯跡〈63〉・竹原窯跡〈74〉・末館Ⅰ窯跡〈85〉・末館Ⅱ窯跡〈86〉等は8世紀に始まった窯業遺跡と考えられる。竹原窯跡では合計9基の窯が見つかり、9世紀後半まで継続して生産が行われていたことが判明している。蝦夷塚古墳群〈82〉は、8世紀中頃から9世紀後半にかけての、在地首長を埋葬したと推定される末期古墳で、菅江真澄が『雪の出羽路』で勾玉の図を示すなど、古くより知られた遺跡である。なお、『続日本紀』等の記述から雄勝郡・平鹿郡成立や秋田城創建が8世紀中頃の藤原仲麻呂政権前後のことであることが知られている。

平安時代では、律令国家によって営まれた城柵官衙である払田柵跡〈21〉が年輪年代測定などの結果、9世紀初頭の創建であることが明らかとなっている。同柵跡からは雄勝郡内の地名とみられる「大津郷」と墨書された土器が出土しており、横手盆地における郡衙遺跡の未発見とも相俟って、北上盆地の胆沢城跡とともに広域行政府の機能を果たしていた可能性も指摘されている。(註7) 横手盆地の平安時代の集落で掘立柱建物跡を検出した例としては台処館遺跡・手取清水遺跡・下田遺跡・上雨堤遺跡〈6〉・藤木遺跡〈31〉・宮の前遺跡〈94〉が、竪穴住居跡を検出した例としては内村遺跡・下田遺跡・オホン清水A遺跡・オホン清水北遺跡・台処館遺跡・郷士館遺跡・平鹿遺跡・竹原窯跡・寺沢遺跡〈5〉・小出Ⅱ遺跡〈11〉・飯詰竪穴群〈29〉・城神巡り遺跡〈98〉の各遺跡があり、これらのうち、区画施設を伴う集落として宮の前遺跡がある。(註8) なお、手取清水遺跡では墨書土器・硯・木簡・鳥形等が、藤木碇遺跡〈30〉では墨書土器・檜扇・弓・柵木等が、城神巡り遺跡でも墨書土器が見つかっており、いずれも地方官人との関わりが示唆されている。成沢窯跡〈33〉・九十九沢窯跡〈37〉・物見窯跡〈45〉・七窪遺跡〈101〉は9～10世紀に生産を開始した窯業遺跡であり、前掲した竹原窯跡などとあわせ、窯業生産のいっそうの高まりが看取できる。

古代末期にあって、律令体制の破綻と在地生産力の向上等を背景に横手盆地を本拠として一大勢力を形成したのが出羽清原氏である。金沢柵跡〈42〉および沼の柵は、11世紀に当地方で起こった後三年合戦で清原家衡が源義家・義光を迎え戦った場所とされている。大鳥井柵跡〈48〉は、当該期の平地性の防禦性集落であり、口承では清原一族の大鳥井太郎頼遠が拠った地であるという。また、平泉政権期およびそれに後続する時期には、主として盆地縁辺部の丘陵上で幾つかの経塚が発見されている。現在では欠失したものもあるが、観音寺経塚〈41〉から久安5(1149)年、一字山経塚〈28〉から仁安3(1168)年、松岡経塚〈110〉から寿永3(1184)年と建久7(1196)年、閑居長根経塚群〈43〉から元久3(1206)年の、それぞれ紀年銘のある経筒が出土している。また、保土森遺跡からは当該期の火葬墓を検出している。

中世に入ると、横手盆地もまた他の奥羽の諸地域とともに鎌倉幕府体制下に組み込まれる。遠藤巌氏によれば、鎌倉初期、尾張国御家人松葉助宗が出羽国平賀郡地頭職に補任され、その次男惟泰の代から出羽国御家人平賀氏を名乗った可能性があり、惟泰の弟油河四郎泰実・吉田五郎経宗もそれぞれ郡内の油河郷・吉田郷を苗字の地にしたとみられる。(註9) 吉田は現在の平鹿町吉田、油河は本遺跡付近を流れる油川に関連ある地名と考えられる。鎌倉中期頃に郡地頭職は北条一門の手に移ったため、建武新政後の平鹿郡は元弘没収地の扱いを受けたものと思われる。したがって、内乱が熾烈になるほど当郡の地頭職や所領の支配権は頻繁に交替させられた可能性がある。延元元(1336)年、南朝方の鎮守府将軍北畠顕家が当地にとどまる平賀四郎左衛門を「北出羽使節」に任命するという記録がある(『中目文書』)。一方、安芸国にあった平賀兼宗は終始足利尊氏に従軍し、延文4(1359)年、兼宗の子貞宗は

足利義詮より「出羽国平賀郡惣領職」に補任されている(『平賀家文書』)。なお、『秋田県の紀年遺物』などによれば、在地に遺存する金石資料である板碑の紀年銘を看取する限り、横手盆地では北朝年号が一般的に使用されていたことがわかる。(註10)

室町時代の横手盆地の様相を示す資料は考古資料・文献資料ともに必ずしも多くはないが、『若王子神社文書』には文明２(1470)年には、寛正３(1462)年以来認めていた「平賀郡油河輩」の熊野参詣諸先達職を本山派の中央機関が安堵したことが記載されており、当時の国人領主層および宗教勢力のあり方の一端を伝えている。(註11)

戦国期に入ると、いわゆる中世城館が各地に営まれる。『秋田県の中世城館』には、大雄村域に所在する城館として江原嶋館〈64－6〉・館屋敷〈64－7〉・八柏城〈64－8〉・堅物館〈64－9〉・宮田館〈64－10〉の５遺跡が紹介されており、本遺跡北西に立地する江原嶋館跡は、口承では館主として江原左衛門の名が知られている。(註12) 当該期の横手盆地にあっては雄勝郡の小野寺氏、仙北郡の戸沢氏等が大名権力として成長を遂げたのに対し、松葉系平賀氏は両勢力に押されその被官となっていったようである。当時の大雄村周辺は、盆地ほぼ中央に位置することを反映してか、南北両勢力の角逐の舞台でもあった。『語伝仙北之次第』によれば、天正14(1586)年、角館城主戸沢盛安が小野寺領沼楯(館)城を攻略するとあり、堀(払)田、梅沢、白岩、門屋、大野、本堂、楢岡、六郷ら仙北の諸将と連合し、現在の大雄村阿気の地を前にして陣を取ったことが知られる(阿気野合戦)。また、天正18(1590)年の太閤検地の際、雄物川対岸の大森城〈61-36〉には上杉景勝が、横手城には大谷吉継が入ったとされるが、この折、田村の四郎右衛門の子は人質として大森城に送り込まれており、上杉氏の管轄下に置かれている(『色部文書』)。その後、小野寺・最上両氏の抗争のなかで、平賀氏一族に属する八柏城主八柏大和守が主君小野寺氏から謀殺されるという事件が起きている(『奥羽永慶軍記』)。

関ヶ原合戦後は常陸国大名佐竹氏が入部し、大雄村を含む横手盆地全域は近世を通じて秋田藩領の一画を占め、今日に至っている。近代初頭の事件として、明治７(1874)年の徴兵令反対の阿気村外６ヶ村騒動が名古屋以北で唯一の血税騒動として有名である。(註13)(註14)

註１　秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第281集　1998(平成10)年

註２　小田島宏　「横手盆地南部沖積平野の微地形」『秋田地学』　第46号　ｐ９－28　1996(平成８)年

註３　渡辺晟　「第八章第六節四　横手盆地と泥炭」　平鹿町『平鹿町史』　1984(昭和59)年

註４　庄子貞雄・安藤豊・増井淳一　「秋田県田根森泥炭の^{14}Ｃ年代－日本の第四紀層の^{14}Ｃ年代(101)－」
『地球科学』　Vol.28　№5　1974(昭和49)年

註５　本節執筆に際しては、下記文献も参考にした。
秋田県　『雄平仙中核都市建設計画地域土地分類基本調査　大曲』　1977(昭和52)年
「角川日本地名大辞典」編纂委員会編　『角川日本地名大辞典５　秋田県』　角川書店　1980(昭和55)年

註６　須藤隆　「秋田県大曲市宇津ノ台遺跡の弥生式土器について」『文化』第33巻第３号　東北大学史学会
1970(昭和45)年

註７　八木光則　「東北北部の諸問題」『第６回東日本埋蔵文化財研究会“遺物からみた律令国家と蝦夷”
－講演・発表要旨集－』　1997(平成９)年

註８　高橋学　「区画施設をともなう古代集落遺跡について」『よねしろ考古』第５号　1989(平成元)年

註９　遠藤巌　「平鹿郡惣領職をめぐって」『秋田地方史論集』　1981(昭和56)年

註10　奈良修介　『秋田県の紀年遺物』　小宮山書店　1976(昭和51)年

註11　加藤民夫　「神仏受容の地方的展開(二)十四～十六世紀の北奥羽を中心に」『秋大史學』41号　1995(平成７)年

註12　秋田県教育委員会　『秋田県の中世城館』　秋田県文化財調査報告書第86集　1981(昭和56)年

註13　田口勝一郎　『秋田県の百年』　山川出版社　1983(昭和58)年

註14　本節執筆に際しては、下記文献も参考にした。

秋田県教育委員会　『秋田県遺跡地図(県南版)』　1987(昭和52)年

奈良修介・豊島昴　『秋田県の考古学』　郷土考古学叢書３　1967(昭和42)年

秋田県　『秋田県史　考古編』　1977(昭和52)年

工藤雅樹　『蝦夷と東北古代史』　1998(平成10)年

塩谷順耳編　『中世の秋田』　さきがけ新書②　秋田魁新報社　1982(昭和57)年

第１～３表文献(番号は各表中の文献番号に対応する。)

1　武藤鉄城　『運穣野組石群発掘報告』　1952(昭和27)年

2　滝口宏・西村正衛　「秋田県雄勝郡欠上り遺跡発掘報告」『古代』第18号　1956(昭和31)年

3　石母田正　「辺境の長者～秋田県横手盆地の歴史地理的一考察～」『歴史評論』１・４・５月号　1958(昭和33)年

4　秋田県　『秋田県史　考古編』　1960(昭和35)年

5　奈良修介　「羽後町三輪十三本塚10号墳調査報告」『秋田考古学』第16号　1960(昭和35)年

6　大和久震平　「平鹿郡雄物川町末館窯址発掘調査報告」『横手郷土資料』第35号　横手郷土史編纂委員会　1963(昭和38)年

7　冨樫泰時　「羽後町五把出山発見の石器について」『秋田考古学』第22号　1963(昭和38)年

8　豊島昴・冨樫泰時　「秋田県雄勝郡羽後町土館新成発見の石器について」『上代文化』第33号　1963(昭和38)年

9　奈良修介・豊島昴　『秋田県の考古学』　1967(昭和42)年

10　秋田県教育委員会　『岩井堂岩陰遺跡発掘調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第16集　1969(昭和44)年

11　須藤隆　「秋田県大曲市宇津台遺跡の弥生式土器について」『文化』第33巻第３号　1970(昭和45)年

12　山下孫継　「狐崎遺跡」『北方考古』第５号　1970(昭和45)年

13　羽後町教育委員会　『足田門田遺跡発掘調査報告書』　1972(昭和47)年

14　山下孫継　「中屋敷遺跡」『北方考古』第８号　1972(昭和47)年

15　千畑町教育委員会　『一丈木遺跡第２次発掘調査略報』　1973(昭和48)年

16　山下孫継　「外ヶ倉遺跡発掘調査報告書」『北方考古』第９号　1973(昭和48)年

17　横手市教育委員会　『中杉沢遺跡発掘調査概報』　横手市文化財調査報告１　1973(昭和48)年

18　秋田県教育委員会　『金沢柵跡発掘調査概報』　秋田県文化財調査報告書第12集　1974(昭和49)年

19　秋田県教育委員会　『鎧田遺跡発掘調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第28集　1974(昭和49)年

20　秋田県教育委員会　『中藤根遺跡』　1974(昭和49)年

21　千畑町教育委員会　『一丈木遺跡第３次発掘調査略報』　1974(昭和49)年

22　横手市教育委員会　『第７次中杉沢遺跡発掘調査概報』　横手市文化財調査報告２　1974(昭和49)年

23　横手市教育委員会　『手取清水遺跡発掘調査報告書』　横手市文化財調査報告３　1974(昭和49)年

24　羽後町教育委員会　『足田遺跡第７次発掘調査略報』　1975(昭和50)年
25　千畑町教育委員会　『一丈木遺跡第４次発掘調査略報』　1975(昭和50)年
26　秋田県教育委員会　『成沢遺跡発掘調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第36集　1976(昭和51)年
27　秋田県教育委員会　『下藤根遺跡発掘調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第39集　1976(昭和51)年
28　横手市教育委員会　『郷土館窯跡』　横手市文化財調査報告４　1976(昭和51)年
29　秋田県教育委員会　『出羽丘陵総合開発事業遺跡分布調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第42集　1977(昭和52)年
30　羽後町教育委員会　『足田遺跡第８次発掘調査略報』　1977(昭和52)年
31　横手市教育委員会　『大鳥井山Ⅰ－横手市大鳥井山遺跡発掘調査概報』　横手市文化財調査報告５　1978(昭和53)年
32　秋田県教育委員会　『館下遺跡・梨ノ木塚遺跡・宮の前遺跡(第２次)発掘調査概報』　秋田県文化財調査報告書第59集　1979(昭和54)年
33　秋田県教育委員会　『梨ノ木塚遺跡発掘調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第63集　1979(昭和54)年
34　秋田県教育委員会　『宮の前遺跡』　秋田県文化財調査報告書第64集　1979(昭和54)年
35　雄勝町教育委員会　『岩井堂洞窟　第４洞穴第８次発掘調査報告書』　1979(昭和54)年
36　横手市教育委員会　『大鳥井山Ⅱ－横手市大鳥井山遺跡発掘調査概報』　横手市文化財調査報告６　1979(昭和54)年
37　秋田県教育委員会　『湯元遺跡発掘調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第68集　1980(昭和55)年
38　秋田県教育委員会　『鵜沼城跡発掘調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第73集　1980(昭和55)年
39　羽後町教育委員会　『城神巡り遺跡－第３次発掘調査概報－』　1980(昭和55)年
40　雄物川町郷土史編纂会編　『雄物川町郷土史』　1980(昭和55)年
41　南外村教育委員会　『大畑窯跡発掘調査報告書』　1980(昭和55)年
42　横手市教育委員会　『大鳥井山Ⅲ－横手市大鳥井山遺跡発掘調査概報』　横手市文化財調査報告７　1980(昭和55)年
43　秋田県教育委員会　『藤木遺跡発掘調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第81集　1981(昭和56)年
44　秋田県教育委員会　『内村遺跡発掘調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第82集　1981(昭和56)年
45　秋田県教育委員会　『秋田県の中世城館』　秋田県文化財調査報告書第86集　1981(昭和56)年
46　大森町郷土史編さん委員会編　『大森町郷土史』　1981(昭和56)年
47　杉渕　馨　「物見窯跡について」『秋田地方史論集』　みしま書房　1981(昭和56)年
48　横手市教育委員会　『大鳥井山Ⅳ－横手市大鳥井山遺跡発掘調査概報』　横手市文化財調査報告８　1981(昭和56)年
49　秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第93集　1982(昭和57)年
50　秋田県教育委員会　『桐木田遺跡発掘調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第95集　1982(昭和57)年
51　横手市教育委員会　『大鳥井山Ⅴ－横手市大鳥井山遺跡発掘調査概報』　横手市文化財調査報告９　1982(昭和57)年
52　秋田県教育委員会　『平鹿遺跡発掘調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第101集　1983(昭和58)年
53　秋田県教育委員会　『石名館遺跡発掘調査報告書－仙北平野農業水利事業上総川排水路工事に係る埋蔵文化財発掘調査－』　秋田県文化財調査報告書第112集　1984(昭和59)年
54　大曲市教育委員会　『四十二館跡発掘調査報告書』　1984(昭和59)年
55　平鹿町　『平鹿町史』　1984(昭和59)年
56　横手市教育委員会　『オホン清水～第３次遺跡発掘調査報告書～』　横手市文化財調査報告10

1984(昭和59)年

57　秋田県教育委員会・払田柵跡調査事務所　『払田柵跡Ⅰ－政庁跡－』　秋田県文化財調査報告書第122集　1985(昭和60)年

58　羽後町教育委員会　『大久保(杉宮)遺跡発掘調査概報』　1985(昭和60)年

59　秋田県教育委員会　『蝦夷塚古墳群発掘調査報告書－一般国道107号改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査－』　秋田県文化財調査報告書第136集　1986(昭和61)年

60　秋田県教育委員会　『石名館遺跡第２次発掘調査報告書－仙北平野農業水利事業上総川排水路工事に係る埋蔵文化財発掘調査－』　秋田県文化財調査報告書第138集　1986(昭和61)年

61　秋田県教育委員会　『上雨堤遺跡発掘調査報告書－県道本荘・西仙北・角館線改良工事に係る埋蔵文化財発掘調査－』　秋田県文化財調査報告書第149集　1986(昭和61)年

62　秋田県教育委員会　『秋田県遺跡地図(県南版)』　1987(昭和62)年

63　稲川町教育委員会　『稲庭城跡発掘調査報告書』　1987(昭和62)年

64　羽後町教育委員会　『大久保(杉宮)遺跡発掘調査概報－柏原古墳群－』　1987(昭和62)年

65　雄物川町教育委員会　『根羽子沢遺跡発掘調査報告書』　1987(昭和62)年

66　秋田県教育委員会　『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅱ－上ノ山Ⅰ遺跡・館野遺跡・上ノ山Ⅱ遺跡－』　秋田県文化財調査報告書第166集　1988(昭和63)年

67　秋田県教育委員会　『根羽子沢遺跡発掘調査報告書－国道107号線改良工事に伴う緊急発掘－』　秋田県文化財調査報告書第176集　1988(昭和63)年

68　平鹿町教育委員会　『年子狐地区遺跡詳細分布調査報告書』　1988(昭和63)年

69　秋田県教育委員会　『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅲ－上野台遺跡・寺沢遺跡・半仙遺跡－』　秋田県文化財調査報告書第180集　1989(平成元)年

70　秋田県教育委員会　『八木遺跡発掘調査報告書－公害防除特別土地改良事業八木地区に係る埋蔵文化財発掘調査－』　秋田県文化財調査報告書第181集　1989(平成元)年

71　秋田県教育委員会　『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅱ(補遺)－上ノ山Ⅱ遺跡－』　秋田県文化財調査報告書第186集　1989(平成元)年

72　羽後町教育委員会　『柏原古墳群発掘調査報告書』　羽後町文化財調査報告書第９集　1989(平成元)年

73　秋田県教育委員会　『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅳ－下田遺跡・下田谷地遺跡－』　秋田県文化財調査報告書第189集　1990(平成２)年

74　秋田県教育委員会　『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅴ－手取清水遺跡－』　秋田県文化財調査報告書第190集　1990(平成２)年

75　神岡町教育委員会　『小沢遺跡発掘調査報告書』　1990(平成２)年

76　秋田県教育委員会　『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅶ－北田山田ヶ沢Ⅰ遺跡・北田山田ヶ沢Ⅱ遺跡・大畑潜沢Ⅱ遺跡・大畑潜沢Ⅲ遺跡－』　秋田県文化財調査報告書第205集　1991(平成３)年

77　秋田県教育委員会　『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅷ－小出Ⅰ遺跡・小出Ⅱ遺跡・小出Ⅲ遺跡・小出Ⅳ遺跡－』　秋田県文化財調査報告書第206集　1991(平成３)年

78　秋田県教育委員会　『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅸ－太田遺跡－』　秋田県文化財調査報告書第207集　1991(平成３)年

79　秋田県教育委員会　『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅹ－上猪岡遺跡－』　秋田県文化財調査報告書第208集　1991(平成３)年

80　秋田県教育委員会　『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅺ－竹原窯跡－』　秋田県文化財調査報告書第209集　1991(平成３)年

81　秋田県教育委員会　『宝竜堂遺跡発掘調査報告書－公害防除特別土地改良事業三重地区に係る埋蔵文化財発掘調査－』　秋田県文化財調査報告書第214集　1991(平成３)年

82　秋田県教育委員会　『七窪遺跡発掘調査報告書－公害防除特別土地改良事業亀田地区に係る埋蔵文化財発掘調査－』　秋田県文化財調査報告書第215集　1991(平成３)年

83　秋田県教育委員会　『秋田ふるさと村(仮称)建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－富ヶ沢Ａ･Ｂ･Ｃ窯跡　田久保下遺跡　富ヶ沢１号～４号塚－』　秋田県文化財調査報告書第220集　1992(平成４)年

84　仙北町教育委員会　『星宮遺跡範囲確認調査報告書』　仙北町文化財調査報告書第１集　1992(平成４)年

85　南外村教育委員会　『大畑・桧山腰窯跡』　1992(平成４)年

86　秋田県教育委員会　『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書ⅩⅢ－茂竹沢遺跡－』　秋田県文化財調査報告書第233集　1993(平成５)年

87　秋田県教育委員会　『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書ⅩⅣ－虫内Ⅱ遺跡－』　秋田県文化財調査報告書第234集　1993(平成５)年

88　秋田県教育委員会　『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書ⅩⅤ－越上遺跡－』　秋田県文化財調査報告書第235集　1993(平成５)年

89　羽後町教育委員会　『福島遺跡ほか発掘調査報告書－柏原古墳群・福島遺跡－』　羽後町文化財調査報告書第12集　1993(平成５)年

90　秋田県教育委員会　『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書ⅩⅥ－上谷地遺跡－』　秋田県文化財調査報告書第241集　1994(平成６)年

91　秋田県教育委員会　『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書ⅩⅦ－虫内Ⅲ遺跡－』　秋田県文化財調査報告書第242集　1994(平成６)年

92　秋田県教育委員会　『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書ⅩⅧ－小田Ⅳ遺跡－』　秋田県文化財調査報告書第243集　1994(平成６)年

93　秋田県教育委員会　『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書ⅩⅩⅠ－小田Ⅴ遺跡－』　秋田県文化財調査報告書第262集　1996(平成８)年

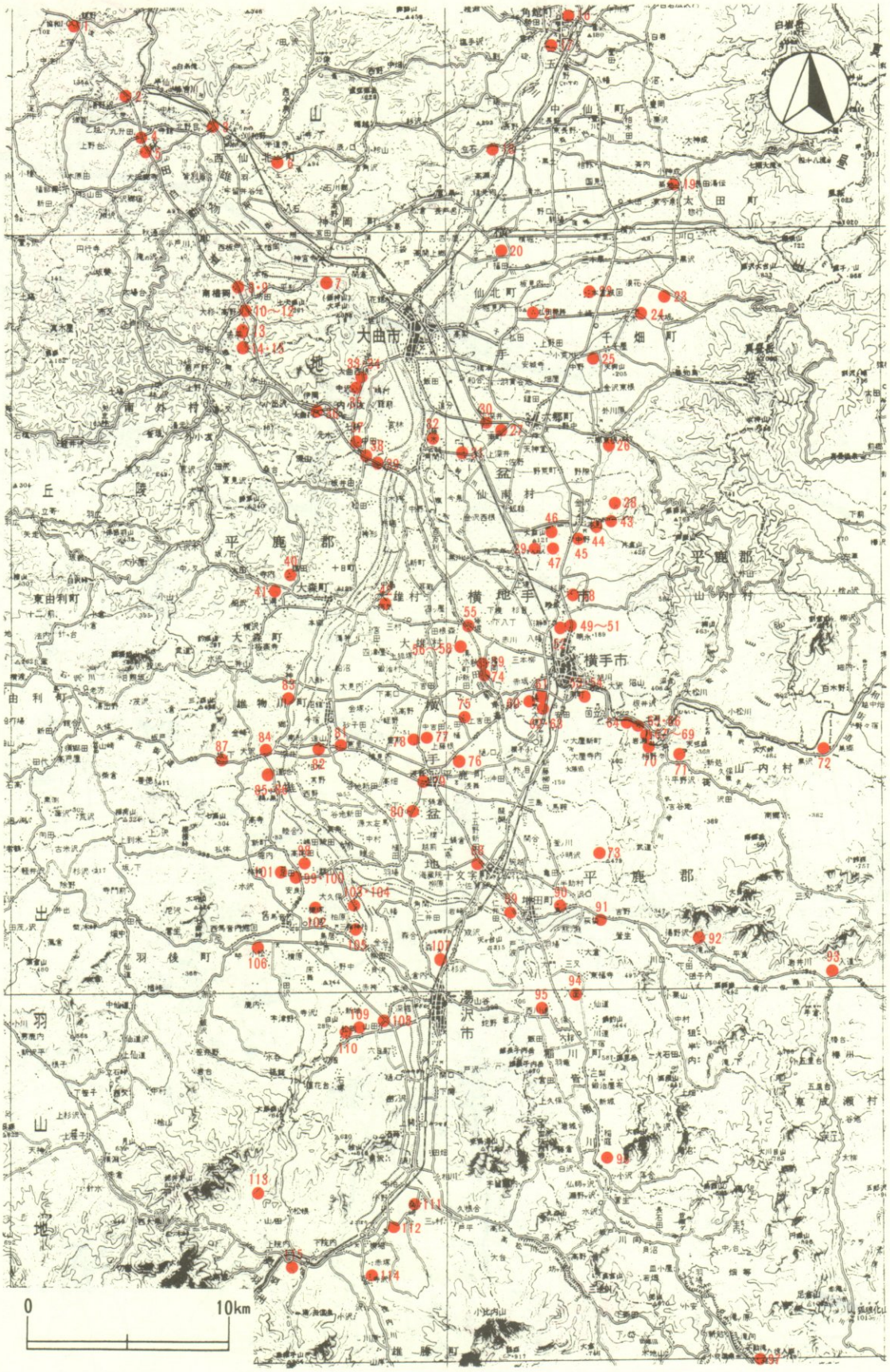
94　秋田県教育委員会　『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書ⅩⅩⅡ－岩瀬遺跡－』　秋田県文化財調査報告書第263集　1996(平成８)年

95　秋田県教育委員会　『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書ⅩⅩⅢ－虫内Ⅰ遺跡－』　秋田県文化財調査報告書第274集　1998(平成10)年

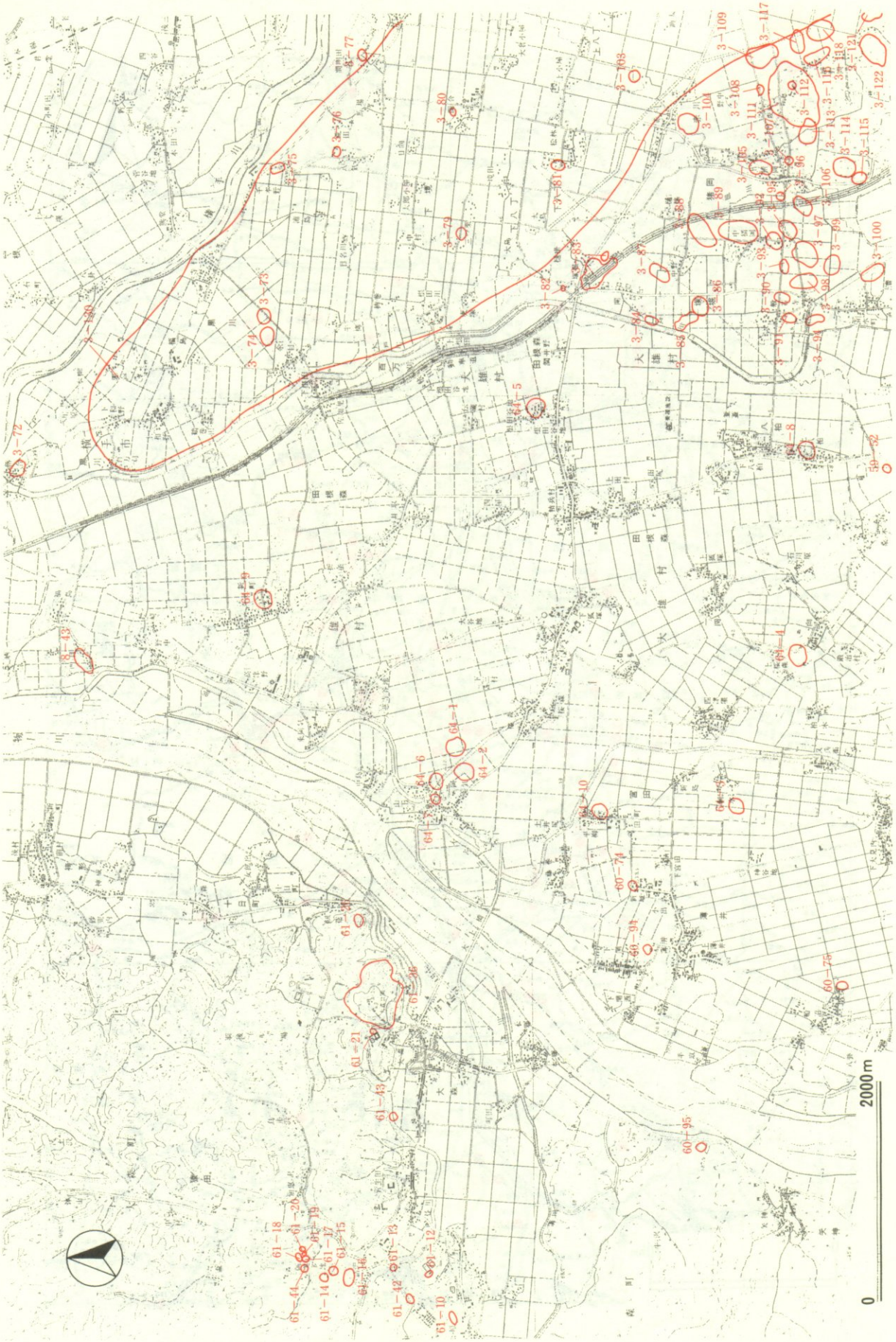
96　秋田県教育委員会　『寄騎館遺跡－一般国道13号刈和野バイパス改築事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－』　秋田県文化財調査報告書第277集　1998(平成10)年

97　秋田県教育委員会・払田柵跡調査事務所　『払田柵跡Ⅱ－区画施設－』　秋田県文化財調査報告書第289集　1999(平成11)年

98　秋田県教育委員会　『十二牲Ｂ遺跡－県営ほ場整備事業(金沢地区)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－』　秋田県文化財調査報告書第304集　2000(平成12)年



第５図　横手盆地の主要遺跡分布



第６図　江原嶋１遺跡周辺の遺跡分布

番号	遺　跡　名	所　在　地	時　代	文　献
1	上ノ山Ⅱ遺跡	協和町中淀川	縄文(前)	66・71
2	半仙遺跡	協和町峰吉川	縄文(前)、弥生	69
3	寄騎館遺跡	協和町峰吉川	縄文(中・晩)、中世以降	96
4	上野台遺跡	西仙北町強首	縄文(中～後)、弥生	69
5	寺沢遺跡	西仙北町強首	縄文(前～晩)、平安	69
6	上雨堤遺跡	西仙北町土川	縄文(後)、平安	61
7	小沢(岳下)遺跡	神岡町神宮寺	縄文(晩)	75
8	北田山田ヶ沢Ⅰ遺跡	南外村字北田山田ヶ沢	縄文(後・晩)	76
9	小出Ⅰ遺跡	南外村字小出	旧石器、縄文(前・中・晩)、弥生、平安、中世	77
10	小出Ⅱ遺跡	南外村字小出	縄文(前)、平安	77
11	小出Ⅳ遺跡	南外村字小出	旧石器、縄文(中)、弥生	77
12	大畑・桧山腰窯跡	南外村字大畑	中世	85
13	大畑窯跡	南外村字大畑深山	中世	41
14	大畑潜沢Ⅲ遺跡	南外村字大畑潜沢	縄文(中)	76
15	角館城跡	角館町岩瀬	中世	45
16	岩瀬遺跡	角館町岩瀬	縄文	62
17	極楽野遺跡	中仙町長野	縄文	62
18	太田城跡	太田町太田	中世	45
19	星宮遺跡	仙北町横堀	縄文(後・晩)、弥生	84
20	払田柵跡	仙北町払田・千畑町本堂城廻	平安	57・97
21	本堂城跡	千畑町本堂城廻	中世	45
22	運穀野組石群	千畑町黒沢	縄文(前)	1
23	一丈木遺跡	千畑町浪花	縄文(中)	15・21・25
24	内村遺跡	千畑町千屋	縄文(前・中)、平安	44
25	鎧ヶ崎遺跡	六郷町六郷東根	縄文(中・晩)、平安	62
26	石名館遺跡	六郷町六郷・仙南村南町	縄文(中～晩)、平安	53・60
27	一字山経塚	仙南村金沢	平安	4
28	飯詰竪穴群	仙南村飯詰	平安	4
29	藤木遺跡	大曲市下深井	平安	62
30	藤木遺跡	大曲市藤木	平安	43
31	四十二館跡	大曲市六郷西根・藤木	中世～近世	54
32	成沢窯跡	大曲市大曲西根	縄文(前～中)、平安	26
33	成沢Ⅱ遺跡	大曲市大曲西根	縄文(後・晩)	26
34	宇津台遺跡	大曲市大曲西根	弥生	11
35	太田遺跡	大曲市内小友	縄文(前～晩)、弥生、中世	78
36	九十九沢窯跡	大曲市内小友	平安	4
37	下田谷地遺跡	大曲市内小友	縄文(後～晩)、平安	73
38	下田遺跡	大森町板井田	縄文(前～晩)、弥生、平安	73
39	中山Ⅲ遺跡	大森町猿田	旧石器	62
40	観音寺経塚	大森町上溝	平安	4
41	江原嶋１遺跡	大雄村字東阿気	縄文(前～晩)、平安	本書
42	閑居長根経塚群	横手市金沢	中世	4
43	金沢城跡	横手市金沢・金沢中野	平安・中世	18
44	物見窯跡	横手市金沢中野	平安	47
45	十二牲Ｂ遺跡	横手市金沢中野	平安	98
46	保土森遺跡	横手市金沢中野	縄文(中～後)	62
47	保土森火葬墓	横手市金沢中野	平安	4
48	中杉沢遺跡	横手市杉沢	縄文(中)	7・22
49	大鳥井柵跡	横手市大鳥町・新坂町	縄文(前～中)、平安	31・36・42・48・51
50	台処館遺跡	横手市新坂町	旧石器、縄文(中～後)	62
51	小吉山遺跡	横手市大鳥町	旧石器、縄文(前～後)、弥生	31・36・42・48・51
52	鳥子山遺跡	横手市杉目	縄文(中～後)	62
53	大剰院塚遺跡	横手市前郷	旧石器、縄文(前)	4
54	三井寺遺跡	横手市前郷	縄文(晩)	4
55	手取清水遺跡	横手市清水町新田	縄文(晩)・弥生・平安	23・74
56	オホン清水Ａ遺跡	横手市塚堀	縄文(後～晩)、平安、近世	56
57	オホン清水Ｂ遺跡	横手市塚堀	縄文(後～晩)、古墳、平安	56
58	オホン清水北遺跡	横手市塚堀	縄文(後～晩)、弥生、平安	56

第１表　横手盆地の主要遺跡一覧(１)

番号	遺　跡　名	所　在　地	時　代	文　献
59	上猪岡遺跡	横手市上猪岡・平鹿町上吉田間内	縄文(早～晩)、弥生	79
60	郷士館窯跡	横手市赤坂	平安	28
61	田久保下遺跡	横手市婦気大堤	奈良～平安	83
62	富ヶ沢窯跡群	横手市赤坂	奈良～平安	83
63	茂竹沢遺跡	山内村土淵	縄文(前～晩)・中近世	86
64	小田Ⅳ遺跡	山内村土淵	縄文(前～晩)	92
65	小田Ⅴ遺跡	山内村土淵	縄文(早～晩)・弥生	93
66	虫内Ⅰ遺跡	山内村土淵	縄文(後・晩)	95
67	虫内Ⅱ遺跡	山内村土淵	縄文(前～晩)	87
68	虫内Ⅲ遺跡	山内村土淵	縄文(早～晩)	91
69	岩瀬遺跡	山内村土淵	縄文(草創～晩)	94
70	上谷地遺跡	山内村平野沢	縄文(中～後)	90
71	越上遺跡	山内村黒沢	縄文(前・中～後)	88
72	西ヶ沢窯跡	平鹿町醍醐	奈良～平安	55
73	大保中台遺跡	平鹿町醍醐	縄文(中)	55
74	竹原窯跡	平鹿町上吉田間内	奈良～平安	80
75	吉田城跡	平鹿町上吉田間内	中世～近世	45
76	年子狐遺跡	平鹿町中吉田	奈良	68
77	中藤根遺跡	平鹿町樽見内	縄文、奈良	20
78	下藤根遺跡	平鹿町樽見内	縄文、奈良	27
79	浅舞遺跡	平鹿町浅舞	縄文(中・後・晩)	55
80	中都(牛首)遺跡	平鹿町下鍋倉	縄文(晩)、弥生	4・55
81	十三塚遺跡	雄物川町東里	縄文、弥生	40
82	蝦夷塚古墳群	雄物川町造山	奈良～平安	59
83	兵部ヶ沢遺跡	雄物川町沼館	縄文(晩)	62
84	根羽子沢遺跡	雄物川町大沢	縄文(前～中・後)	65・67
85	末館Ⅰ窯跡	雄物川町今宿	奈良	6
86	末館Ⅱ窯跡	雄物川町今宿	奈良	6
87	新道遺跡	雄物川町大沢	旧石器、縄文(中)	40
88	宝竜堂遺跡	十文字町上鍋倉	縄文(中)	81
89	八木遺跡	増田町増田	縄文(中～後)	70
90	平鹿遺跡	増田町増田	縄文(晩)～弥生、平安	52
91	梨ノ木塚遺跡	増田町吉野	縄文(前～後・晩)	32・33
92	上掵遺跡	東成瀬村田子内	縄文(前)	62
93	矢櫃遺跡	東成瀬村岩井川	旧石器	9
94	宮の前遺跡	稲川町八面	平安	32・34
95	欠上り遺跡	稲川町久保	縄文(前～中)	2
96	稲庭城跡	稲川町稲庭	中世～近世	63
97	湯元遺跡	皆瀬村畑等	縄文(早～前)	37
98	城神巡り遺跡	羽後町足田	平安	39
99	足田遺跡	羽後町足田	平安	24・30
100	新成遺跡	羽後町足田	旧石器	8
101	七窪遺跡	羽後町足田	平安	82
102	足田門田遺跡	羽後町足田	平安	13
103	大久保杉宮遺跡	羽後町大久保	縄文、奈良～平安	58・64
104	柏原古墳群	羽後町大久保	奈良～平安	64・72・89
105	貝沢拾三本塚	羽後町貝沢	中世	5
106	五把出山遺跡	羽後町西馬音内	旧石器	7
107	木津根崎遺跡	湯沢市岩崎	縄文(前)	12
108	中屋敷遺跡	湯沢市山田	縄文(後)	14
109	鐙田遺跡	湯沢市松岡	縄文(晩)	19
110	松岡経塚	湯沢市松岡	平安、中世	4
111	鵜沼城跡	雄勝町桑ヶ崎	中世～近世	38
112	桐木田遺跡	雄勝町小野	中世～近世	50
113	外ヶ倉遺跡	雄勝町上院内	縄文(早)	16
114	館堀城跡	雄勝町寺沢	中世～近世	45
115	岩井堂岩陰遺跡	雄勝町上院内	縄文(早)	10・35

第２表　横手盆地の主要遺跡一覧(２)

番号	遺　跡　名	所　在　地	時　代	文　献
64-1	江原嶋1	大雄村字東阿気	縄文(中～後)、平安	本書
64-2	江原嶋2	大雄村阿気	縄文	62
64-3	剰水	大雄村字剰水	縄文	62
64-4	柏木	大雄村田根森	古代	62
64-5	根田谷地	大雄村田根森	古代	62
64-6	江原嶋館	大雄村字東阿気	中世	45
64-7	館屋敷	大雄村字阿気	中世	45
64-8	八柏城	大雄村八柏	中世	45
64-9	監物館	大雄村田根森	中世	45
64-10	宮田館	大雄村宮田	中世	45
3-72	落合館跡	横手市黒川	中世	45
3-73	黒川館跡	横手市黒川	中世	45
3-74	館西	横手市黒川	古代	62
3-75	西野館跡	横手市下境	中世	45
3-76	八気	横手市上境	古代	62
3-77	上間明田	横手市上境		62
3-79	三ツ栗柵木	横手市下境	古代	18
3-80	関合	横手市下境	縄文	62
3-81	古館跡	横手市八丁	中世	45
3-82	塚堀字塚腰塚	横手市塚堀	不明	62
3-83	手取清水	横手市塚堀	縄文(晩期)・弥生・平安	23・74
3-84	オホン清水北	横手市塚堀	縄文(後～晩期)・弥生・平安	56
3-85	オホン清水Ｂ	横手市塚堀	縄文(後～晩期)・古墳・平安	56
3-86	オホン清水Ａ	横手市塚堀	縄文(後～晩期)・平安	56
3-87	猪岡字萱原	横手市清水町新田	縄文(後～晩期)	62
3-88	鷹匠道下	横手市猪岡	縄文・平安	62
3-89	中堰西	横手市猪岡	縄文・平安	62
3-90	薬師前	横手市清水町新田	縄文	62
3-91	般若寺	横手市塚堀	平安	4
3-92	中猪岡Ａ	横手市猪岡	縄文・平安	62
3-93	中猪岡Ｂ	横手市猪岡	平安	62
3-94	宮下	横手市清水町新田	平安	62
3-95	川口Ａ	横手市猪岡	平安	62
3-96	川口Ｂ	横手市猪岡	中世～近世	62
3-97	猪岡字八幡	横手市猪岡	縄文(晩期)・平安	62
3-98	清水町新田字堤下	横手市清水町新田	縄文(後～晩期)・平安	62
3-99	大堰端	横手市清水町新田	縄文(後～晩期)・平安	62
3-100	宮東	横手市清水町新田	縄文・平安	62
3-103	赤川館	横手市赤川	中世	45
3-104	野際	横手市赤川	縄文・平安	62
3-105	猪岡館	横手市猪岡	中世	62
3-106	長瀞Ａ	横手市猪岡	平安	62
3-107	長瀞Ｂ	横手市猪岡	縄文	62
3-108	森崎	横手市赤坂	中世	62
3-109	赤坂字高口	横手市赤坂	縄文・平安	62
3-111	城野岡館	横手市赤坂	中世	45
3-112	城野岡塚群	横手市赤坂	不明	62
3-113	猪岡	横手市猪岡	縄文・平安	62
3-114	岩野沢Ａ	横手市猪岡	縄文	62
3-115	岩野沢Ｂ	横手市猪岡	縄文(後～晩期)・平安	49
3-116	城野岡	横手市赤坂	平安	62
3-117	城野岡前Ａ	横手市赤坂	縄文	62
3-118	城野岡前Ｂ	横手市赤坂	縄文	62
3-121	橋本	横手市赤坂	縄文(後～晩期)	62
3-122	城野岡窯跡	横手市赤坂	平安	62
3-130	条里制跡	横手市黒川外	古代？	3
8-43	門野目城	大曲市角間川町	中世	45
59-52	七日市城	平鹿町下吉田		55
60-73	館野	雄物川町薄井		62
60-74	新城館	雄物川町薄井	中世	45
60-75	薄井館	雄物川町薄井	中世	45
60-94	天保無縁塚	雄物川町薄井		40
60-95	矢神	大森町字鰌沼	縄文	40
61-10	松原Ⅰ	大森町上溝	古代	29
61-12	上野	大森町上溝	縄文	46
61-13	石清水	大森町上溝	縄文	62
61-14	白山下Ⅰ	大森町上溝	縄文中期	29
61-15	白山下Ⅱ	大森町上溝	縄文中期	29
61-16	白山下Ⅲ	大森町上溝	古代	29
61-17	阿美多地	大森町猿田	縄文後期	29
61-18	中山Ⅰ	大森町猿田	縄文中期	29
61-19	中山Ⅱ	大森町猿田	縄文中期	29
61-20	中山Ⅲ	大森町猿田	旧石器	46
61-21	高口下水戸堤	大森町字高口	古代	62
61-26	剣花山	大森町十日町	不明	62
61-36	大森城	大森町字高口	中世	45
61-42	岩清水	大森町上溝	近世？	62
61-43	文天鏡田	大森町字文田鏡田	不明	46
61-44	弥陀三尊碑	大森町猿田	中世	46

第３表　江原嶋１遺跡周辺の遺跡一覧

第３章　調査の概要

第１節　遺跡の概観

遺跡周辺の現状は、標高36m前後の水田であったが、調査の結果、間層を挟んで上下２面の微高地を確認し、それぞれの微高地とその周辺で主として平安時代と縄文時代の遺構・遺物を検出した。以下、遺跡の概観について時代順に略述する。

縄文時代前期

明瞭な遺構は検出されなかったが、大木２・３式期の縄文土器等が出土している。

縄文時代中期～後期

排水路設置工事対象部分(1,700㎡)のみの狭い範囲の調査であったが、多数の土坑および柱穴を確認した。覆土の特徴と遺物出土状況から、ほとんどが縄文時代中期後半から後期前半にかけての土坑墓であり、当該期の本遺跡はきわめて大規模で遺構密度の高い墓域を形成したと判断できる。土坑墓には上部に配石をもつ例もあり、底面から三角柱形土製品が出土した例がある。三角柱形土製品は県内では羽後町および六郷町で出土例がある。また、大量の当該期の土器・石器が出土している。このほか、少量の後期中葉～後葉の土器も出土した。

縄文時代晩期

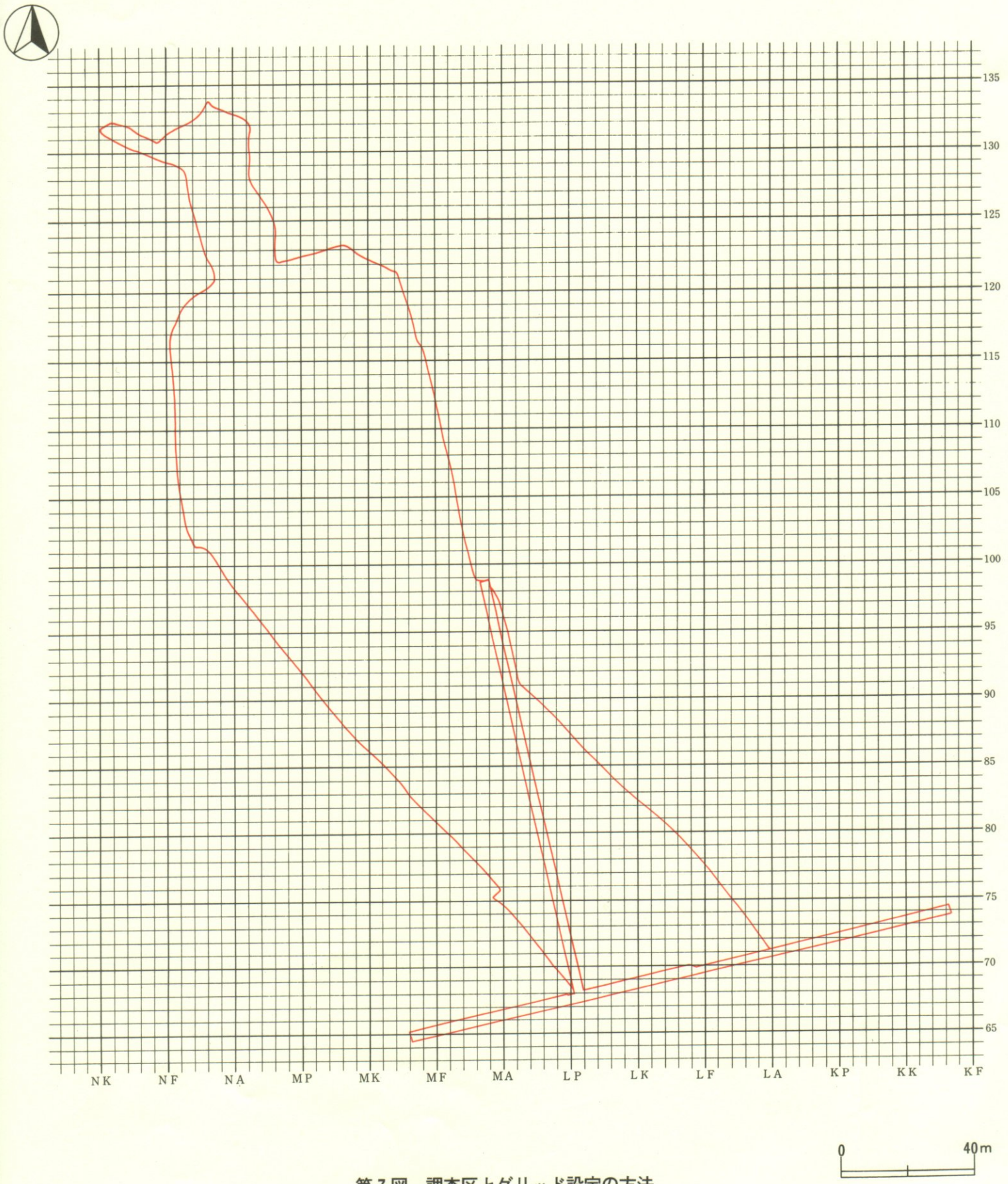
明瞭な遺構は検出されなかったが、大洞BC式期に属する土器が僅かに出土している。

平安時代

主として20棟余りの大小の掘立柱建物と僅かな竪穴住居などからなる集落跡であり、少なくともある時期には、油川とこれに平行する総延長350mを越える長狭な溝とによって集落を区画していたことが判明した。掘立柱建物跡は、分布域を異にする２棟を除くと、大半の長軸方位が直交する二方向にまとまる傾向にあり、出土遺物の年代からも比較的短期間のうちに連続して建てられたものと推定できる。また、上述した区画溝と過半の建物の軸方向にほぼ平行し、延長では約70mにわたって不連続的に広がる土器溜からは、完形のものを含む8,200点を越す土器片が一括廃棄されており、そのなかからは施釉陶器や石製銙具(巡方)が出土している。

中世～近世

明瞭な遺構としては、中世の井戸状土坑１基およびこれとほぼ同時期の可能性のある類似形態の土坑２基を検出したのみである。このほか耕作土中から、陶磁器・かわらけ・銭貨・鏡片などが出土している。陶磁器は量的には僅少であるが、龍泉窯系青磁などの貿易陶磁、瀬戸美濃・珠洲・肥前などの国産陶磁器があり、なかには瀬戸天目茶碗や初期伊万里様式に属する磁器など当時にあっては高級



第７図　調査区とグリッド設定の方法

品が含まれる。

現在の水田造成時に削平された中近世集落を想定しうる。また、本遺跡北西に位置したとされる江原嶋館跡の削平を受けたものである可能性も存在する。

第２節　発掘調査の方法

調査区全域には国家座標第Ｘ系の座標北を基準として、（Ｘ＝－73.200000, Ｙ＝－31.900000）を原点とする各４ｍ間隔の方眼を設定した。方眼の原点を通る南北線をＭＡ、同じく東西線を100とし、南北線は西に向かってアルファベットの符号を、東西線は北に向かって数字の符号を、それぞれ昇順となるよう付した。なお、南北線に付した２文字のアルファベットはＡ～Ｔまでの20文字の繰り返しとなっている。この方眼によって画する４ｍ四方の区画は、その南東隅を通る南北線の符号と東西線の符号とを組み合わせて、ＭＡ100区のように呼称した（第７図）。

調査区は、ほ場整備面工事部分と３本の排水路設置工事部分とに分けられる。後者は前者よりも深く掘削することとなり、縄文時代の遺物包含層に係るので、東西方向排水路設置位置をⅠトレンチ、油川沿い排水路設置位置をⅡトレンチ、面工事部分に挟まれる南北方向排水路設置位置をⅢトレンチと呼称した（第７図）。

後述するように、面工事対象部分の調査区は、古代集落の東端を走る当該期の溝跡（ＳＤ01Ａ）が当初の遺跡推定範囲よりも北西側および南東側に延伸することが判明したことから、最終的には当初予定区より北西・南東の双方向に拡張した形態となっている。

調査は、ほ場整備面工事部分および排水路設置工事部分ともに、重機および人力による表土除去ののち、遺構確認作業を行った。遺構番号は「凡例」に示した通り、確認順に付し、遺構の性格を表す略記号と組み合わせてＳＤ01のように呼称した。ただし、調査の進行に伴い、遺構の性格が当初予想したものと異なると判断して略記号を変更した場合や、途中で遺構でないことが判明して欠番とした場合がある。確認後の遺構精査は、長軸方向とそれに直交する方向に土層観察用ベルトを残す四分割法と、柱穴等の小規模な遺構および排水路設置工事部分など四分割法の不可能な箇所では長軸に沿う二分割法で行うことを原則とした。溝跡や遺構の重複する箇所等では適宜サブトレンチを入れた。

記録は、図面と写真によった。遺構実測は、面工事部分では原則的に各方眼杭を基準として計測を行い、排水路設置工事部分では光波測量機器の利用と一部手作業による計測とを併用した。遺構の平面図・断面図の原図縮尺は１/20を基本としたが、遺物出土状況など細部の表現が必要なところでは縮尺１/10の計測も行っている。写真撮影は、35㎜カラーリバーサルフィルムと黒白ネガフィルムを主に使用したが、必要に応じ中版用フィルムや35㎜ネガカラーフィルムも使用した。なお、遺跡の全景写真（巻頭図版１・２）は航空写真撮影である。

遺物は、遺構名・方眼区画名・出土層位・出土年月日をチャック付ポリ袋もしくは耐水用荷札に記入のうえ取り上げることを原則とした。

なお、範囲確認調査時における出土遺物は方眼杭が設定される以前に取り上げたので、本書で記載する場合には、範囲確認調査トレンチそのままの名称を用いることとし、「範１トレンチ」のように表記することとする。

第３節　発掘調査の経過

調査日誌にもとづいて、以下に調査経過を略述する。

５月25日、秋田県埋蔵文化財センター(以下、「センター」と略記)の三浦所長も出席して作業員説明会を開催。器材の搬入、駐車場・事務所棟等の整備終了後、面工事部分の発掘調査を開始。26日、人力による表土除去作業中、当初調査予定範囲の北端部Ⅲ層上面にてSD 01を確認。29日、ベルトコンベアー運転開始。水準測量開始。

６月１日、本日より非常勤職員黒澤・亀井・菊地現場参加。東西方向排水路設置予定地(Ⅰトレンチ)の発掘調査を開始。同トレンチ南壁側に土層観察用サブトレンチを設定。２日、NI～MQ 102～105区Ⅲ層上面にて柱穴群を確認。３日、平鹿農林事務所相場博隆主査、中田藤春技師現場視察。４日、Ⅰトレンチ南壁にて縄文時代の土坑や柱穴を多数確認、掘り込み面はⅣ層～Ⅴ層上面。９日、大雄村広報担当者、発掘調査風景の写真撮影のため来跡。SK 05遺物分布図計測開始。10日、東京都立大学山田昌久助教授、国立歴史民俗博物館辻誠一郎助教授来跡。相場氏来跡。大雄村佐々木良文教育長来跡。検出した柱穴群の配置よりSB 23・SB 24を認定。11日、降雨のため発掘作業を休止、範囲確認調査時に掘削したトレンチ排土中の遺物採集作業。12日、センター櫻田課長補佐来跡し、ほ場整備工事による表土掘削面(Ⅲ層上面相当)での溝跡３条の確認状況視察。17日、断ち割りの結果、倒木痕と判断して欠番としたSK 18サブトレンチで摩滅した縄文土器片を検出。このことにより、縄文時代遺物包含層が当初予想以上に北側に広がっていることを確認、同時にサブトレンチを設定したMQ･MR 104区のⅣ層上面の標高が34.8～35.1mであることが判明。相場氏・中田氏来跡。18日、遺跡測量システムを導入。22日、佐々木義広大雄村長および阿気地区ほ場整備推進委員会(約35名)来跡。23日、文化課武藤学芸主事・櫻田課長補佐来跡。ほ場整備着工中の遺跡南側で確認した古代～近世遺構分の取扱等について協議。24日、大雄村教育委員会(７名)来跡。25日、Ⅲ層上面検出のSK 05・SK 25等を一連の遺物廃棄用土坑(土器溜)と判断。26日、終日降雨のため現場作業全てを休止。29日、ML 106 SKP 10より半割材を検出、Ⅰトレンチ西端より日時計状組石を確認。30日、湯沢北高等学校本田嘉之教諭来跡。

７月１日、日時計状組石が円形平面土坑の上面施設であることが判明(SK 1127)。３日、SD 01より中央部穿孔の石製品が出土。７日、油川沿い排水路設置予定地(Ⅱトレンチ)の表土を除去。工事掘削深度より上位では遺構・遺物の確認はみられなかった。９日、ほ場整備工事請負業者より、東西方向の排水路設置位置(Ⅰトレンチ)が５月に呈示した位置よりも約50cm南側にズレるとの連絡があった。その結果、地表面換算で約130㎡の追加調査が必要となった。10日、Ⅲ層上面で土器廃棄用土坑をさらに２基(SK 35・SK 39)検出。同様の土坑は計６基となった。13日、Ⅰトレンチで土器埋設遺構を確認。15日、安原・黒澤、潟前遺跡第２次発掘調査実測応援(17日まで)。SK 25より石製銙具出土。16日、土器埋設遺構は炉跡(土器埋設炉)であること、竪穴住居に伴うものではないことが判明(SN 1211)。小野茂治氏(秋田考古学協会員、雄物川町在住)遺跡見学。17日、この日までで柱材と思われる材が７点検出。21日、Ⅰトレンチ拡幅部分の調査開始。Ⅲ層上面にて有孔の垂飾品らしい石製品が出土。23日、降雨のため現場作業休止。終日、遺物洗いと範囲確認調査排土包含の遺物採集を行

う。その際、多量の土器・石器とともに有孔石製円盤を採取。29日、SK 1266から深鉢が出土。30日、降雨のため、遺物洗いと範囲確認調査トレンチ排土の遺物採集作業を行う。31日、SK 1268より最大長約40㎝・抉りの深さ約５㎜の大形石鏃が出土。

８月３日、重機による第２回表土除去(Ⅲ層上面・南西部)の開始(７日まで)。５日、SK 1315・SK 1369・SK 1386などから本来ほぼ完形であったと推定できる土器が出土。７日、第２回表土除去範囲から古代の竪穴住居跡１基(SI 63 B)を確認。夏期休暇に向けた安全対策・遺構保存対策を行う。17日、夏期休暇を終え、現場作業を再開。19日、ミズホ測量、第２次分までのグリッド配置図納品。24日、SK 1462より三角柱形土製品が出土。25日、Ⅲ層上面にてSB 59など新たに７棟の掘立柱建物跡を検出。SB 59を構成する約半数の柱穴確認面で須恵器片を検出。27日、相場氏・中田氏来跡、南北排水路位置確認および調査状況の協議。

９月１日、SR 1441より逆位埋設の縄文時代後期前葉の土器が出土。４日、阿気土地改良区職員(４名)遺跡見学。７日、センター三浦所長・櫻田課長補佐来跡。８日、相場氏・中田氏来跡、地権者説明会について。センター船木調査課長初来跡。９日、教育庁文化課冨樫泰時課長・武藤学芸主事来跡。大雄村婦人学級遺跡見学(約30名)。14日、SQ 3004より長さ38㎝の石棒が出土。16日、台風５号襲来に備え、ベルトコンベアー・ローリングタワー等発掘器材の安全対策を行い、午後は現場休止とした。21日、ミズホ測量、第３次分までのグリッド配置図納品。25日、Ａ区北側および南東側を重機により表土除去した。

10月６日、ミズホ測量株式会社によるグリッド杭打設作業(第４次)。16日、文化庁小林克調査官による現地指導。船木調査課長・武藤学芸主事ともに来跡し、現地視察。21日、大館工業高等学校教諭(現秋田工業高等学校教諭)五十嵐典彦氏による現地指導。22日、調査区南端Ⅲ層上面確認の旧水田水路より縄文時代のミニチュア土器が出土。30日、大雄村文化財保護協会および村立阿気小学校５・６年生による遺跡見学(約80名)。ミズホ測量、最終分(第５次分)グリッド配置図納品。

11月２日、調査区南端旧水田水路より石棒破片が出土。５日、朝日新聞横手通信局柳沼記者、取材のため来跡。相場氏・中田氏来跡。13日、ハイマーテック社による航空写真撮影。17日、縄文土器や礫が露出する80ライン以南の縄文期微高地の広がりを計測終了。18日、遺構精査と遺物洗いを全て終了。19日、相場氏・中田氏、武藤学芸主事立ち会いのもと、現場引き渡しに関する現地協議。遺物・測量器材・事務用品材等の搬出作業および現場内の測量杭・釘・コノエ鋲などの除去作業。20日、発掘器材・遺跡管理システム・パイプ類・板材・書類等の搬出作業。コンテナハウス・トイレハウス・リース器材等の返却準備完了、業者と返却に関する打ち合わせ。午後３時、三浦所長より作業員に慰労を兼ねた現場終了挨拶。

なお、面工事対象部分については、当初調査対象面積は15,000㎡であったが、古代集落の東端を走向する当該期の溝跡(SD 01のちにSD 01 A)が当初の遺跡推定範囲よりも北西側および南東側に延伸することが発掘調査中に判明した。このため溝跡の広がりを確認しながらの調査となった。溝跡を調査するため、延伸するであろう方向の表土除去作業およびグリッド杭打設作業を行い、当初予定区より北西・南東に拡張して調査を行った。いっぽう、削平を受けていることが判明し、調査対象外とした箇所もあるため、面工事対象部分における最終的な調査対象面積は15,500㎡にとどまった。

排水路対象部分については、当初予定は1,700㎡であったが、Ⅱトレンチを調査対象外とし、追加調査の必要な箇所もあって最終的には1,200㎡となった。

したがって、最終的な調査対象面積は16,700㎡となり、結果的に当初予定に等しい面積となった。

第4節　整理作業の方法

1　原則および方針

遺構の整理については、覆土の特徴と遺構内外の遺物出土状況とを照合し、出土遺物の由来と遺構の時期や性格の把握に努めた。検討の結果、有意な遺物出土状況を認定することができる場合は、原則として遺物出土地点もしくは出土状態を掲載した。また、有意な遺物出土状況か判断しかねる場合等も適宜出土地点等を掲載した。ただし、個々の遺構における表現方法はその状況に応じて変更している。

また、遺物については以下のような原則に則って整理・選択し、報告書に掲載した。

まず、土器類(陶磁器含む)については、異なった遺構で出土した土器類同士および遺構内出土土器類と遺構外出土土器類との接合に努めた。接合作業ののち、復元実測が可能な遺構内出土土器類は原則として実測し、これを掲載した。復元実測可能な遺構外出土土器類は、各器種ごとの形態等の変異を可能な限りもれなく網羅できるよう選択し、実測した。この実測の際には適宜拓本も併用した。

復元実測が困難な断片資料は拓本作成と断面図実測を原則とした。遺構内出土断片資料は文様や調整痕があって時期の比定が可能な資料、口縁部破片資料、底部破片資料を中心に選択し、これを掲載した。これに対し、遺構外出土断片資料は縄文時代にあっては精製土器、古代以降にあっては出土例の少ないものを中心に、全体の出土傾向に応じるのではなく、器形・文様等の変異を可能な限り網羅するよう努めた。

一方、石器は遺構出土例と遺構外出土例とでは選択基準を別にした。前者では二次的な加工痕もしくは使用痕が認定できる石器は微小剥離痕ある剥片を除いた全点を実測・掲載することを原則とした。後者では、各器種ごとに代表的な形態のものを中心に、特異な形態などの稀少例と製作における特徴等が顕著な例を加えて選択し、実測した。

以上の原則のもとで遺物の整理を実施したが、紙数の関係で、遺構外出土遺物はそのごく一部を掲載するにとどまった。

なお、柱穴および報告書掲載遺物には観察表を付すことを原則とした。

2　縄文土器分類と時期区分

今回の調査では、一部断絶期間があるものの、縄文時代前期前葉から晩期前葉にかけての資料が出土した。出土土器の大半は、中期中葉から後期前葉にかけてのものである。その中で、遺構によっては、大木10式から門前式にかけての諸型式の細別に相当すると想定できる土器群が出土した例がある。調査時の出土状況の検討は必ずしも充分ではないことから、本遺跡での出土状況から、それら細別そのものの是非について論ずることは難しい。ここでは、報告書記述の都合上、当該時期の土器群については、基本的に本間宏氏(註1)に従い、若干の細別をした。

大木10式(古)は、本間の大木10ａ式に相当する。
大木10式(中)は、本間の大木10ｂ式に相当する。
大木10式(新)は、本間の観音堂式に相当する。

なお、ここでの大木10式(新)土器群を、本間は後期初頭に位置づけている。しかし、当該資料を中期・後期のどちらの大別に含めるかは、現時点では議論が分かれている。将来的には、関東地方をはじめとした周辺地域の中期末から後期初頭の土器編年との平行関係を検討した上で、中期・後期の大別について列島規模で総合的に判断すべきであろう。本書では、山内清男の大木10式標本資料中には、当該段階相当資料を含むと認め、さらに大木10式の終末を中期の終末とする立場をとる。よって、大木10式の等質の細分かは問題があるものの、当該資料を中期最終末の大木10式(新)としておく。

なお、粗製土器や細片のため具体的な型式比定の困難な土器については、場合によって、中期土器等の大別表記などをすることもある。

3　古代土器の分類

酸化焔焼成の軟質の赤褐色土器を、ロクロ使用の有無や黒色処理の有無を問わず土師器とした。ただし、遺物観察表等では、土師器のうち、内面に黒色処理が施されたものを内黒、内外面に黒色処理が施されたものを両黒として記載している。

還元焔焼成の硬質の灰色を呈する土器を須恵器とする。須恵器を作ることを意図したものの還元焔の状態が保てず結果的に褐色ないし赤褐色を呈すると判断したもの、同様に焼成が不良で結果的に軟質になったと認められたものも須恵器として扱った。

第5節　整理作業の体制と経過

1　体制(※職名は当該年度当時)

整理担当者

〔平成10年度〕　榮　　一郎（秋田県埋蔵文化財センター調査課調査第3科学芸主事）
吉川　　孝（秋田県埋蔵文化財センター調査課調査第3科学芸主事）
佐々木政任（秋田県埋蔵文化財センター調査課調査第3科非常勤職員）
菊地　誠重（秋田県埋蔵文化財センター調査課調査第3科非常勤職員）
亀井　崇晃（秋田県埋蔵文化財センター調査課調査第3科非常勤職員）
黒澤　幸子（秋田県埋蔵文化財センター調査課調査第3科非常勤職員）
安原　　誠（秋田県埋蔵文化財センター調査課調査第3科非常勤職員）
〔平成11年度〕　榮　　一郎（秋田県埋蔵文化財センター調査課調査第3科学芸主事）
吉川　　孝（秋田県埋蔵文化財センター調査課調査第3科学芸主事）
〔平成12年度〕　榮　　一郎（秋田県埋蔵文化財センター調査課調査第3科学芸主事）
吉川　　孝（秋田県埋蔵文化財センター調査課調査第3科学芸主事）

総務担当者

〔平成10年度〕　菅原　　晃（秋田県埋蔵文化財センター総務課主査）
　　佐藤　幸嗣（秋田県埋蔵文化財センター総務課主事）
　　八文字　隆（秋田県埋蔵文化財センター総務課主事）
〔平成11年度〕　菅原　　晃（秋田県埋蔵文化財センター総務課主査）
　　佐々木敬隆（秋田県埋蔵文化財センター総務課主事）
　　八文字　隆（秋田県埋蔵文化財センター総務課主事）
〔平成12年度〕　佐藤　　悟（秋田県埋蔵文化財センター総務課課長）
　　佐々木敬隆（秋田県埋蔵文化財センター総務課主事）
　　八文字　隆（秋田県埋蔵文化財センター総務課主事）

２　経過

江原嶋１遺跡の発掘調査では、1,600基以上の遺構を検出し、18リッター入りコンテナで400箱以上の遺物が出土した。

本報告書の刊行年度は当初より平成12年度であったが、整理期間は発掘調査の終わった平成10年11月下旬から平成12年３月までの16ヶ月余りにすぎず、日程的に非常に厳しいことが調査開始当初から予想されたため、遺物の洗い作業と注記作業は極力現場で行った。洗い作業は、主として発掘調査の困難な雨天に行い、現場終了前には全遺物の洗い作業をほぼ完了した。

注記作業は現場でも行ったが、事務員２名による賃金等諸々の事務の合間を縫っての作業であり、到底出土量に追いつくものではなかった。センターでは機械（自動注記システム）で注記作業を行ったが、微細な破片資料等については整理作業員の手作業で行った。

注記作業終了後、４ｍ区画単位を基本に遺構および遺構外出土土器の接合作業を開始した。土器の接合および復元作業は、最終的には平成11年２月まで継続した。

これらの土器・石器をはじめとする遺物の選別は平成10年度末に集中して行った。

一方、遺構については、発掘調査における実測図面および撮影写真の点検および報告書掲載図の元図となる第２原図の作成は平成10年度中にほぼ終了した。土層注記のテキスト入力は平成11年度初頭に行った。

平成11年度は、榮が象潟町ヲフキ遺跡、吉川が大森町観音寺廃寺跡の調査を行いながらの整理作業となった。遺物実測図の約９割、遺物トレースの約９割、遺構トレースの約６割については整理作業員の手で平成11年度中に終えることができた。残った実測・トレースについては、一部石器の写真実測およびトレース図作成を株式会社エーテックに、一部縄文土器の実測・トレース図作成および一部遺構のトレース図作成をシン技術コンサル株式会社にそれぞれ委託した。

このほかテフラ分析および珪藻分析、寄生虫卵・花粉分析、種実同定はパリノ・サーヴェイ株式会社に、放射性炭素年代測定は株式会社古環境研究所に、樹種同定は株式会社パレオ・ラボにそれぞれ委託した。また、大館工業高等学校教諭五十嵐典彦氏（現秋田工業高等学校教諭）には掘立柱建物跡の分析を依頼し、平成11年９月に玉稿をいただいた。

なお、本遺跡の調査成果については、榮が平成11年３月に秋田県埋蔵文化財発掘調査報告会（男鹿

市)において、吉川が平成11年4月に江原嶋1遺跡発掘調査報告会(大雄村)および12年2月に秋田大学史学会(秋田市)において、それぞれ報告を行った。

註1　本間宏「大木10式土器の考え方」『しのぶ考古』10　1994(平成6)年

第４章　調査の記録

第１節　遺跡の層序

江原嶋１遺跡の調査前の現況は、油川幹線排水路沿いの西北部の一部が1.5m前後低くなる以外は、標高35～36m前後のほぼ平坦な水田であった。調査の結果、旧油川流路を主要な形成要因とする上下２面の微高地が埋没し(第８図)、平安時代と縄文時代の遺構・遺物がそれぞれの微高地を中心に分布することが明らかとなった。これら埋没地形を構成する遺跡の層序は、地点により若干の変異があるものの、今回の調査では、全体として以下のⅠ～Ⅳ層にまとめた。以下、Ⅰ・Ⅲトレンチの断面土層を中心に、遺跡の基本層序について記述する(第９～15図)。

Ⅰ層は現表土層である。大半は現水田耕作土(Ⅰｃ層)であるが、畦上位の造成土・敷き砂利層を分離し、細別記号を付加した。なお、現油川幹線排水路寄りの地点では、現水田造成時に造成土を入れている地点もある(Ⅰトレンチ MC～MG 65区周辺)。

Ⅱ層は現水田造成以前の旧表土層である。部分的には現水田の床土に相当すると判断できる地点もある。本層は前述した上位の微高地周辺では現水田造成時に大半が削平されている。

Ⅲ層は極めて均質なシルト質土で、腐植を含まない。本層上面が古代遺構の確認面である。遺存状態の良好な地点で、層厚は30～70cm前後あり、基本的に調査区全域に堆積する。本層上面標高は、Ⅰトレンチでは LI～LP 68区周辺、Ⅲトレンチでは LP･LQ 73～76区周辺で相対的に高くなっており、後述する旧油川起源の下位の微高地にほぼ並列するように、本層上面は北西方向にのびる微高地部とその両側に低位部とを形成している(第８図)。本層は、現水田造成時にその上位、場合によっては全体が削平されているが、現状で、Ⅲ層上面の微高地部と低位部との比高は最大60cm前後である。

本層はよく淘汰が進み、かつ、極めて広範に分布することから、油川起源ではなく、本遺跡の北西約600mを北流する雄物川由来の堆積物の可能性が強いと推定する。本層には顕著な混入物は乏しいが、MJ 115区本層上位から縄文土器が出土している(第142図14)。当該資料は摩滅痕跡は顕著ではなく、胎土・器形および縄文の特徴等から、縄文時代晩期に属する可能性が強い。また、本層は縄文時代中期中葉～後期前葉を主体とする遺物包含層であるⅣ層直上に整合で堆積する。さらに、縄文時代後期後葉～晩期前葉土器(第142図９～13)もわずかながらⅣ層から出土している。これらのことから、Ⅲ層は、縄文時代晩期の比較的短期間のうちに堆積した可能性が強く、堆積直後には少なくとも一部地点は離水していたものと想定できる。微高地形成は、主として、本層堆積時における直下のⅣ層上面の微地形の変化と、そのⅣ層層相の変異による本層堆積後の不等沈下とに起因するものと推定しておく。

なお、本層中には糸根状に酸化鉄が沈着するものの、酸化鉄・酸化マンガン斑紋の縞状集積等の埋没乾田土壌痕跡を土層断面で認めることができない(註1)。さらに当該層の植物珪酸体分析では、イネ機動細胞珪酸体は、現水田耕作土直下の本層上位で少量検出されたにとどまっている(註2)。高位部では、Ⅲ層上位が若干削平されているものの、Ⅱ層が遺存する周辺の低位部のⅢ層にも埋没乾田土壌痕跡を認めることができない。

Ⅳ層は微砂質～泥質の黒色もしくは黒褐色土である。層厚は30～60cm前後である。本層はⅠ・Ⅲトレンチの状況から、後述する旧油川が形成した本層直下の自然堤防および後背湿地地形とほぼ対応し、LR～MB 65・66区周辺が相対的に上面標高が高く、北西方向にのびる微高地状をなすものと推定できる。本層層相は、当該地点周辺では微砂質であり、より東側の低位部では黒泥質となる。本層には微高地部を中心に多数の縄文時代中期中葉から後期前葉の遺構と多量の当該時期の遺物が分布している。このほかに縄文時代前期・後期中葉～晩期前葉土器が少量出土し、これらの土器には顕著な摩滅痕等の二次的移動痕跡を認めることができない。これらの土器の出土を重視すると、現状では、本層堆積上限時期は縄文時代前期、下限時期は晩期前葉と判断する。

なお、調査では、遺構・遺物が濃密に分布することもあり、本層を細分し、遺構掘り込み面の上下差や出土遺物の時期差をとらえることはできなかった。

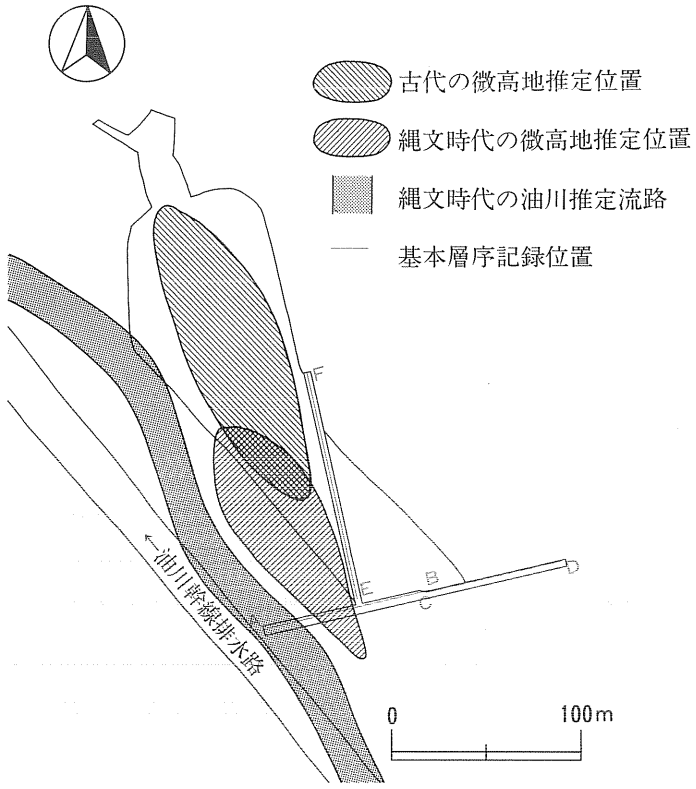
Ⅴ層は旧油川の自然堤防～後背湿地に相当する砂質土～シルト質粘土、Ⅵ層は旧油川の河床に相当する礫層である。Ⅴ層はグライ化が著しいⅤａ層と酸化状態のⅤｂ層とに分けた。これらⅤ・Ⅵ層堆積時には、油川はより遺跡寄りに東側へ蛇行し、小規模で低平な自然堤防とその東隣に後背湿地を形成したと推定できる。自然堤防から後背湿地への変化は漸移的であるが、ⅠトレンチではLRライン以東からⅤ層がシルト質粘土化するとともにグライ化が著しくなる。層相の変化も勘案すると、現状のグライ土壌（Ⅴａ層）確認域が後背湿地にほぼ相当するようである。Ⅴａ・Ⅴｂ層には共に顕著な混入物がない。

Ⅴ・Ⅵ層の形成時期は現状では特定し難い。Ⅳ層出土土器から、縄文時代前期には少なくとも一部の地点は離水していたと推定できよう。

また、Ⅱトレンチでは、重機によって、標高34.4m前後まで掘り下げた結果、１m前後の厚さの造成土および現水田造成直前の旧水田耕作土の下は、全面にわたって無遺物の礫層もしくはグライ化した粘土層が堆積していた。これらの層は、Ⅰトレンチで確認した旧油川流路河床のⅥ層よりも50cm前後下位に位置し、大勢として昭和40年代の改修直前の油川流路に対応すると判断できる。

以上の状況から、今回の調査地点周辺においては、油川は、縄文時代初頭前後には、現在よりも東寄りを蛇行しながら北流するとともにその流路沿いに微高地と後背湿地を形成し、その後、より西側に流路を変えた可能性を想定できる。その間の縄文時代晩期前後には、おそらく雄物川の氾濫によってシルトが厚く堆積する。その上面には、古代の遺構によって掘り込まれる倒木痕が存在し、さらに古代の遺構覆土には一般に腐植を含むことから、その後、地表は安定し、一定の植生が生成していたと判断できよう。

また、今回の調査では、古代～中世に属する可能性ある水田土壌・水路・畦畔等の水田痕跡を確認することはできなかった。後世に削平された可能性も想定し得るが、その削平をどの程度見積もるかについては、確実な根拠を欠く。旧表土が遺存する相対的に低位な地点でも、水田土壌を認めることができなかったこと、現時点では横手盆地周辺でも確実な古代～中世の水田跡が確認できないことを勘案すると、古代・中世の小規模な水田の存在は当然予測できるにしても、本遺跡周辺を含めた横手盆地での大規模な水田開発は近世以降まで下る可能性も考慮すべきかもしれない。



第８図　縄文時代・古代の微高地推定位置

Ⅰ・Ⅲトレンチ基本層序

Ⅰａ：畦上面敷き砂利

Ⅰｂ：畦造成土

Ⅰｃ：灰黄褐色土(10YR 4/2)　水田耕作土

Ⅱ　：褐灰色土(10YR 4/1)　水田床土

Ⅲ　：にぶい黄褐色シルト質土(10YR 5/3)　均質で混入物少ない　古代基盤層

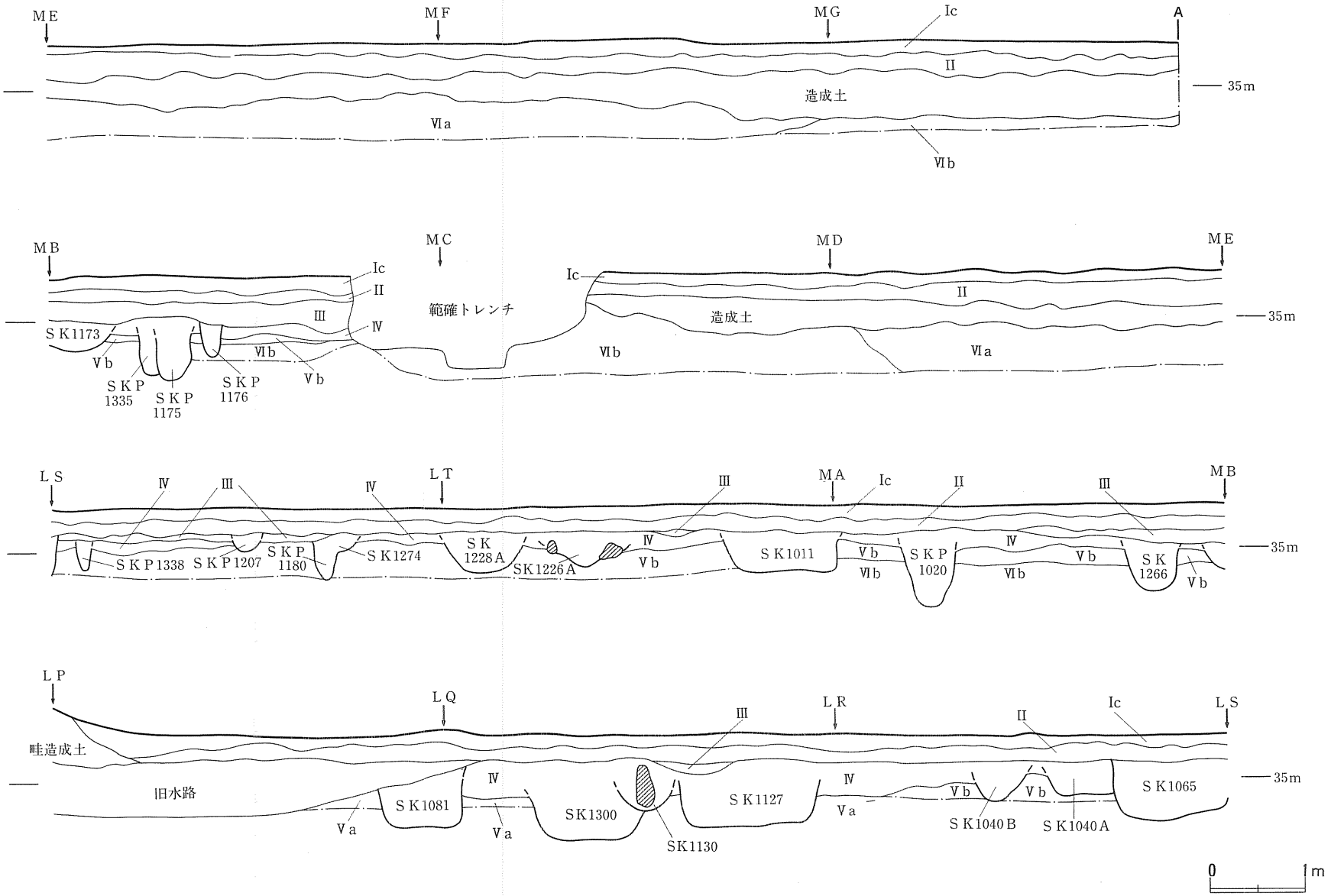
Ⅳ　：黒色土(10YR 2/1)　縄文時代遺物包含層

Ⅴａ：灰オリーブ色シルト質粘土(7.5Y 4/2)　グライ土壌

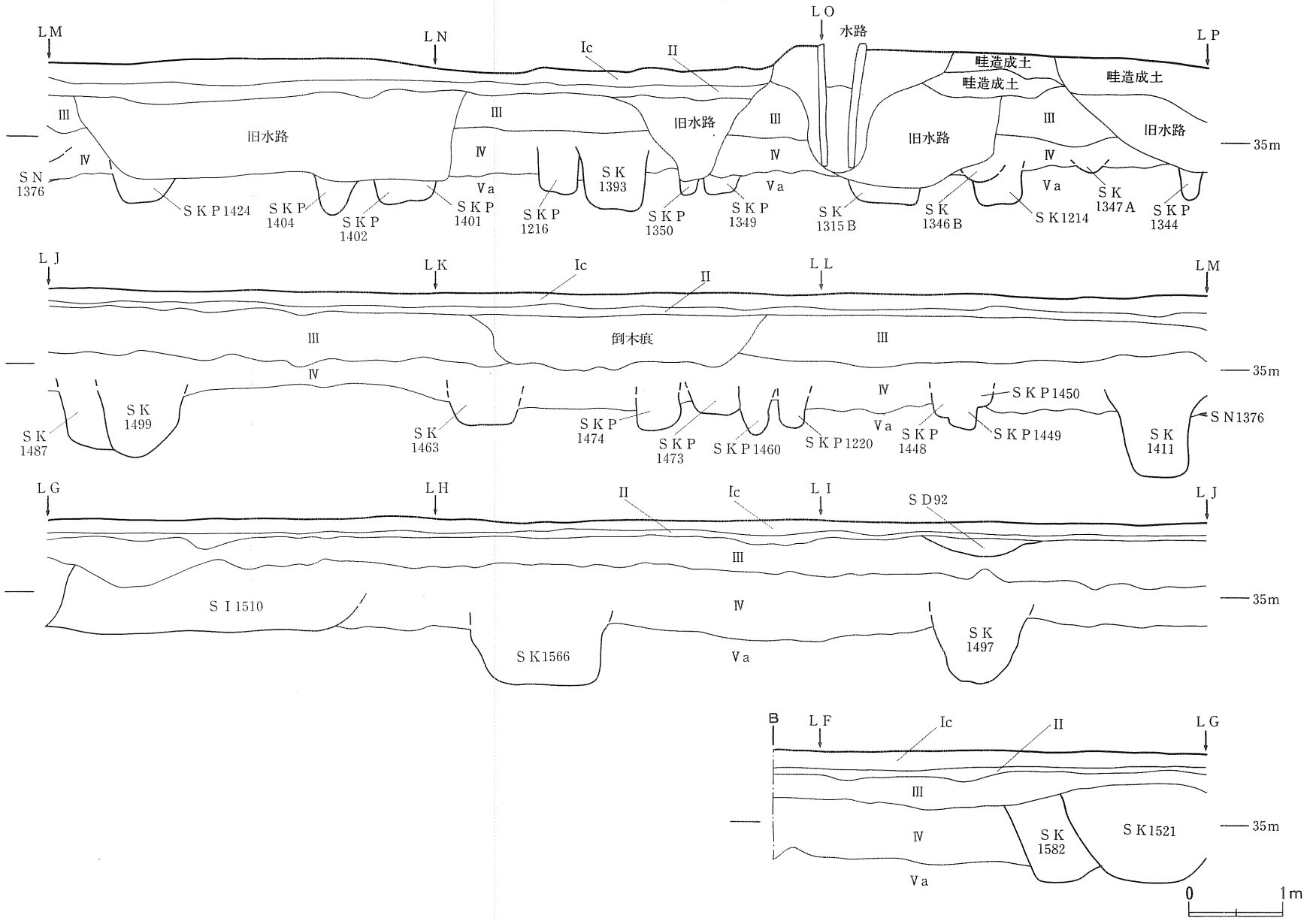
Ⅴｂ：にぶい黄褐色砂質土(10YR 5/3)

Ⅵａ：黒褐色砂質土(10YR 3/2)　旧河床

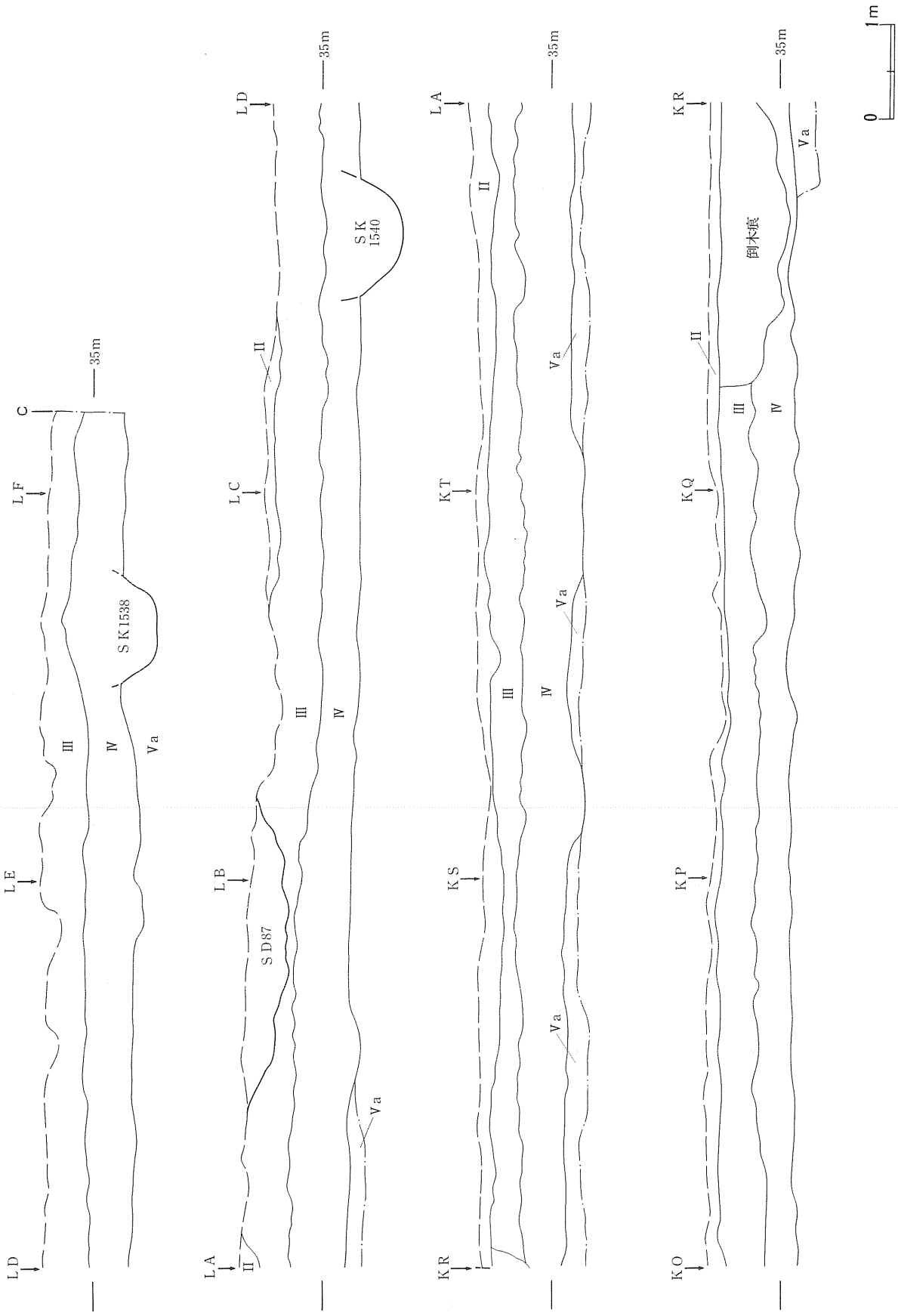
Ⅵｂ：黒褐色混礫土(10YR 3/1)　旧河床



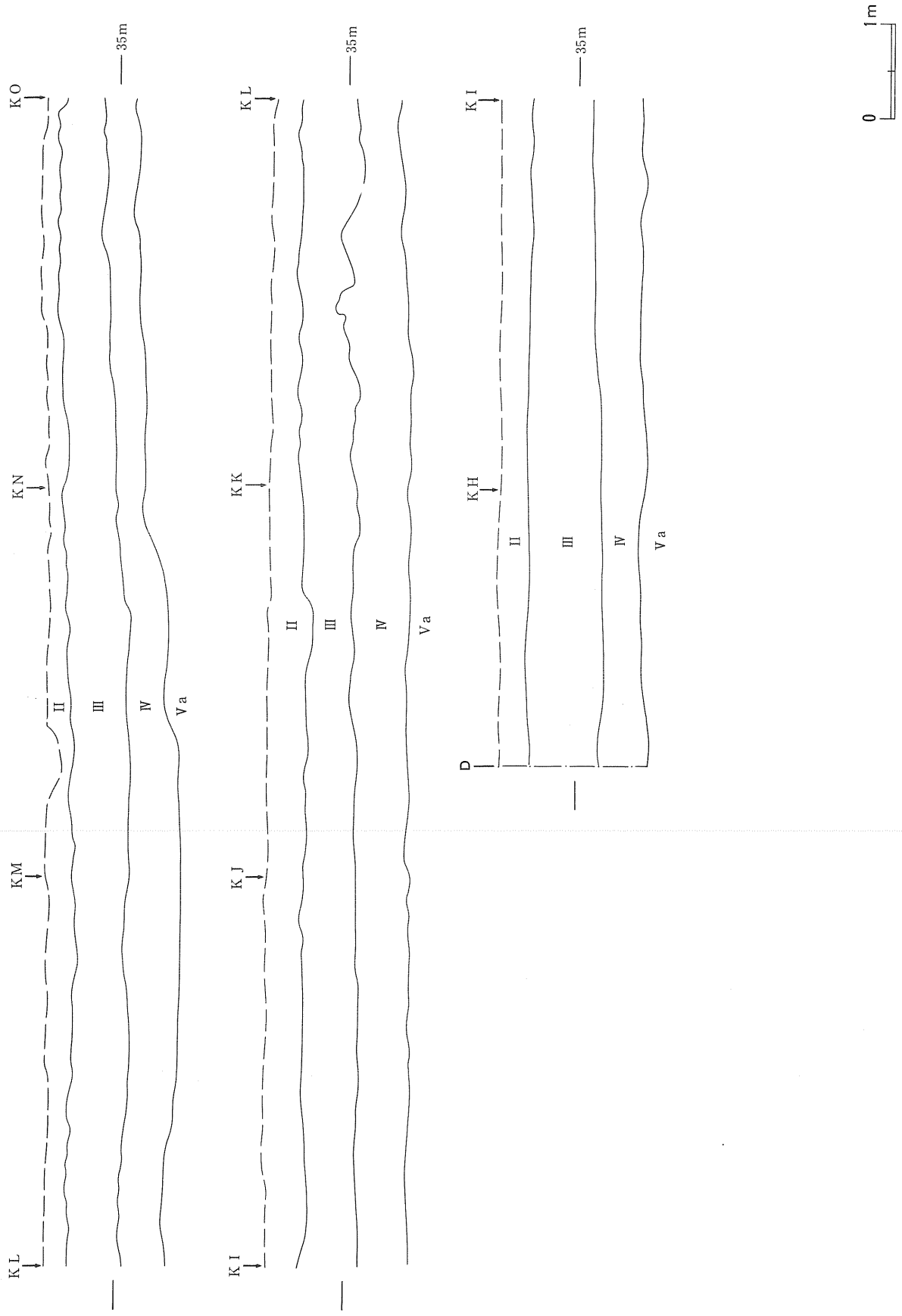
第9図　Iトレンチ土層断面(1)



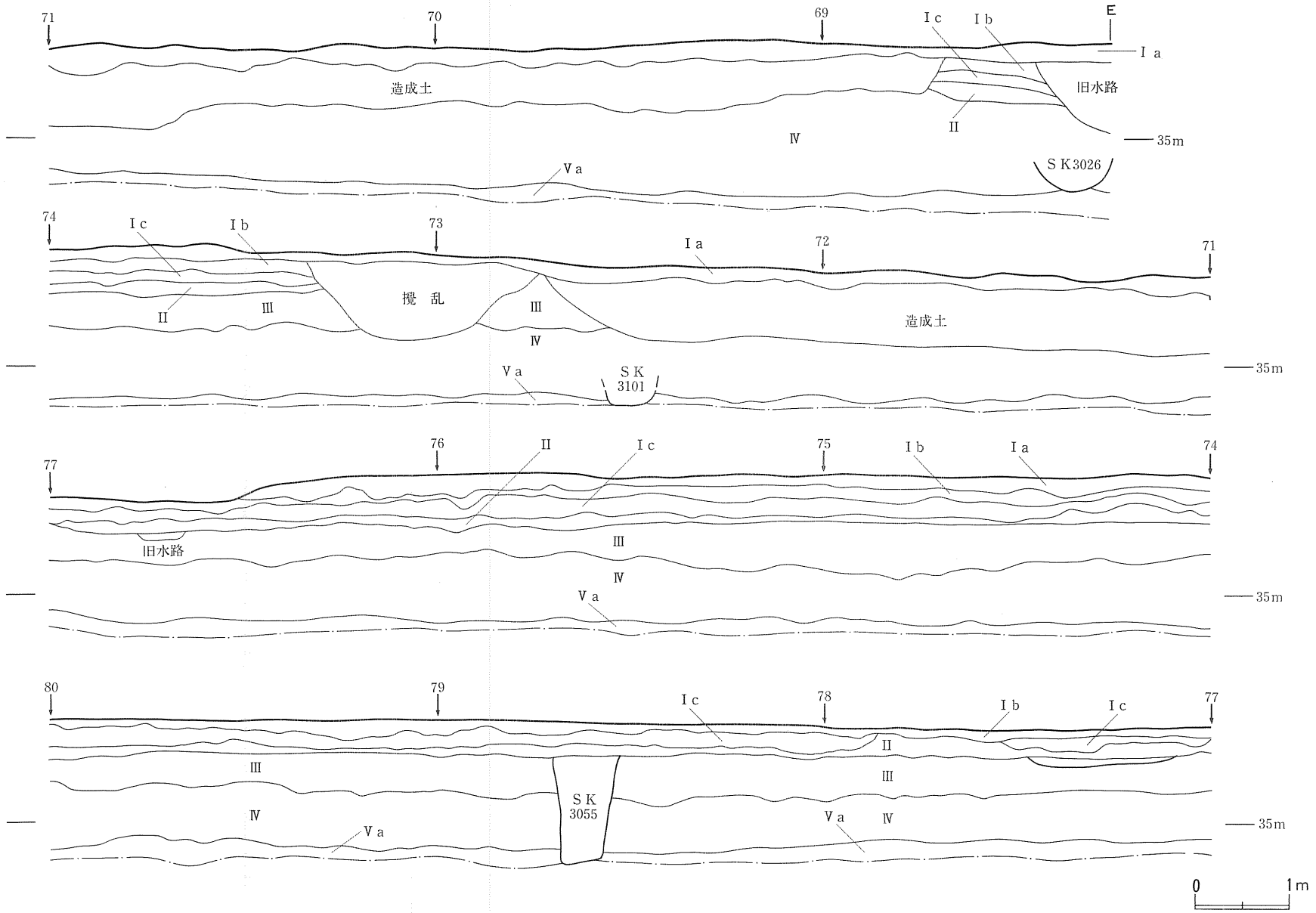
第10図　Ⅰトレンチ土層断面（2）



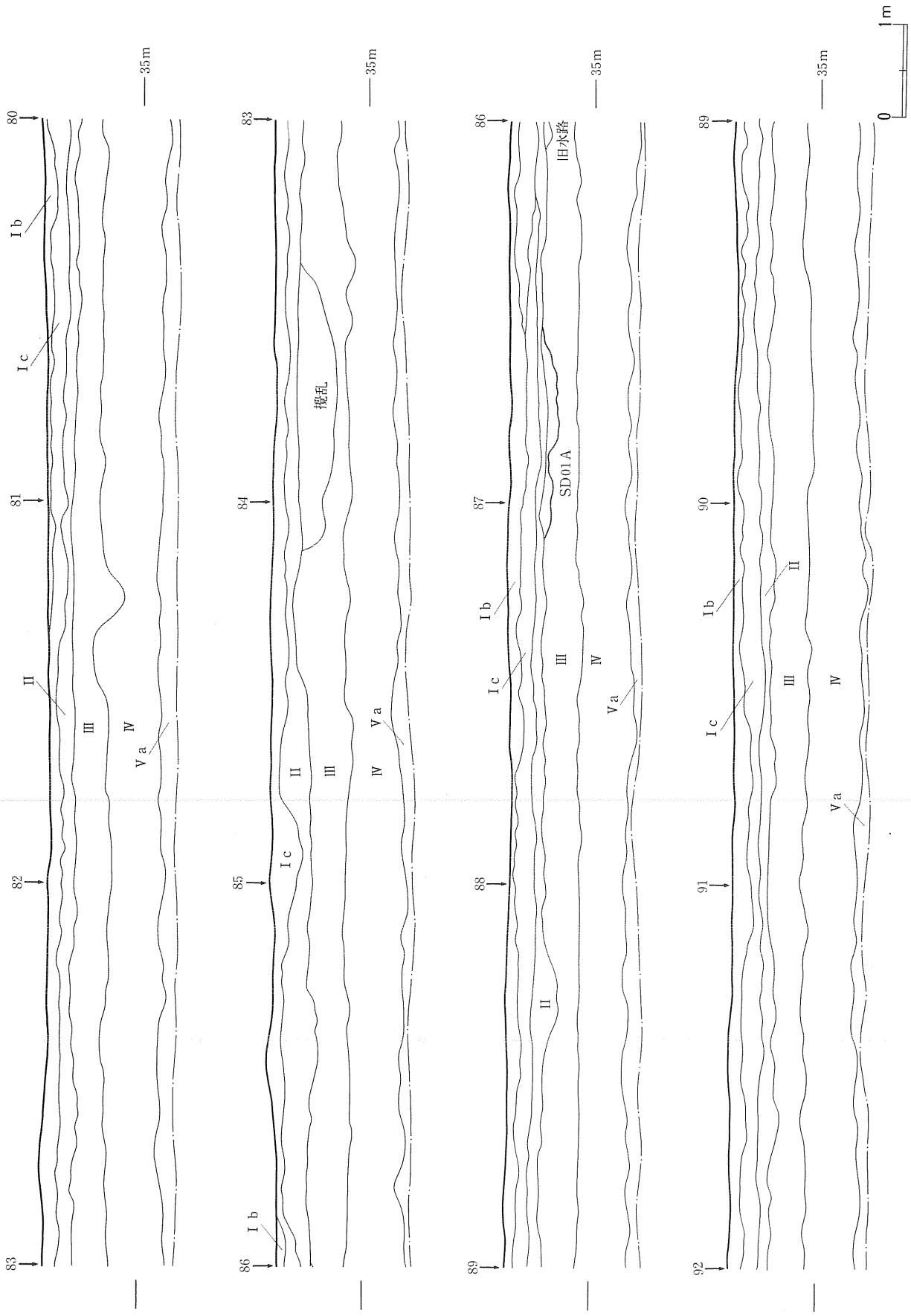
第11図　Ｉトレンチ土層断面（３）



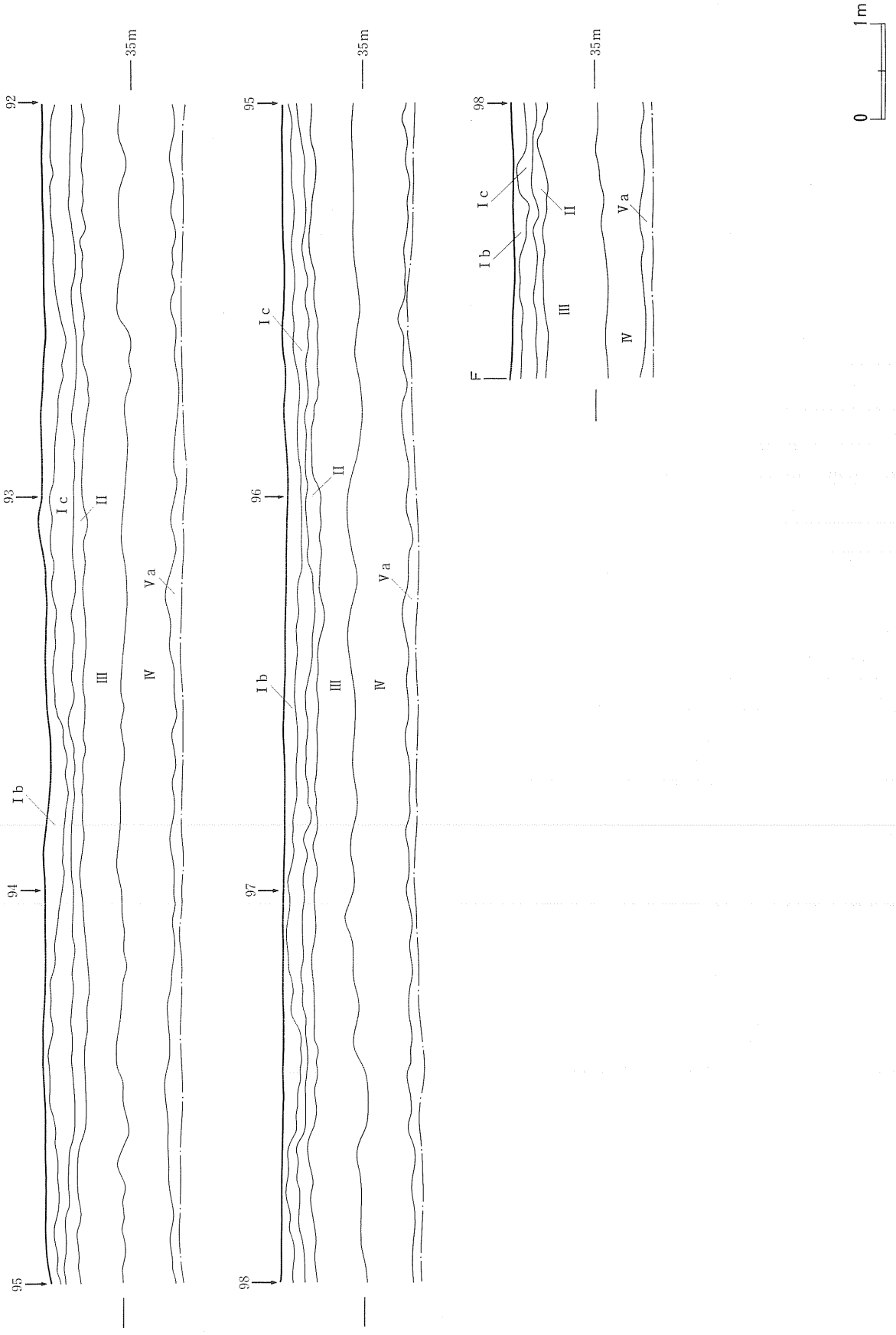
第12図　Ｉトレンチ土層断面（４）



第13図　Ⅲトレンチ土層断面（1）



第14図　Ⅲトレンチ土層断面（２）



第15図　Ⅲトレンチ土層断面（３）

第２節　縄文時代の遺構と遺物

１　検出遺構と出土遺物

（１）概要

検出遺構

今回確認した縄文時代の遺構は以下の通りである。これらの遺構は、詳細な時期を特定できる例は少ないが、遺構内外の遺物出土状況から、大勢としていずれも縄文時代中期中葉～後期前葉に属するものと判断する。

竪穴住居跡（略記号 SI）	1軒
土坑（略記号 SK）	138基
土器埋設遺構（略記号 SR）	6基
焼土遺構・屋外炉（略記号 SN）	18基
配石遺構（略記号 SQ）	14基
柱穴（略記号 SKP）	521基

出土遺物

縄文時代の出土遺物には、中コンテナ換算で縄文土器136箱、石器10箱のほか、土偶、三角柱形土製品、三角形土製品、円盤状石製品など少量の土製品・石製品がある（以下の記述では、土器と土製品とをまとめて土器類、石器・石製品をまとめて石器類とする）。このほか、平成９年度の範囲確認調査において、縄文土器類が約60箱、石器類が約30箱出土しており、これらの資料のうちの特徴的なものについてもあわせて報告する。

このうち、縄文土器については、基本的に従来の諸型式に比定して記述するが、一部は第３章第４節で述べたように細別する。その他の石器等については、凹石・磨石・敲石を凹石類と総称するほかは、従来の器種名称を原則として踏襲する。

分布

縄文時代の遺構・遺物は、基本的に旧油川右岸の小規模な自然堤防様の微高地とその周囲に分布する。後者は元来、微高地に対応する後背湿地に相当する。今回の調査で主体となるのは、Ⅳ層からⅤ層上面にかけて検出した縄文時代中期中葉（大木８ｂ式期）から後期前葉（宮戸Ⅰｂ式期）にかけての遺構・遺物である。この他、Ⅳ層中から縄文時代前期・後期中葉～晩期土器が、Ⅲ層上位や古代の遺構内から縄文時代晩期前後の土器がそれぞれ極少量出土している。

縄文時代の遺構・遺物が遺存するⅣ層以下の調査は、ほ場整備に伴う水路設置工事計画地点３箇所（Ⅰ・Ⅱ・Ⅲトレンチ）を対象に実施した。各トレンチは下底幅1.2～1.5m前後と極めて狭小であったため、縄文時代の遺構・遺物の広がりや個々の遺構の全体の構造などについては、不明な部分が少なくない。現状からは、各トレンチの状況は以下のようになる。

Ⅰトレンチ：MC66区以西は旧油川流路に当たり、遺構・遺物は分布しない。MB66区～LQ67区周辺は微高地部に当たり、本地点からその東側のLE70区周辺までの間には、土坑・柱穴を中心とした遺構が濃密に集中分布する。このうち、LF･LG69区周辺では縄文時代中期中葉(大木８ｂ式期)の竪穴住居跡１軒を検出している。これらの遺構集中地点の東側では、遺構の分布密度はしだいに低くなり、KT70区以東には遺構は分布しない。また、遺物分布は遺構分布とほぼ対応している。

Ⅱトレンチ：既述のように、全域が改修直前の旧油川流路に当たり、遺構・遺物は確認できない。

Ⅲトレンチ：基本的に後背湿地部に相当する。遺構・遺物の分布はⅠトレンチと接する本トレンチ南端からほぼLR80区付近までである。

上記の分布状況から、当該期の遺構・遺物は、当時の油川に沿う微高地形状に対応する形で、南東から北西にのびる帯状に分布するものと推測できる。今回は、調査範囲が狭小であったため、遺構分布が環状構造等の規格性を示すかは判然としない。ただし、微高地と後背湿地は形成時の状態を基本的にとどめていると推定できることから、削土や盛り土を伴うような大規模な地形改変を実施した可能性は低いと判断する。現状からは、当時の微地形に沿うように縄文時代中期中葉から後期前葉にかけて集中的に占地・利用したと想定できよう。

以下に記述する個々の遺構は、特記しない限り、土器埋設遺構・焼土遺構(屋外炉)・配石遺構についてはⅣ層中で、他の遺構についてはⅤ層上面で確認した。各遺構番号のうち、1000番台がⅠトレンチ、3000番台がⅢトレンチでそれぞれ確認したものである。

なお、調査時には、遺構同士の重複の有無とその前後関係を充分確認できなかった例が少なくない。遺構からの遺物出土状態の検討も充分でない例も多く、特に複数の遺構が重複している例では、その出土遺物の帰属も必ずしも確実ではない場合もある。

(２)竪穴住居跡

SI1510(第16図、図版２の１)

LG･LF69区に位置する。SKP1578・1580を切り、SK1521・1573・1574・1581・1582・1583に切られる。このほか、SK1512・SKP1511・1513・1514・1515・1516・1517・1518・1519・1522・1523・1524・1525・1579と重複する。

本遺構は、当初、地山(Ⅴ層)上面で土器埋設炉を確認した。その後、当該土器埋設炉周辺のトレンチ壁面土層断面を観察し、地山(Ⅴ層)上面を平坦に掘削した竪穴床面と壁の立ち上がりの一部を認めたことから、土器埋設炉を伴う竪穴住居跡が存在するものと判断した。

竪穴の規模・形態は、ごく一部の調査であったことと、多数の遺構と重複することとから、判然としない。現状からは、長径５～６ｍ前後の円形基調の平面をなし、炉は竪穴中心から多少壁寄りに位置する可能性を想定する。トレンチ壁面土層観察では、壁はやや開き気味に立ち上がり、壁高は約0.60ｍである。

竪穴覆土はⅣ層類似の黒褐色土を主体とする。C－D断面では、西壁際から竪穴床面に向かって傾斜する堆積層を認めることができる(２層)。この堆積状況を重視すると、竪穴覆土は周囲からの流入土による自然堆積土であった可能性も想定できるが、当該堆積状況は一部のみの確認であるため、必

ずしも確実ではない。

床面には上述した土器埋設炉が存在する。底部を欠いた口径21cmの深鉢を小形の掘り込み中に正位に埋設し、その南隣の床面上に焼土面が遺存する。埋設土器および焼土面の周囲には石組みあるいはその痕跡を認めることはできない。埋設土器内覆土には少量の炭化物粒が存在するが、焼土面や焼土粒は確認できない。

また、竪穴床面上では、13基の柱穴を確認した。このうち、トレンチ壁面土層の観察で、現状で竪穴床面が掘り込み面となるSKP 1578・1580は本竪穴住居に伴う柱穴の可能性が強い。一方、SKP 1516からは、詳細不明であるものの、大木10式～門前式土器破片が出土している。後述するように、本竪穴住居跡は大木８ｂ式期に属することから、本柱穴は本竪穴住居跡には伴わない可能性が強い。この他の柱穴の中には、本竪穴住居に伴う柱穴が存在すると推測できるが、現状では特定することはできない。この他、壁溝等の施設は未確認である。

本遺構に伴うことが確実な出土遺物は土器埋設炉の埋設土器のみである（第74図１）。当該資料は大木８ｂ式に属する。よって、本竪穴住居跡の時期も大木８ｂ式期である。

（３）土坑

SK 1002 A（第17図）

LS 66区に位置する。SKP 1002 Bを切る。SKP 1062と重複する。

長径1.24m、短径1.11mの円形平面をなす。壁はやや開き気味に立ち上がり、底面は平坦である。確認面から底面までの深さは0.15mである。

覆土は炭化物を顕著に含む黒褐色土単一層である。一括埋め戻し土と推定する。覆土中からは縄文土器小破片20点が出土した。確実に供伴するかは判然としない。

本遺構は、円形平面の土坑墓であろう。詳細な時期は不明である。

SK 1003（第17図）

LS 66・67区に位置する。SK 1089・SKP 1092を切り、SKP 1093に切られる。SKP 1091と重複する。

長径1.07m、短径0.95mの円形平面をなす。壁は開き気味に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。確認面から底面までの深さは0.15mである。

覆土は炭化物を含む黒色土単一層である。一括埋め戻し土と推定する。覆土中からは縄文土器小破片36点が出土したが、確実に供伴するかは判然としない。

本遺構は、円形平面の土坑墓であろう。詳細な時期は不明である。

SK 1005（第17図）

LS 66区に位置する。他の遺構との切り合いはない。

長径0.71m、短径0.50mの楕円形平面をなす。平面長軸方位は北東方向である。壁は開き気味に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。確認面から底面までの深さは0.29mである。

覆土は黒色～黒褐色土で、主に色調の差で上下２層に分けた。下層が相対的に黒味が強い。覆土中

からは縄文土器小破片8点が出土したが、確実に供伴するかは判然としない。

本遺構は、楕円形平面の小形土坑墓の可能性があろう。覆土下層は埋葬当初の埋め戻し土と想定し得るかもしれない。詳細な時期は不明である。

SK 1008（第18図）

LS 67区に位置する。SKP 1006に切られる。

長径0.86m、短径0.57mの楕円形平面をなす。平面長軸方位はほぼ東方向である。壁は比較的急傾斜で立ち上がり、底面はほぼ平坦である。確認面から底面までの深さは0.12mである。

覆土は黒褐色土単一層である。一括埋め戻し土と推定する。覆土中からは縄文土器小破片8点が出土したが、確実に供伴するかは判然としない。

本遺構は、楕円形平面の土坑墓であろう。詳細な時期は不明である。

SK 1010（第18図）

MA 66区に位置する。他の遺構との切り合いはない。

長径0.66m、短径0.60mの円形平面をなす。壁は垂直に立ち上がり、底面は平坦である。確認面から底面までの深さは0.28mである。

覆土は地山土粒の顕著な部分を分離し、1・2層に分層した。1層は小塊状の断面形状を示すことから、本来、両層は一連の埋め戻し土であろう。覆土中からは縄文土器小破片14点が出土したが、確実に供伴するかは判然としない。

本遺構の詳細な性格・時期等は不明である。

SK 1011（第18図）

LT・MA 66区に位置する。SK 1097・SKP 1161を切り、SKP 1056・1106と切り合う。南端部は調査時の排水路掘削により削平されている。

現状から、東西径1.20mの円形平面をなすものと推定する。壁は大きく開きながら立ち上がり、底面はほぼ平坦である。確認面から底面までの深さは0.20mである。

覆土は壁際の部分を色調の差で分離した。両層の境界は漸移的であり、連続した埋め戻し土の可能性が強い。覆土中からは縄文土器破片64点が出土した。いずれも時期不詳の小破片であり、確実に供伴するかは判然としない。このほか、二次加工ある剥片1点、剥片1点、凝灰岩製球礫2点も出土している。

本遺構の詳細な性格・時期等は不明である。

SK 1017（第19図、巻頭図版3の1）

MA 66区に位置する。SK 1044に切られる。

長径0.81m、短径推定0.57mの楕円形平面をなす。平面長軸方位は西北西である。壁・底面ともに凹凸がある。確認面から底面までの深さは0.36mである。

覆土は上下二層に分けた。下層は地山土粒を含み、相対的に黒味が強い色調を呈する。上層は土坑中心に向かって傾斜した堆積を示す。覆土中からは縄文土器小破片11点が出土した。また、上層覆土

下位から大形円礫1点が出土している。

本遺構は、楕円形平面の小形土坑墓であろう。東側に大形円礫を配置した可能性がある。覆土土層の観察から、当初の埋め戻し後、中央部が陥没し、周囲から当時の表土が流入したものと推測しておく。SK1044との切り合い関係から、本土坑は、大木10式(新)期を下限時期とすると判断する。

SK 1018(第19図)

MA66区に位置する。SK1044と重複する。

長径0.67m、短径0.61mのほぼ円形平面をなす。壁はほぼ垂直に立ち上がり、掘り込みは円筒状を呈する。底面は全体が微かに浅くくぼむ。確認面から底面までの深さは0.64mである。

覆土は黒褐色土単一層である。その性格は判然としない。覆土中からは縄文土器破片約100点が出土した。いずれも詳細な時期不詳の小破片であり、確実に供伴するか判然としない。このほか、微小剥離痕ある剥片1点、剥片3点が出土している。

本遺構は、形態から比較的大形の柱穴の可能性も想定し得る。しかし、調査時には柱痕跡を確認していないことから、断定できない。詳細な時期は不明である。

SK 1019(第19図)

MA66区に位置する。他の遺構との切り合いはない。

直径0.60mのほぼ正円平面をなす。壁は垂直に立ち上がり、底面はほぼ平坦で、全体は円筒状をなす。確認面から底面までの深さは0.41mである。

覆土は黒褐色土単一層である。その性格は判然としない。本土坑からの出土遺物はない。

本遺構は、形態から比較的大形の柱穴の可能性も想定し得る。しかし、調査時には柱痕跡を確認していないことから、断定できない。詳細な時期は不明である。

SK 1030(第20図)

LQ67区に位置する。SKP1036を切る。

長径0.60m、短径0.42mの楕円形平面をなす。平面長軸方位はほぼ北西方向である。壁は南西半側が開き気味に、東北半が比較的急傾斜でそれぞれ立ち上がる。底面はほぼ平坦で、確認面から底面までの深さは0.14mである。

覆土は黒褐色土単一層である。一括埋め戻し土であろう。本土坑からの出土遺物はない。

本遺構は、楕円形平面の小形土坑墓であろう。詳細な時期は不明である。

SK 1040 A(第20図)

LR66・67区に位置する。SK1065に切られ、SK1040Bを切る。

現状から、直径1.2m前後の円形平面をなすと推定する。壁は緩やかに開きながら立ち上がり、底面はほぼ平坦である。確認面から底面までの深さは0.09mと浅い。

覆土は黒褐色土単一層である。その性格は判然としない。本土坑からの確実な出土遺物はない。

本遺構の詳細な性格・時期等は不明である。

SK 1040 B（第20図）

LR 66・67区に位置する。SK 1040 A に切られ、SKP 1120と切り合う。

現状から、長径1.32m、短径0.66mの楕円形平面をなすと推定する。平面長軸方位は北西方向である。壁は緩やかに開きながら立ち上がり、底面は若干凹凸がある。確認面から底面までの深さは0.12mである。

覆土は黒褐色土単一層である。その性格は判然としない。覆土中からは縄文土器小破片38点、被熱した剥片１点が出土した。いずれも確実に供伴するかは判然としない。

本遺構は、長楕円形平面の土坑墓の可能性があろう。詳細な時期は不明である。

SK 1043 B（第21・22図）

LQ・LR 67区に位置する。SK 1127・SKP 1043 A・1146を切る。

長径0.92m、短径0.76mの北西側が広がる不整楕円形平面をなす。壁は比較的急傾斜で立ち上がり、底面は浅くくぼむ。確認面から底面までの深さは0.69mである。

確認面では10数個の円礫が、掘り込み平面とほぼ重複して、径80cmほどの環状に巡っている。覆土は三分した。１・２層は黒色～黒褐色土で、一連の埋め戻し土の可能性が高い。３層は円礫を充填した層である。E－F断面では１・２層に切られる形で堆積し、平面では東端部のみに偏在するようである。本層は柱穴の柱根固め土であった可能性を想定でき、平断面の状況も勘案すると、現平面の東端側が当初の柱穴位置で、中央部から西側が柱材の抜き取り痕であった可能性があろう。

本遺構からは、縄文土器小破片約70点が出土した。いずれも詳細な時期不詳で、確実に供伴するかも判然としない。このほか、剥片４点、砕片１点も出土した。

本遺構は、上述のように柱材抜き取り後、抜き取り痕を埋め戻し、その上面に環状に円礫を巡らすという柱廃絶に伴う一連の儀礼的行為が執り行われた柱穴であった可能性も想定し得る。ただし、調査時に明確に確認できていないため、ここでは土坑として扱っておく。門前式期に属するSK 1127を切ることから、本土坑の上限時期は門前式期である。

SK 1044（第19図、巻頭図版３の１）

MA 66区に位置する。SK 1017を切り、SK 1018と重複する。

長径1.29m、短径0.93mの楕円形平面をなす。長軸方位は東方向である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。確認面から底面までの深さは0.59mである。

覆土は１～７層に分けた。覆土中位の６層を境に上層（１～５層）、中層（６層）、下層（７層）にまとめることができる。下層は地山土粒を含む黒褐色土である。土坑掘削直後の埋め戻し土であろう。土坑東側本層上面には大形円礫２点を置いている。中層は焼土粒と多量の炭化物粒を含む。周囲で火を焚き、その際生成した炭化物・焼土を土坑内に埋めたものであろう。上層は地山土粒を含む黒褐色土の互層状堆積である。複数次にわたって人為的に埋め立てられたものと推定する。覆土中からは大木10式（新）土器破片など縄文土器破片40点が出土した。

本遺構は、楕円形平面土坑墓であろう。当初の埋葬後、周囲での焚き火を含めた儀礼的行為を伴って複数次にわたって埋められたと判断できる。出土土器から、本土坑は大木10式（新）期に属すると判

断する。

SK 1074（第23図）

LR・LS 67区に位置する。SKP 1135に切られる。北端部は調査対象範囲外である。

現状から、長径0.74mの円形平面をなすと推定する。壁は比較的急傾斜で立ち上がり、特に北側の壁は大きくオーバーハングしている。底面は全体が浅くくぼんでいる。底面の推定径は0.8m前後である。確認面から底面までの深さは0.59mである。

覆土は上中下で三分した。底面直上の３層は顕著な混入物を含まない砂質土で、開口状態下での周囲からの流入土であった可能性がある。上位の１・２層はいずれも地山土塊を多量に含む一連の埋め戻し土である。覆土中からは縄文土器小破片５点、頁岩剥片１点が出土した。いずれも確実に供伴するかは判然としない。

本遺構は、いわゆる袋状土坑に近い形態であることと、さらに上述の想定から土坑掘削当初は開口状態であったと考えると、比較的小形の貯蔵穴であった可能性があろう。土坑廃絶時には他の土坑掘削土によって埋め戻されたと推定できよう。詳細な時期は不明である。

SK 1081（第23図）

LP・LQ 67区に位置する。SKP 1197・1131・1132・1133・1134と重複する。

長径1.55m、短径1.18mの楕円形平面をなす。平面長軸方位は北西方向である。壁は西側では比較的急傾斜で、東側ではやや緩やかに立ち上がる。底面は多少凹凸があるが、全体としてはほぼ平坦である。確認面から底面までの深さは0.19mである。

覆土はⅣ層類似の黒褐色土単一層である。覆土中からは大木10式（新）土器破片など縄文土器破片約120点、剥片５点、砕片２点が出土した。縄文土器破片はいずれも小破片であり、確実に供伴するかは判然としない。

本遺構は、楕円形平面の土坑墓の可能性を想定し得るが、確実ではない。詳細な時期は不明である。

SK 1083（第23図）

LP 67区に位置する。他の遺構との切り合いはない。

長径0.73m、短径0.59mの楕円形平面をなす。平面長軸方位は北東方向である。壁は開き気味に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。確認面から底面までの深さは0.28mである。

覆土は地山土粒の混入が目立つ黒褐色土単一層であり、埋め戻し土の可能性が高い。覆土中からは大木８ｂ式土器破片など縄文土器破片40点あまりが出土した。いずれも小破片で、確実に供伴するかは判然としない。

本遺構は、楕円形平面の土坑墓の可能性があろう。詳細な時期は不明である。

SK 1087（第23図）

LP 67区に位置する。他の遺構との切り合いはない。

長径1.03m、短径0.86mの楕円形平面をなす。平面長軸方位は北東方向である。壁はほぼ垂直に立

ち上がり、底面はほぼ平坦である。確認面から底面までの深さは0.37mである。

覆土は黒褐色土を基調とし、しまりの差などで上下に二分した。土坑南西端の2層上面では径20cmの大形円礫が出土した。覆土中からは縄文土器小破片47点、被熱した頁岩剥片1点が出土した。確実に供伴するかは判然としない。

本遺構は、楕円形平面の土坑墓であろう。2層上面で確認した大形円礫は埋葬に係わる配石の可能性があろう。詳細な時期は不明である。

SK 1089（第17図）

LS 66・67区に位置する。SK 1003に切られ、SKP 1090と切り合う。

長径1.23m、短径0.65mの長楕円形平面をなす。平面長軸方位は北北東方向である。壁は比較的急傾斜で立ち上がり、確認面から底面までの深さは0.35mである。

覆土は主に相対的なしまりの程度の差をもとに上下に二分した。下層がやや砂質で、しまりが弱く、上層はⅣ層と近似する。下層が当初の埋め戻し土、上層が当初の埋め戻し土が陥没するとともに周囲から流入した堆積土であった可能性があろう。本土坑からの出土遺物はない。

本遺構は、長楕円形平面の土坑墓の可能性がある。詳細な時期は不明である。

SK 1097（第18図）

LT 66区に位置する。SKP 1160・1161を切り、SK 1011に切られる。

現状から、長径1.2m前後、短径0.66mの長楕円形平面をなすと推定する。平面長軸方位は東北東方向である。壁は緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。確認面から底面までの深さは0.16mである。

覆土はⅣ層起源と推定できる黒褐色土単一層である。その性格は不明である。覆土中からは縄文土器小破片11点が出土した。確実に供伴するかは判然としない。

本遺構は、長楕円形平面の土坑墓の可能性があろう。詳細な時期は不明である。

SK 1111（第24図）

LT 66区に位置する。SKP 1110・1113と重複する。

長径0.73m、短径0.53mの楕円形平面をなす。平面長軸方位は北北西方向である。壁は比較的急傾斜で立ち上がり、底面はほぼ平坦である。確認面から底面までの深さは0.30mである。

覆土は黒褐色土を基調とする。しまりの程度差などによって上下に二分したが、両者の境界は漸移的である。覆土中からは縄文土器小破片6点が出土した。確実に供伴するかは判然としない。

本遺構は、楕円形平面の土坑墓の可能性を想定し得るが、確実ではない。詳細な時期は不明である。

SK 1127（第21・22図、巻頭図版3の2）

LQ 66・67区に位置する。SK 1130・1308を切り、SK 1043Bに切られる。この他、SKP 1167・1168・1194・1296と重複する。

長径2.00m、短径1.46mの北西半が幅広となる不整楕円形をなす。平面長軸方位は北西方向である。

やや不整な平面形からは、２基の土坑の切り合いも想定し得るが、調査時には未確認である。壁はかすかに開き気味に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。現状で、確認面から底面までの深さは0.22mである。ただし、後述する当時の推定掘り込み面からの深さは約0.30mである。

覆土はⅣ層類似の黒色土を基調とする。土坑内には主に中央部から東南半にかけて10～30cm前後の円礫～亜角礫を埋めている。そのうち、中央部では、土坑中位に不整に組んだ礫群の上に長さ29cmの柱状角礫を垂直に立てており、立石を伴う配石状を呈す。この角礫には、東面の上位から中位にかけて被熱痕が残る。この状況から、調査時には焼土面等は未確認であるが、土坑は立石の下位面まで埋め戻し、その後、立石東側の土坑中央部で火を焚いたものと推定できる。

本土坑からは、門前式土器破片など縄文土器破片約60点が出土した。このほかの遺物には、先の礫群中から出土した凹石類５点や、石錐１点、石皿破片１点がある。

本遺構は、地表に立石を設置するなどの配石を伴う土坑墓であろう。埋葬時には土坑中央部で火を焚く等の葬送儀礼を執り行ったものと推定できる。本土坑は、大木10式(新)期の土坑SK 1308を切ることと出土土器とから、門前式期に属する可能性が強い。

SK 1130(第21・22図)

LQ 67区に位置する。SK 1139・1300を切り、SK 1127に切られる。

長径1.40m、短径1.03mの楕円形平面をなす。平面長軸方位は北方向である。壁はかすかに開き気味に立ち上がり、底面はわずかに凹凸がある。確認面から底面までの深さは0.39mである。

覆土は、土坑底面から中位までは黒色土単一層である(３層)。上位には地山土を主体とした埋め戻し土が堆積する(１・２層)。土坑南端には長さ71cmの大形の柱状円礫をほぼ垂直に立石状に立てている。覆土中からは門前式土器破片など縄文土器破片16点が出土した。

本遺構は、長軸端に立石を据えた楕円形平面の土坑墓と推定できる。他の遺構との切り合い関係と出土土器とから、大木10式(新)期～門前式期に属する可能性が強いと判断する。

SK 1136(第24図)

MB 66区に位置する。SK 1173を切り、SN 1054に切られる。SKP 1175・1335と重複する。

長径1.89m、短径1.51mの楕円形平面をなす。平面長軸方位は東北東方向である。壁は比較的急傾斜で立ち上がり、底面はほぼ平坦である。確認面から底面までの深さは、0.56mである。

覆土は５層に分けた。いずれも多寡はあるが、地山土を含む。一連の埋め戻し土の可能性があるものの、断定できない。覆土中からは大木10式(新)土器破片など縄文土器破片45点、石皿破片１点、剥片１点が出土した。

本遺構は、楕円形平面の土坑であるが、その性格は不明である。出土土器と他の遺構との切り合い関係とから、大木10式(新)期前後に属する可能性が強い。

SK 1139(第21・22図)

LQ 67区に位置する。SK 1130に切られ、SK 1300と重複する。

現状から、長径0.71cm、短径0.48cmの楕円形平面をなすと推定する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、

底面はやや不整である。確認面から底面までの深さは0.53mである。

覆土は黒色土を基調とする。しまりの度合いの差等によって、上下に二分したが、両層の境界は漸移的である。覆土中からは詳細な時期不明の縄文土器小破片37点が出土した。

本遺構は、柱穴状の形態をなす。現状では柱痕跡を認めることができないため、ここでは土坑としておく。その性格は特定し難い。SK 1130に切られることから、大木10式(新)期～門前式期を下限時期とする可能性が強い。

SK 1150(第24図)

LT 66区に位置する。SKP 1147・1202と重複する。

長径0.82m、短径0.67mの東側が狭まる不整楕円形平面をなす。平面長軸方位は西北西方向である。壁は緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。確認面から底面までの深さは0.11mである。

覆土は黒褐色土単一層である。人為堆積の可能性があるが、確実ではない。覆土中からは縄文土器小破片20点が出土した。

本遺構は、楕円形平面の土坑である。詳細な性格・時期は不明である。

SK 1151(第25図)

MB 66区に位置する。SKP 1158・1159に切られる。北側は調査対象範囲外である。

現状から、東西径1.1m前後の円形もしくは楕円形平面をなすと推定する。壁は比較的急傾斜で立ち上がり、底面は中央部が浅くくぼむようである。確認面から底面までの深さは0.39mである。

覆土は1～5層に分けた。底面直上の5層は炭化物粒が目立つ。上位の1～4層は地山土と暗褐色～黒褐色土が累積する。いずれも人為的な埋め戻し土であろう。本土坑からの出土遺物はない。

本遺構は、一部分の調査であったため、不明な点が多い。覆土の特徴からは、数回にわたって埋め戻された土坑墓の可能性が強いと想定する。本遺構の詳細な時期は不明である。

SK 1173(第24図)

MA・MB 66区に位置する。SK 1136に切られ、SKP 1170と重複する。南端側でSKP 1267と重複する可能性があるが、南端が調査時の排水路掘削によって削平されているため、詳細不明である。

現状から、長径1.2m前後、短径0.84mの楕円形平面をなすと推定する。平面長軸方位はほぼ東方向である。壁は比較的開き気味に立ち上がり、底面は平坦である。確認面から底面までの深さは0.46mである。

覆土は黒褐色土を基調とする。下位が相対的に砂質土となり、上下に二分した。土層断面形状からは、土坑覆土は自然堆積層の可能性を想定できるものの、確実ではない。覆土中からは大木10式(新)土器破片など縄文土器破片60点が出土した。

本遺構は、楕円形平面の土坑であるが、現状では詳細な性格は不明である。出土土器と他遺構との切り合い関係とから、大木10式(新)期前後に属する可能性が強い。

SK 1214（第25図）

LO 67区に位置する。SK 1346 B に切られ、SK 1346 A と重複する。

現状で、短径0.66mの楕円形平面をなす。平面長軸方位は北北西方向である。壁は比較的急傾斜で立ち上がり、底面は若干の凹凸がある。確認面から底面までの深さは0.35mである。

覆土は黒褐色土単一層である。覆土中からは大木10式（古）土器小破片など縄文土器小破片54点、剥片２点が出土した。

本遺構は、楕円形平面の土坑墓の可能性があろう。詳細な時期は不明である。

SK 1225（第26図、図版２の２）

LT 66区に位置する。SKP 1332を切り、SKP 1330と重複する。南側は調査対象範囲外である。

現状から、短径１m前後の楕円形平面をなすかと推定するが、確実ではない。平面長軸方位は北北西方向である。壁は内湾しながら緩やかに立ち上がり、底面は全体にくぼんでいる。確認面から底面までの深さは0.30mである。

覆土は地山土塊を含む暗褐色土単一層である。土坑北西端側には円礫が比較的まとまって出土し、さらに上面には長さ40cmの大形円礫をほぼ垂直に立てた立石がある。覆土中からは縄文土器破片22点が出土した。このほかに、土坑北西端側の立石付近から凹石類１点が出土している。

本遺構は、一端に立石を設置した楕円形平面の土坑墓であったと推定する。詳細な時期は不明である。

SK 1226 A（第26図）

LT 66区に位置する。他の遺構との切り合いはない。南端部は調査区南壁に接する。

現状から、長径0.90m、短径0.73mの楕円形平面をなすと推定する。平面長軸方位は北方向である。東西の壁は比較的急傾斜で立ち上がるが、北側の壁は緩やかに開きながら立ち上がる。底面は若干の凹凸がある。確認面から底面までの深さは0.38mである。

覆土は中位の層厚５cm前後の炭化物粒を多量に含む層を境に三分できる。下層は、地山土塊を多量に含む埋め戻し土で、おそらく同一個体の粗製深鉢破片がまとまって出土した。上層はⅣ層起源土を主体とする。土坑北東側本層上位には、長さ31cmの柱状円礫を立石状に立てている。また、土坑北西端に接して、長さ40cmの大形亜円礫と石皿破片を配置している。

本遺構は、上面に立石を含む配石を伴う土坑墓と推定する。土坑底部に、大形土器破片を副葬し、その後２度に分けて埋め戻し、最後に配石を設置するという埋葬行為の存在を想定できる。出土土器から、本土坑は後期前葉に属すると推定する。

SK 1228 A（第26図）

LS･LT 66区に位置する。SKP 1226 B を切り、SKP 1228 C と重複する。北端部は調査対象範囲外である。

現状から、長径1.20mの円形平面をなすと推定する。壁は比較的急傾斜で立ち上がり、底面は若干の凹凸がある。確認面から底面までの深さは0.25mである。

覆土は二分した。2層はⅣ層土を主体とする一括の埋め戻し土と推定する。1層は、幅24cmの柱穴状断面形態をなし、その上位に長さ24cmの柱状円礫を立石状に据えている。土坑とは別の立石状遺構の覆土である可能性も想定し得るが、ここでは、一連のものと判断しておく。1層からの大木9式土器破片など遺構全体で縄文土器破片20点が出土した。

本遺構は、上面に立石を伴う円形平面の土坑墓と判断しておく。ただし、立石は土坑とは別遺構の可能性も否定できない。出土土器から、本土坑は、大木9式期が上限時期と判断しておく。

SK 1260（第27図）

LT・MA 66区に位置する。SKP 1259に切られる。南側は調査対象範囲外である。

現状から、長径0.85mの楕円形平面をなすと推定する。推定平面長軸方位は東北東方向である。壁は西側が緩やかに開き気味に立ち上がる他は、ほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦である。確認面から底面までの深さは0.31mである。

覆土は黒褐色土単一層である。覆土中からは大木10式（新）土器破片など縄文土器小破片32点が出土した。確実に供伴するかは判然としない。

本遺構は、楕円形平面の土坑である。形態から土坑墓の可能性も想定し得るが、詳細な性格および時期は不明である。

SK 1262（第27図）

MA 66区に位置する。SKP 1289を切り、SKP 1261に切られる。

現状から、長径0.73m、短径0.58mの楕円形平面をなすと推定する。平面長軸方位は北東方向である。壁は急傾斜で立ち上がり、底面は全体に浅くくぼむ。確認面から底面までの深さは0.30mである。

覆土は黒褐色土を基調とする。主に地山土粒の混入度の差から、1～3層に三分した。底面直上の3層は土器破片を含む黒褐色土である。2層は地山土粒を含む厚さ5cm前後の薄層である。1層は相対的にしまりの弱い黒褐色土である。各層は人為的な埋め戻し土と推定する。また、底面直上から3層中にかけて、破片となった深鉢1個体が出土している。

本遺構は、楕円形平面の土坑墓の可能性があろう。覆土下位から出土した深鉢大形破片は完形土器を破壊して納めた副葬品の可能性があろう。また、土坑埋め戻しは複数次にわたって行われた可能性も想定できる。本遺構は、出土土器から、中期後葉～後期前葉に属すると判断する。

SK 1266（第27図）

MA 66区に位置する。SKP 1265に切られる。

長径0.75m、短径0.51mの楕円形平面をなす。平面長軸方位は北東方向である。壁はかすかに開き気味に立ち上がり、底面は北に向かって傾斜している。確認面から底面までの深さは0.26mである。

覆土は黒褐色土単一層である。地山土塊を含み、人為的な埋め戻し土と判断できる。覆土中からは縄文土器小破片7点が出土した。

本遺構は、楕円形平面の土坑墓の可能性があろう。詳細な時期は不明である。

SK 1268(第27図)

MB 65・66区に位置する。SKP 1297を切り、SKP 1267に切られる。また、SKP 1275と重複し、北端部は　調査時の排水路掘削により削平されている。

現状から、径0.7m前後の円形平面をなすと推定する。壁はかすかに開き気味に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。確認面から底面までの深さは0.25mである。

覆土は主に色調の差で上下に二分した。ともに地山土粒を含み、下層がより黒味が強い。覆土中からは縄文土器破片10点、大形石鏃1点が出土した。

本遺構は、円形平面の土坑墓の可能性があろう。大形石鏃は、本遺跡では他に類例のない特異な形態を呈する。このことから、詳細な出土状況は不明ではあるが、ここでは副葬品であったと推定しておく。本土坑の詳細な時期は不明である。

SK 1270(第28図)

MB 65区に位置する。SKP 1271・1272・1275・1277と重複する。南半部は調査対象範囲外である。

現状から、長径0.80mの楕円形平面をなすと推定する。壁は若干開き気味に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。確認面から底面までの深さは0.20mである。

覆土は黒褐色土を基調とし、主に色調の差で上下に二分した。ともに地山土粒を含み、下層がより黒味が強い。本土坑からの出土遺物はない。

本遺構は、楕円形平面の土坑墓の可能性を想定し得るが、確実ではない。詳細な時期は不明である。

SK 1274(第28図)

LS 66区に位置する。SKP 1180・1278・1280と重複する。

長径1.10m、短径0.80mの楕円形平面をなす。平面長軸方位は北東方向である。壁は若干開き気味に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。確認面から底面までの深さは0.20mである。

覆土は暗褐色土単一層である。覆土中からは縄文土器小破片11点が出土した。

本遺構は、楕円形平面の土坑墓の可能性があろう。詳細な時期は不明である。

SK 1285 A (第28図)

LR・LS 66区に位置する。SK 1065に切られる。

現状から、長径0.80m、短径0.65mの不整楕円形平面をなすと推定する。平面長軸方位は北西方向である。壁は比較的急傾斜で立ち上がり、底面は平坦である。確認面から底面までの深さは0.45mである。

覆土は黒褐色～暗褐色を呈し、中位の炭化物粒を多量に含む厚さ8㎝前後の薄層を境に三分した。下層は相対的に黒味が強い。覆土中からは大木10式(新)土器破片など縄文土器破片30点が出土した。

本遺構は、楕円形平面の土坑墓であろう。複数回に分けて埋め戻されたものと想定できる。出土土器から大木10式(新)期を上限時期とすると判断する。

SK 1285 B（第28図）

LR 66区に位置する。SK 1065に切られる。

長径0.60m、短径0.40mの楕円形平面をなす。平面長軸方位は東北東方向である。

壁は急傾斜で立ち上がり、底面はやや浅くくぼむ。確認面から底面までの深さは0.45mである。

覆土は黒褐色土を基調とする。中位の炭化物粒を多量に含む厚さ５㎝前後の薄層を境に三分した。下層は相対的に黒味が強い。本土坑からの確実な出土遺物はない。

本遺構は、楕円形平面の土坑墓であろう。覆土の特徴はSK 1285 A と類似し、同様に複数回に分けて埋め戻されたものと想定できる。詳細な時期は不明である。

SK 1288（第28図）

LR 66区に位置する。南半は調査対象範囲外である。他の遺構との切り合いはない。

現状から、長径0.95mの楕円形平面をなすかと推定するが、確実ではない。壁はかすかに開き気味に立ち上がり、底面は若干の凹凸があるものの、ほぼ平坦である。確認面から底面までの深さは0.26mである。

覆土は焼土粒を含む黒褐色土単一層である。土坑西側上位から径16㎝の円礫が出土している。

本土坑からは、大木10式（中）土器破片など縄文土器破片21点、二次加工ある剥片１点が出土した。

本遺構は、楕円形平面の土坑墓の可能性を想定し得るものの、部分的な調査であったため確実ではない。詳細な時期は不明である。

SK 1292（第29図）

LS 66区に位置する。SKP 1291に切られる。南端部は調査対象範囲外である。

現状から、長径0.70m、短径0.44mの楕円形平面をなすと推定する。平面長軸方位は東北東方向である。壁はは東側が開き気味に立ち上がり、その他の壁はほぼ垂直に立ち上がる。確認面から底面までの深さは0.35mである。

覆土は黒褐色土を基調とし、主に混入物の差で上下に二分した。下層は小礫を多量に含み、上層には地山土塊を混入する。ともに埋め戻し土と推定する。土坑東側の上層下位からは径12㎝の大形円礫が出土した。また、覆土中からは縄文土器小破片６点が出土した。確実に供伴するかは判然としない。

本遺構は楕円形平面の土坑墓の可能性があろう。詳細な時期は不明である。

SK 1299（第29図）

MA 65区に位置する。SKP 1263を切り、SKP 1264と重複する。南側は調査対象範囲外である。

現状から、長径1.03mの楕円形平面をなすと推定するが、確実ではない。壁は開き気味に立ち上がり、底面は全体に浅くくぼむ。確認面から底面までの深さは0.36mである。

覆土は黒褐色土単一層である。覆土中からは縄文土器小破片５点が出土した。

本遺構は、楕円形平面の土坑墓の可能性を想定し得るものの、部分的な調査であったため確実ではない。詳細な時期は不明である。

SK 1300（第21：22図）

LQ 66・67区に位置する。SK 1130・1308に切られ、SKP 1139・1302と重複する。

現状から、長径1.5m前後の楕円形平面をなすと推定する。推定平面長軸方位は東北東方向である。壁は大きく内湾しながら立ち上がり、底面は若干凹凸がある。確認面から底面までの深さは0.46mである。

覆土は黒褐色土を基調とし、色調の差などから５層に分けた。いずれの層にも炭化物粒が顕著であり、人為的な埋め戻し土と推定する。覆土中からは大木10式（新）土器など縄文土器破片57点、頁岩砕片１点が出土した。

本遺構は、楕円形平面の土坑墓と想定する。覆土土層断面の状況から、埋葬に際して複数次の埋め戻し行為を執り行った可能性があろう。本遺構からは、大木10式（新）土器小破片が出土し、かつ大木10式（新）期の土坑SK 1308に切られることから、大木10式（新）期に属する可能性が強い。

SK 1308（第21・22図）

LQ 66・67区に位置する。SK 1300を切り、SK 1127に切られる。また、南端部は調査対象範囲外であった。

現状から、長径1.3m前後、短径0.9m前後の楕円形平面をなすと推定する。平面長軸方位は北東方向である。壁は大きく開きながら立ち上がり、底面はほぼ平坦である。確認面から底面までの深さは0.15mである。

覆土は炭化物粒を含む黒褐色土を主体とする。上位には部分的に地山土を含む塊状の堆積層が存在する。土坑上面施設等と関連する堆積の可能性もあるが、現状では判断できない。また、土坑南東底面からは大木10式（新）深鉢大形破片が出土した。このほか、詳細不明であるが、土坑全体で縄文土器破片約130点、砕片１点が出土している。

本遺構は、楕円形平面の土坑墓であろう。底面出土の深鉢破片は副葬されたものであろう。当該深鉢から、本土坑は大木10式（新）期に属すると判断する。

SK 1315 A（第29図）

LO 67区に位置する。SK 1315 Bに切られる。

現状から、長径0.68mの円形平面をなすものと推定する。壁は比較的急傾斜で立ち上がり、底面は中央に向かって傾斜する。確認面から底面までの深さは0.30mである。

覆土は黒褐色～暗褐色を呈し、主に色調の差で二分した。ともに地山土粒を含み、埋め戻し土と想定する。上層上面中央には現状で円礫２点と凹石類１点が配石状にまとまっている。また、上層中位からは門前式の深鉢大形破片が出土した。このほか、縄文土器破片約50点、二次加工ある剥片１点、剥片３点が出土している。ただし、これらの遺物はSK 1315 Bに伴う可能性もある。

本遺構は、上面中央に配石を伴う円形平面の土坑墓と推定する。出土土器から、門前式期に属すると判断する。

SK 1315 B（第29図）

LO 67区に位置する。SK 1315 A を切る。北端は調査時の排水路掘削により削平されている。

現状から、長径0.8m前後、短径0.60mの楕円形平面をなすと推定する。推定平面長軸方位は西北西方向である。壁は垂直に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。確認面から底面までの深さは0.40mである。

覆土は黒褐色土を基調とし、主に色調の差で上下に二分した。ともに地山土粒を含み、一連の埋め戻し土と推定する。覆土中からは縄文土器小破片27点、剥片１点が出土した。確実に供伴するかは判然としない。

本遺構は、楕円形平面の土坑墓の可能性を想定し得るものの、一部の調査にとどまったこともあり、確実ではない。SK 1315 A との切り合い関係から、本遺構は、門前式期が上限時期である。

SK 1329（第25図）

LO 67区に位置する。SK 1347 A・SKP 1328と重複する。南側は調査対象範囲外である。

現状から、短径１m前後の楕円形平面をなす可能性を想定できるものの、確実ではない。壁は比較的急傾斜で立ち上がり、底面はほぼ平坦である。確認面から底面までの深さは0.36mである。

覆土は上下に二分した。両層とも地山土塊を含み、人為的な埋め戻し土と判断できる。また、下層上面からは大形円礫２点と深鉢底部の大形破片が出土した。そのほか、詳細な状況は不明であるが、縄文土器破片約100点、剥片３点が出土している。

本遺構は、土坑墓と推定できるが、部分的な調査であったため、詳細は不明である。詳細な時期も不明である。

SK 1346 A（第25図）

LO 67区に位置する。SKP 1347 B を切り、SK 1346 B に切られる。また、SK 1214と重複する。

現状から、短径0.6m前後の楕円形平面をなすかと推定する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。確認面から底面までの深さは0.31mである。

覆土は上下に二分した。部分的な調査であったため、覆土の性格は判然としない。本土坑からの確実な出土遺物はない。(註３)

本遺構は、楕円形平面の土坑墓の可能性があろう。詳細な時期は不明である。

SK 1346 B（第25図、図版２の３）

LO 67区に位置する。SK 1214・1346 A を切る。また、南端部はかすかに調査対象範囲外にのびている。

現状で、長径1.10m、短径0.84mの楕円形平面をなす。平面長軸方位は北北西方向である。壁は比較的急傾斜で立ち上がり、底面は平坦である。確認面から底面までの深さは0.33mである。

覆土は上下２層に分けた。いずれも地山土粒を含み、人為的埋め戻し土と推定できる。本土坑からの遺物には、土坑北西端の底面直上出土の深鉢底部破片（第78図17）、２層上面出土深鉢口縁部～胴部破片（第78図16）など縄文土器破片43点、石核１点、剥片２点がある。

本遺構は、楕円形平面の土坑墓と推定する。上述の土器破片は埋葬時の副葬品あるいは供献品と想定できよう。出土土器から縄文時代中期後葉から後期前葉に属すると判断する。

SK 1347 A（第25図）

LO 67区に位置する。SKP 1347 B に切られ、SK 1329と重複する。

現状から、長径1.05m、短径0.66mの楕円形平面をなすと推定する。平面長軸方位は北西方向である。壁は緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。確認面から底面までの深さは0.39mである。

覆土は上下に二分した。部分的な調査であったため、覆土の性格は不明である。本土坑からの出土遺物はない。

本遺構は、楕円形平面の土坑墓と推定する。詳細な時期は不明である。

SK 1358 A（第29図）

LO・LP 67区に位置する。SKP 1358 B・1359 B と重複する。南端部は調査時の排水路掘削によって削平されている。

現状から、長径1.15m、短径0.8m前後の楕円形平面をなすと推定する。平面長軸方位は北東方向である。壁は開き気味に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。確認面から底面までの深さは0.24mである。

覆土は黒褐色土単一層である。覆土中からは大木10式（新）・門前式等の土器小破片など縄文土器破片約70点、剥片 2 点が出土した。

本遺構は、楕円形平面の土坑墓と推定する。詳細な時期は不明である。

SK 1361 A（第29図）

LO 67区に位置する。SKP 1361 B と重複する。

現状で、推定長径1.12m、短径0.76mの楕円形平面をなす。平面長軸方位は西北西方向である。壁は緩やかに開きながら立ち上がり、底面はほぼ平坦である。確認面から底面までの深さは0.29mである。

覆土は黒褐色土単一層である。覆土中からは時期不詳の縄文土器小破片約100点、円盤状土製品 2 点、円盤状石製品 1 点、剥片 1 点が出土した。いずれも確実に供伴するかは判然としない。

本遺構は、楕円形平面の土坑墓と推定する。詳細な時期は不明である。

SK 1365 A（第30図）

LM・LN 68区に位置する。SK 1365 B に切られ、SK 1416・1417と重複する。北側は調査対象範囲外である。

現状から、長径1.3m前後の楕円形平面をなすかと推定するが、確実ではない。壁は若干開き気味に立ち上がり、底面は多少凹凸があるものの、ほぼ平坦である。確認面から底面までの深さは0.40mである。

覆土は黒褐色土単一層である。覆土中からは大木10式（新）土器破片が出土した可能性があるが確実

ではない。

本遺構は、楕円形平面の土坑墓が可能性があると判断する。SK 1365 B に切られることから、宮戸Ⅰｂ式期をその下限時期と判断する。

SK 1365 B（第30図）

LN 67・68区に位置する。SK 1365 A を切り、SKP 1362に切られる。北端部は調査対象範囲外である。

現状から、長径1.2m前後の楕円形平面をなすかと推定するが、確実ではない。壁は急傾斜で立ち上がり、底面は平坦である。確認面から底面までの深さは0.51mである。

覆土は黒褐色土単一層である。覆土中位からは、宮戸Ⅰｂ式深鉢口縁～胴部破片がまとまって出土した。このほか、本土坑からは縄文土器破片約20点が出土した。

本遺構は、楕円形土坑墓の可能性を想定し得るものの、確実ではない。出土土器から宮戸Ⅰｂ式期に属すると判断する。

SK 1366（第30図）

LM 67・68区に位置する。SKP 1367を切り、SK 1470に切られる。SK 1416・1470と重複する。

現状で、長径0.66m、短径0.53mの楕円形平面をなす。平面長軸方位は北東方向である。壁は急傾斜で立ち上がり、底面は平坦である。確認面から底面までの深さは0.40mである。

覆土は黒褐色土単一層である。覆土の性格は判然としない。覆土中からは大木10式（新）土器破片など縄文土器破片17点、剥片１点が出土した。

本遺構は、形態は大形柱穴状を呈する。調査では柱痕跡を確認していないことから、ここでは土坑としておく。現状では、本遺構の詳細な性格・時期は不明である。

SK 1375（第31図）

LL・LM 68区に位置する。SN 1376を切る。

長径0.82m、短径0.71mの円形に近い楕円形をなす。平面長軸方位は北東方向である。壁は急傾斜で立ち上がり、底面は南西端に向かって傾斜している。確認面から底面までの深さは0.20mである。

覆土は地山土塊を含む黒褐色土単一層である。覆土中からは大木８ｂ式土器破片など縄文土器小破片14点が出土した。

本遺構の詳細な性格・時期は不明である。

SK 1386（第31図）

LO 67区に位置する。SK 1387と重複する。北側は未確認である。

現状から、長径0.8m前後の円形もしくは楕円形平面をなすと推定する。壁は急傾斜で立ち上がり、底面は平坦である。確認面から底面までの深さは0.30mである。

覆土は上下に二分した。底面直上の２層は、層厚数cm程度の薄層で、地山土塊を含む。１層はⅣ層に類似する。覆土中からは縄文土器破片５点が出土した。

本遺構の詳細な性格・時期は不明である。

SK 1387（第31図）

LO 67区に位置する。SK 1386と重複する。北側は調査対象範囲外である。

現状から、長径0.9m前後の円形もしくは楕円形平面をなすと推定する。底面から壁にかけては緩やかにくぼみ、確認面から底面までの深さは0.10m程度と極めて浅い。

覆土は地山土粒を含む黒褐色土単一層である。その性格は判然としない。覆土中からは縄文土器破片15点が出土した。

本遺構の詳細な性格・時期は不明である。

SK 1393（第32図）

LN 67区に位置する。他の遺構との切り合いはない。

直径0.72mの円形平面をなす。壁は垂直に立ち上がり、底面は平坦である。確認面から底面までの深さは0.30mである。

覆土は黒褐色土単一層である。その性格は判然としない。覆土中からは大木８ｂ式・大木10式土器破片など縄文土器破片38点が出土した。

本遺構の詳細な性格・時期は不明である。

SK 1411（第31図）

LL 68区に位置する。SN 1376を切る。

直径0.71mの円形平面をなす。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。確認面から底面までの深さは0.53mである。

覆土は黒褐色土を基調とする。地山土塊の混入度の違いから、二分した。覆土中からは大木８ｂ式土器破片など縄文土器破片67点が出土した。

本遺構は、形態は大形の柱穴に類似する。土層断面には柱痕跡を認めることができないことから、ここでは土坑とする。性格は不明である。出土土器から大木８ｂ式期に属する可能性があると推測する。

SK 1416（第30図）

LM・LN 67・68区に位置する。SK 1365 A・1366・1417と重複する。

現状から、長径0.6m前後の円形もしくは楕円形平面をなすかと推定するが、確実ではない。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。確認面から底面までの深さは0.32mである。

覆土は黒褐色土単一層である。覆土中からは縄文土器小破片21点、円盤状石製品１点、剥片１点が出土した。

本遺構の詳細な性格・時期は不明である。

SK 1417（第30図）

LN 67・68区に位置する。SK 1365 A・1416と重複する。

現状から、長径0.7m前後の楕円形平面をなすかと推定するが、確実ではない。壁は急傾斜で立ち上がり、底面は平坦である。確認面から底面までの深さは0.26mである。

覆土は黒褐色土単一層である。その性格は判然としない。本土坑からの出土遺物はない。

本遺構は、楕円形平面の土坑である。その詳細な性格・時期は不明である。

SK 1441 B（第32図）

LJ 69区に位置する。SR 1441 Aに切られる。北側は調査対象範囲外である。

現状から、長径0.7m以上の円形もしくは楕円形平面をなすかと推定するが、確実ではない。壁は急傾斜で立ち上がり、底面は浅くくぼむ。確認面から底面までの深さは0.56mである。

覆土は三分した。いずれも黒褐色土を基調とし、２・３層は地山土粒を含み、３層が相対的に黒味が強い。いずれも埋め戻し土と推定する。覆土中からは大木８ｂ式土器破片５点がまとまって出土した。

本遺構の性格は不明である。宮戸Ⅰｂ式期に属するSR 1441 Aに切られることから、その下限時期は宮戸Ⅰｂ式期である。出土土器からは、大木８ｂ式期に属する可能性が強いと推定する。

SK 1445（第32図）

LK 68区に位置する。SKP 1452に切られる。北側は調査対象範囲外である。

現状から、短径0.6m前後の楕円形平面をなすと推定する。壁は比較的急傾斜で立ち上がり、底面は平坦である。確認面から底面までの深さは0.23mである。ただし、後述する遺物出土状況から、本来の深さは0.30m以上あったものと推定できる。

覆土は黒褐色土を基調とする。主に色調と混入物の差によって、上下に二分した。下層は炭化物粒を含む他は、顕著な混入物が乏しい。上層は地山土粒を含む。ともに埋め戻し土と判断する。

土坑確認面上位からは、２個体の深鉢破片がまとまって出土している。深鉢破片と土坑平面は重複することから、これらの深鉢破片は、本来、本土坑覆土上位に含まれるものと判断する。このほか、詳細は不明であるが、縄文土器小破片約70点、石鏃１点、二次加工ある剥片２点が出土した。

本遺構は、楕円形平面の土坑墓と推定する。上位からの出土土器から、縄文時代後期前葉前後に属すると推定する。

SK 1462（第32図、図版３の１）

LK・LL 68区に位置する。SKP 1430を切る。北側は調査対象範囲外である。

現状で、長径1.1m前後の円形もしくは楕円形平面をなすかと推定するが、確実ではない。壁はかすかに開きながら立ち上がり、底面はほぼ平坦である。確認面から底面までの深さは0.64mである。

覆土は上下に二分した。覆土の過半を占める２層は、地山土塊を含む黒褐色土である。埋め戻し土と判断する。一方、土坑上位中央にレンズ状に堆積する１層は、Ⅳ層に類似し、土坑埋め戻し後の覆土上面の陥没への流入土と推定する。

本土坑からは大木9式～大木10式(新)前後土器など縄文土器小破片50点が出土した。また、土坑東端側底面直上から一端を欠損した三角柱形土製品が出土した。このほかの出土遺物には、台石1点、剥片3点がある。このうち、台石は底面直上から出土した可能性がある。

本遺構は、円形もしくは楕円形平面の土坑墓であろう。底面直上から出土した三角柱形土製品は副葬品であろう。現状では、三角柱形土製品の詳細な時期は特定し難い。出土遺物全体から、本土坑は縄文時代中期末～後期初頭前後に属すると推定しておく。

SK 1463(第33図)

LK 68区に位置する。他の遺構との切り合いはない。

直径0.74mの円形平面をなす。壁は緩やかに開きながら立ち上がり、底面はかすかにくぼむ。確認面から底面までの深さは0.08mと極めて浅い。

覆土は黒褐色土単一層である。その性格は判然としない。覆土中からは縄文土器小破片4点が出土した。

本遺構は、円形平面の土坑である。詳細な性格・時期は不明である。

SK 1464(第33図)

LJ·LK 68区に位置する。他の遺構との切り合いはない。南側は調査対象範囲外である。

現状から、径0.82mの円形もしくは楕円形平面をなすかと推定するが、確実ではない。壁はやや開き気味に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。確認面から底面までの深さは0.22mである。

覆土は黒褐色土単一層である。その性格は判然としない。覆土中からは縄文土器小破片9点が出土した。

本遺構の性格は不明である。

SK 1470(第33図)

LM 68区に位置する。SK 1366・SKP 1367を切る。南端は調査時の排水路掘削により削平されている。

現状から、長径0.68mの楕円形平面をなすと推定する。推定平面長軸方位は北東方向である。壁は東側はやや開き気味に立ち上がり、他は比較的急傾斜に立ち上がる。底面は西端に向かって傾斜している。確認面から底面までの深さは0.44mである。

覆土は相対的な色調の差で上下に二分した。ともに炭化物粒を含む。その性格は判然としない。覆土中からは縄文土器小破片2点が出土した。

本遺構の詳細な性格・時期は不明である。

SK 1475(第33図)

LK 68区に位置する。SKP 1492と重複する。南側は調査対象範囲外である。

現状から、長径0.91mの楕円形平面をなすと推定する。推定平面長軸方位は北東方向である。壁は比較的急傾斜で立ち上がり、底面は若干の凹凸がある。確認面から底面までの深さは0.75mである。

覆土は１～５層に分けた。２～５層には地山土粒を含み、埋め戻し土と判断する。覆土中からは大木８ｂ式～宮戸Ⅰｂ式土器破片など縄文土器破片60点、砥石１点、剥片４点が出土した。

本遺構は、楕円形平面の土坑である。詳細な性格は不明である。出土土器から、宮戸Ⅰｂ式期を上限時期とする可能性が強い。

SK 1486（第34図）

LI 68区に位置する。SK 1506を切る。南側は調査対象範囲外である。

現状から、長径１ｍ以上の楕円形平面をなすかと推定するが、確実ではない。壁は開き気味に立ち上がり、底面は中央部に向かってくぼんでいる。確認面から底面までの深さは0.76ｍである。

覆土は１～５層に分けた。底面直上の５層は比較的混入物の少ない黒褐色土である。本層上面からは深鉢破片が出土している。その上位の層群は、地山土の混入度に差があることから、１～４層に分層した。複数次におよぶ埋め戻し土であろう。

本土坑からは、大木10式（中）前後の土器破片など、全体で縄文土器小破片34点が出土した。また、土坑北西端５層中位からは礫がまとまって出土し、その中には凹石類１点がある。

本遺構は楕円形平面の土坑墓の可能性を想定し得るが、部分的な調査にとどまったため確実ではない。大木10式（新）期のSK 1506を切ることから、本土坑の上限時期は大木10式（新）期である。

SK 1487（第35図、図版３の２）

LJ 68区に位置する。SK 1499に切られる。南端は調査対象範囲外である。

現状で、長径1.55ｍ、短径1.35ｍ前後の不整楕円形平面をなす。平面長軸方位は北東方向である。壁は開き気味に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。確認面から底面までの深さは0.49ｍである。

覆土は地山土塊を含む黒褐色土単一層である。一括の埋め戻し土であろう。なお、土坑南西端底面付近からは礫がまとまって出土した。礫群には凹石類３点を含んでいる。

このほか、本土坑からは縄文土器破片が300点近く出土した。ただし、SK 1499と分離して取り上げることができなかったこともあって、出土土器には大木９式～宮戸Ⅰｂ式の時期幅がある。出土量と遺存状態から、本来、本土坑には大木９式土器が伴った可能性が強い。

本遺構は、本来、円形平面の土坑墓であった可能性が強いと想定する。出土土器と切り合い関係とから、本遺構は大木９式期に属すると判断する。

SK 1488（第34図）

LI 68区に位置する。SK 1506に切られる。

現状で、長径0.8ｍ前後、短径0.63ｍの楕円形平面をなす。平面長軸方位は西北西方向である。底面から壁にかけては全体に緩やかにくぼんでいる。確認面から底面までの深さは0.09ｍと極めて浅い。覆土は地山土塊を含む黒褐色土単一層である。覆土上面からは深鉢破片など縄文土器破片約80点や円礫などがまとまって出土した。

本土坑の詳細な性格は不明である。出土土器と大木10式（新）期のSK 1506に切られることとから、本土坑は大木10式期に属する可能性が強い。

SK 1495（第35図）

LI 68・69・LJ 68区に位置する。SKP 1443と重複する。

長径1.00m、短径0.45mの長楕円形平面をなす。平面長軸方位はほぼ東方向である。壁は開き気味に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。確認面から底面までの深さは0.10mと浅い。

覆土は黒褐色土単一層である。覆土中からは大木８ｂ式土器破片など縄文土器小破片10点が出土した。

本遺構は、楕円形平面の土坑墓であろう。詳細な時期は不明である。

SK 1496（第36図）

LI 68・69区に位置する。SK 1497に切られる。北側は調査対象範囲外である。

一部のみの調査のため、詳細な形態は不明である。現状では、壁は比較的急傾斜で立ち上がり、底面は中央に向かってかすかに傾斜するようである。確認面から底面までの深さは0.66mである。

覆土は黒褐色土を基調とし、主に混入物の差で上下に二分した。下層は砂礫の混入が顕著であり、上層では地山土塊を含む。ともに埋め戻し土であろう。覆土中からは大木８ｂ式～10式（新）土器破片など縄文土器小破片200点あまり、剥片１点が出土した。

本遺構は、詳細な性格・時期は不明である。

SK 1497（第36図）

LI 68・69区に位置する。SK 1496を切り、東端上位にはSQ 1224が位置する。また、北側は調査対象範囲外である。

現状から、長径1.7m前後の円形もしくは楕円形平面をなすと推定する。壁は開き気味に立ち上がり、底面は平坦である。確認面から底面までの深さは0.85mである。

覆土は１～５層に分けた。黒褐色土を基調とし、主に地山土の混入度の差で分層できる。このうち、２層は焼土粒を多量に含む。いずれも埋め戻し土であろう。覆土中からは大木９式・大木10式（新）土器破片など縄文土器破片88点、穿孔礫１点が出土した。

本遺構は、大形の土坑墓であろう。複数次にわたって埋め戻され、その際には近辺で焼土を形成するような儀礼的行為を伴ったものと推定する。出土土器から、本土坑の上限時期は大木10式（新）期と推定する。

SK 1499（第35図、図版３の２）

LJ 68区に位置する。SK 1487を切り、SKP 1494と重複する。

長径1.15m、短径0.86mの楕円形平面をなす。平面長軸方位は北方向である。壁は比較的急傾斜で立ち上がり、底面はほぼ平坦である。確認面から底面までの深さは0.52mである。

覆土は上下に二分した。ともに地山土塊を含み、連続した埋め戻し土と判断する。覆土中から確認面にかけて、縄文土器・礫石器および礫などがまとまって出土した。土坑全体では、大木９式・大木10式（新）土器破片など縄文土器破片約100点、凹石類７点、石皿破片２点、台石１点剥片５点、砕片４点がそれぞれ出土している。

本遺構は、楕円形平面の土坑墓であろう。出土土器から、大木10式(新)期に属すると判断する。

SK 1500(第36図)

LI 68区に位置する。SR 1570を切り、SKP 1559と重複する。南端部は調査対象範囲外である。

現状で、直径0.77mの不整円形平面をなす。壁は比較的急傾斜で立ち上がり、底面は平坦である。確認面から底面までの深さは0.18mである。

覆土は地山土塊を多量に含む黒褐色土単一層である。一括の埋め戻し土と判断する。覆土中からは大木10式(中)～宮戸Ⅰｂ式土器破片など縄文土器破片85点、円盤状土製品１点が出土した。このほか、西側覆土上面から、凹石類と石皿各１点出土している。

本遺構は、上面に配石を伴う円形平面土坑墓であろう。出土土器から、宮戸Ⅰｂ式期に属する可能性が強いと判断する。

SK 1506(第34図、図版３の３)

LI 68区に位置する。SK 1488を切り、SK 1486に切られる。南側は調査対象範囲外である。

現状から、平面長径１ｍを越える土坑と推定できるが、一部のみの調査であったため、詳細不明である。壁は比較的急傾斜で立ち上がり、底面は平坦である。確認面から底面までの深さは1.00mである。

覆土は黒褐色土を基調とし、主に地山土の混入度の差から１～９層に分けた。このうち、５層中には焼土粒を含む。また、８層は後述する深鉢内部の堆積層である。８層を除く各層は、大勢として薄層状の断面形態をなし、複数次にわたって埋め戻されたものと判断する。

本土坑北端底面直上からは深鉢１個体が横位置状態で出土している。また、出土状況は不明であるが、別個体の深鉢口縁部～胴部大形破片もある。土坑全体では、縄文土器破片が700点あまり出土した。詳細不明であるが、このほかにスクレイパー１点、円盤状石製品１点も出土している。

本遺構は、反復的な葬送儀礼を伴う土坑墓であろう。底面直上から出土した深鉢は副葬品であろう。出土土器から、本土坑は大木10式(新)期に属すると判断する。

SK 1512(第37図)

LG 69区に位置する。上位にSQ 1213が存在し、SI 1510と重複する。北半は未確認である。

現状から、長径0.75mの円形もしくは楕円形平面をなすと推定するが、確実ではない。壁は緩やかに開きながら立ち上がり、底面は全体が浅くくぼむ。確認面から底面までの深さは0.11mである。

覆土は地山土塊を含む黒褐色土単一層である。一括の埋め戻し土と判断する。なお、底面直上からは円礫がまとまって出土した。本土坑からの出土遺物はない。

本遺構は、土坑墓と推定する。部分的な調査であったため、詳細な性格は不明である。SQ 1213との上下関係から、宮戸Ⅰｂ式期が下限時期と推定する。

SK 1521(第37図)

LF･LG 69区に位置する。SI 1510・SK 1582を切る。南側は調査対象外である。

現状から、径1.9m前後の円形もしくは楕円形平面をなすと推定する。壁は開き気味に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。確認面から底面までの深さは0.85mである。

覆土は中位の焼土層（３層）および炭化物層（２層）を境に大きく三分できる。底面直上の４層は黒褐色土を基調とする。地山土塊を含み、埋め戻し土と判断する。中位の２・３層は上述したように焼土層と炭化物層であり、４層上面中央での焚き火による被熱痕跡である。2.3層は、現状では土坑底面中心に向かって傾斜している。これは、被熱痕跡が、本来、４層上面が平坦な状態下で形成された後に覆土全体が陥没した結果によるものであろう。覆土上位の１層は、埋め戻されたものか、下位の覆土が陥没したくぼみに流入したものかは判断し難い。覆土中からは大木９式土器破片など縄文土器小破片37点、剥片１点が出土した。

本遺構は、大形の土坑墓と推定する。埋葬に際しては、土坑上面中央で火を焚くことを伴う葬送儀礼を執り行ったと想定できる。SI 1510を切ることから、大木８ｂ式期が上限時期である。

SK 1527（第38図）

LF 69区に位置する。SI 1510を切る。北側は調査対象範囲外である。

現状から、長径1.5m以上の長楕円形平面をなすと推定する。壁は比較的急傾斜で立ち上がり、底面は凹凸がある。確認面から底面までの深さは0.78mである。

覆土は中位の焼土層を境に三分できる。底面直上の３層は地山土塊を含み、埋め戻し土と想定する。２層は３層上面が被熱により焼土化したもので、両層はほぼ平坦に埋め戻され、焼土層が形成された後に、全体が陥没したものと推測する。その上位の１層の性格は、現状では判然としない。覆土中からは大木８ｂ式土器破片など縄文土器小破片10点が出土した。

本遺構は、楕円形平面の土坑墓と推定する。埋葬に際しては、土坑上面で火を焚くことを伴う葬送儀礼を執り行ったと想定できる。SI 1510を切ることから、大木８ｂ式期が上限時期である。

SK 1538（第38図、図版４の１）

LE 69区に位置する。他の遺構との切り合いはない。南端部は調査対象範囲外である。

現状から、長径1.4m以上、短径1.35mの楕円形平面をなすと推定する。平面長軸方位は西北西方向である。壁は比較的急傾斜で立ち上がり、底面は平坦である。確認面から底面までの深さは0.24mである。

覆土は中位の焼土層を境に三分した。１・３層は地山土塊を含む黒褐色土で、一連の埋め戻し土の可能性が高い。２層の焼土層は１・３層埋め戻し時に混入したものと想定しておく。覆土中から上面にかけて円礫等もまとまって出土した。

本土坑からは縄文土器破片300点あまりが出土した。いずれも小破片で、詳細な時期や確実に供伴したかは判然としない。このほか、スクレイパー１点、凹石類２点が出土している。

本遺構は、楕円形平面の土坑墓と判断する。詳細な時期は不明である。

SK 1540（第39図）

LC 70区に位置する。SK 1541に切られる。南端部は調査対象外である。

現状から、直径1.68mの円形平面をなすと推定する。壁はやや開き気味に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。確認面から底面までの深さは0.36mである。

覆土は地山土塊・焼土粒を含む黒褐色土単一層である。覆土中からは土器破片や円礫がまとまって出土している。一括の埋め戻し土と判断する。覆土中からは全体で約700点の縄文土器破片が出土した。これらには、少量の大木８ｂ式・大木９式土器破片が含まれるものの、大半は大木10式(新)土器破片である。このほか、石錐１点、スクレイパー１点、凹石類２点、石皿破片２点、円盤状石製品１点が出土している。

本遺構は、円形平面の土坑墓と判断する。出土土器から、大木10式(新)期に属する可能性が強いと判断する。

SK 1541(第39図)

LC 70区に位置する。SK 1540を切る。北側は調査対象範囲外である。

現状から、長径1.30mの楕円形平面をなすかと推定するが、確実ではない。底面から壁は緩やかに内湾する。確認面から底面までの深さは0.26mである。

覆土は黒褐色土単一層である。その性格は判然としない。覆土中からは縄文土器破片54点が出土した。

本土坑は、詳細な性格は不明である。SK 1540を切ることから、大木10式(新)期を上限時期とすると推定する。

SK 1562 A (第40図)

LH 68・69区に位置する。SK 1563に切られる。

現状から、径0.6m以上の円形もしくは楕円形平面をなすかと推定するが、確実ではない。底面から壁は緩やかに内湾する。確認面から底面までの深さは、現状で0.40mである。

覆土は中位の焼土層を境に１～３層に三分できる。１・３層は地山土粒を含み、埋め戻し土と判断する。２層の焼土層は、原位置で形成されたか、埋め立てられたものかは判然としない。覆土中からは大木８ｂ式土器破片など縄文土器破片５点が出土した。

本遺構は、円形もしくは楕円形平面の土坑墓であろう。覆土中の焼土の性格が判然としないため、埋葬の詳細は判然としない。現状では、複数回に分けて埋め立てられたものとのみ想定しておく。出土土器と他遺構との切り合い関係とから、大木８ｂ式期が上限時期、大木10式(新)期が下限時期である。

SK 1563(第40図)

LH 68・69区に位置する。SK 1562 A・1564を切る。南側は調査対象範囲外である。

現状から、長径2.1m前後の楕円形平面をなすと推定する。推定平面長軸方位は東北東方向である。また、遺構確認面上とその周辺には直径10cm前後の円礫数10点が散在している。確認面から底面までの深さは1.20mである。

覆土は１～９層に分けた。底面直上の８・９層はいずれも地山土粒を含み、一連の埋め戻し土であ

ろう。上位の１～７層は基本的に焼土層と炭化物層との互層状の堆積である。土坑上面中央で、複数次にわたって焚き火を行ったことにより形成されたものであろう。これらの層群は、本来、ほぼ平坦な土坑埋め戻し面上で形成され、その後の覆土の陥没によって、土坑底面中心に向かって傾斜したものと推測する。ただし、現状の土層断面形状からは、土坑上面中央にくぼみを作り、その中で、焚き火をした可能性もあり得よう。

本土坑からは、全体で縄文土器破片が900点近く出土した。特に、上位の層群中からは、深鉢破片がまとまって出土している。このほか、詳細な状況は不明であるが、覆土中からスクレイパー２点、二次加工ある剥片２点、凹石類１点が出土している。また、遺構確認面上とその周囲の礫群中からは、注口土器破片（第92図７）、円盤状土製品１点、二次加工ある剥片１点、凹石類３点、磨製石斧破片１点、砥石１点などが出土している。これら上面の遺物群は、少量の後出時期資料も混在するが、基本的に土坑覆土と同時期のものと判断する。

本遺構は、楕円形平面の大形の土坑墓と判断する。埋葬に際しては、土坑覆土上で複数次にわたって焚き火と土器破片等の廃棄等を行い、最後に土坑上面に礫を配置し、遺物を廃棄するなどの葬送儀礼を執り行ったものと推定する。

本遺構は、出土土器から大木10式（新）期に属すると判断する。

SK 1564（第40図）

LH 68・69区に位置する。SK 1563に切られる。南側は調査対象範囲外である。
現状から、径0.8m前後の円形もしくは楕円形平面をなすと推定する。壁は緩やかに開きながら立ち上がり、底面は全体に浅くくぼむ。確認面から底面までの深さは0.70mである。

覆土は１～５層に分けた。１・２・４・５層は地山土もしくは炭化物粒などの混入が目立つ。中位の３層は焼土層である。いずれも埋め戻し土と判断する。覆土中からは大木９式・大木10式（新）？土器破片など縄文土器破片78点、凹石類１点が出土した。

本遺構は円形もしくは楕円形平面の土坑墓であろう。埋葬時には、覆土の特徴から、複数次に分けて埋め戻されたと推定できる。その際には、周囲で焚き火を伴う儀礼的行為も実施された可能性もあろう。本土坑は、SK 1563に切られることと出土遺物とから、大木10式（新）期に属すると判断する。

SK 1566（第41図）

LH 69区に位置する。SKP 1565と重複する。
長径2.96m、短径1.30mの不整楕円形平面をなす。平面長軸方位は北西方向である。壁は北東側が緩やかに開きながら立ち上がる他は、比較的急傾斜で立ち上がる。確認面から底面までの深さは0.53mである。

覆土は地山土を含む黒褐色土単一層である。一括の埋め戻し土と判断する。また、土坑南東端確認面に円礫が集中する。覆土中からは大木８ｂ式～大木９式土器破片など縄文土器破片200点あまりが出土した。このほか、先の土坑南東端の礫群中からは凹石類２点が出土している。

本遺構は、一端の上部に配石を施す楕円形平面の土坑墓と推定する。平面形からは、複数の土坑の切り合ったものの可能性も想定し得るが、調査では確認できなかった。出土土器から大木９式期が上

限時期である。

SK 1573（第41図）

LF･LG 69区に位置する。他の遺構との切り合いはない。北側は調査対象範囲外である。

現状から、径1.3m前後の円形もしくは楕円形平面をなすかと推定するが、確実ではない。壁は比較的急傾斜で立ち上がり、底面はほぼ平坦である。確認面から底面までの深さは0.96mである。

覆土は三分した。２・３層は地山土を含み、一連の埋め戻し土と判断する。１層はⅣ層に類似し、その性格は判然としない。覆土中からは縄文土器破片74点が出土した。このうち、３層中からは深鉢大形破片（第95図３）が出土している。本資料は接合の結果、一部分を欠く他はほぼ完形となった。このほか、剥片２点も出土した。

本遺構は、土坑墓の可能性が高いと推定する。しかし、一部分のみの調査であったため、詳細な性格は判然としない。出土土器から、門前式期に属すると判断する。

SK 1575（第42図）

LE･LF 69区に位置する。調査区北壁土層断面でのみ確認した。SK 1576を切る。

現状では、長さ1.1m以上の大形平面をなす。壁は緩やかに開きながら立ち上がり、底面はほぼ平坦である。深さは推定で0.60m前後である。

覆土は中位の焼土層を境に１～３層に三分できる。底面直上の３層は地山土塊を含み、埋め戻し土であろう。その上位の２層は３層上面が被熱により焼土化したものである。また、２層中央周辺には円礫が集中する。上位の１層はⅣ層に類似し、その性格は判然としない。本土坑からの出土遺物はない。

本遺構は、土坑墓と判断する。埋葬時には、覆土上面に集石状に円礫を配し、火を焚く等の葬送儀礼を執り行ったものと推測する。ただし、両者の行為の先後関係は不明である。詳細な時期は不明である。

SK 1576（第42図）

LE 69・70区に位置する。SK 1575と同様に調査区北壁土層断面でのみの確認である。SK 1575に切られる。

現状では、長さ1.4m以上の大形平面をなす。壁は比較的緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。深さは0.70mである。

覆土は１～３層に分けた。底面直上の３層は地山土粒を、その上位の２層は焼土粒をそれぞれ含む。いずれも埋め戻し土と判断する。１層はⅣ層に類似し、その性格は判然としない。本土坑からの出土遺物はない。

本遺構は、土坑墓と判断する。埋葬においては、周囲で焚き火を伴う儀礼的行為が執り行われた可能性があろう。詳細な時期は不明である。

SK 1581（第42図）

LF 69区に位置する。SI 1510を切り、SKP 1523と重複する。北側は調査対象範囲外である。

現状から、径1.1m前後の円形もしくは楕円形平面をなすと推定する。壁は比較的急傾斜で立ち上がり、底面はほぼ平坦である。確認面から底面までの深さは0.76mである。

覆土は主に色調の差で上下に二分した。堆積の性格は不明である。本土坑からの出土遺物はない。

本遺構の性格は不明である。SI 1510を切ることから、大木８ｂ式期が上限時期である。

SK 1582（第37図）

LF 69区に位置する。SI 1510を切り、SK 1521に切られる。南側は調査対象範囲外である。

現状から、径1.1m以上の大形円形もしくは楕円形平面をなすと推定する。壁は比較的急角度に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。確認面から底面までの深さは0.75mである。

覆土は二分した。ともに黒褐色土を基調とするが、下層は相対的に黒味が薄く、地山土塊を含む。埋め戻し土であろう。上層の性格は判然としない。本土坑からの出土遺物はない。

本遺構の性格は不明である。SI 1510を切ることから、大木８ｂ式期が上限時期である。

SK 1583（第42図）

LG 69区に位置する。SI 1510を切る。南側は調査対象範囲外である。

現状から、長径1.3m以上の円形もしくは楕円形平面をなすと推定する。壁は開きながら立ち上がり、底面は狭小である。現状の断面形からは、掘り込みはすり鉢形をなすようである。確認面から底面までの深さは0.65mである。

覆土は黒褐色土単一層である。地山土塊を少量含むが、現状では、詳細な性格不明である。本土坑からの出土遺物はない。

本土坑の性格は不明である。SI 1510を切ることから、大木８ｂ式期が上限時期である。

SK 3019（第43図）

LO 67・68区に位置する。他の遺構との切り合いはない。西側は調査対象範囲外である。

現状から、長径0.8m前後の不整円形もしくは楕円形平面をなすと推定する。壁は急傾斜で立ち上がり、底面は平坦である。確認面から底面までの深さは0.35mである。

覆土は上下に二分した。ともに地山土を含み、一連の埋め戻し土と判断する。１層上面からは円礫２点が出土し、配石状を呈する。覆土中からは大木10式（新）土器破片など縄文土器破片29点が出土した。

本遺構は上面に配石を伴う土坑墓と推定する。詳細な時期は不明である。

SK 3026（第43図）

LO 68区に位置する。SK 3047に切られ、SK 3072と重複する。また、上位にはSQ 3005がある。東側は調査時の排水路掘削により削平されている。

現状から、長径1.1m以上の楕円形平面をなすかと推定するが、確実ではない。壁は開き気味に立ち上がり、底面は南側に向かって傾斜している。確認面から底面までの深さは0.32mである。

覆土は地山土粒を含む黒褐色土単一層である。その性格は判然としない。覆土中からは縄文土器小

破片42点が出土した。

本土坑の詳細な性格・時期は不明である。

SK 3030（第43図）

LO 68区に位置する。SKP 3028・3029を切る。

長径0.55m、短径0.49mのやや不整な楕円形平面をなす。平面長軸方位はほぼ東方向である。壁は開き気味に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。確認面から底面までの深さは0.12mと浅い。ただし、後述する遺物出土状況からは、本来、0.2m以上の深さがあるものと推測できる。

覆土は地山土粒を含む黒褐色土単一層である。覆土中からは縄文土器破片７点が出土した。このうち、深鉢胴～底部大形破片が覆土上面～上位からまとまって出土している。

本遺構は、小規模ではあるが、遺物がまとまって出土することから、土坑としておく。現状ではその性格は不明である。出土土器から、本土坑は、大木10式（新）～門前式前後の時期に属する可能性が高いと推定する。

SK 3033 A（第43図）

LO・LP 68・69区に位置する。SKP 3033 B を切る。西側は調査対象範囲外である。

現状から、長径0.84mの不整楕円形平面をなすと推測する。壁は比較的急傾斜で立ち上がり、底面は平坦である。確認面から底面までの深さは0.58mである。

覆土は主に色調の差により上下に二分した。その性格は判然としない。覆土中からは時期不詳の縄文土器小破片30点、スクレイパー１点が出土した。

本遺構は、形態は大形の柱穴に類似するが、柱痕跡もしくは柱抜き取り痕を認めることができない。よって、ここでは土坑としておく。現状では詳細な性格・時期は不明である。

SK 3037（第44図、図版４の２）

LO・LP 69区に位置する。SKP 3086を切り、SKP 3057と重複する。

長径0.58m、短径0.45mの隅丸方形平面をなす。平面長軸方位は東北東方向である。底面と壁は緩やかに内湾する。確認面から底面までの深さは0.11mである。

覆土は黒褐色土単一層である。遺構壁面には径10～20㎝前後の円礫10点ほどが巡る。SKP 3057との重複部分でとぎれるが、本来、円礫は壁面を全周していた可能性が強い。

本土坑からは、詳細な時期不明の縄文土器小破片６点が出土した。このほか、壁面を巡る礫群中から、石皿１点、台石１点も出土している。

本遺構は、小規模ではあるが、壁面の円礫を巡らす特徴的な構造を有することから、ここでは土坑としておく。本遺構の詳細な時期は不明である。

SK 3038（第44図）

LP 69・70区に位置する。他の遺構との切り合いはない。西側は調査対象範囲外である。

現状から、長径1.6m以上の楕円形平面をなすと推定する。推定平面長軸方位は北北東方向である。

壁は緩やかに開きながら立ち上がり、底面はほぼ平坦である。確認面から底面までの深さは0.25mである。

覆土は地山土粒を含む黒褐色土単一層である。覆土中からは大木10式・門前式土器破片など縄文土器破片約160点、円盤状土製品１点、スクレイパー１点、二次加工ある剥片１点、石皿破片１点、剥片２点が出土した。

本遺構は楕円形平面の土坑墓の可能性があると推定する。詳細な時期は不明である。

SK 3040（第44図）

LP 70区に位置する。SR 3006・3015が上位に存在する。西端部は調査対象範囲外である。長径0.60m、短径0.56mの不整円形平面をなす。壁は急傾斜で立ち上がり、底面は平坦である。確認面から底面までの深さは0.28mである。

覆土は地山土塊を含む黒褐色土単一層である。覆土中からは縄文土器小破片９点、二次加工ある剥片１点、剥片４点、砕片４点が出土した。

本遺構は、小形の円形平面の土坑とする。詳細な性格は不明である。他遺構との切り合い関係から、本遺構の下限時期は門前式期である。

SK 3047（第43図）

LO 68区に位置する。SK 3026を切る。上位にSQ 3005が存在する。東側は調査時の排水路掘削により削平されている。

現状から、長径0.78mの隅丸方形平面をなすと推定する。推定平面長軸方位は北西方向である。壁は急傾斜で立ち上がり、底面はほぼ平坦である。確認面から底面までの深さは0.25mである。

覆土は黒褐色土単一層である。その性格は判然としない。覆土中からは縄文土器小破片15点が出土した。

本土坑の詳細な性格・時期は不明である。

SK 3049（第44図）

LO 68区に位置する。SK 3072・SKP 3022・3025・3050と重複する。上位にはSQ 3005が存在する。

現状から、径0.6m前後の円形平面をなすと推定する。壁は比較的急傾斜で立ち上がり、底面はほぼ平坦である。確認面から底面までの深さは0.23mである。

覆土は黒褐色土単一層である。その性格は判然としない。覆土中からは縄文土器小破片15点が出土した。

本遺構は、小形の土坑とする。平面形態からは、SK 3072と一連の土坑であった可能性も想定し得るが、調査時には確認できていない。詳細な時期は不明である。

SK 3054（第44図）

LP 72区に位置する。SK 3111を切り、SKP 3112と重複する。

長径0.66m、短径0.62mの不整円形平面をなす。壁は開き気味に立ち上がり、底面はほぼ平坦であ

る。確認面から底面までの深さは0.16mである。ただし、後述する礫群の確認状況から、本来の深さは0.2m以上あるものと判断できる。

覆土は暗褐色土を基調とし、色調の差で上下に二分した。いずれも地山土粒を含み、一連の埋め戻し土と推定する。覆土中からは縄文土器小破片1点が出土した。また、遺構確認面の上位には径10～20cm前後の円礫が南東側にまとまって出土している。本来、土坑上面の配石と想定する。

本遺構は、上面に配石を伴う土坑墓であろう。詳細な時期は不明である。

SK 3058（第45図）

LO・LP 69区に位置する。SK 3071に切られ、SKP 3059と重複する。東側は調査時の排水路掘削により削平されている。

現状から、直径1.07mの円形平面をなすと推定する。壁は緩やかに開きながら立ち上がり、底面はほぼ平坦である。確認面から底面までの深さは0.21mである。

覆土は地山土塊を含む黒褐色土単一層である。覆土中からは時期不詳の縄文土器小破片13点、スクレイパー1点、剥片2点が出土した。

本遺構は、円形平面の土坑である。詳細な性格・時期は不明である。

SK 3064（第45図）

LP 70区に位置する。SKP 3066・3067と重複する。西側は調査対象範囲外である。

現状で、長径1.34mの楕円形平面をなす。平面長軸方位はほぼ北方向である。壁は南側が緩やかに開きながら立ち上がる他は、比較的急傾斜で立ち上がる。底面はほぼ平坦である。確認面から底面までの深さは0.15mである。

覆土は黒褐色土単一層である。覆土中からは大木2b式土器破片、後期前葉土器破片など縄文土器破片43点、剥片5点、砕片3点が出土した。

本遺構は楕円形平面の土坑墓と想定する。出土土器から、後期前葉が上限時期と判断する。

SK 3071（第45図）

LO 68・69区に位置する。SK 3058を切る。東側は調査時の排水路掘削により削平されている。

現状から、長径0.8m以上の楕円形平面をなすかと推定するが、確実ではない。壁は緩やかに開きながら立ち上がり、底面は浅くくぼむ。確認面から底面までの深さは0.27mである。

覆土は地山土塊を含む黒褐色土単一層である。その性格は判然としない。覆土中からは縄文土器破片5点が出土した。

本土坑は、一部分のみの調査のため、詳細な性格・時期は不明である。

SK 3072（第44図）

LO 68区に位置する。SK 3026・3049・SKP 3025と重複する。上位にはSQ 3005が存在する。

現状から、長径0.72m、短径0.5m前後の楕円形平面をなすと推定する。壁は急傾斜に立ち上がり、底面は西側に向かって傾斜する。確認面から底面までの深さは0.20mである。

覆土は黒褐色土単一層である。その性格は判然としない。本土坑からの出土遺物はない。

本遺構は、小形の土坑とする。既述のように、SK 3049と一連の土坑であった可能性も想定し得る。現状では、詳細な性格・時期は不明である。

SK 3076（第45図）

LP 71区に位置する。SK 3077・SKP 3080と重複する。西側は調査対象範囲外である。

現状から、長径0.65mの楕円形平面をなすかと推定するが、確実ではない。壁は比較的急傾斜で立ち上がり、底面は平坦である。確認面から底面までの深さは0.76mである。

覆土は黒褐色土単一層である。その性格は判然としない。覆土中からは縄文土器小破片2点、剥片2点が出土した。

本土坑の詳細な性格・時期は不明である。

SK 3077（第45図）

LP 70・71区に位置する。上位にはSN 3007が存在する。また、SK 3076・SKP 3075と重複する。

現状で、長径0.88m、短径0.72mの楕円形平面をなす。平面長軸方位は西北西方向である。壁は比較的急傾斜で立ち上がり、底面は平坦である。確認面から底面までの深さは0.15mである。

覆土は黒褐色土単一層である。覆土中からは縄文土器破片18点が出土した。

本遺構は、楕円形平面の土坑墓の可能性があろう。本遺構の上位で確認したSN 3007が中期後葉前後に属する可能性が強いことから、本遺構は中期後葉を下限時期とする可能性が強いと判断する。

SK 3084（第46図）

LP 71区に位置する。上位にSN 3008が存在する。東側は調査時の排水路掘削により削平されている。

現状で、長径0.83mの楕円形平面をなす。平面長軸方位は北北西方向である。壁は南側が開き気味に立ち上がる他は、急傾斜に立ち上がる。底面はほぼ平坦である。確認面から底面までの深さは0.22mである。

覆土は黒褐色土単一層である。本土坑からの出土遺物はない。

本遺構は、楕円形平面の土坑墓の可能性があろう。SN 3008との上下関係から、本遺構は後期前葉が下限時期と判断する。

SK 3092（第46図）

LP 71区に位置する。上位にSN 3010が存在する。西端は調査対象範囲外である。

現状で、長径0.96mの楕円形平面をなす。平面長軸方位はほぼ北方向である。壁は開き気味に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。確認面から底面までの深さは0.20mである。

覆土は地山土塊を含む黒褐色土単一層である。本土坑からの出土遺物はない。

本遺構は、楕円形平面の土坑墓の可能性があろう。詳細な時期は不明である。

SK 3099（第46図）

LO・LP 69区に位置する。他の遺構との切り合いはない。東側は調査時の排水路掘削により削平されている。

現状で、長径0.60mの楕円形平面をなす。底面から壁は緩やかに内湾する。確認面から底面までの深さは0.13mである。

覆土は黒褐色土単一層である。その性格は判然としない。覆土中からは時期不詳の縄文土器小破片1点が出土した。

本土坑の詳細な性格・時期は不明である。

SK 3101（第46図）

LP 72区に位置する。上位にはSN 3012が存在する。また、SKP 3100・3104 B・3105と重複する。東側は調査時の排水路掘削により削平されている。

現状では、径0.75m前後の円形もしくは楕円形平面をなすと推定するが、確実ではない。壁は緩やかに開きながら立ち上がり、底面は南側に向かってくぼんでいる。確認面から底面までの深さは0.12mである。

覆土は黒褐色土単一層である。覆土中からは縄文土器小破片24点が出土した。この中には、底面直上から礫群とともに出土した深鉢破片（第97図5・6）がある。

本遺構は、土坑墓の可能性があろう。一部分の調査であったため、詳細は不明である。SN 3012との上下関係から、本遺構は門前式期が下限時期である。

SK 3108（第46図）

LP 72区に位置する。他の遺構との切り合いはない。西側は調査対象範囲外である。

現状から、長径0.62mの楕円形平面をなすかと推定するが、確実ではない。壁は緩やかに開きながら立ち上がり、底面はほぼ平坦である。確認面から底面までの深さは0.15mである。

覆土は黒褐色土単一層である。本土坑からの出土遺物はない。

本遺構は、楕円形平面の土坑墓の可能性を想定できるものの、一部分の調査であったこともあり、確実ではない。詳細な時期は不明である。

SK 3109（第46図）

LP 72区に位置する。他の遺構との切り合いはない。西側は調査対象範囲外である。

現状から、長径0.64mの楕円形平面をなすかと推定するが、確実ではない。壁は緩やかに開きながら立ち上がり、底面はほぼ平坦である。確認面から底面までの深さは0.11mである。

覆土は黒褐色土単一層である。覆土中からは時期不詳の縄文土器小破片5点、二次加工ある剥片1点が出土した。

本遺構は、楕円形平面の土坑墓の可能性を想定できるものの、一部分の調査であったこともあり、確実ではない。詳細な時期は不明である。

SK 3111（第47図）

LP 72区に位置する。SK 3054に切られる。SKP 3110と重複する。東側は調査時の排水路掘削により削平されている。

現状から、径0.66mの円形平面をなすかと推定するが、確実ではない。壁は比較的急傾斜で立ち上がり、底面はほぼ平坦である。確認面から底面までの深さは0.21mである。

覆土は黒褐色土単一層である。本土坑からの出土遺物はない。

本土坑の詳細な性格・時期は不明である。

SK 3121（第47図）

LP・LQ 73区に位置する。他の遺構との切り合いはない。西側は調査対象範囲外である。

現状から、径0.7m以上の楕円形平面をなすかと推定するが、確実ではない。壁は開きながら立ち上がり、底面はほぼ平坦である。確認面から底面までの深さは0.11mである。

覆土は黒褐色土単一層である。覆土中からは縄文土器小破片6点が出土した。

本土坑の詳細な性格・時期は不明である。

SK 3127（第47図）

LQ 73区に位置する。他の遺構との切り合いはない。西側は調査対象範囲外である。

現状から、長径0.6m以上の楕円形平面をなすかと推定するが、確実ではない。推定長軸方位は北北東方向である。壁は開きながら立ち上がり、底面は平坦である。確認面から底面までの深さは0.20mである。

覆土は黒褐色土単一層である。覆土中からは縄文土器小破片1点が出土した。

本遺構は、小形の楕円形平面の土坑墓の可能性を想定し得るが、一部分の調査であったこともあり、確実ではない。詳細な時期は不明である。

SK 3128（第47図）

LQ 73区に位置する。他の遺構との切り合いはない。西側は調査対象範囲外である。

現状から、径0.6m以上の円形もしくは楕円形平面をなすかと推定するが、確実ではない。壁は開きながら立ち上がり、底面は平坦である。確認面から底面までの深さは0.08mである。

覆土は黒褐色土単一層である。覆土中からは縄文土器小破片1点が出土した。

本土坑の詳細な性格・時期は不明である。

SK 3139（第47図）

LQ 74区に位置する。他の遺構との切り合いはない。東端部は調査時の排水路掘削により削平されている。

現状で、長径0.72m、短径0.60mの楕円形平面をなす。平面長軸方位はほぼ東方向である。壁は緩やかに開きながら立ち上がり、底面はほぼ平坦である。確認面から底面までの深さは0.11mである。

覆土は黒褐色土単一層である。本土坑からの出土遺物はない。

本遺構は、楕円形平面の土坑墓の可能性があろう。詳細な時期は不明である。

SK 3140（第47図）

LQ 74区に位置する。他の遺構との切り合いはない。西側は調査対象範囲外である。

現状から、長径0.7m以上の楕円形平面をなすかと推定するが、確実ではない。底面から壁は緩やかに内湾する。確認面から底面までの深さは0.13mである。

覆土は暗褐色土単一層である。本土坑からの出土遺物はない。

本土坑の詳細な性格・時期は不明である。

SK 3145（第48図）

LQ 74区に位置する。SKP 3142と重複する。西側は調査対象範囲外である。

現状から、長径1.0m以上、短径0.93mの楕円形平面をなすと推定する。平面長軸方位は北東方向である。壁は開きながら立ち上がり、底面は平坦である。確認面から底面までの深さは現状で0.08mに過ぎない。本来の遺構掘り込み面は、確認面よりもかなり上位であったであろう。

覆土は黒褐色土単一層である。覆土中からは詳細な時期不詳の縄文土器小破片6点が出土した。

本遺構は、楕円形平面の土坑墓の可能性を想定し得る。しかし、土坑の最下位部分を確認し得たのみのため、詳細は不明である。詳細な時期も不明である。

SK 3151（第48図）

LQ 75区に位置する。SKP 3202と重複する。西側は調査対象範囲外である。

現状から、径0.70mの円形平面をなすかと推定するが、確実ではない。壁は比較的急傾斜で立ち上がり、底面は凹凸がある。確認面から底面までの深さは0.29mである。

覆土は黒褐色土単一層である。本土坑からの出土遺物はない。

本土坑の詳細な性格・時期は不明である。

SK 3153（第48図）

LQ 75区に位置する。他の遺構との切り合いはない。東側は調査時の排水路掘削により削平されている。

現状から、0.7m以上の円形もしくは楕円形平面をなすと推定する。壁は開きながら立ち上がり、底面はほぼ平坦である。確認面から底面までの深さは0.13mである。

覆土は黒褐色土単一層である。本土坑からの出土遺物はない。

一部分のみの調査であり、本土坑の詳細な性格・時期は不明である。

SK 3155（第48図）

LQ 75・76区に位置する。SK 3156と重複する。西端部は調査対象範囲外である。

現状から、長径0.65m、短径0.48mの楕円形平面をなすと推定する。平面長軸方位は北北西方向である。壁は開きながら立ち上がり、底面は平坦である。確認面から底面までの深さは0.15mである。

覆土は黒褐色土単一層である。本土坑からの出土遺物はない。

本遺構は、楕円形平面の小形土坑墓の可能性があろう。詳細な時期は不明である。

SK 3156（第48図）

LQ 76区に位置する。SK 3155・3157と重複する。

現状から、長径0.70m、短径0.56mの楕円形平面をなすと推定する。平面長軸方位は西北西方向である。壁は開きながら立ち上がり、底面は平坦である。確認面から底面までの深さは0.17mである。

覆土は黒褐色土単一層である。本土坑からの出土遺物はない。

本遺構は、楕円形平面の小形土坑墓の可能性があろう。詳細な時期は不明である。

SK 3157（第48図）

LQ 76区に位置する。SK 3191に切られ、SK 3156と重複する。東端部は調査時の排水路掘削により削平されている。

現状から、直径0.85mの円形平面をなすと推定する。壁は緩やかに開きながら立ち上がり、底面はほぼ平坦である。確認面から底面までの深さは0.24mである。

覆土は黒褐色土単一層である。覆土中からは詳細な時期不詳の縄文土器小破片２点が出土した。

本遺構は、詳細な性格・時期は不明である。

SK 3165（第49図）

LQ 76・77区に位置する。他の遺構との切り合いはない。西側は調査対象範囲外である。

現状から、長径1.2m以上の楕円形もしくは円形平面をなすと推定する。壁は開き気味に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。確認面から底面までの深さは0.12mである。

覆土は黒褐色土単一層である。覆土中からは詳細な時期不詳の縄文土器小破片33点、剥片２点が出土した。

本土坑の詳細な性格・時期は不明である。

SK 3173（第49図）

LQ 77区に位置する。他の遺構との切り合いはない。

直径0.60mの不整円形平面をなす。壁は比較的急傾斜で立ち上がり、底面は平坦である。確認面から底面までの深さは現状で0.12mに過ぎない。本来の遺構掘り込み面は、確認面よりもかなり上位であったであろう。

覆土は黒褐色土単一層である。覆土中からは詳細な時期不詳の縄文土器小破片12点が出土した。

本遺構は、円形平面の土坑墓の可能性を想定し得る。しかし、土坑の最下位部分を確認し得たのみのため、詳細な性格・時期は断定し難い。

SK 3177（第49図）

LQ 75区に位置する。他の遺構との切り合いはない。西端部は調査対象範囲外である。

現状から、長径1m前後、短径0.90mの楕円形平面をなすと推定する。平面長軸方位は北東方向である。壁は緩やかに開きながら立ち上がり、底面はほぼ平坦である。確認面から底面までの深さは現状で0.09mに過ぎない。本来の遺構掘り込み面は、確認面よりもかなり上位であったであろう。

覆土は地山土粒を含む暗褐色土単一層である。覆土中からは詳細な時期不詳の縄文土器小破片34点、スクレイパー1点、剥片1点が出土した。

本遺構は楕円形平面の土坑墓の可能性があろう。しかし、土坑の最下位部分を確認し得たのみのため、詳細な性格・時期は断定し難い。

SK 3179 B（第49図）

LQ 77・78区に位置する。SKP 3179 Aに切られる。東側は調査時の排水路掘削により削平されている。

現状から、長径0.9m前後、短径0.6m前後の楕円形平面をなすと推定する。推定平面長軸方位は北西方向である。壁は比較的緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。確認面から底面までの深さは0.16mである。

覆土は黒褐色土単一層である。覆土中からは深鉢破片9点がまとまって出土した。

本遺構は、楕円形平面の土坑墓の可能性があろう。出土土器から大木10式(中)期に属すると判断する。

SK 3186（第50図）

LR 78・79区に位置する。他の遺構との切り合いはない。

長径0.60m、短径0.55mの不整円形平面をなす。壁は緩やかに開きながら立ち上がり、底面は平坦である。確認面から底面までの深さは現状で0.09mに過ぎない。

覆土は黒褐色土単一層である。本土坑からの出土遺物はない。

本土坑の詳細な性格・時期は不明である。

SK 3188（第50図）

LR 79区に位置する。他の遺構との切り合いはない。西側は調査対象範囲外である。

現状から、径0.7m以上の円形もしくは楕円形平面をなすと推定する。壁は緩やかに開きながら立ち上がり、底面は平坦である。確認面から底面までの深さは現状で0.12mに過ぎない。

覆土は黒褐色土単一層である。本土坑からの出土遺物はない。

本土坑の詳細な性格・時期は不明である。

SK 3196（第50図）

LR 79区に位置する。他の遺構との切り合いはない。西側は調査対象範囲外である。

現状から、長径0.85mの楕円形もしくは円形平面をなすと推定する。壁は比較的急傾斜で立ち上がり、底面は南端側に向かって傾斜している。確認面から底面までの深さは0.53mである。

覆土は黒褐色土単一層である。覆土中からは縄文土器小破片28点、凹石類1点が出土した。

本土坑の詳細な性格・時期は不明である。

SK 3203（第50図）

LQ 75区に位置する。SKP 3202と重複する。東側は調査時の排水路掘削により削平されている。

現状から、長径0.9m以上の楕円形もしくは円形平面をなすと推定する。壁は南側では緩やかに開きながら立ち上がる。底面はほぼ平坦である。確認面から底面までの深さは0.16mである。

覆土は黒褐色土単一層である。覆土中からは縄文土器小破片18点が出土した。

本土坑の詳細な性格・時期は不明である。

SK 3206（第50図）

LQ 76区に位置する。SKP 3205と重複する。東側は調査時の排水路掘削により削平されている。

現状から、直径0.65mの円形平面をなすかと推定するが、確実ではない。壁は比較的急傾斜で立ち上がり、底面は平坦である。確認面から底面までの深さは0.23mである。

覆土は黒褐色土単一層である。本土坑からの出土遺物はない。

本土坑の詳細な性格・時期は不明である。

（４）土器埋設遺構

SR 1441 A（第32図、図版４の３）

LJ 69区に位置する。SK 1441 Bを切る。北半は調査対象範囲外である。

復元高約50cmの深鉢を小形の掘り込み内に逆位で埋設する。掘り込みは径0.55m前後の円形もしくは楕円形平面で、深さ0.51mである。確認時には、埋設土器は底部を欠損していたが、復元の結果ほぼ完形となった。また、埋設土器周囲から浅鉢大形破片が出土している。ただし、詳細な出土状況は不明である。

埋設土器内覆土は黒褐色土単一層である。炭化物粒を含むが、他の混入物は顕著でない。本遺構からは、上記の深鉢・浅鉢のほか、大木10式土器小破片など縄文土器小破片３点、剥片１点が出土した。

埋設土器は宮戸Ⅰｂ式に属する。

SR 1570（第36図）

LI 68区に位置する。SK 1500に切られる。南半は調査対象範囲外である。

直径0.48m前後の円形平面で、深さ0.36mの小形の掘り込み内に、口縁部を欠く壺形土器を逆位に埋めている。壺形土器は現状で高さ24cmで、赤色顔料が塗彩されている。このほか、埋設土器周辺からは、大木９式土器破片など縄文土器小破片６点が出土している。

本遺構は、一部のみの調査のため確実ではないが、土器埋設遺構としておく。埋設土器は大木10式（中）～（新）に属する。

SR 1571（第51図）

LF 69区に位置する。SK 1527・SKP 1536が上位に位置する可能性がある。北側は調査対象範囲

外である。

本遺構は、粗製深鉢胴部を正位に埋設する。調査では土器埋設のための掘り込みは未確認である。

埋設土器内覆土には、焼土面や焼土粒を認めることができない。本遺構は土器埋設炉に類似するが、現状では明確に焼土面を確認できなかったため、ここでは土器埋設遺構としておく。

また、周辺には関連する遺構を認定することができない。埋設土器は中期後葉～後期前葉に属すると推定する。

SR 3006（第51図）

LP 70区に位置する。SK 3040の上位で確認した。

現状では、ほぼ横位の状態で深鉢大形破片を確認したにとどまる。深鉢破片は口縁部～胴部片で、全周の約１／４程度遺存するに過ぎない。下位では明瞭な掘り込みを確認できなかったが、土器表面を下にした状態で出土しており、ここでは、本来、横位に深鉢を据えた土器埋設遺構としておく。また、土器上面からは円礫３点が出土している。

土器内部の覆土は、地山土粒・炭化物粒を少量含むが、他に顕著な混入物はない。

上述のように、ここでは、土器埋設遺構としたが、遺存状態が不良であることもあり、必ずしも確実ではない。出土土器は門前式に属する。

SR 3015（第51図）

LP 70区に位置する。SK 3040の上位で確認した。西側は調査対象範囲外である。

小形の掘り込み内に深鉢頸部～胴部を正位に据えている。埋設土器は口縁部・底部を欠く他、西側部分の頸胴部も未確認である。掘り込みは、推定で、直径0.32mの円形平面で、深さが現状で0.12mである。埋設土器内からは径10cmあまりの円礫が１点出土した。

土器内覆土は少量の炭化物粒を含むものの、他の混入物は顕著でない。

本遺構の埋設土器の形態は土器埋設炉に類似する。しかし、埋設土器の内部や周辺では焼土面や焼土粒は確認できなかったことから、ここでは土器埋設遺構としておく。埋設土器は宮戸Ｉｂ式に属する。

SR 3181（第51図）

LR 78区に位置する。SN 3182の下位で確認した。西側は調査対象範囲外である。

粗製深鉢をほぼ正位に埋設する。埋設土器は現状では口縁部を欠く。調査時には明確な掘り込みを確認することができず、掘り込みは埋設土器とほぼ同じ大きさであったと推定しておく。

土器内覆土は、炭化物粒を含む黒褐色土単一層である。土器内覆土や周囲には焼土面や焼土粒を認めることができない。

埋設土器は中期後葉～後期前葉に属すると推定するが、より詳細な時期は判然としない。

（５）焼土遺構・屋外炉

SN 1037（第51図）

LT 66区に位置する。SKP 1104・1202を切る。

粗製深鉢の縦半分を横位に埋設する土器埋設炉である。埋設土器の周囲は被熱により焼土化しており、土器内覆土には焼土粒を含む。

埋設土器周辺からは、縄文土器小破片約100点、二次加工ある剥片１点が出土しているが、本遺構に供伴するか不明である。

本遺構の周囲には多数の柱穴も分布するが有意な関係は不明である。竪穴住居に伴う土器埋設炉であった可能性も想定し得るが、調査時には竪穴住居の存在は確認できなかった。また、SN 1041と隣接し、一連の遺構であった可能性もあるが、やはり断定できない。埋設土器は、門前式期前後に属すると推定する。

SN 1041（第51図）

LT 66区に位置する。他の遺構との切り合いはない。

径30cmの粗製深鉢胴部を炉体土器として長径0.44m、深さ0.39mの掘り込みに埋設する土器埋設炉である。

埋設土器内および掘り込み覆土中には焼土粒を含む。覆土中から剥片１点が出土している。

本遺構の周囲には柱穴が分布するが、有意な関係は不明である。また、SN 1037と隣接し、一連の遺構であった可能性も想定し得るが、断定できない。炉体土器は中期後葉～後期前葉に属すると推定する。

SN 1054（第24図）

MB 66区に位置する。SK 1136を切る。

本遺構は、楕円形平面の浅い掘り込みとその南西端の土器埋設炉とからなると判断した。掘り込みは長径1.72m、短径1.02mの楕円形平面で、確認面からの深さは0.15mである。覆土は黒褐色土の単一層で、焼土面や焼土粒はほとんど認めることはできない。土器埋設炉は底部を欠いた径28cmの深鉢胴部を炉体土器として小形の掘り込みに正位に据えている。土器内覆土は焼土化している。

本遺構からは、炉体土器の他に、別個体の深鉢胴部破片が出土している。炉体土器の周りに部分的に巡らした可能性も想定し得るが、詳細な出土状況は不明である。

本遺構は掘り込みと土器埋設炉とから構成されることから、縄文時代中期後葉前後の竪穴住居に伴う複式炉の一種であった可能性も想定し得る。しかし、調査時には、竪穴掘り込みや明瞭な床面を確認することはできなかった。また、調査範囲が狭小であるため、周囲に有意な柱穴配置を認定することもできない。よって、ここでは、単独の屋外炉であったものと想定しておく。炉体土器は後期前葉に属すると推定する。

SN 1211（第52図）

LL 68区に位置する。他の遺構との切り合いはない。

Ⅳ層中で深鉢破片のまとまりを確認し、精査の結果、小形掘り込みの壁沿いに粗製深鉢胴部破片を部分的に巡らせた屋外炉と判断した。

掘り込み内覆土は１～３層に分けた。１・２層は焼土塊を含み、本来の炉の燃焼部に大勢として対応する堆積層と推定できる。３層は、掘り込み内に深鉢破片を据える際の裏込め土であろう。

周辺からは、250点あまりの縄文土器破片土器破片のほか、三角形土製品が1点出土している。しかし、詳細な出土状況は不明であり、本遺構に供伴したかは判然としない。

本遺構は、周辺に関連する遺構を認定することができなかったため、屋外炉とした。本来、深鉢胴部をそのまま炉体土器として埋設した可能性も想定し得るが、遺存状態が不良なため断定できない。炉体土器は中期後葉に属すると推定する。

SN 1327（第52図）

LM 68区に位置する。他の遺構との切り合いはない。南半は調査対象範囲外である。

深鉢胴部を炉体土器として正位に埋設する土器埋設炉である。調査では埋設のための掘り込みは確認できなかった。

土器内覆土は焼土粒を含む。埋設土器内およびその周辺からは、縄文土器小破片約100点、二次加工ある剥片1点が出土した。供伴するかは不明である。

周辺には関連する遺構を認定することができない。埋設土器の詳細な時期は不明である。

SN 1376（第31図）

LL・LM 68区に位置する。SK 1375・1411に切られる。南半は調査時の排水路掘削時に削平されている。

現状から、推定平面長径0.9m、深さ0.05m前後の浅い掘り込み底面が焼土化している。出土遺物はない。

本遺構は、詳細な性格は不明である。他遺構との切り合い関係から、大木8b式期を下限時期とする可能性があろう。

SN 1444（第52図、図版5の1）

LL 67・68区に位置する。他遺構との切り合いはない。南側は調査対象範囲外である。

掘り込み内に深鉢胴部～底部を炉体土器として正位に埋設する土器埋設炉である。掘り込みは、長径0.8m以上の楕円形平面で、深さ0.40mである。

埋設土器内覆土上位とその周囲が被熱により焼土化している。周辺には関連する遺構を認定することができない。

炉体土器は門前式に属する可能性が高いと推定する。

SN 3007（第52図）

LP 71区に位置する。SK 3077の上位で確認した。

Ⅳ層中で、深鉢口縁部～胴部の大形破片が出土し、さらにその下位で焼土層を確認した。深鉢破片は、口縁部から胴部にかけてのほぼ全周が接合した。これらの状況から、本来、底部を欠いた深鉢を炉体土器として埋設した土器埋設炉と判断する。ただし、現状では、その詳細な形態は判然としない。

周辺には関連する遺構を認定することができない。炉体土器は中期後葉に属する可能性が強い。

SN 3008（第52図）

LP 71区に位置する。SK 3084の上位で確認した。

別個体の深鉢底部と胴部とを隣接して埋設した土器埋設炉である。埋設土器の周囲が被熱により焼土化している。調査では土器埋設のための掘り込みは未確認である。

周辺には関連する遺構を認定することができない。炉体土器は後期前葉に属する可能性が高いと推定する。

SN 3009（第52図）

LP 71区に位置する。他の遺構との切り合いはない。

深鉢底部を炉体土器として正位に埋設した土器埋設炉である。埋設土器内覆土には焼土塊を含む。

周辺には関連する遺構を認定することができない。炉体土器は中期後葉に属する可能性が高いと推定する。

SN 3010（第53図）

LP 71区に位置する。SK 3092の上位で確認した。

掘り込み内に深鉢胴部を炉体土器として埋設する土器埋設炉である。埋設土器内覆土には焼土粒を含む。

周辺には関連する遺構を認定することができない。炉体土器は後期前葉に属すると推定する。

SN 3011（第53図）

LP 72区に位置する。SKP 3098と重複する。

掘り込み内に深鉢胴部を炉体土器として埋設する土器埋設炉である。炉体土器は現状では南西半部を欠く。SKP 3098により削平された可能性もあるが、調査時には未確認である。

炉体土器の東隣と炉体土器内覆土中位とが焼土面となっている。

本遺構は、50cm北に位置するSN 3012と一連の土器埋設炉の可能性も想定できる。このほかには周辺に関連する遺構を認定することができない。炉体土器は後期前葉に属すると推定する。

SN 3012（第53図）

LP 72区に位置する。SK 3101・SKP 3104Ｂの上位で確認した。

深鉢胴部を炉体土器として埋設する土器埋設炉である。炉体土器の南隣には焼土面が存在する。本遺構の50cm南に位置するSN 3011と一連の土器埋設炉の可能性も想定できる。他に周辺に関連する遺構を認定することができない。炉体土器は門前式である。

SN 3016（第53図）

LP 71区に位置する。SKP 3081を切り、SKP 3079と重複する。東側は調査時の排水路掘削により削平されている。

本遺構は、深鉢胴部を炉体土器として埋設する土器埋設炉である。炉体土器内覆土は焼土塊を含む。

周辺には関連する遺構を認定することができない。炉体土器は宮戸Ⅰｂ式である。

SN 3017（第53図）

LP 70区に位置する。他の遺構との切り合いはない。

本遺構は、掘り込み内に深鉢胴部を炉体土器として正位に埋設し、その周囲に胴部破片を巡らす土器埋設炉である。土器内覆土は焼土粒を含む。

周辺には関連する遺構を認定することができない。炉体土器は門前式である。

SN 3018（第53図）

LQ 73区に位置する。他の遺構との切り合いはない。西側は調査対象範囲外である。

本遺構は、深鉢胴部～底部を炉体土器として正位に埋設する土器埋設炉である。炉体土器の南隣が焼土面となっている。土器内覆土には焼土粒を認めることはできない。

周辺には関連する遺構を認定することができない。炉体土器は中期後葉～後期前葉に属すると推定する。

SN 3182（第51図）

LR 78区に位置する。SR 3181・SKP 3215の上位に位置する。西側は調査対象範囲外である。

当初、南北に約20㎝離れた２基の埋設土器を確認した。その後、調査区壁の土層断面の観察から、長径およそ1.6m、深さ0.35mの掘り込み覆土上位中に２個の土器が据えられ、かつ、掘り込み覆土上面が焼土化していることを確認した。このことから、本遺構は、２個の深鉢底部を正位に据えた土器埋設炉と判断した。埋設土器内覆土には、ともに焼土粒を含む。

埋設土器の詳細な時期は不明である。SR 3181との上下関係から、本遺構は大木10式期が上限時期と推測する。

SN 3217（第53図）

LP 72区に位置する。他の遺構との切り合いはない。東側は調査時の排水路掘削により削平されている。

本遺構は深鉢胴部を炉体土器として埋設する土器埋設炉である。炉体土器の周囲が焼土面となっている。土器内覆土には焼土粒を少量含む。

周辺には関連する遺構を認定することができない。炉体土器は中期後葉に属すると推定する。

（６）配石遺構

SQ 1045（第54図、図版５の２）

MA･MB 66区に位置する。SKP 1172の上位で確認した。

径0.5m前後の範囲に長径10～15㎝ほどの円～亜角礫15点前後を集積する。礫群中には凹石類２点がある。礫群には被熱痕を認めることはできない。

礫群の東側下位に存在する小形の柱穴SKP 1172との関係は不明である。また、詳細な時期も不明

である。

SQ 1213（第54図）

LG 69区に位置する。SI 1510・SK 1512・SKP 1511・1578・1579の上位で確認した。

径1.2m前後の範囲に礫や土器破片などが集中する。

礫の多くは長径10cm前後の円～亜角礫である。礫群中からは、縄文土器破片約970点のほか、円盤状土製品１点、石錐１点、二次加工ある剥片１点、石核１点、凹石類６点、敲石１点、円盤状石製品１点などが出土した。

本遺構は、当初、礫を多量に確認したことから、配石遺構として扱った。しかし、礫の分布に規則性等は認めることができず、礫群内には他の遺物も顕著であることから、遺物の集中廃棄地点と想定することもできよう。出土土器には宮戸Ⅰｂ式に属するものがあり、本遺構も宮戸Ⅰｂ式に属する可能性が高い。

SQ 1224（第54図）

LI 69区に位置する。SK 1497の上位で確認した。

径0.8m前後の範囲に長径10～15cm前後の円～亜角礫10点ほどを集積する。礫群中には凹石類１点を含む。

本礫群の下位に位置するSK 1497との関係は不明である。また、詳細な時期も不明である。

SQ 1229（第54図）

LJ 68区に位置する。他の遺構との切り合いはない。

径0.4m前後の範囲に長径10～30cmほどの円礫数点を集積する。礫群中には凹石類２点を含む。このほか、大木８ｂ式、大木10式等の縄文土器破片約70点、二次加工ある剥片１点、剥片２点も出土している。

礫群には被熱痕跡はなく、また、礫群の下位には掘り込みを確認できなかった。詳細な時期は不明である。

SQ 1384（第55図）

LN・LO 67区に位置する。SKP 1385を切る。

小形の柱穴状の掘り込み内に、長さ25cmの大形柱状礫を立石として据えている。立石は、掘り込み西壁沿いに据え、立石上端は、現状で、掘り込み確認面よりも10cm上位である。掘り込み内からは詳細な時期不詳の縄文土器破片８点、剥片１点が出土した。

本遺構の詳細な時期は不明である。

SQ 1483（第55図）

LI 68区に位置する。他の遺構との切り合いはない。

径0.3mほどの範囲に長径15cm前後の円礫４点と上下に重ね合わせた深鉢底部破片２点とを集積する。

円礫には被熱痕跡は確認できない。また、下位に関連する遺構も確認できなかった。本遺構の詳細な時期は不明である。

SQ 1491（第36図）

LI 68区に位置する。本遺構に隣接してSR 1570・SK 1500がある。10～15cm前後の円礫４個がまとまっている。円礫には加工痕や使用痕を認めることはできない。円礫下には掘り込みは確認できなかった。

周辺からは、中期中葉前後に属する深鉢破片１点が出土した。本遺構の詳細な時期は不明である。

SQ 1530（第55図）

LC 70区に位置する。下位でSKP 1552を確認した。

径0.4mほどの範囲に長径10～20cm前後の円礫５点を集積する。周囲には類似した配石遺構SQ 1531・1532・1533が連続し、一連の遺構と推定できる。下位に存在するSKP 1552との関係は不明である。また、詳細な時期も不明である。

SQ 1531（第55図）

LC 70区に位置する。他の遺構との切り合いはない。

径0.3mほどの範囲に長径10～15cm前後の円礫５点を集積する。礫群には凹石類１点を含む。周囲には類似した配石遺構SQ 1530・1532・1533が連続し、一連の遺構と推定できる。詳細な時期は不明である。

SQ 1532（第55図）

LB 70区に位置する。他の遺構との切り合いはない。

径0.3mほどの範囲に長径５～15cm前後の円礫５点を集積する。周囲には類似した配石遺構SQ 1530・1531・1533が連続し、一連の遺構と推定できる。詳細な時期は不明である。

SQ 1533（第55図）

LB 70区に位置する。他の遺構との切り合いはない。

径0.3mほどの範囲に長径10～20cm前後の円礫10点ほどを集積する。礫群には石皿破片１点を含む。周囲には類似した配石遺構SQ 1530・1531・1532が連続し、一連の遺構と推定できる。詳細な時期は不明である。

SQ 3004（第56図、図版５の３）

LR 79区に位置する。下位でSKP 3192を確認した。西側は調査対象範囲外まで広がり、東側は調査時の排水路掘削により削平されている。

現状で、径１m前後の範囲に円礫、縄文土器破片約70点等が集中する。礫群中には、大形石棒１点、凹石類１点、石皿破片１点を含む。石棒は、横位状態で出土し、下半を欠損する。下位には掘り込み

等は確認できず、現状では、石棒が本来立てられていたかは不明である。

現状の礫群等の分布状況からは、遺物の集中廃棄地点であった可能性も想定し得る。出土土器には大木10式(新)に属する例がある。本遺構も当該期に属する可能性を認めることができるものの、確実ではない。

SQ 3005(第56図)

LO 68区に位置する。SK 3026・3047・3049・3072・SKP 3050・3051の上位で確認した。

径1.2mほどの範囲に円礫が集中する。礫群中には、凹石類２点を含む。周囲からは縄文土器破片15点も出土した。これらの遺物は、下位に存在する遺構に伴うものの可能性もあろう。

本遺構の詳細な時期は不明である。

SQ 3014(第56図)

LP 71区に位置する。他の遺構との切り合いはない。西側は調査対象範囲外である。

径0.4mほどの範囲に長径５～15cm前後の円礫９点を集積する。礫群には凹石類１点、礫石錘１点を含む。周囲からは、縄文土器小破片20点が出土した。本遺構の詳細な時期は不明である。

(７)柱穴

柱穴は第５～13表にまとめた。以下では、一部の特徴的な例についてのみ、個別に記述する。

SKP 1072(第56図)

MA 66区に位置する。他の遺構との切り合いはない。直径0.22mの円形平面をなす。壁はやや開き気味に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。確認面から底面までの深さは、0.09mである。

覆土上面では長径15cm前後の円礫３点がまとまって出土した。円礫には凹石類１点が含まれている。下位に掘り込みを伴う配石遺構とする想定も可能であるが、ここでは柱穴として扱っておく。

SKP 1362(第30図)

LN 67・68区に位置する。SK 1365 B を切る。北端は調査対象範囲外である。

現状で、長径0.70m前後の円形平面をなす。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。確認面から底面までの深さは0.84mである。

覆土は１～４層に分けた。１・２層が柱痕跡、３・４層が柱の根固め土に相当する。覆土中からは詳細な時期不詳の縄文土器小破片29点が出土した。

本遺構は、大形の柱穴である。宮戸Ⅰｂ式期に属するSK 1365 B を切り、柱痕跡を残すことから、縄文時代中期中葉から後期前葉にかけての遺構群の中では、最も新しい時期に属する一群であろう。

SKP 3053(第56図)

LP 70区に位置する。SKP 3063を切り、SKP 3056と重複する。

直径0.40mの不整円形平面をなす。壁は比較的急傾斜で立ち上がり、底面は浅くくぼむ。確認面か

ら底面までの深さは0.23mである。

覆土は黒褐色土単一層である。上面には長径15cm前後の円礫５点が集中する。覆土中からは、大木10式(新)土器破片など縄文土器破片が９点出土した。

上面に配石を伴う土坑の可能性も想定し得るが、ここでは掘り込みの形態と規模を勘案し、柱穴として扱っておく。

２　遺構外出土遺物

今回の調査および前年の範囲確認調査において、約240箱分の縄文時代の遺物が出土している。今回の調査で縄文時代の遺跡調査の対象となったⅠ・Ⅲトレンチは、既述のように極めて狭小であり、かつ調査では地点・層位による出土土器の相違等を明確にとらえることはできなかった。紙数が限られることもあり、ここでは、今回の発掘調査出土遺物と範囲確認調査出土遺物とを一括し、特徴的な遺物を掲載するにとどめる。以下では、主として出土遺物の概要について簡単に触れておく。

土器

出土土器には、縄文時代前期前葉表館式、同前期中葉大木２式～３式土器、同中期中葉～後葉大木８ｂ式～大木10式、同後期前葉門前式～宮戸Ⅰｂ式、同十腰内Ⅰ式、同後期中葉後期十腰内Ⅳ式、同後期後葉宮戸Ⅲａ・Ⅲｂ式、同晩期前葉大洞BC式などがある。これらのうち、Ⅰ・Ⅲトレンチ Ⅳ層中では、中期中葉から後期前葉にかけての大木８ｂ式～宮戸Ⅰｂ式土器がまとまって出土しており、本遺跡の主体をなしている。宮戸Ⅰｂ式土器にほぼ併行する十腰内Ⅰ式土器が少量出土しているが、東北地方北部に分布の中心があるそれ以前の土器群の存在は確認していない。このほかの前期土器、後期中葉～晩期前葉土器群の出土は僅かであり、特に後者はごく少量に過ぎない。

なお、MJ115区Ⅲ層上面で、晩期前後に属する可能性ある深鉢底部破片(第142図14)を検出している。当該土器の出土状況を重視すると、縄文時代晩期前後の遺物の出土層準はⅢ層上位であった可能性があるものの、現状では確実ではない。

土製品

遺構外出土土製品には、円盤状土製品22点、土偶１点、三角形土製品４点、土製耳飾り２点がある。このうち、円盤状土製品については、円盤状の土器破片であっても、全体が摩滅し、整形加工の有無が判然としない例は当該遺物からは除外した。本遺跡出土土器は全体に遺存状態が不良であり、本来、円盤状土製品はここで認定した以上に出土している可能性が強い。一方、土偶は確実な出土例は１点のみであり、全体の遺物量と比して著しく僅少であると評価できるかもしれない。ただし、調査範囲が狭小であったため、本遺跡全体の特徴として評価できるかは、確実ではない。

また、東北地方北部の後期前葉の特徴的な土製品である鐸形土製品・キノコ形土製品は出土していない。

石器・石製品

遺構外出土および遺構内出土石器・石製品の内訳は第４表の通りである。なお、出土石器・石器類

器　　種	遺構出土	遺構外出土
石鏃	4	16
石槍		23
石錐	3	8
石匙	1	22
石篦	2	21
打製石斧		1
スクレイパー	13	148
楔形石器		7
二次加工ある剥片	20	148
石核	1	33
凹石類	51	23
石皿	10	50
石錘	1	3
磨製石斧	1	9
砥石	2	3
礫器	1	
石棒	1	4
石刀		1
石剣		2
有孔石製品		1
球状石製品	4	34
円盤状石製品	7	68
その他の石製品		1

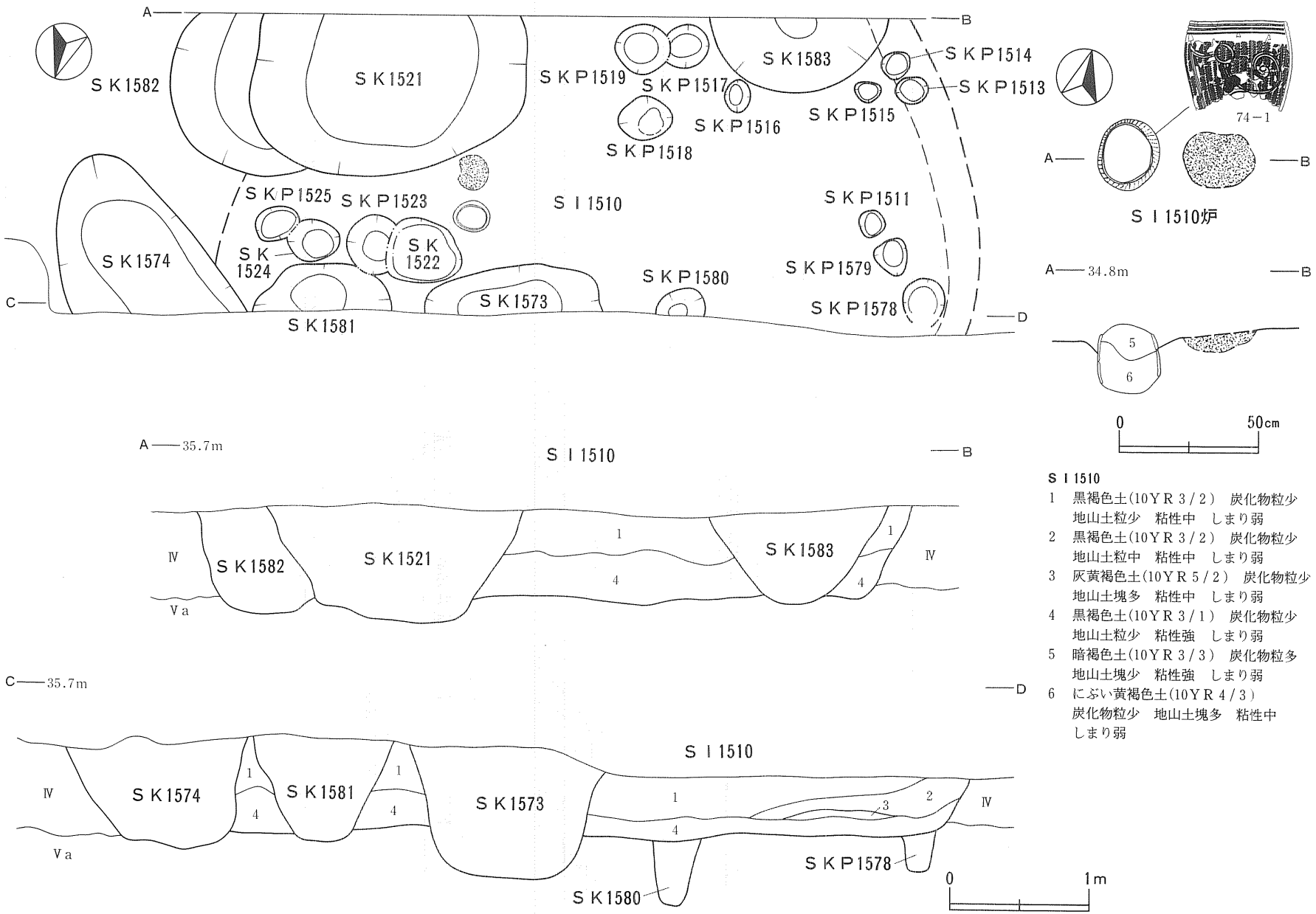
第4表　縄文時代出土石器類一覧　（古代遺構出土例除く）

は、形態および出土土器量を勘案すると、ほとんどが縄文時代中期中葉から後期前葉に属すると推定できる。

遺構出土例と遺構外出土例とを比較すると、凹石類が遺構から多出していることが目立つが、現状では、他に有意な組成差を認め難い。

また、石器類全体の組成を見ると、石錘出土例が遺構出土例を合わせても4点のみと極めて乏しいことを注意すべきであろう。本遺跡と同じく横手盆地の低地上に立地し、ほぼ併存する時期に営まれた増田町八木遺跡では、打欠石錘・切目石錘・アスファルト石錘などを合わせると1000点を越える多量の石錘が出土している状況と顕著な対照をなしている。(註4) このほか、八木遺跡で定型的石器として認定された嘴状石器に相当する石器も本遺跡では認めることができない。大野憲司は、当該石器を石錘の多出等を考慮して、魚の解体具であった可能性を推定しているが、本遺跡における石錘・嘴状石器の出土状況は、この推定の傍証となる可能性があろう。

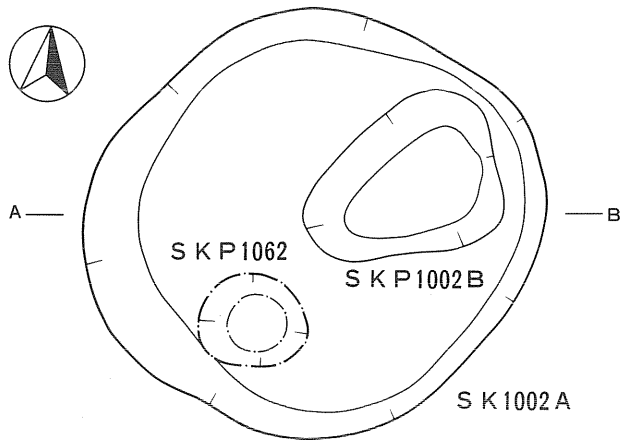
このほか、個別の石器類の形態を見ると、全体の出土量は僅かであるが、石鏃に有茎鏃を認めることができないことも注意すべきであろう。東北地方北部の中期後葉～後期前葉段階では有茎鏃が卓越することと対照的である。さらに、八木遺跡では凹基鏃が全体の約半数を占めるものの、有茎鏃も3割以上出土している。石鏃形態の南北地域差に加えて、近接地域内での形態組成の変異についても留意する必要があろう。

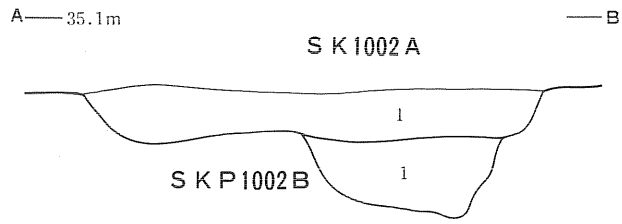


SI1510

1　黒褐色土(10YR3/2)　炭化物粒少
　地山土粒少　粘性中　しまり弱
2　黒褐色土(10YR3/2)　炭化物粒少
　地山土粒中　粘性中　しまり弱
3　灰黄褐色土(10YR5/2)　炭化物粒少
　地山土塊多　粘性中　しまり弱
4　黒褐色土(10YR3/1)　炭化物粒少
　地山土粒少　粘性強　しまり弱
5　暗褐色土(10YR3/3)　炭化物粒多
　地山土塊少　粘性強　しまり弱
6　にぶい黄褐色土(10YR4/3)
　炭化物粒少　地山土塊多　粘性中
　しまり弱

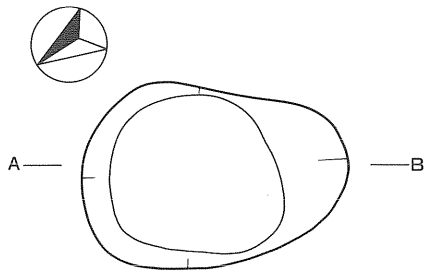
第16図　検出遺構(1)(SI1510)

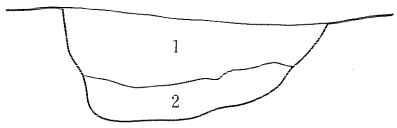




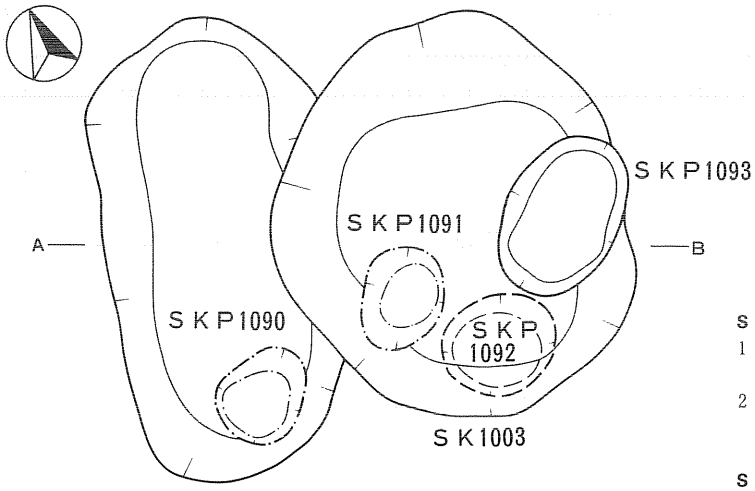
ＳＫ1002Ａ
1　黒褐色土(10ＹＲ３/１)　炭化物粒少　粘性強　しまり弱

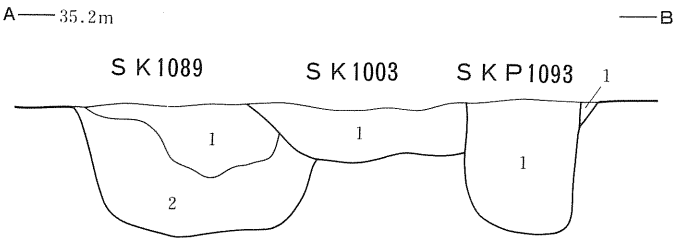
ＳＫＰ1002Ｂ
1　黒褐色土(10ＹＲ３/２)　炭化物粒少　粘性強　しまり弱





ＳＫ1005
1　黒褐色土(10ＹＲ３/２)　炭化物粒少　粘性中　しまり弱
2　黒色土(10ＹＲ２/１)　炭化物粒少　粘性中　しまり弱

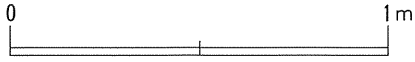




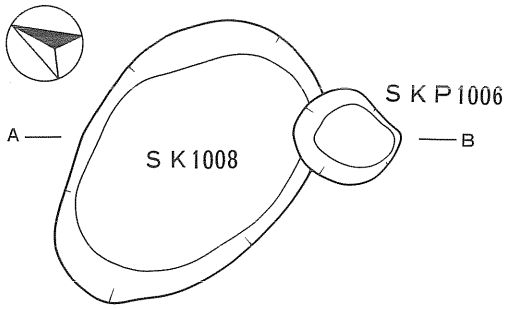
ＳＫ1089
1　黒褐色土(10ＹＲ３/１)　炭化物粒少　粘性中　しまり弱
2　黒褐色土(10ＹＲ３/１)　炭化物粒多　粘性弱　しまり弱

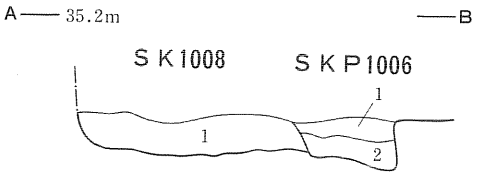
ＳＫ1003
1　黒色土(10ＹＲ２/１)　炭化物粒中　粘性中　しまり弱

ＳＫＰ1093
1　黒褐色土(10ＹＲ３/２)　炭化物粒中　粘性弱　しまり弱



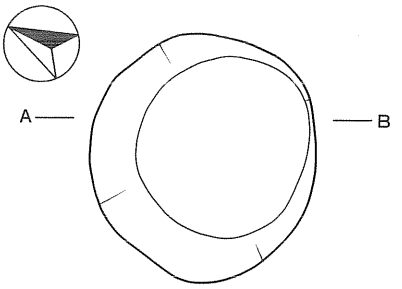
第17図　検出遺構(２)（SK1002A・1003・1005・1089、SKP1002B・1090・1091・1092・1093）

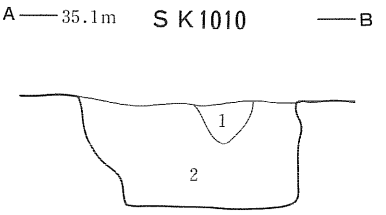




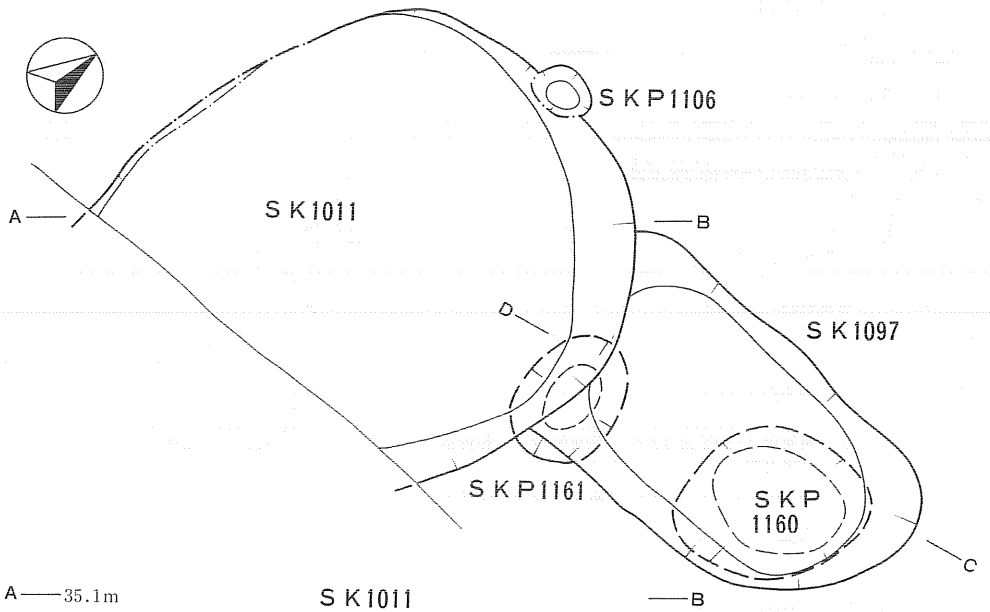
SK1008
1　黒褐色土(10YR 3/2)　炭化物粒少　粘性弱　しまり弱

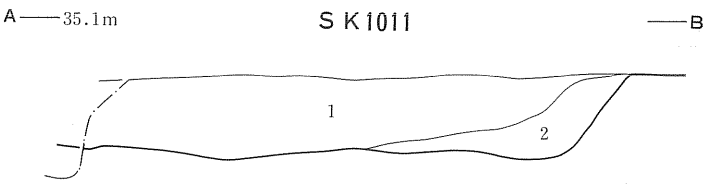
SKP1006
1　黒褐色土(10YR 3/2)　炭化物粒少　粘性中　しまり弱
2　灰黄褐色土(10YR 4/2)　粘性弱　しまり弱

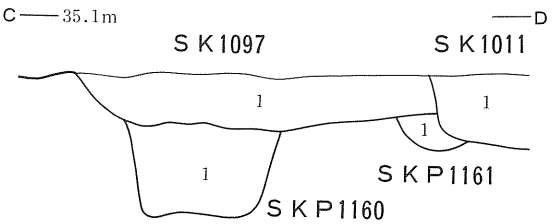




SK1010
1　黒褐色土(10YR 3/1)　地山土粒多　粘性中　しまり弱
2　黒褐色土(10YR 3/2)　炭化物粒少　粘性弱　しまり弱





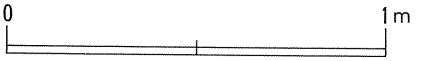


SK1011
1　黒褐色土(10YR 3/1)　炭化物粒中　粘性弱　しまり弱
2　黒褐色土(10YR 3/2)　炭化物粒少　粘性弱　しまり弱

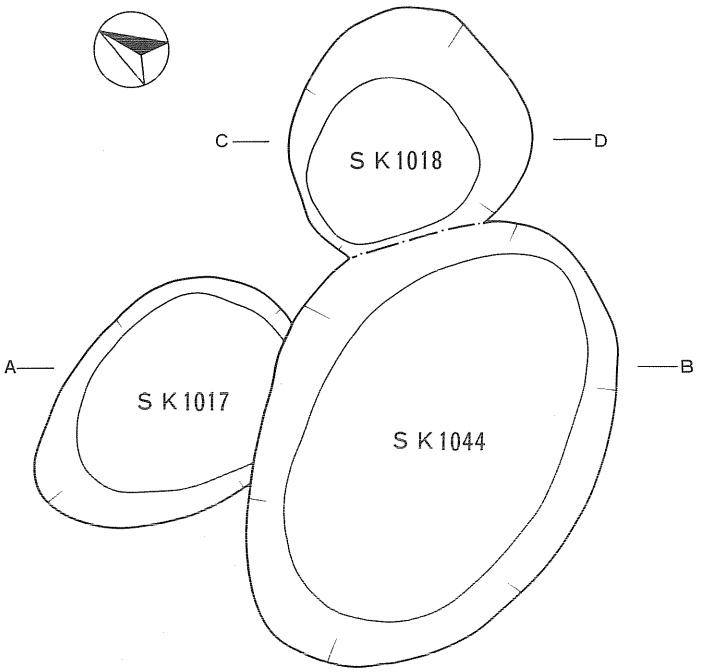
SK1097
1　黒褐色土(10YR 3/1)　炭化物粒少　粘性弱　しまり弱

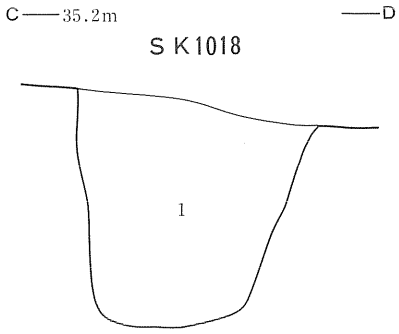
SKP1160
1　黒褐色土(10YR 3/1)　炭化物粒少　粘性弱　しまり弱

SKP1161
1　黒褐色土(10YR 3/2)　炭化物粒中　粘性弱　しまり弱

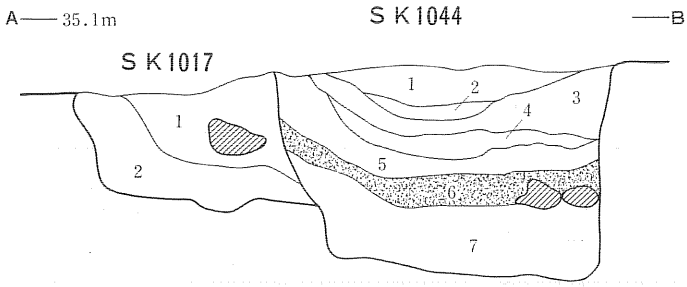


第18図　検出遺構(３)（SK1008・1010・1011・1097、SKP1006・1160・1161）



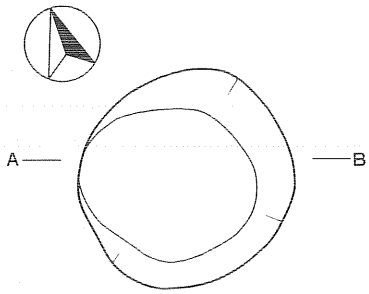


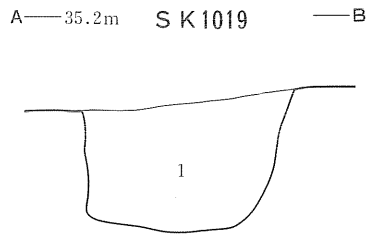
SK1018
1　黒褐色土(10YR３/１)　炭化物粒少　粘性強
　　しまり弱



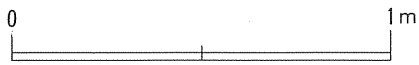
SK1017
1　黒褐色土(10YR３/２)　炭化物粒少
　　地山土粒少　粘性弱　しまり弱
2　黒褐色土(10YR３/１)　地山土粒少
　　粘性弱　しまり弱

SK1044
1　黒褐色土(10YR３/２)　炭化物粒中　粘性弱
　　しまり弱
2　黒褐色土(10YR３/２)　炭化物粒少
　　地山土粒中　粘性弱　しまり弱
3　黒褐色土(10YR３/２)　炭化物粒少　粘性弱
　　しまり弱
4　黒褐色土(10YR３/１)　地山土粒多　粘性弱
　　しまり弱
5　黒褐色土(10YR３/１)　炭化物粒中
　　地山土粒中　粘性弱　しまり弱
6　黒色土(10YR２/１)　焼土粒少　炭化物粒多
　　粘性弱　しまり弱
7　黒褐色土(10YR３/１)　炭化物粒中　粘性弱
　　しまり弱

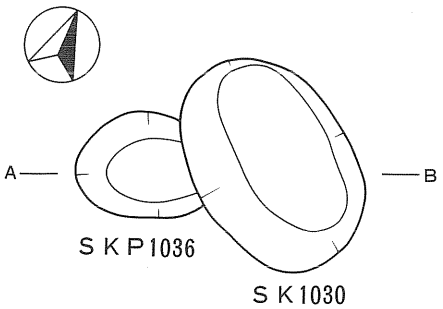




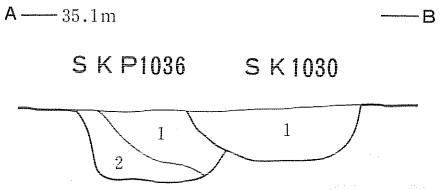
SK1019
1　黒褐色土(10YR３/２)　炭化物粒少
　　粘性弱　しまり弱



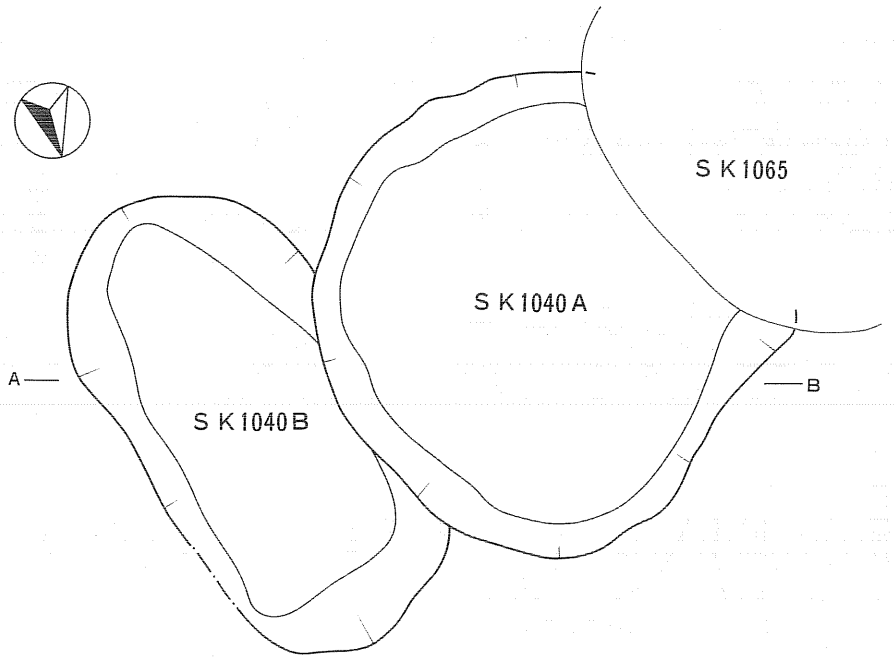
第19図　検出遺構(４)（SK1017・1018・1019・1044）

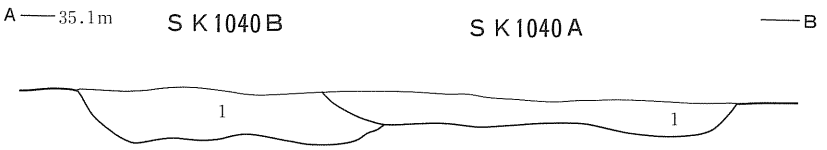


SK1030
1　黒褐色土(10YR３/１)　粘性弱　しまり弱



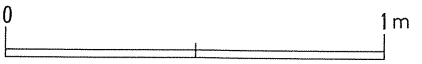
SKP1036
1　黒褐色土(10YR３/２)　炭化物粒少
　粘性中　しまり弱
2　黒褐色土(10YR３/１)　粘性弱
　しまり弱



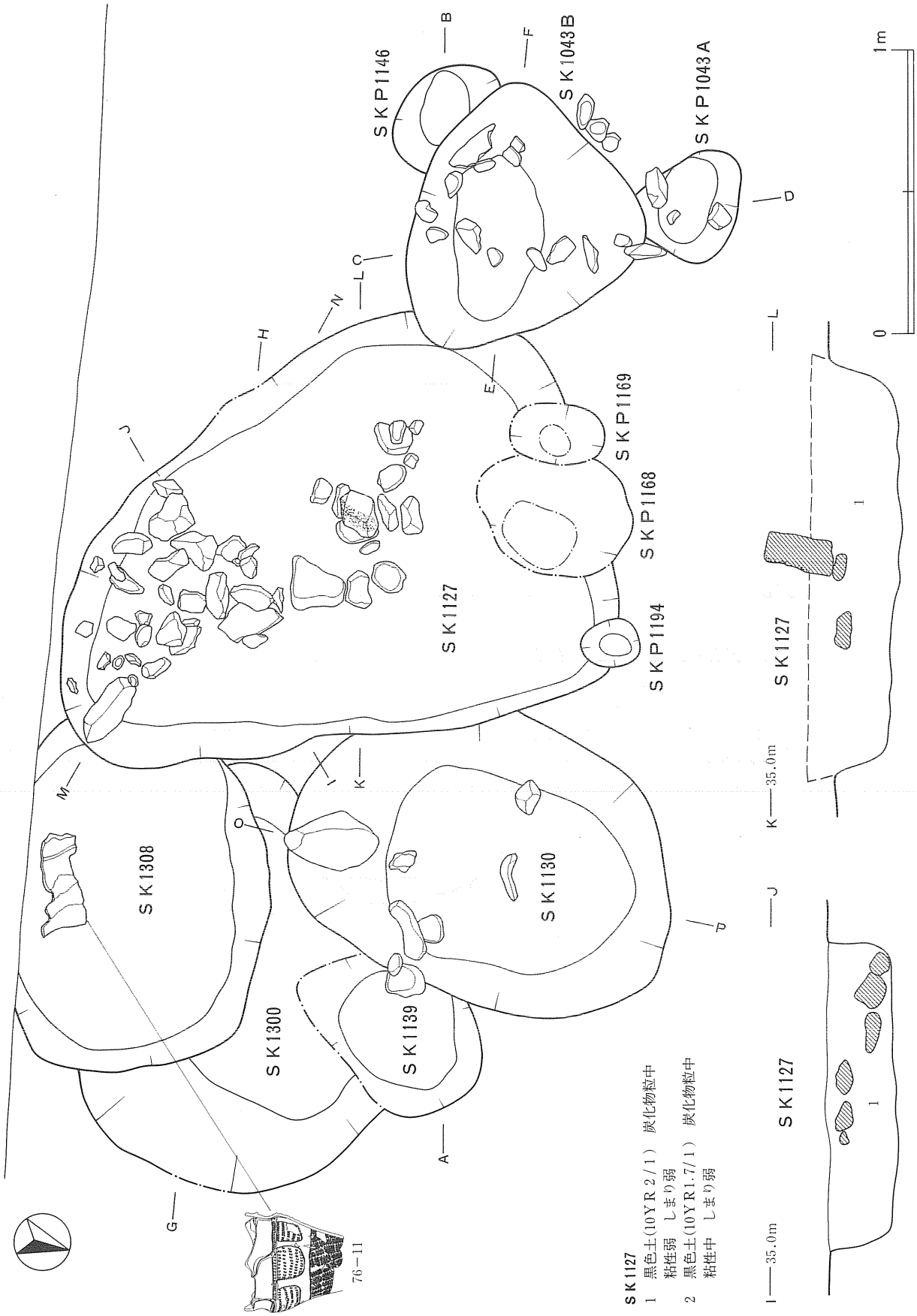


SK1040B
1　黒褐色土(10YR３/２)　炭化物粒少
　粘性中　しまり弱

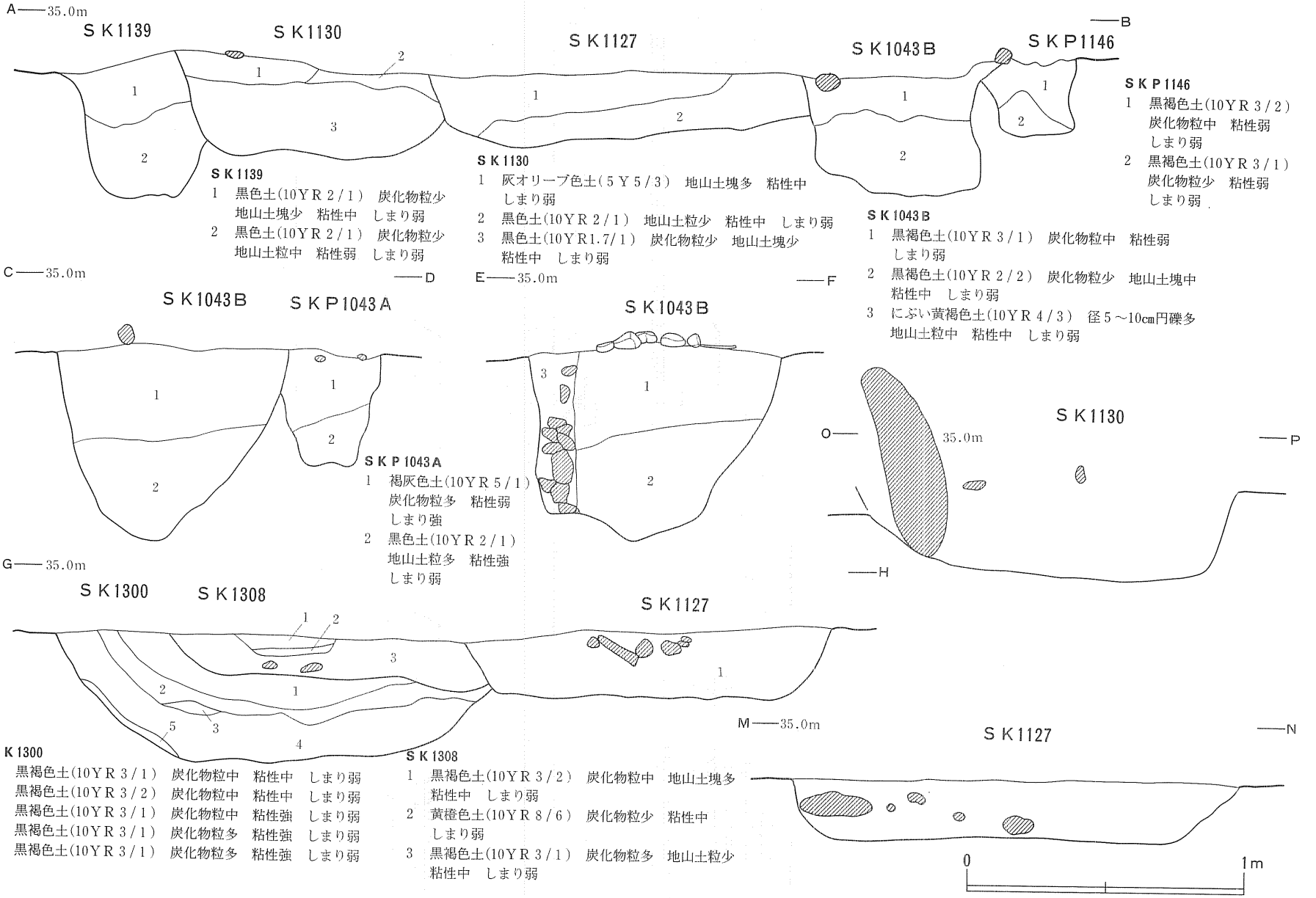
SK1040A
1　黒褐色土(10YR３/２)　炭化物粒少
　粘性中　しまり弱



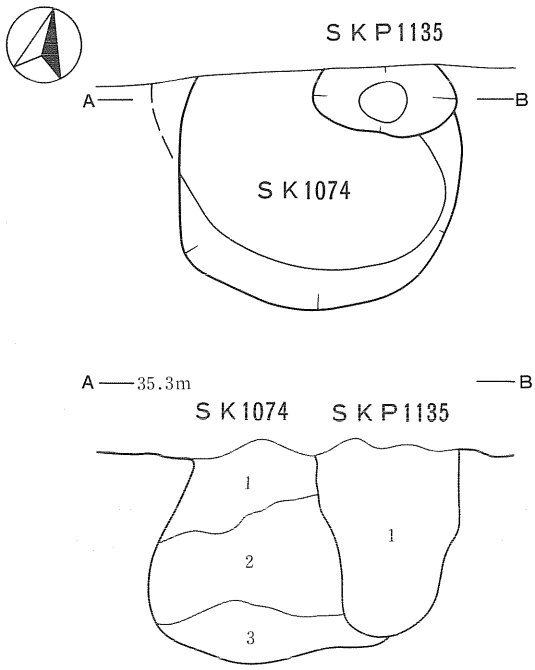
第20図　検出遺構(５)（SK1030・1040A・1040B、SKP1036）



第21図　検出遺構(6a)（SK1043B・1127・1130・1139・1300・1308、SKP1043A・1146・1167・1168・1194）

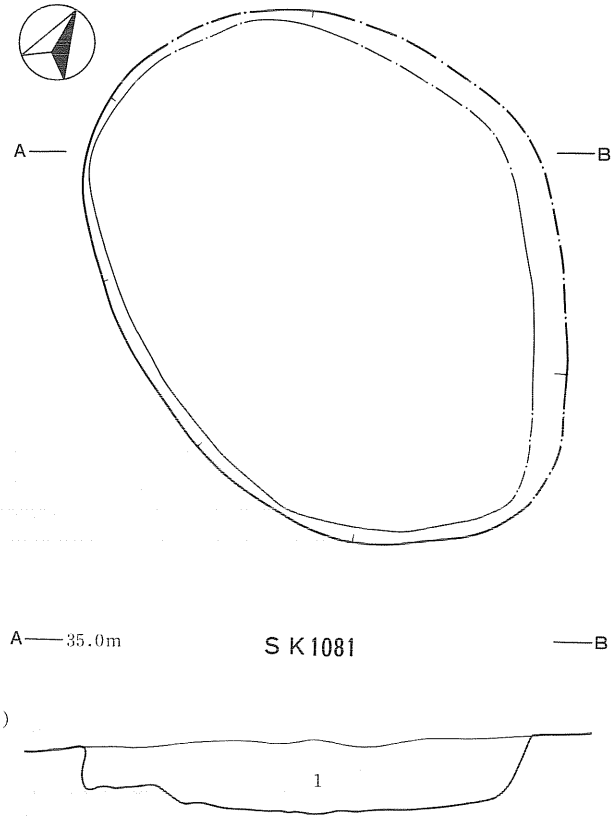


第22図　検出遺構(6b)（SK1043B・1127・1130・1139・1300・1308、SKP1043A・1146・1167・1168・1194）

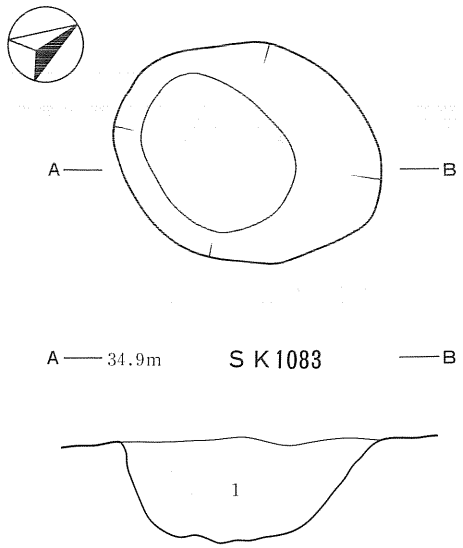


ＳＫ1074
1　黒褐色土(10ＹＲ３/２)　炭化物粒中
　地山土塊多　粘性弱　しまり弱
2　黒色土(10ＹＲ２/１)　炭化物粒中
　地山土塊多　粘性弱　しまり弱
3　灰黄褐色土(10ＹＲ４/２)　炭化物粒少
　地山土塊多　粘性弱　しまり弱

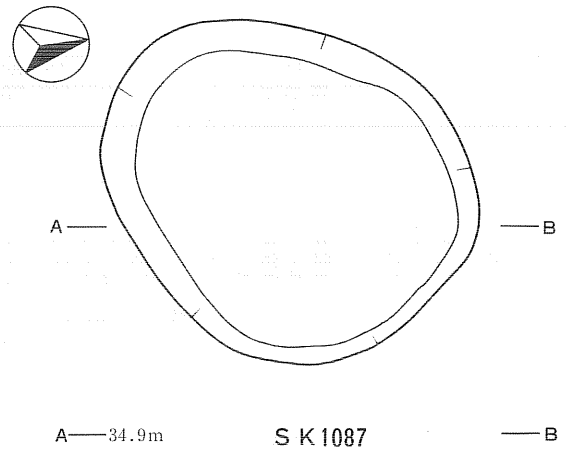
ＳＫＰ1135
1　黒褐色土(10ＹＲ２/２)
　炭化物粒中　粘性強
　しまり弱



ＳＫ1081
1　黒褐色土(10ＹＲ３/１)　地山土粒少　粘性中　しまり弱



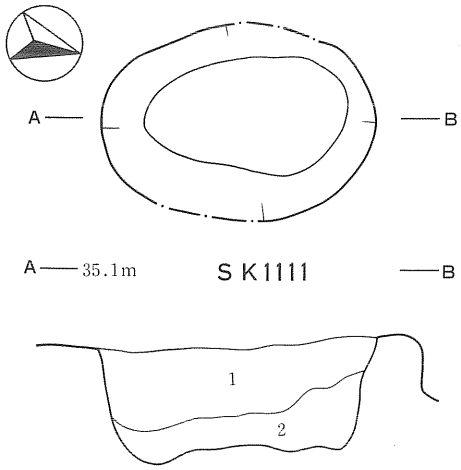
ＳＫ1083
1　黒褐色土(10ＹＲ２/２)　炭化物粒少　地山土粒多
　粘性強　しまり弱



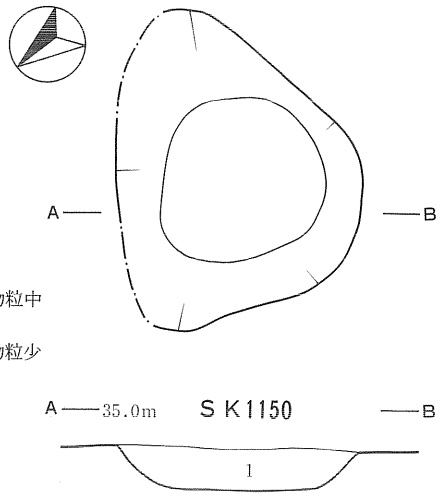
ＳＫ1087
1　黒褐色土(10ＹＲ２/２)　炭化物粒少　粘性強　しまり弱
2　黒褐色土(10ＹＲ２/２)　粘性弱　しまり弱

0　1m

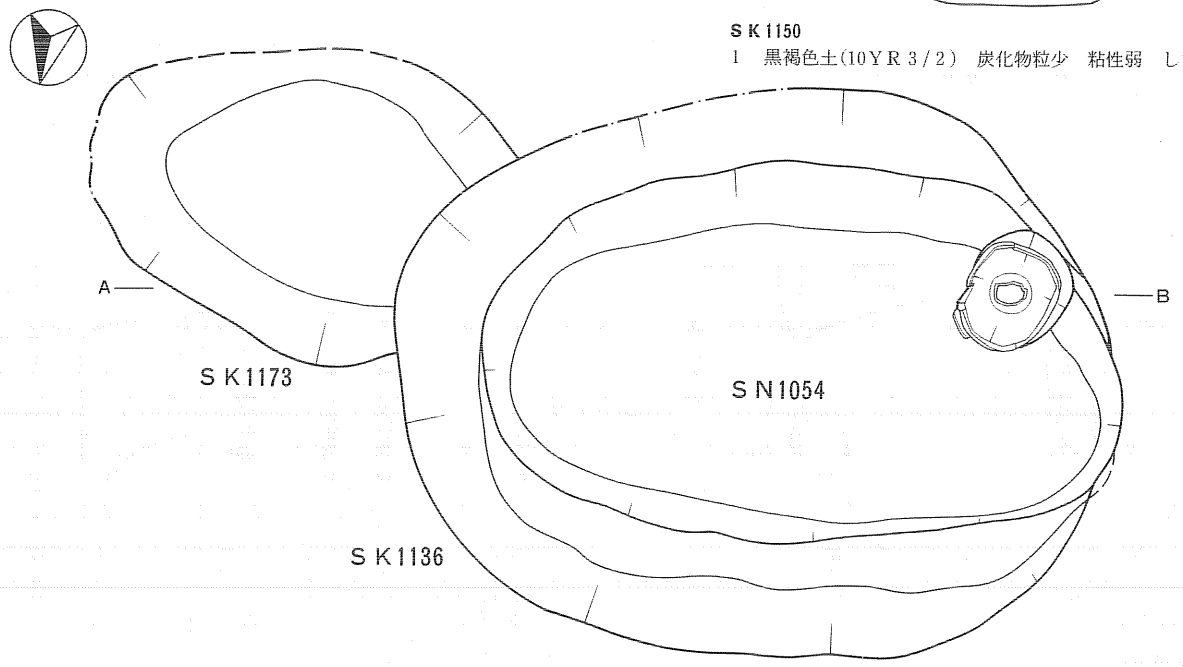
第23図　検出遺構(７)（SK1074・1081・1083・1087、SKP1135）

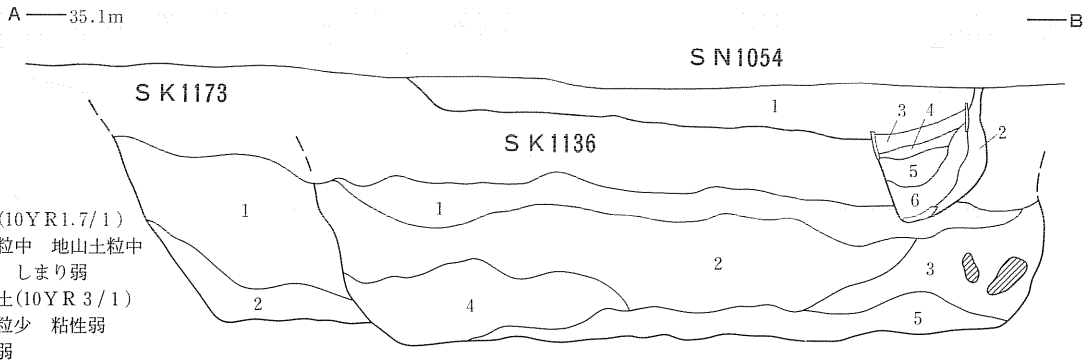


SK1111
1　黒褐色土(10YR３/２)　炭化物粒中
　粘性弱　しまり弱
2　黒褐色土(10YR３/２)　炭化物粒少
　粘性弱　しまり弱



SK1150
1　黒褐色土(10YR３/２)　炭化物粒少　粘性弱　しまり弱





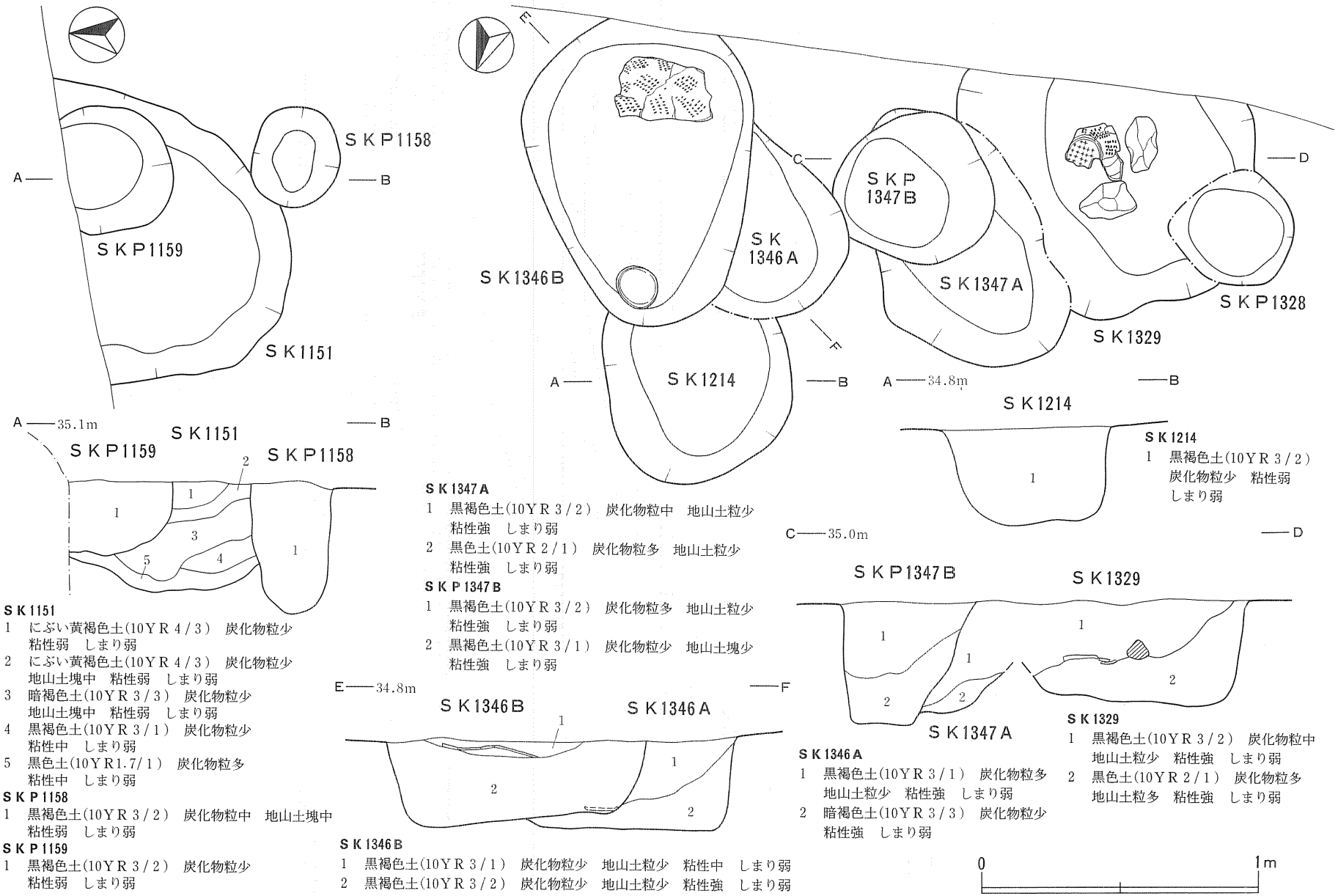
SK1173
1　黒色土(10YR1.7/１)
　炭化物粒中　地山土粒中
　粘性弱　しまり弱
2　黒褐色土(10YR３/１)
　地山土粒少　粘性弱
　しまり弱

SK1136
1　黒褐色土(10YR３/２)　炭化物粒中　地山土塊少　粘性中
　しまり弱
2　黒褐色土(10YR２/２)　炭化物粒中　地山土粒中　粘性強
　しまり弱
3　暗褐色土(10YR３/３)　炭化物粒少　粘性弱　しまり弱
4　オリーブ灰色土(５GY５/１)　地山土塊多　粘性弱　しまり弱
5　黒色土(10YR２/１)　炭化物粒中　地山土塊多　粘性中
　しまり弱

SN1054
1　黒褐色土(10YR３/２)　炭化物粒少　粘性弱　しまり弱
2　灰褐色土(7.5YR４/２)　焼土塊中　炭化物粒中　粘性弱　しまり弱
3　褐色土(7.5YR４/３)　焼土粒多　炭化物粒少　粘性弱　しまり弱
4　灰褐色土(7.5YR４/２)　焼土粒多　炭化物粒中　粘性弱　しまり弱
5　黒褐色土(7.5YR３/１)　焼土粒中　炭化物粒中　粘性弱　しまり弱
6　暗褐色土(10YR３/３)　焼土粒少　粘性弱　しまり弱

0　1m

第24図　検出遺構(８)（SK1111・1136・1150・1173、SN1054）



SK1151
1　にぶい黄褐色土(10YR 4/3)　炭化物粒少　粘性弱　しまり弱
2　にぶい黄褐色土(10YR 4/3)　炭化物粒少　地山土塊中　粘性弱　しまり弱
3　暗褐色土(10YR 3/3)　炭化物粒少　地山土塊中　粘性弱　しまり弱
4　黒褐色土(10YR 3/1)　炭化物粒少　粘性中　しまり弱
5　黒色土(10YR1.7/1)　炭化物粒多　粘性中　しまり弱

SKP1158
1　黒褐色土(10YR 3/2)　炭化物粒中　地山土塊中　粘性弱　しまり弱

SKP1159
1　黒褐色土(10YR 3/2)　炭化物粒少　粘性弱　しまり弱

SK1347A
1　黒褐色土(10YR 3/2)　炭化物粒中　地山土粒少　粘性強　しまり弱
2　黒色土(10YR 2/1)　炭化物粒多　地山土粒少　粘性強　しまり弱

SKP1347B
1　黒褐色土(10YR 3/2)　炭化物粒多　地山土粒少　粘性強　しまり弱
2　黒褐色土(10YR 3/1)　炭化物粒少　地山土塊少　粘性強　しまり弱

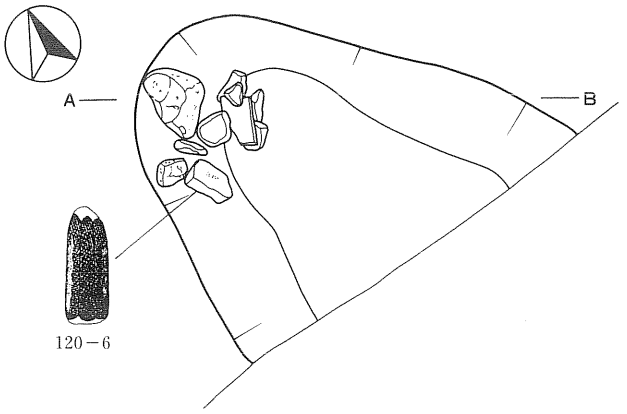
SK1346B
1　黒褐色土(10YR 3/1)　炭化物粒少　地山土粒少　粘性中　しまり弱
2　黒褐色土(10YR 3/2)　炭化物粒少　地山土粒少　粘性強　しまり弱

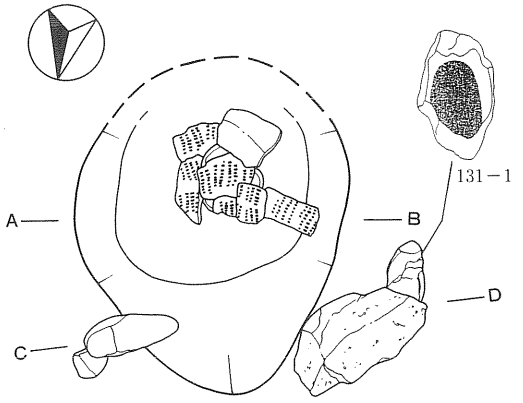
SK1214
1　黒褐色土(10YR 3/2)　炭化物粒少　粘性弱　しまり弱

SK1346A
1　黒褐色土(10YR 3/1)　炭化物粒多　地山土粒少　粘性強　しまり弱
2　暗褐色土(10YR 3/3)　炭化物粒少　粘性強　しまり弱

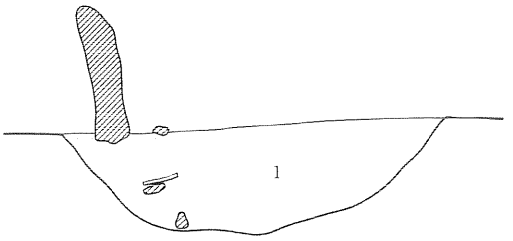
SK1329
1　黒褐色土(10YR 3/2)　炭化物粒中　地山土粒少　粘性強　しまり弱
2　黒色土(10YR 2/1)　炭化物粒多　地山土粒多　粘性強　しまり弱

第25図　検出遺構(9)(SK1151・1214・1329・1346A・1346B・1347A・1347B、SKP1158・1159・1328)



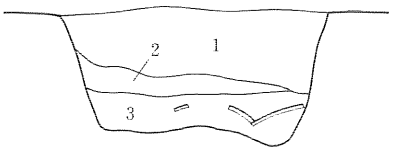


A ── 35.4m　ＳＫ1225　── B

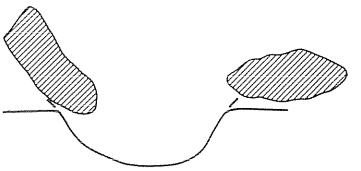


ＳＫ1225
1　暗褐色土(10ＹＲ３/３)　炭化物粒少　地山土塊中
　　粘性中　しまり弱

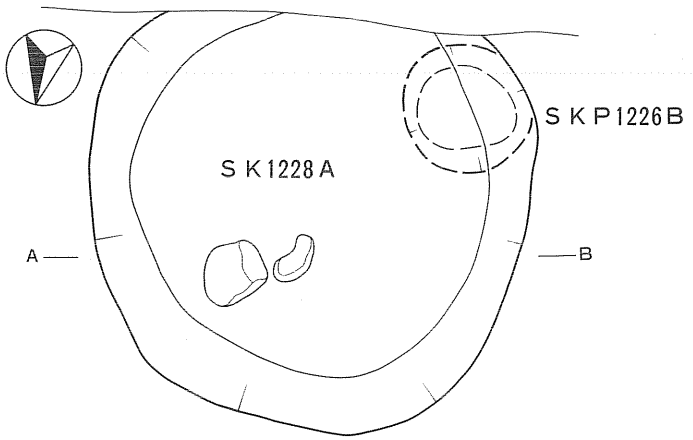
A ── 35.1m　ＳＫ1226Ａ　── B



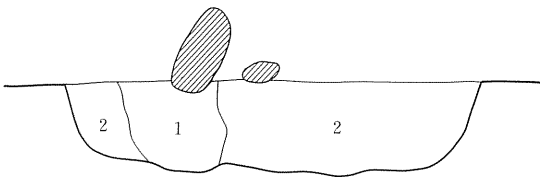
C ── 35.4m　── D



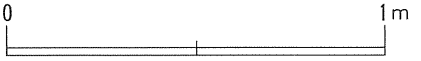
ＳＫ1226Ａ
1　黒褐色土(10ＹＲ３/１)　炭化物粒中　粘性中　しまり弱
2　黒褐色土(10ＹＲ３/２)　炭化物粒多　粘性中　しまり弱
3　にぶい黄褐色土(10ＹＲ５/４)　炭化物粒少　地山土塊多
　　粘性中　しまり弱



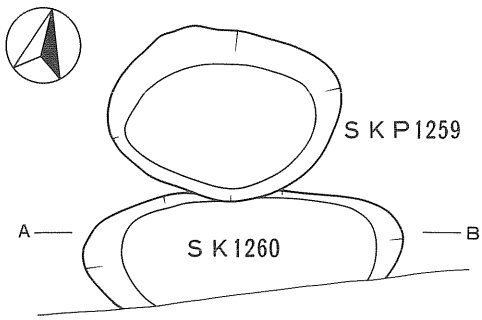
A ── 35.3m　ＳＫ1228Ａ　── B

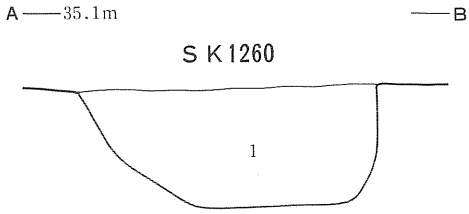


ＳＫ1228Ａ
1　黒褐色土(10ＹＲ３/２)　炭化物粒少　粘性中　しまり弱
2　黒褐色土(10ＹＲ３/１)　炭化物粒少　粘性強　しまり弱

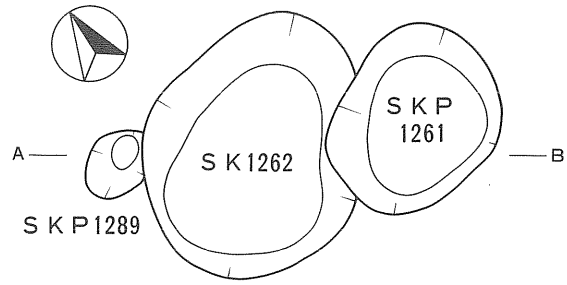


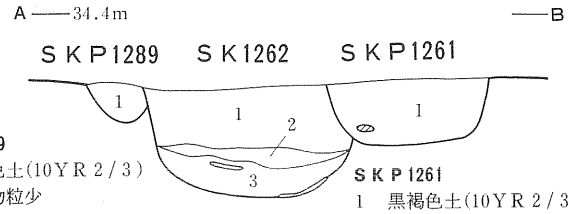
第26図　検出遺構(10)（SK1225・1226A・1228A、SKP1226B）





ＳＫ1260
1　黒褐色土(10ＹＲ３/２)　炭化物粒中　粘性弱　しまり弱

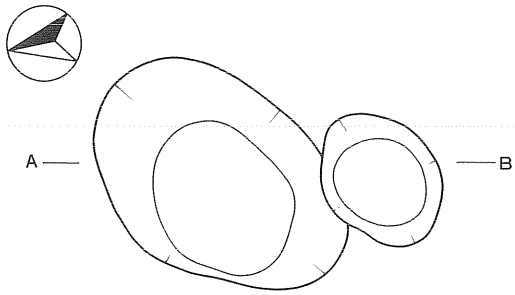


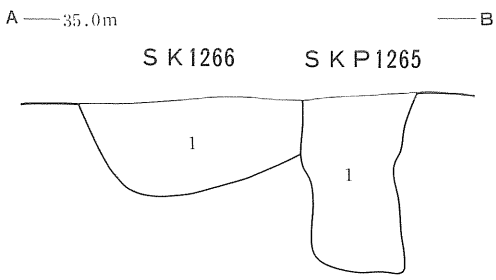


ＳＫＰ1289
1　黒褐色土(10ＹＲ２/３)
炭化物粒少
地山土粒少　粘性中
しまり弱

ＳＫＰ1261
1　黒褐色土(10ＹＲ２/３)
炭化物粒少　粘性弱
しまり弱

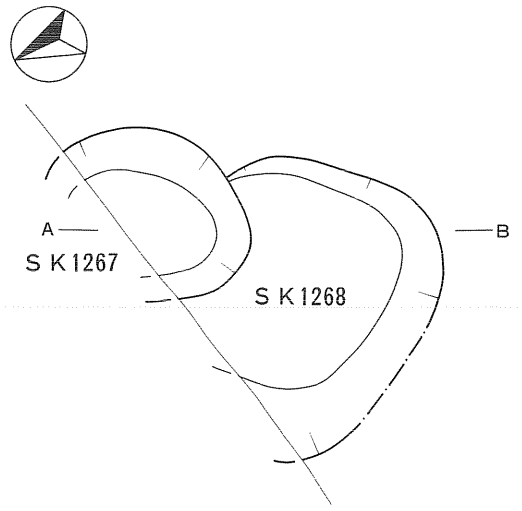
ＳＫ1262
1　黒褐色土(10ＹＲ２/３)　炭化物粒中
粘性中　しまり弱
2　黒褐色土(10ＹＲ２/３)　炭化物粒少
地山土粒中　粘性強　しまり弱
3　黒褐色土(10ＹＲ２/３)　炭化物粒少
粘性弱　しまり弱

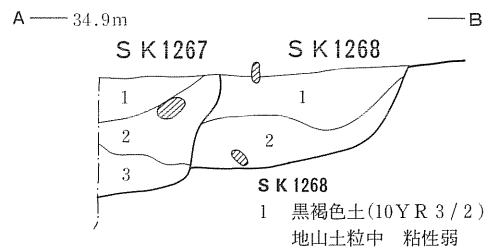




ＳＫ1266
1　黒褐色土(10ＹＲ２/３)
地山土粒中　粘性弱
しまり弱

ＳＫＰ1265
1　黒褐色土(10ＹＲ２/３)
炭化物粒少　粘性中
しまり弱



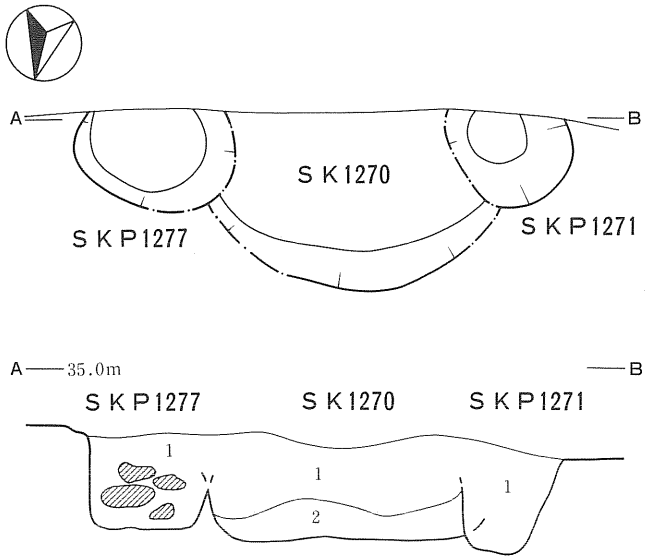


ＳＫ1268
1　黒褐色土(10ＹＲ３/２)
地山土粒中　粘性弱
しまり中
2　黒褐色土(10ＹＲ２/２)
地山土塊中　粘性中
しまり弱

ＳＫ1267
1　黒褐色土(10ＹＲ２/３)　炭化物粒少
地山土粒少　粘性弱　しまり弱
2　黒褐色土(10ＹＲ２/２)　炭化物粒中
粘性中　しまり中
3　灰オリーブ色土(7.5Ｙ４/２)
炭化物粒少　粘性弱　しまり弱

0　1m

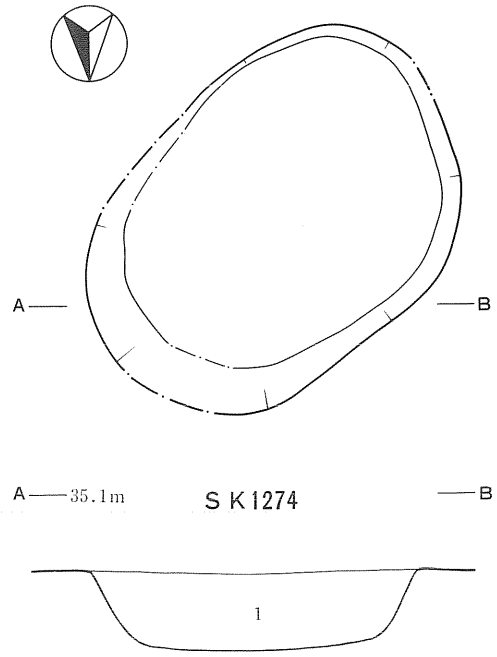
第27図　検出遺構(11)（SK1260・1262・1266・1268、SKP1259・1261・1265・1267・1289）



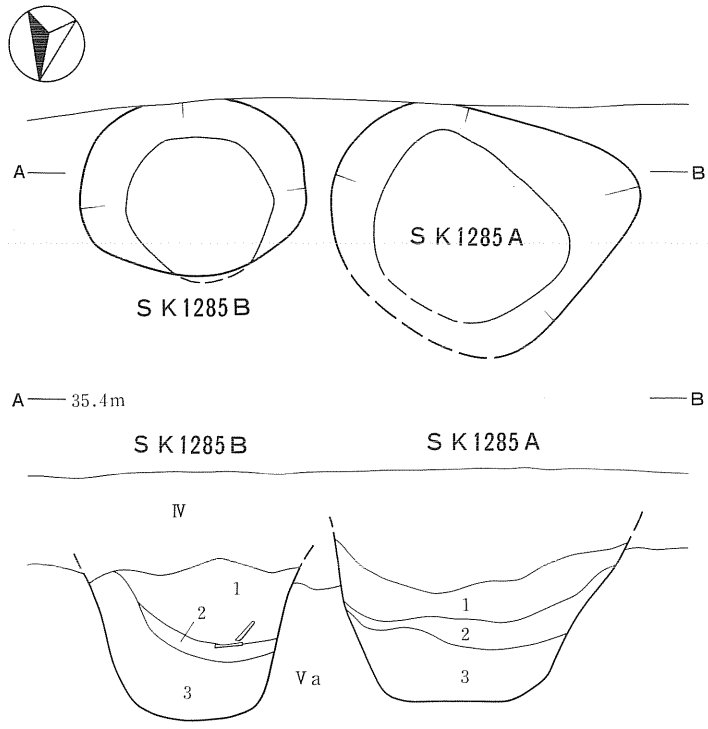
SKP1277
1　黒色土(10YR 2/1)　地山土粒少　粘性弱　しまり弱

SK1270
1　黒褐色土(10YR 2/3)　炭化物粒少　地山土粒少　粘性弱　しまり弱
2　黒褐色土(10YR 2/2)　地山土粒多　粘性弱　しまり弱

SKP1271
1　黒褐色土(10YR 2/2)　地山土粒多　粘性弱　しまり弱

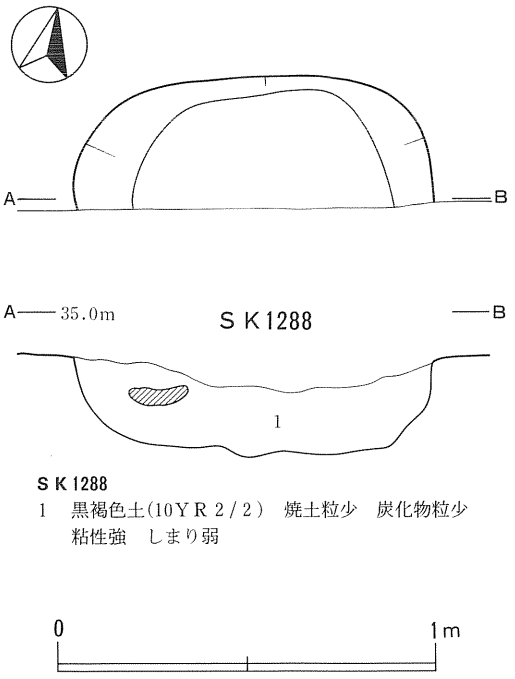


SK1274
1　暗褐色土(10YR 3/3)　炭化物粒中　地山土塊多　粘性中　しまり弱



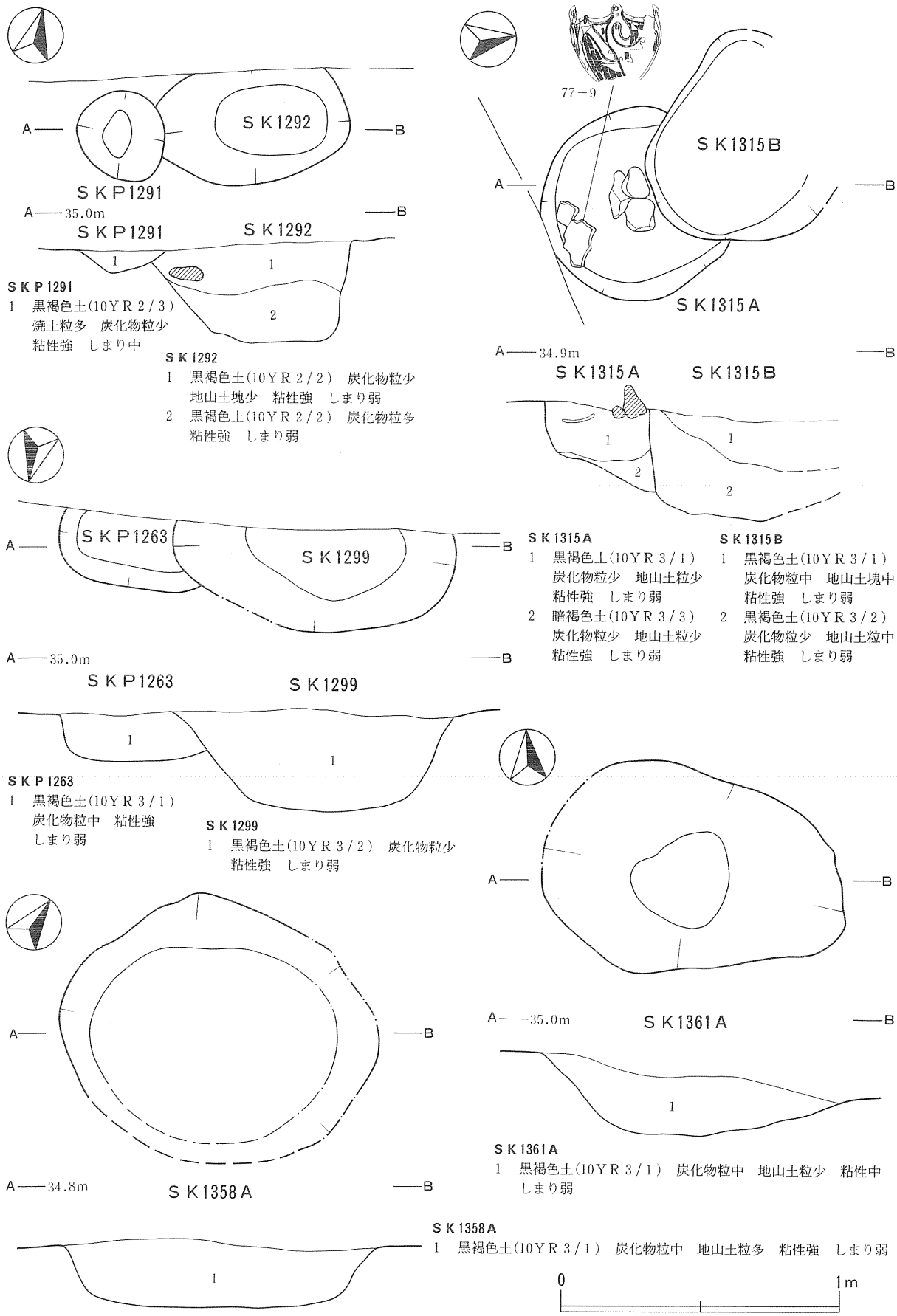
SK1285B
1　黒褐色土(10YR 2/3)　炭化物粒多　地山土塊少　粘性弱　しまり弱
2　黒褐色土(10YR 2/2)　炭化物粒多　粘性強　しまり弱
3　黒褐色土(10YR 2/2)　炭化物粒中　地山土粒少　粘性強　しまり弱

SK1285A
1　暗褐色土(10YR 3/3)　炭化物粒多　地山土粒少　粘性中　しまり中
2　黒褐色土(10YR 2/2)　炭化物粒中　地山土粒少　粘性強　しまり弱
3　黒褐色土(10YR 2/2)　地山土粒少　粘性強　しまり弱

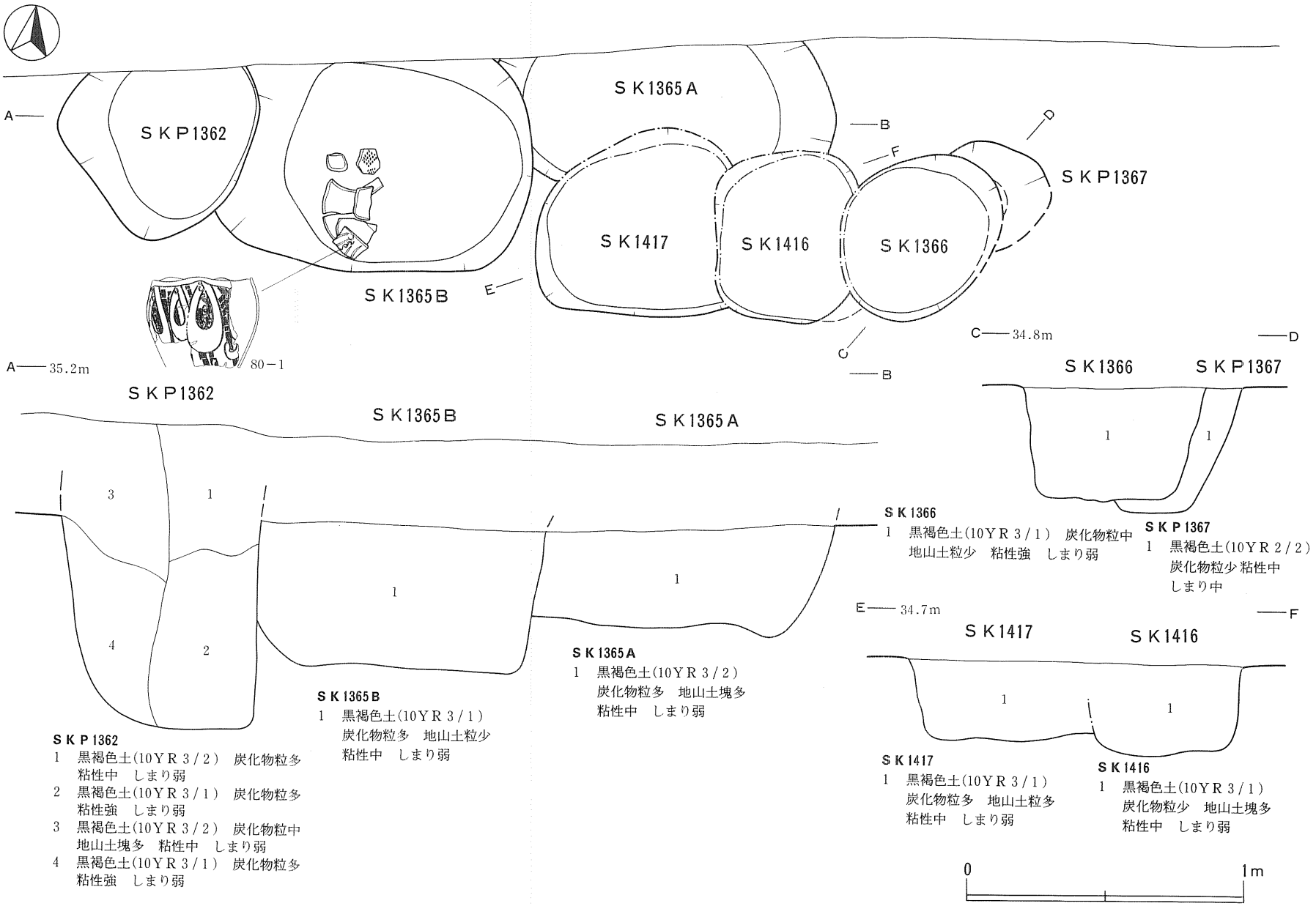


SK1288
1　黒褐色土(10YR 2/2)　焼土粒少　炭化物粒少　粘性強　しまり弱

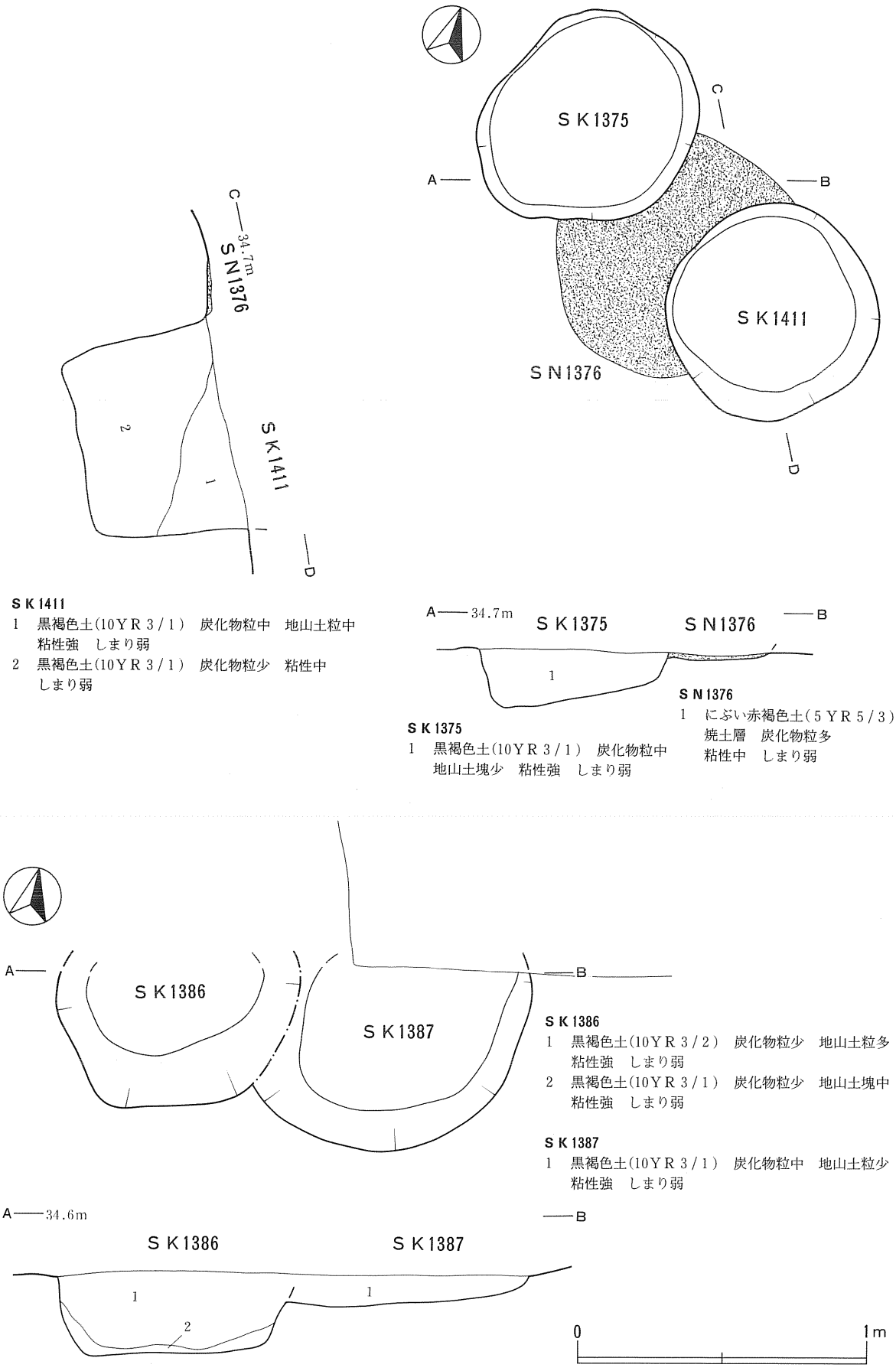
第28図　検出遺構(12)（SK1270・1274・1285A・1285B・1288、SKP1271・1277）



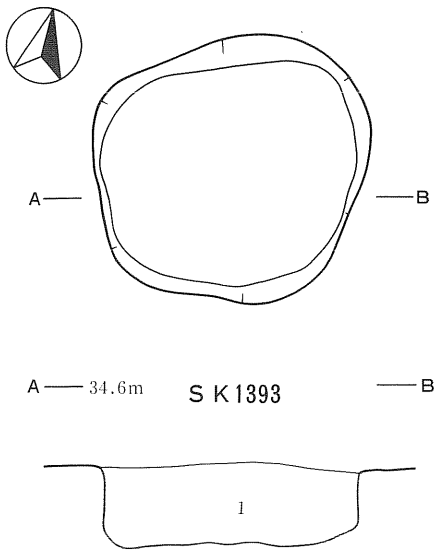
第29図　検出遺構(13)（SK1292・1299・1315A・1315B・1358A・1361A、SKP1263・1291）



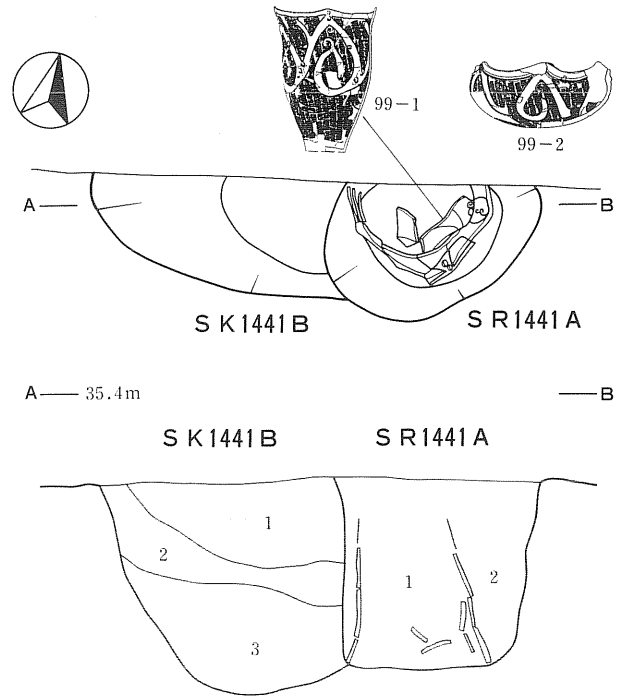
第30図　検出遺構(14)（SK1365A・1365B・1366・1416・1417、SKP1362・1367）



第31図　検出遺構(15)（SK1375・1386・1387・1411、SN1376）

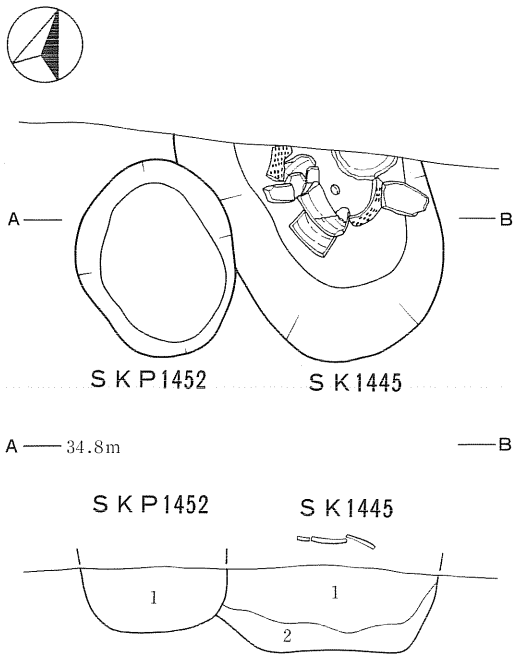


SK1393
1　黒褐色土(10YR３/１)　炭化物粒中　地山土粒中
粘性強　しまり弱



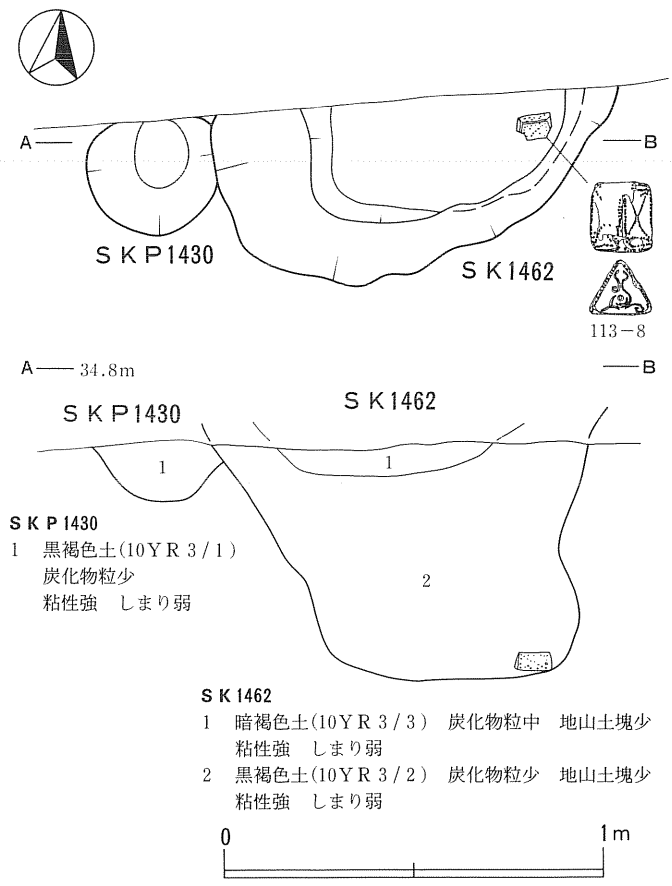
SK1441B
1　黒褐色土(10YR３/２)　炭化物粒少
粘性強　しまり中
2　黒褐色土(10YR３/２)　炭化物粒多
地山土粒多　粘性強　しまり弱
3　黒褐色土(10YR３/１)　炭化物粒少
地山土粒多　粘性強　しまり弱

SR1441A
1　黒褐色土(10YR３/２)　炭化物粒中
粘性強　しまり中
2　黒褐色土(10YR３/２)　炭化物粒少
粘性強　しまり中



SKP1452
1　黒褐色土(10YR３/１)
炭化物粒少　粘性強
しまり弱

SK1445
1　黒褐色土(10YR３/１)
炭化物粒少　地山土塊中
粘性強　しまり弱
2　黒褐色土(10YR３/２)
炭化物粒少　粘性強
しまり弱

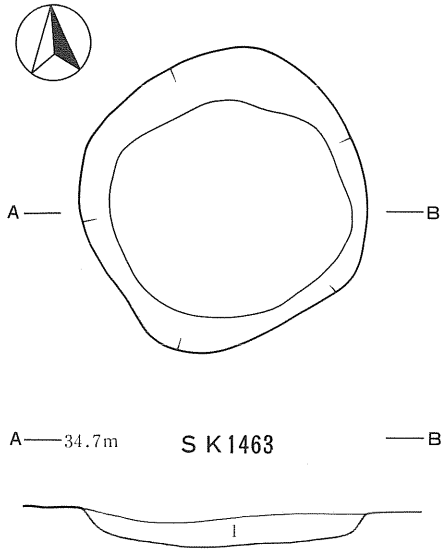


SKP1430
1　黒褐色土(10YR３/１)
炭化物粒少
粘性強　しまり弱

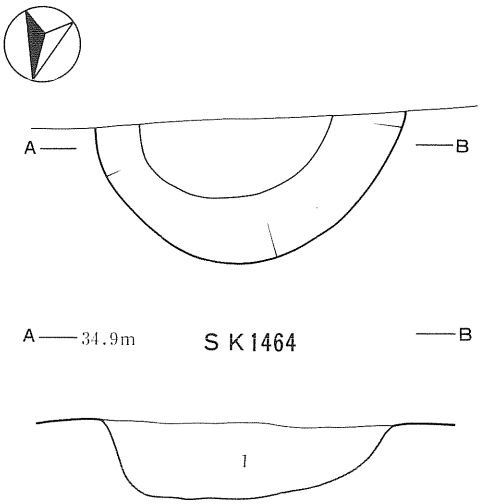
SK1462
1　暗褐色土(10YR３/３)　炭化物粒中　地山土塊少
粘性強　しまり弱
2　黒褐色土(10YR３/２)　炭化物粒少　地山土塊少
粘性強　しまり弱

0　1m

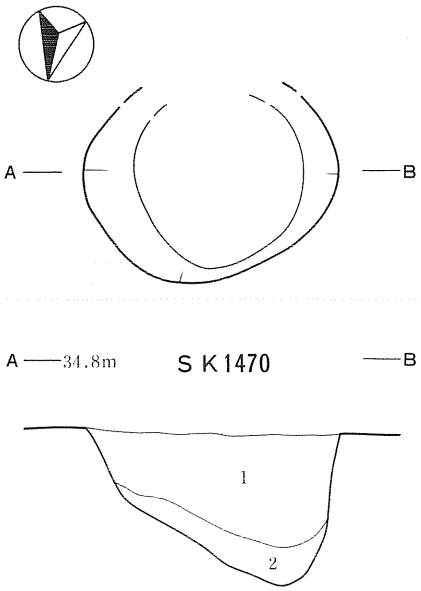
第32図　検出遺構(16)（SK1393・1441B・1445・1462、SR1441A、SKP1430・1452）



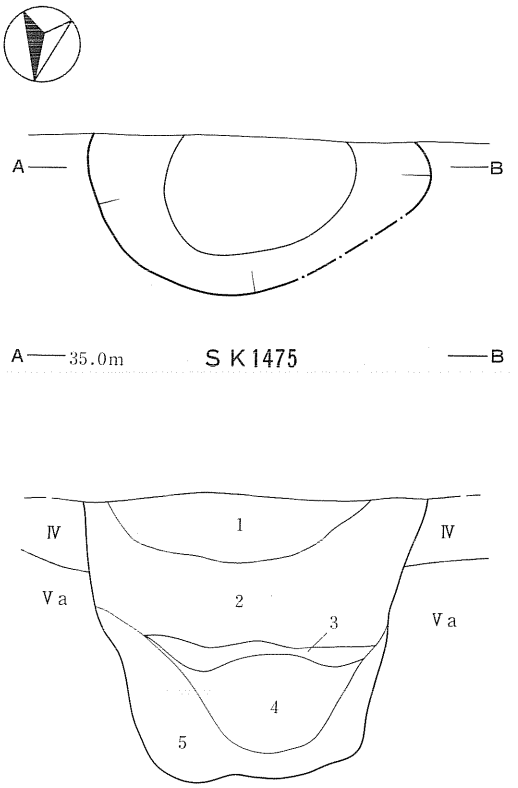
SK1463
1　黒褐色土(10YR３/１)　炭化物粒多　地山土粒少
　粘性中　しまり弱



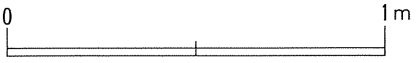
SK1464
1　黒褐色土(10YR３/２)　炭化物粒少　粘性強　しまり弱



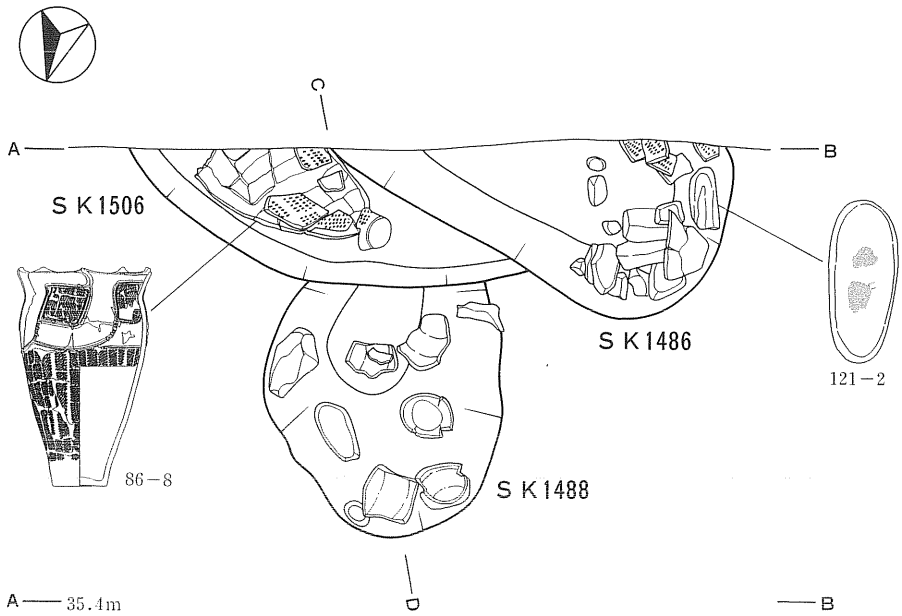
SK1470
1　黒褐色土(10YR３/２)　炭化物粒少　粘性強　しまり弱
2　暗褐色土(10YR３/３)　炭化物粒少　粘性強　しまり弱

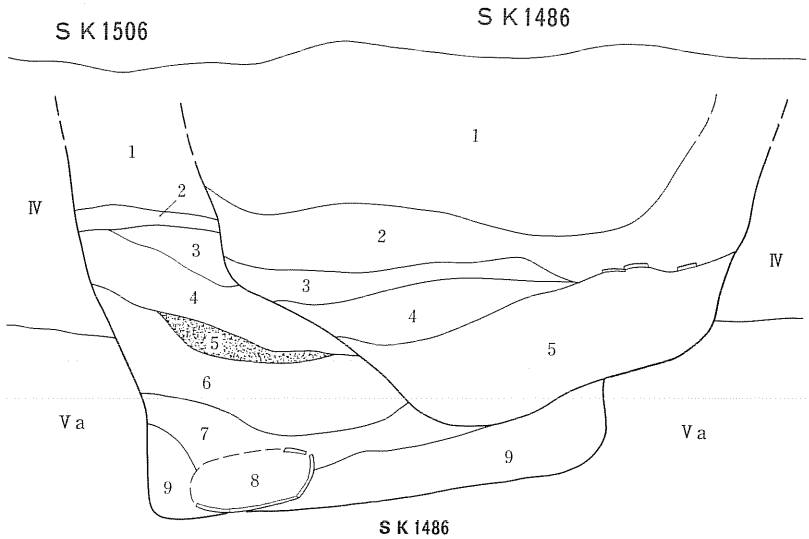


SK1475
1　黒褐色土(10YR３/１)　炭化物粒少　粘性強　しまり弱
2　黒褐色土(10YR３/１)　炭化物粒少　地山土塊少　粘性強　しまり弱
3　黒色土(10YR２/１)　地山土塊多　粘性強　しまり弱
4　黒色土(10YR２/１)　炭化物粒少　地山土塊少　粘性強　しまり弱
5　黒色土(10YR２/１)　炭化物粒少　地山土塊少　粘性強　しまり弱



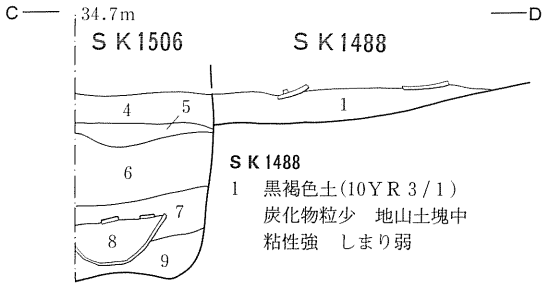
第33図　検出遺構(17)（SK1463・1464・1470・1475）





SK1486

1　黒褐色土(10YR３/１)　炭化物粒中　地山土塊中　粘性強　しまり中
2　黒褐色土(10YR３/１)　炭化物粒多　粘性強　しまり弱
3　黒褐色土(10YR３/１)　炭化物粒多　地山土粒多　粘性強　しまり弱
4　黒褐色土(10YR３/２)　炭化物粒少　地山土粒多　粘性中　しまり弱
5　黒褐色土(10YR３/１)　炭化物粒少　粘性強　しまり弱

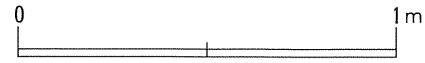


SK1488

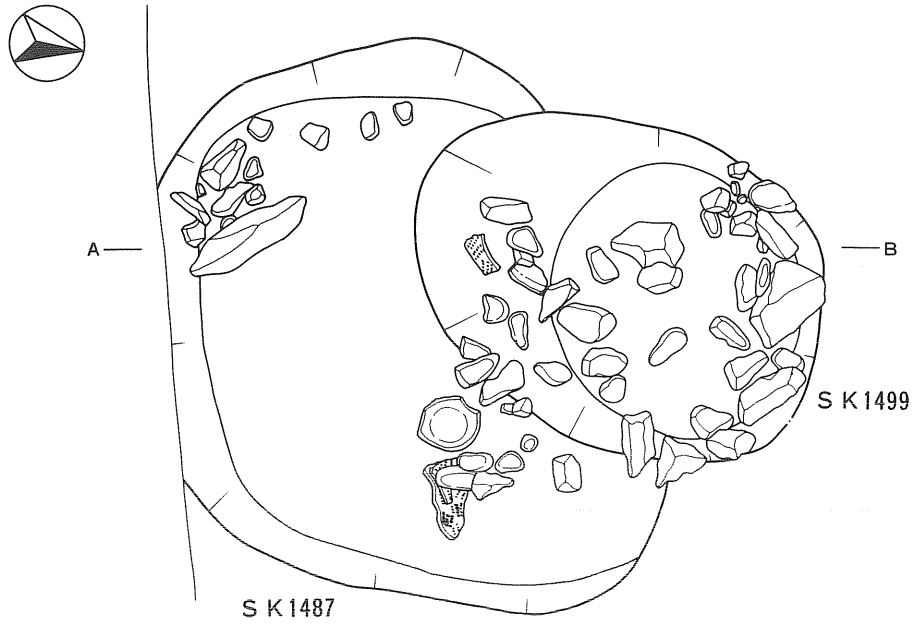
1　黒褐色土(10YR３/１)　炭化物粒少　地山土塊中　粘性強　しまり弱

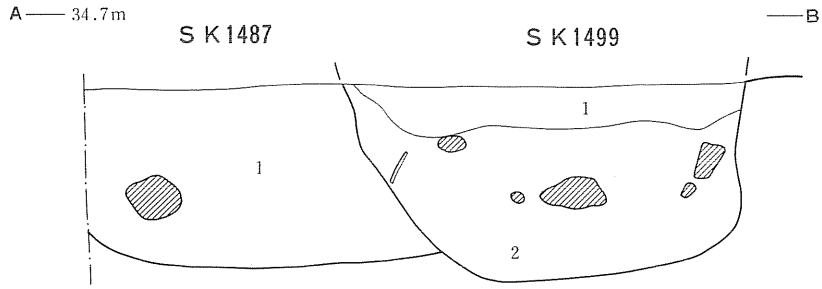
SK1506

1　黒色土(10YR２/１)　粘性弱　しまり中
2　黒褐色土(10YR３/１)　炭化物粒中　地山土塊多　粘性強　しまり弱
3　黒色土(10YR２/１)　粘性弱　しまり中
4　黒褐色土(10YR３/１)　炭化物粒多　地山土粒中　粘性中　しまり弱
5　暗オリーブ灰色土(５GY４/１)　焼土粒少　炭化物粒少　地山土粒多　粘性強　しまり弱
6　黒褐色土(10YR３/１)　炭化物粒多　粘性強　しまり弱
7　黒褐色土(10YR３/２)　炭化物粒多　地山土塊多　粘性強　しまり弱
8　黒褐色土(10YR３/２)　炭化物粒少　粘性強　しまり弱
9　黒褐色土(10YR３/１)　炭化物粒多　地山土塊多　粘性強　しまり弱



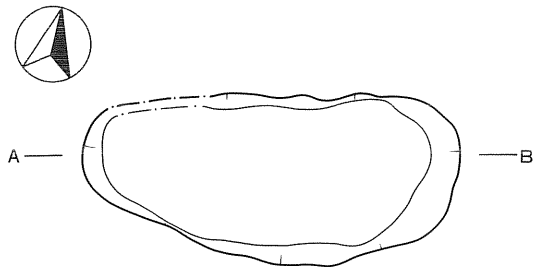
第34図　検出遺構(18)（SK1486・1488・1506）

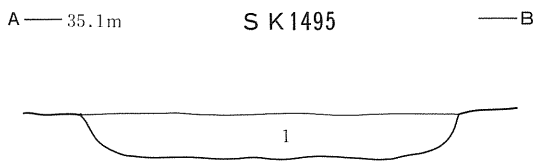




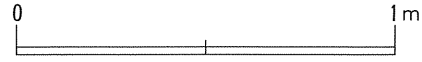
ＳＫ1487
1　黒褐色土(10ＹＲ３/２)　炭化物粒少
　地山土粒多　粘性強　しまり弱

ＳＫ1499
1　黒色土(10ＹＲ２/１)　炭化物粒多　地山土塊中
　粘性強　しまり弱
2　黒色土(10ＹＲ２/１)　炭化物粒多　地山土塊中
　粘性強　しまり弱

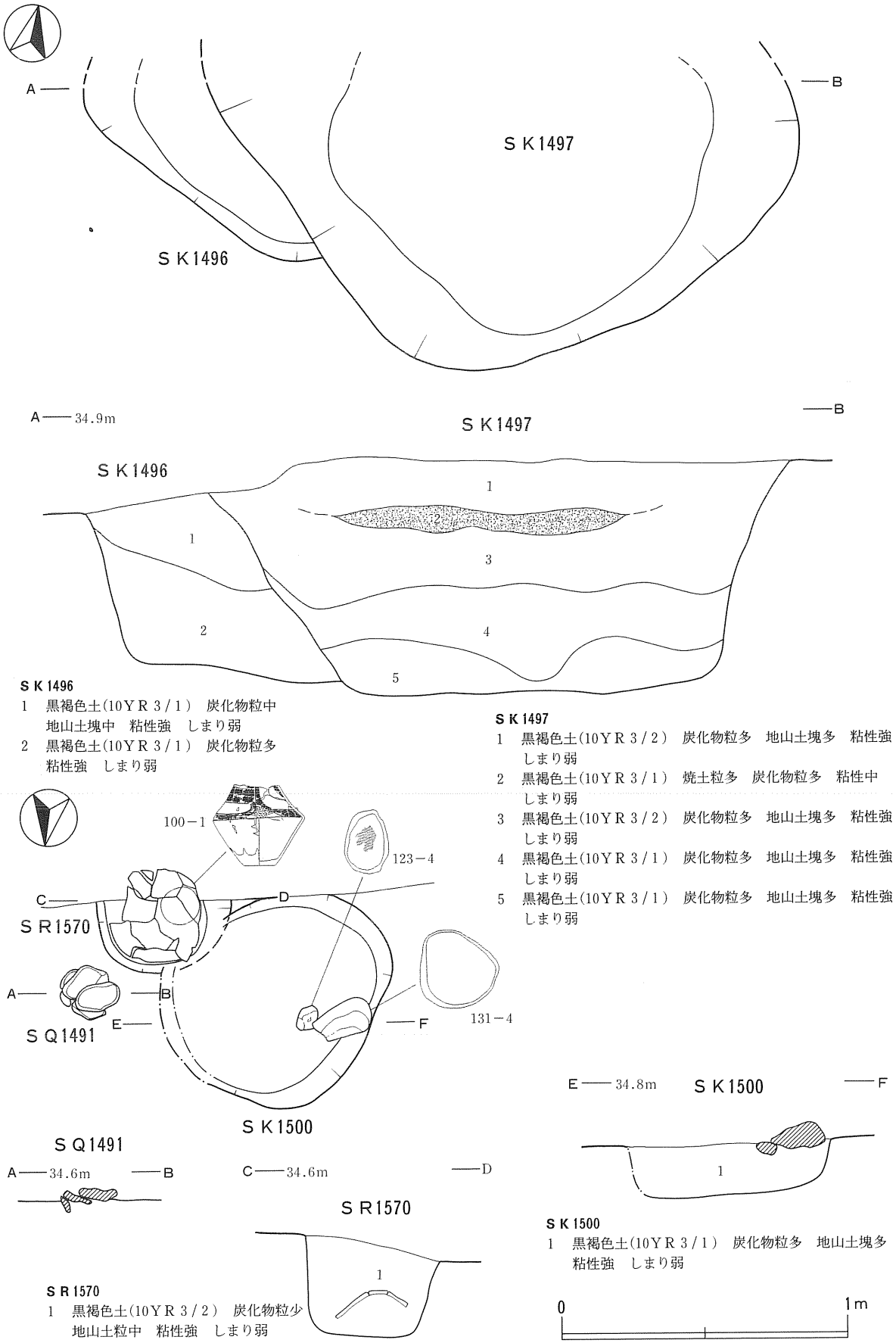




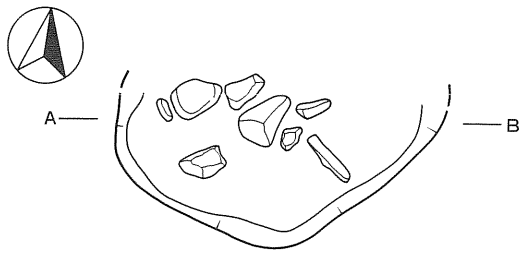
ＳＫ1495
1　黒褐色土(10ＹＲ３/２)　炭化物粒中　地山土塊多
　粘性中　しまり弱

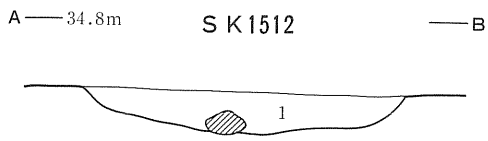


第35図　検出遺構(19)（SK1487・1495・1499）



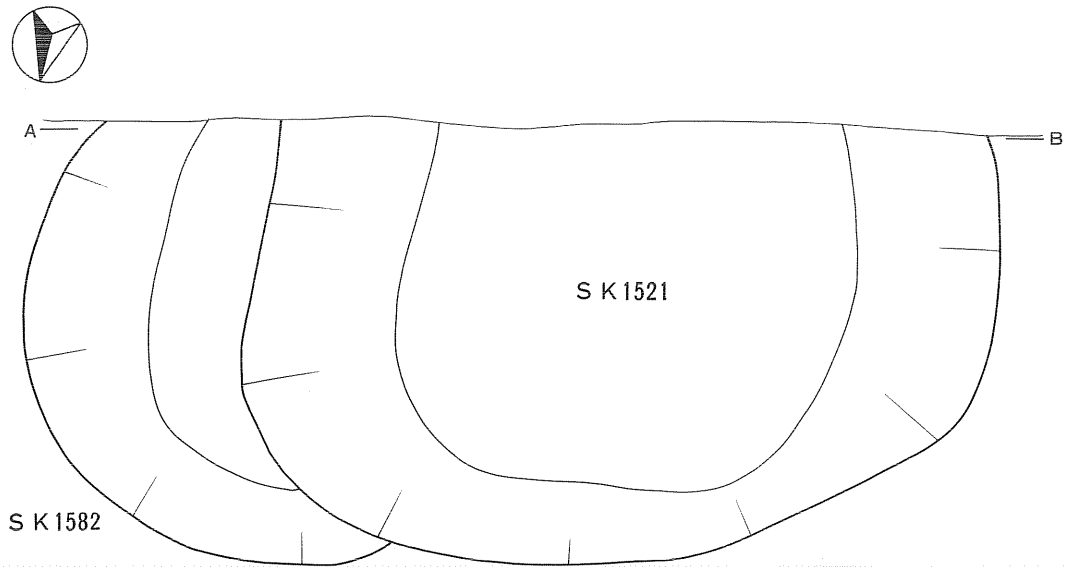
第36図　検出遺構(20)（SK1496・1497・1500、SR1570、SQ1491）

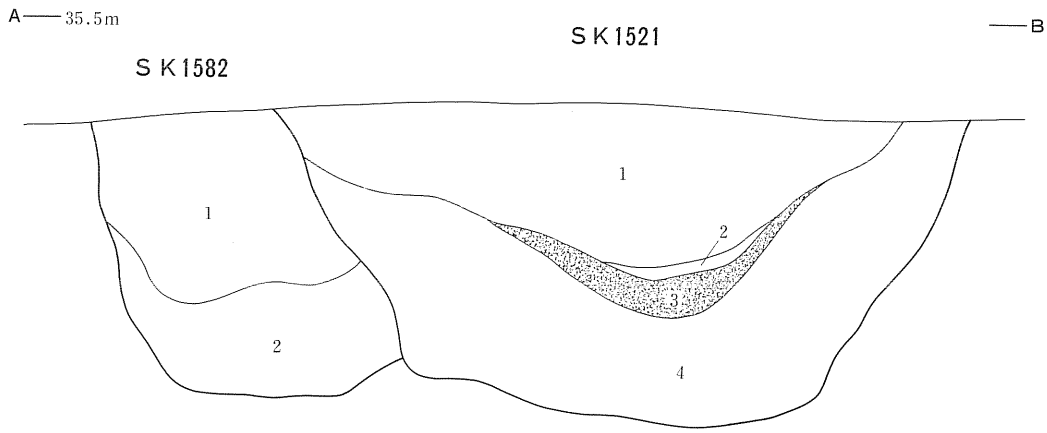




SK1512

1　黒褐色土(10YR３/１)　炭化物粒少　地山土塊中　粘性強　しまり弱





SK1582

1　黒褐色土(10YR３/１)　炭化物粒少　粘性強　しまり弱

2　黒褐色土(10YR３/２)　炭化物粒少　地山土粒少　粘性強　しまり弱

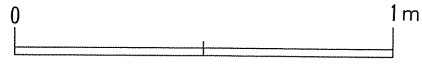
SK1521

1　暗褐色土(10YR３/３)　炭化物粒少　粘性強　しまり弱

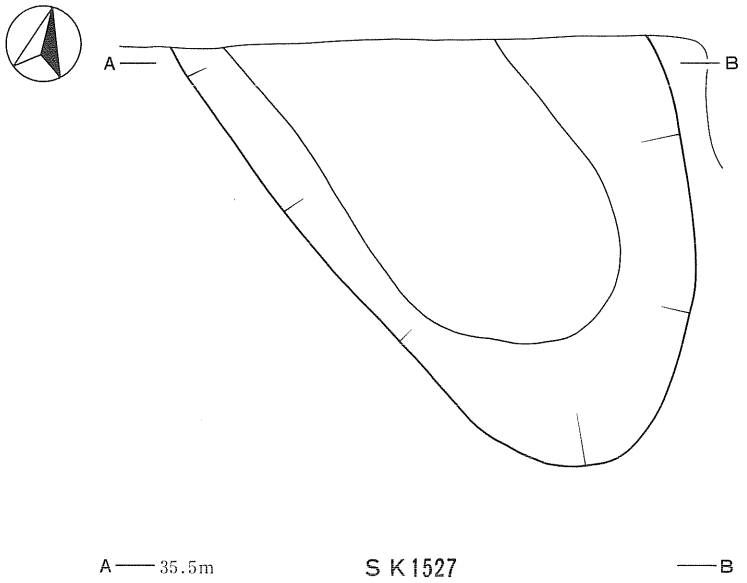
2　黒色土(10YR２/１)　炭化物粒多　粘性強　しまり弱

3　にぶい黄褐色土(10YR４/３)　焼土粒中　炭化物粒少　粘性中　しまり弱

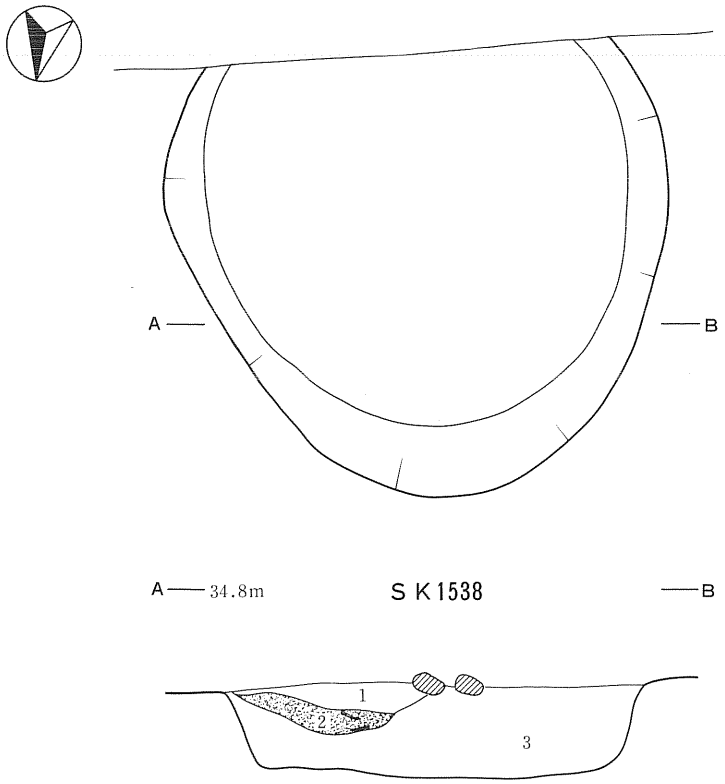
4　黒褐色土(10YR３/１)　炭化物粒少　地山土塊少　粘性強　しまり弱



第37図　検出遺構(21)（SK1512・1521・1582）



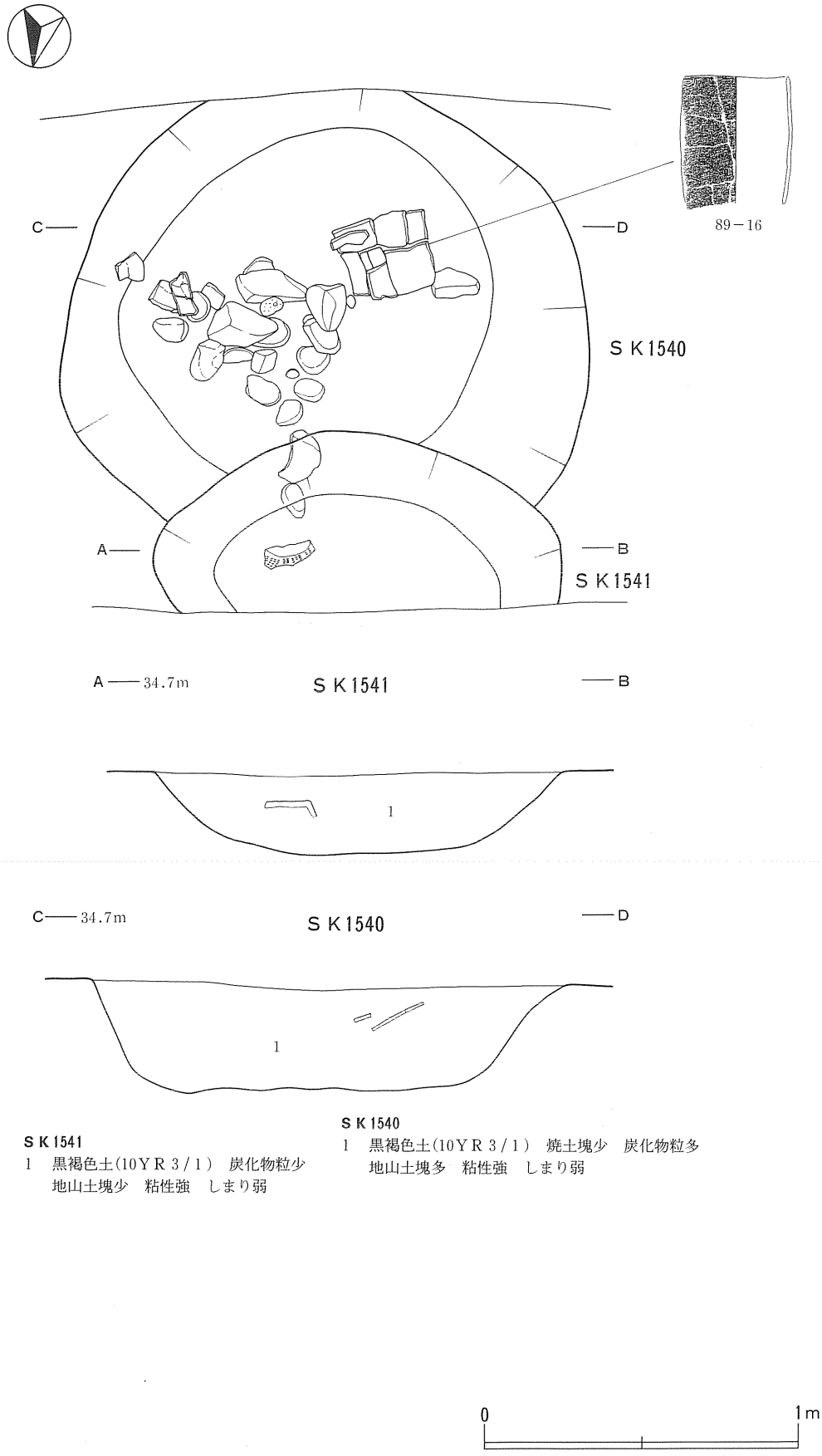
SK1527
1　黒褐色土(10YR３/２)　炭化物粒中　粘性強　しまり弱
2　にぶい黄褐色土(10YR４/３)　焼土層　炭化物粒少
　地山土塊多　粘性強　しまり弱
3　黒褐色土(10YR３/１)　炭化物粒中　地山土粒少　粘性強
　しまり弱



SK1538
1　黒褐色土(10YR３/１)　炭化物粒中　地山土塊多
　粘性強　しまり弱
2　にぶい黄褐色土(10YR４/３)　焼土層　炭化物粒少
　粘性強　しまり弱
3　黒褐色土(10YR３/１)　炭化物粒中　地山土塊多
　粘性強　しまり弱

0　1m

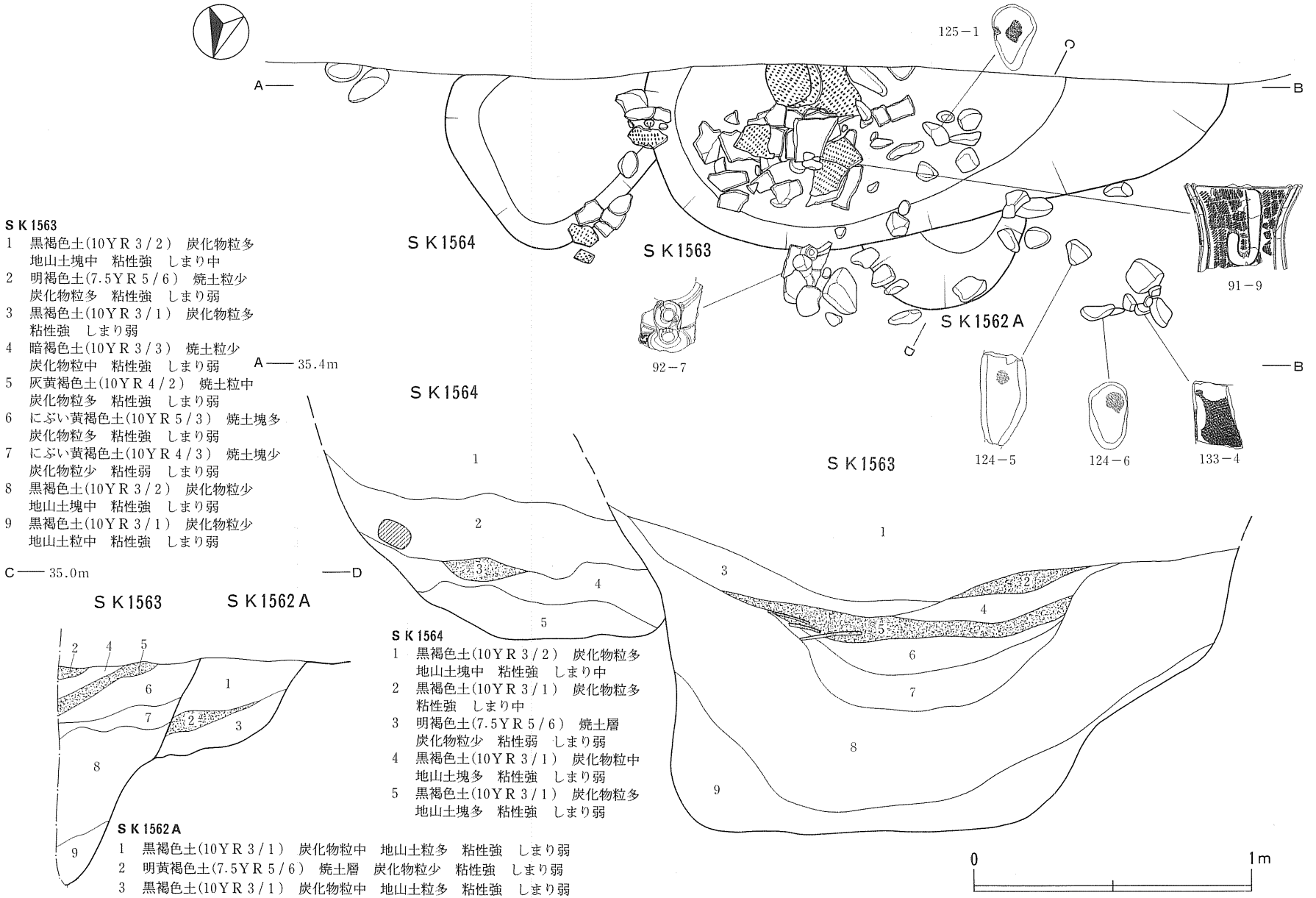
第38図　検出遺構(22)（SK1527・1538）



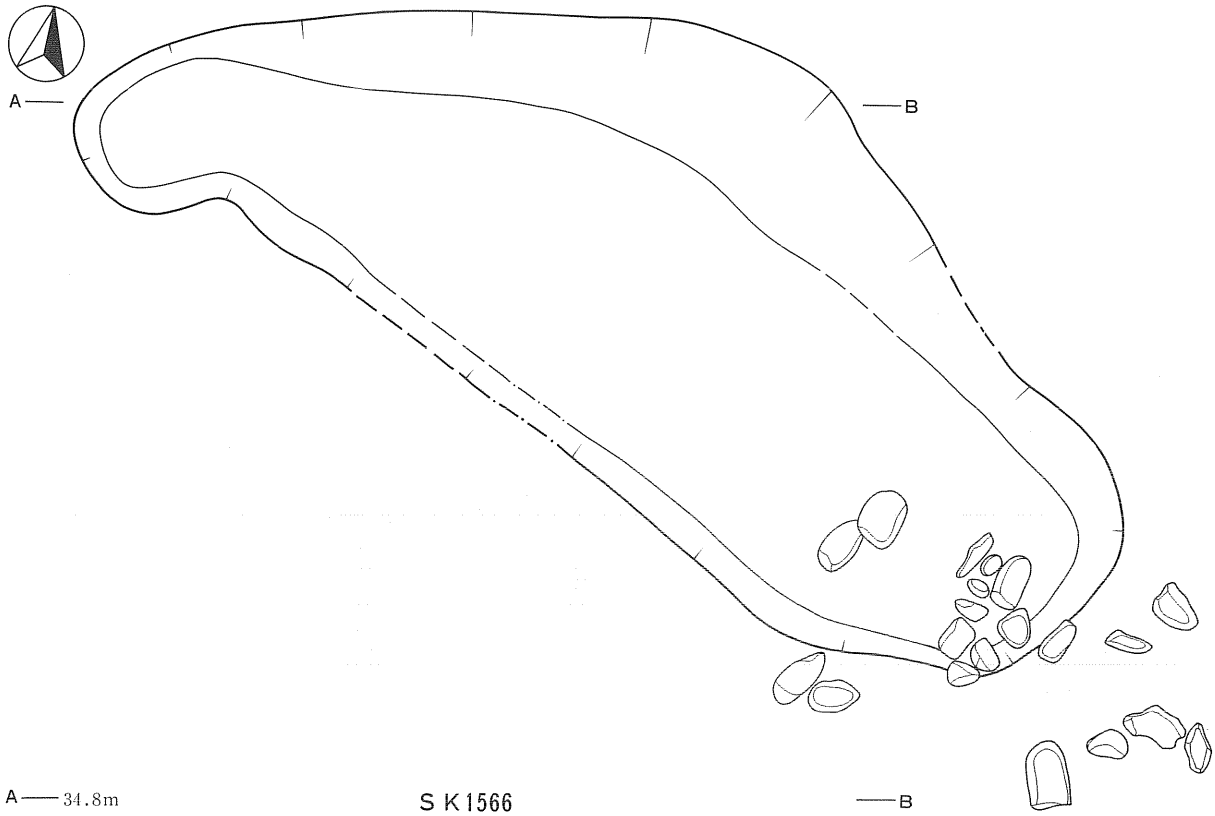
S K 1541
1　黒褐色土(10Y R 3 / 1)　炭化物粒少
　地山土塊少　粘性強　しまり弱

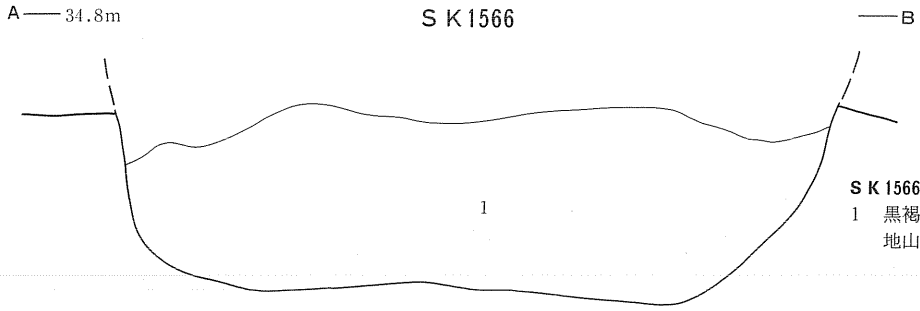
S K 1540
1　黒褐色土(10Y R 3 / 1)　焼土塊少　炭化物粒多
　地山土塊多　粘性強　しまり弱

第39図　検出遺構(23)（SK1540・1541）

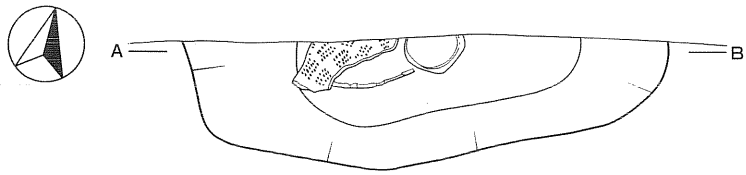


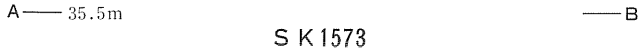
第40図　検出遺構(24)（SK1562A・1563・1564）



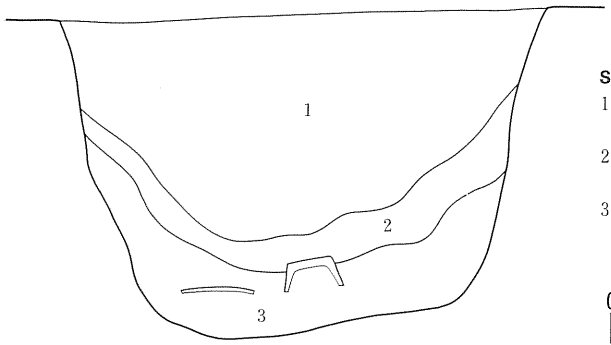


SK1566
1　黒褐色土(10YR３/１)　炭化物粒少
　地山土粒中　粘性強　しまり弱

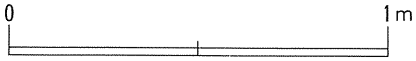




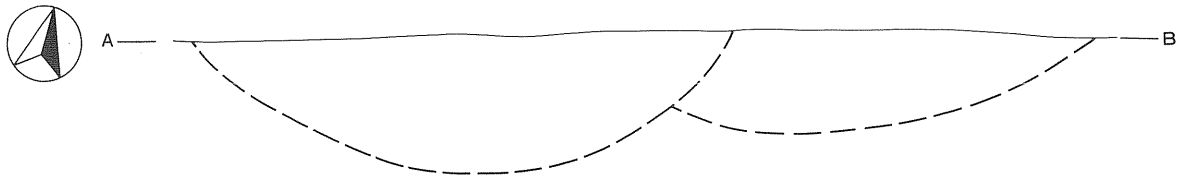
SK1573

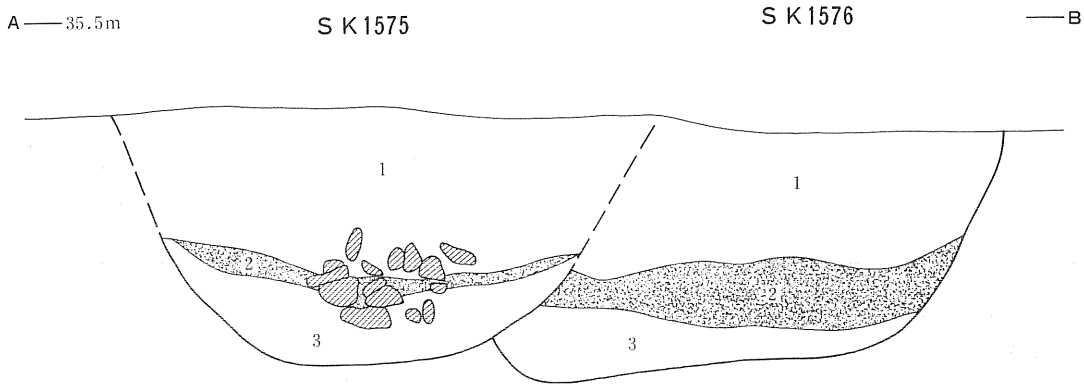


SK1573
1　黒褐色土(10YR３/１)　炭化物粒少　粘性強
　しまり弱
2　黒褐色土(10YR３/１)　炭化物粒少　地山土塊少
　粘性強　しまり弱
3　暗褐色土(10YR３/３)　炭化物粒中　地山土粒中
　粘性強　しまり弱



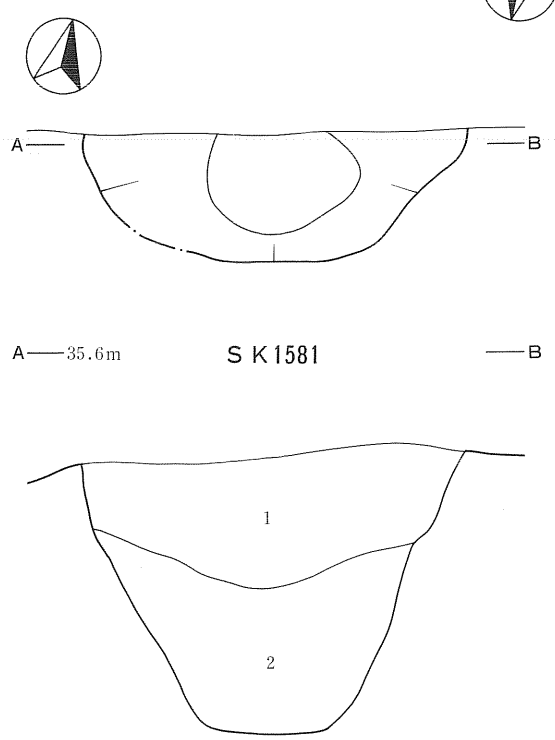
第41図　検出遺構(25)（SK1566・1573）



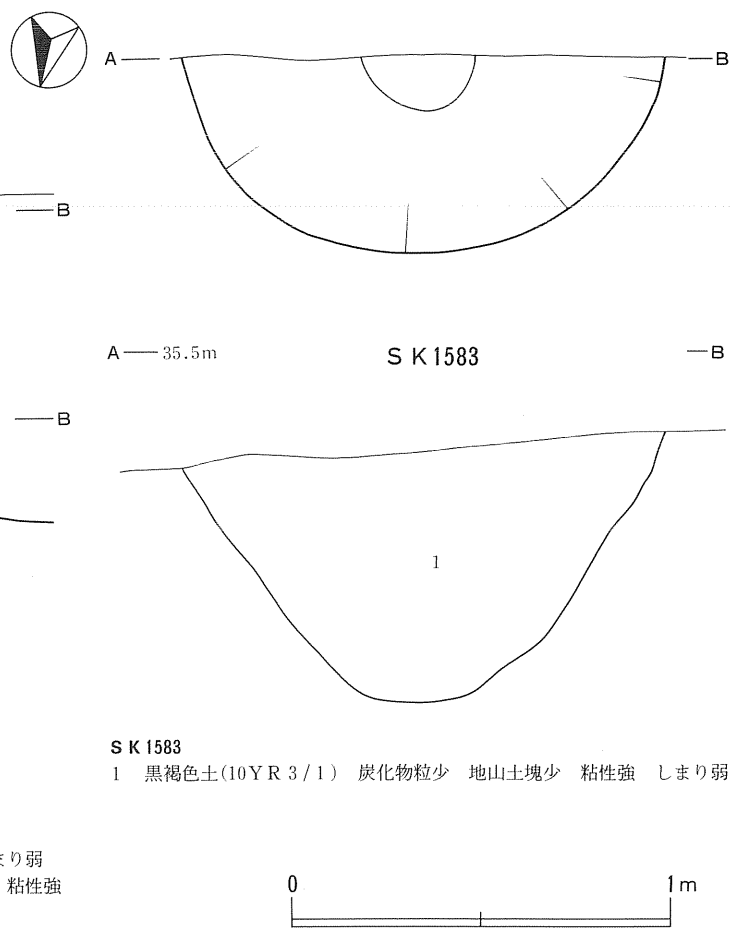


S K 1575
1　暗褐色土(10ＹＲ３/３)　炭化物粒少　粘性強　しまり弱
2　にぶい黄褐色土(10ＹＲ５/３)　焼土塊多　炭化物粒中　地山土塊多　粘性強　しまり弱
3　黒褐色土(10ＹＲ３/１)　炭化物粒中　地山土塊中　粘性強　しまり弱

S K 1576
1　黒褐色土(10ＹＲ３/１)　炭化物粒少　粘性強　しまり弱
2　褐色土(7.5ＹＲ４/３)　焼土塊多　炭化物粒中　粘性中　しまり弱
3　黒褐色土(10ＹＲ２/２)　炭化物粒中　地山土粒中　粘性強　しまり弱

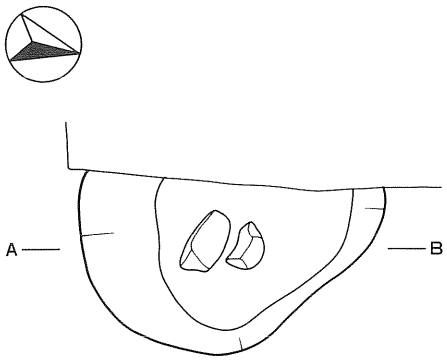


S K 1581
1　黒褐色土(10ＹＲ３/２)　炭化物粒少　粘性強　しまり弱
2　暗褐色土(10ＹＲ３/３)　炭化物粒少　地山土粒少　粘性強　しまり弱

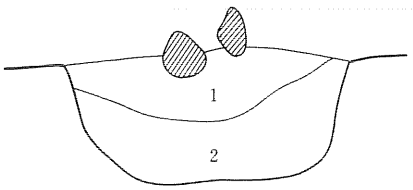


S K 1583
1　黒褐色土(10ＹＲ３/１)　炭化物粒少　地山土塊少　粘性強　しまり弱

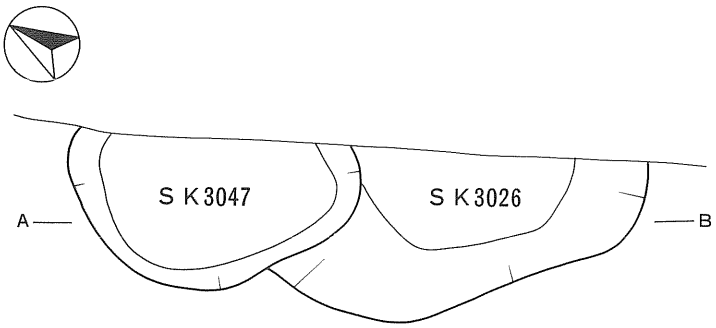
第42図　検出遺構(26)（SK1575・1576・1581・1583）



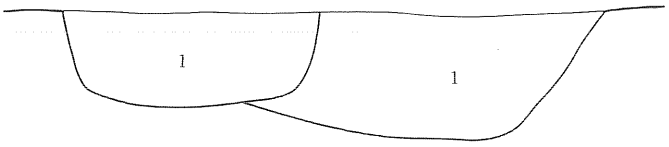
A —— 36.0m　S K 3019　—— B



S K 3019
1　暗褐色土(10Y R 3 / 3)　炭化物粒少　地山土塊多
　粘性強　しまり弱
2　黒褐色土(10Y R 3 / 2)　炭化物粒中　地山土粒中
　粘性強　しまり弱

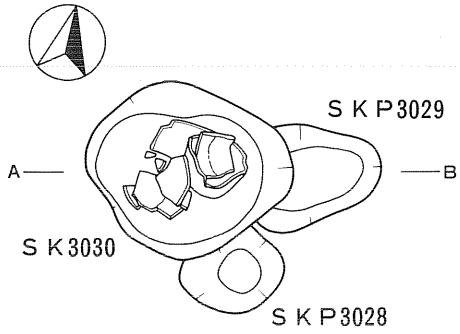


A —— 35.0m　—— B
S K 3047　S K 3026

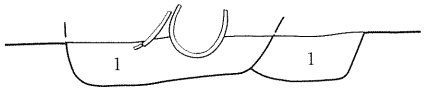


S K 3026
1　黒褐色土(10Y R 3 / 1)　炭化物粒中　地山土粒少　粘性強　しまり弱

S K 3047
1　黒褐色土(10Y R 3 / 1)　炭化物粒少　地山土塊少　粘性強　しまり弱

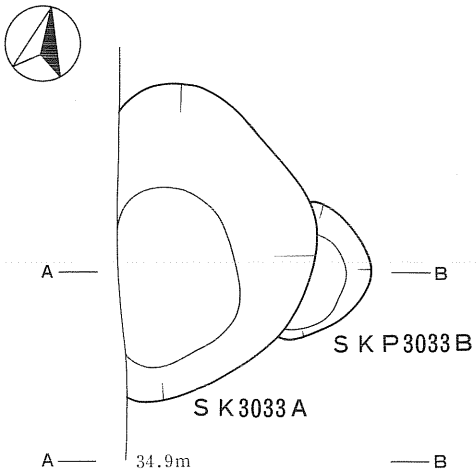


A —— 34.7m　—— B
S K 3030　S K P 3029

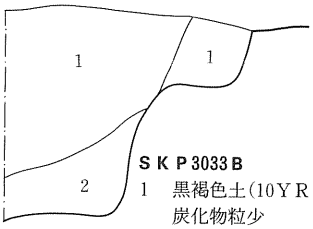


S K 3030
1　黒褐色土(10Y R 3 / 1)
　炭化物粒中　地山土粒少
　粘性強　しまり弱

S K P 3029
1　黒褐色土(10Y R 3 / 1)
　炭化物粒少　地山土粒少
　粘性強　しまり弱



A —— 34.9m　—— B
S K 3033 A　S K P 3033 B

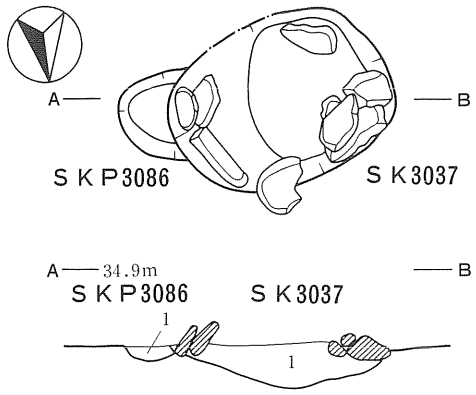


S K P 3033 B
1　黒褐色土(10Y R 3 / 1)
　炭化物粒少
　地山土粒少　粘性強
　しまり弱

S K 3033 A
1　暗褐色土(10Y R 3 / 3)　炭化物粒多
　地山土塊多　粘性強　しまり弱
2　黒褐色土(10Y R 3 / 2)　炭化物粒少
　粘性強　しまり弱

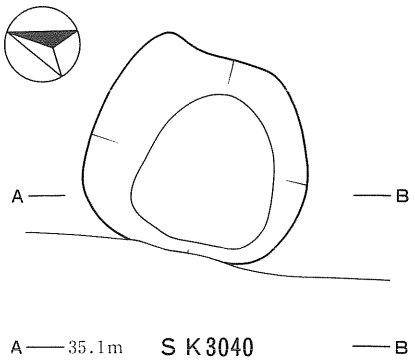
0　1m

第43図　検出遺構(27)（SK3019・3026・3030・3033A・3047、SKP3028・3029・3033B）

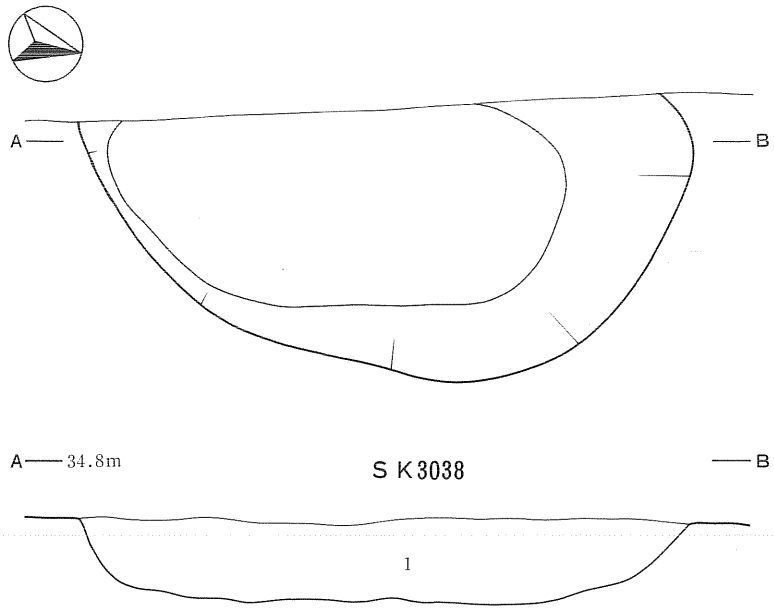


ＳＫＰ3086
1　黒褐色土(10ＹＲ３/２)　炭化物粒少　地山土粒中　粘性強　しまり弱

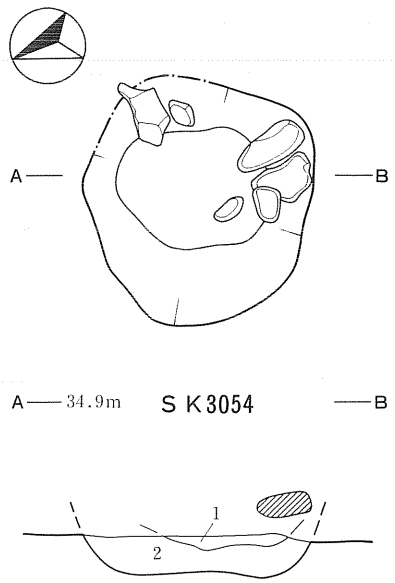
ＳＫ3037
1　黒褐色土(10ＹＲ３/１)　炭化物粒少　地山土粒少　粘性強　しまり弱



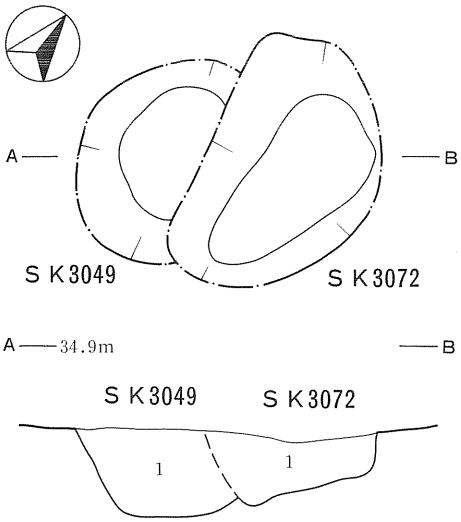
ＳＫ3040
1　黒褐色土(10ＹＲ３/１)　炭化物粒中　地山土塊多　粘性強　しまり弱



ＳＫ3038
1　黒褐色土(10ＹＲ３/２)　炭化物粒少　地山土粒中　粘性強　しまり弱



ＳＫ3054
1　暗褐色土(10ＹＲ３/３)　炭化物粒少　地山土粒少　粘性強　しまり弱
2　暗褐色土(10ＹＲ３/４)　炭化物粒中　地山土粒少　粘性強　しまり弱

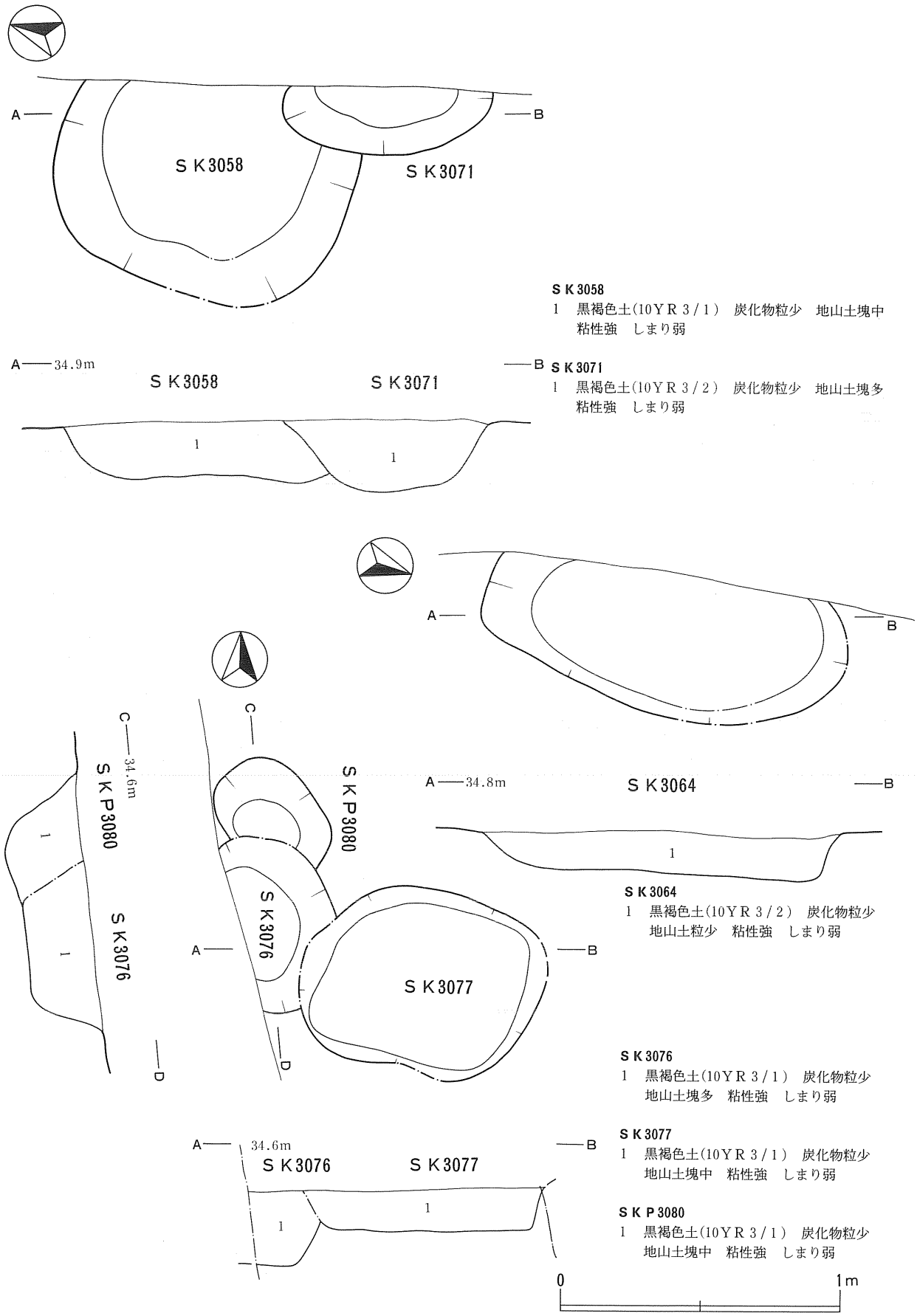


ＳＫ3049
1　黒褐色土(10ＹＲ３/１)　炭化物粒少　地山土塊少　粘性強　しまり弱

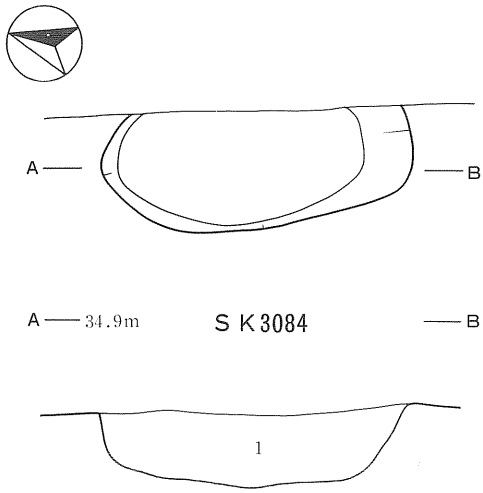
ＳＫ3072
1　黒褐色土(10ＹＲ３/１)　炭化物粒中　地山土塊中　粘性強　しまり弱

0　1m

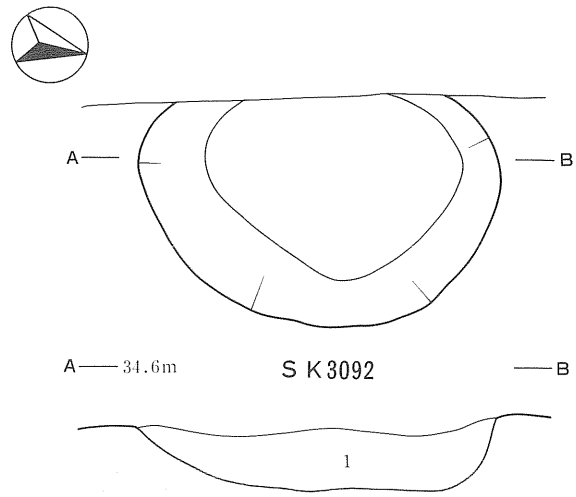
第44図　検出遺構(28)（SK3037・3038・3040・3049・3054・3072、SKP3086）



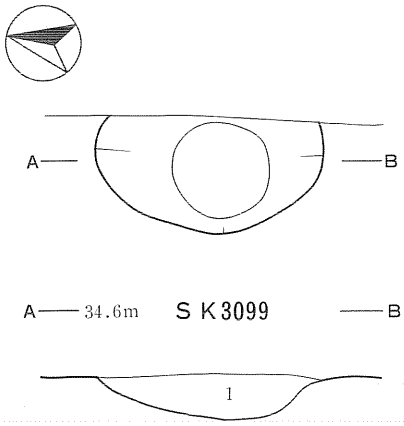
第45図　検出遺構(29)（SK3058・3064・3071・3076・3077、SKP3080）



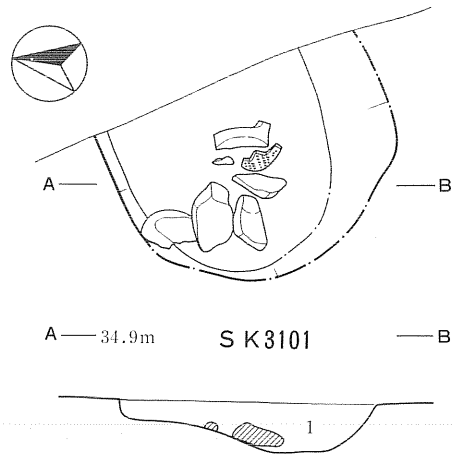
SK3084
1　黒褐色土(10YR３/２)　炭化物粒少　地山土塊少　粘性強　しまり弱



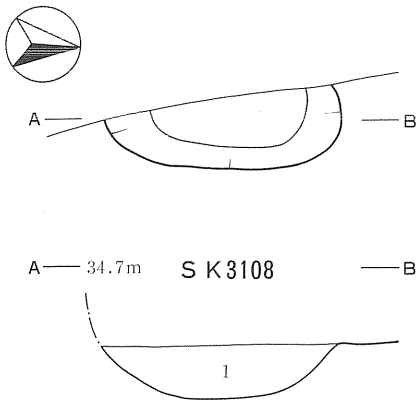
SK3092
1　黒褐色土(10YR３/２)　炭化物粒中　地山土塊多　粘性強　しまり弱



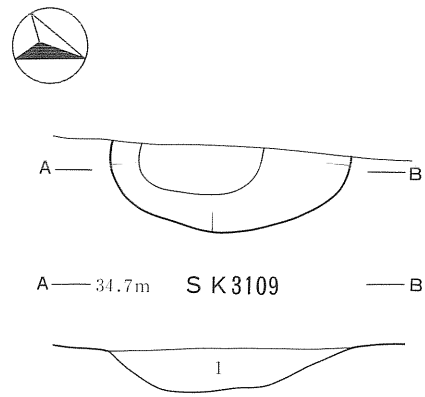
SK3099
1　黒褐色土(10YR３/２)　炭化物粒少　地山土塊少　粘性強　しまり弱



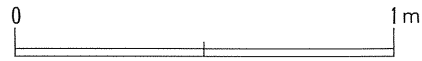
SK3101
1　黒褐色土(10YR３/２)　炭化物粒少　地山土粒少　粘性強　しまり弱



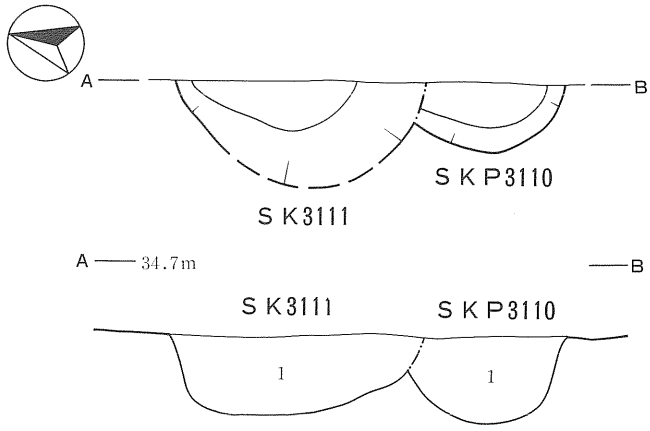
SK3108
1　黒褐色土(10YR３/２)　炭化物粒少　地山土粒少　粘性強　しまり弱



SK3109
1　黒褐色土(10YR３/２)　炭化物粒少　地山土粒少　粘性強　しまり弱

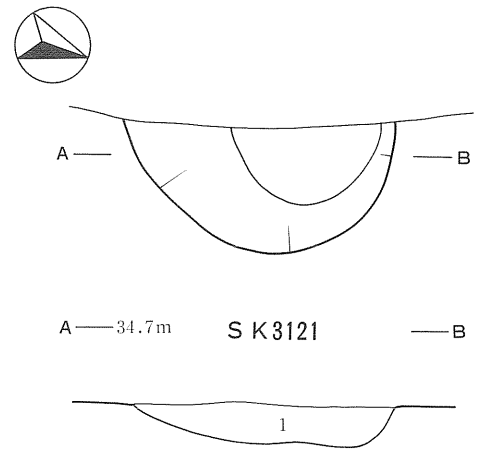


第46図　検出遺構(30)（SK3084・3092・3099・3101・3108・3109）

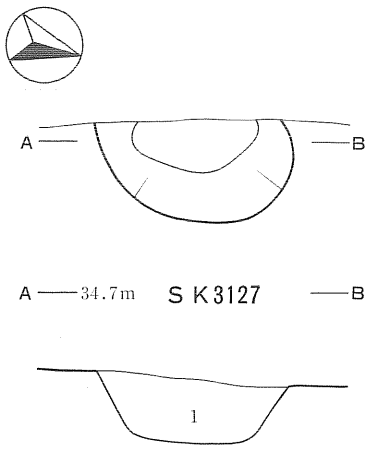


ＳＫ3111
1　黒褐色土(10ＹＲ３/２)　炭化物粒中　地山土塊少　粘性強　しまり弱

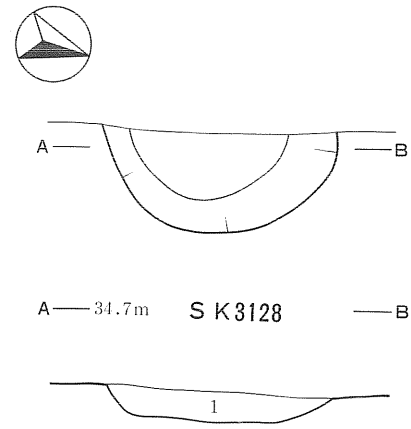
ＳＫＰ3110
1　黒褐色土(10ＹＲ３/１)　炭化物粒少　地山土塊中　粘性強　しまり弱



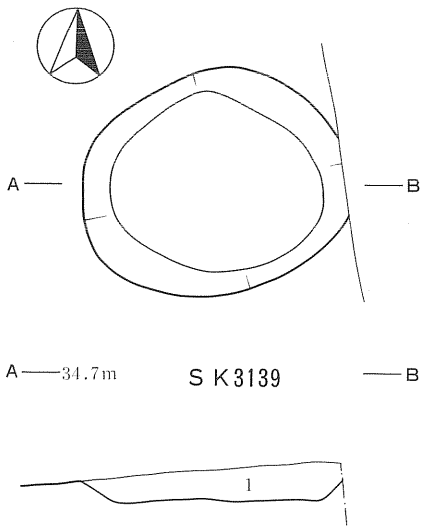
ＳＫ3121
1　黒褐色土(10ＹＲ３/２)　炭化物粒中　地山土粒少　粘性強　しまり弱



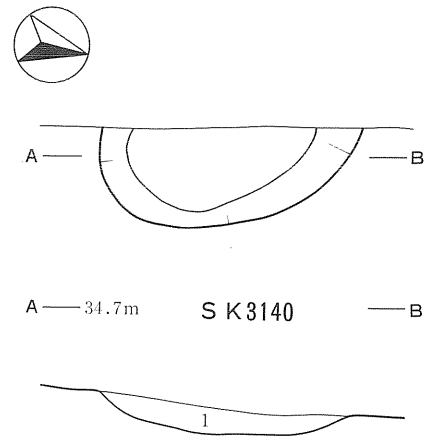
ＳＫ3127
1　黒褐色土(10ＹＲ３/２)　炭化物粒少　地山土塊少　粘性強　しまり弱



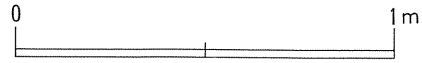
ＳＫ3128
1　黒褐色土(10ＹＲ３/２)　炭化物粒少　地山土粒中　粘性強　しまり弱



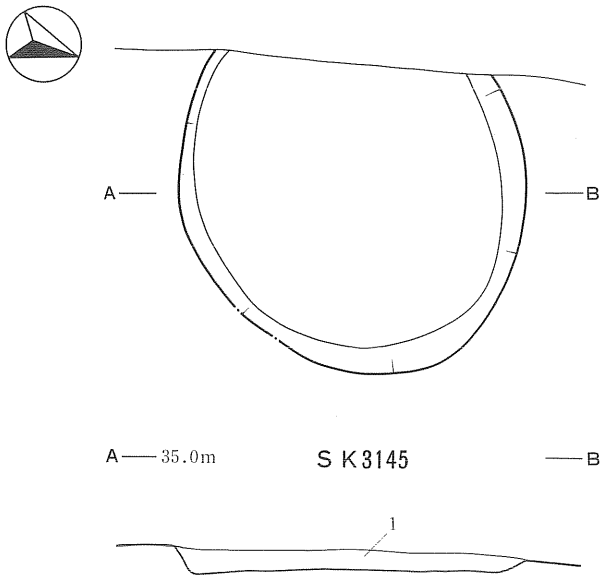
ＳＫ3139
1　黒褐色土(10ＹＲ３/２)　炭化物粒少　地山土塊少　粘性強　しまり弱



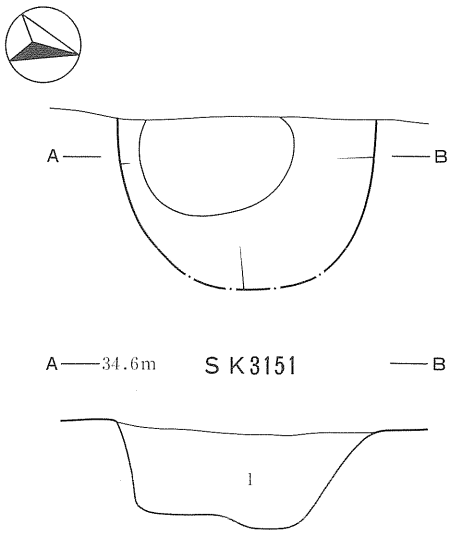
ＳＫ3140
1　暗褐色土(10ＹＲ３/３)　炭化物粒少　地山土粒少　粘性中　しまり弱



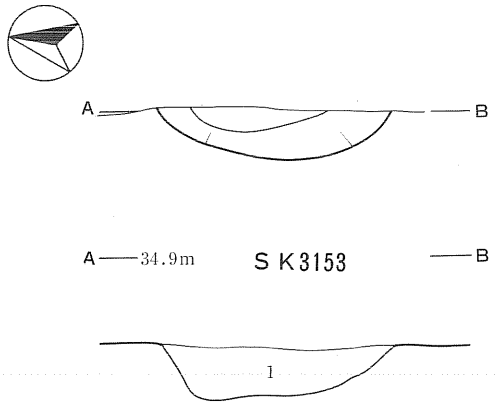
第47図　検出遺構(31)（SK3111・3121・3127・3128・3139・3140、SKP3110）



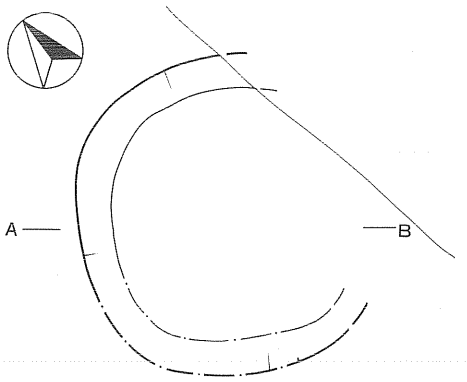
SK3145
1　黒褐色土(10YR 3/2)　炭化物粒中　地山土塊少　粘性強　しまり弱



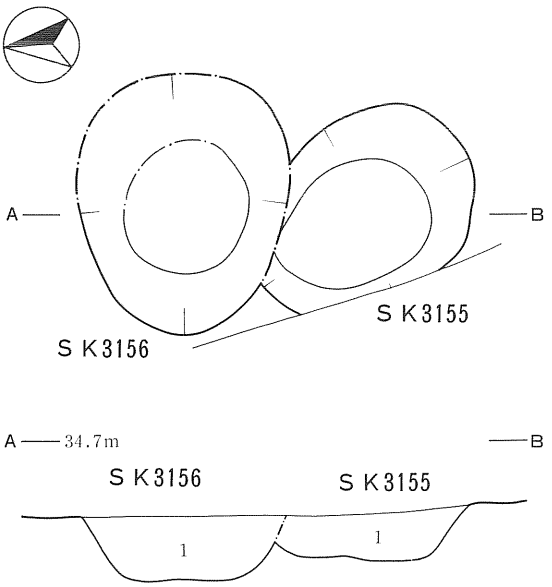
SK3151
1　黒褐色土(10YR 3/2)　炭化物粒少　地山土粒少
粘性強　しまり弱



SK3153
1　黒褐色土(10YR 3/2)　炭化物粒少　地山土粒少　粘性強　しまり弱



SK3157
1　黒褐色土(10YR 3/2)　炭化物粒少　地山土塊少
粘性強　しまり弱

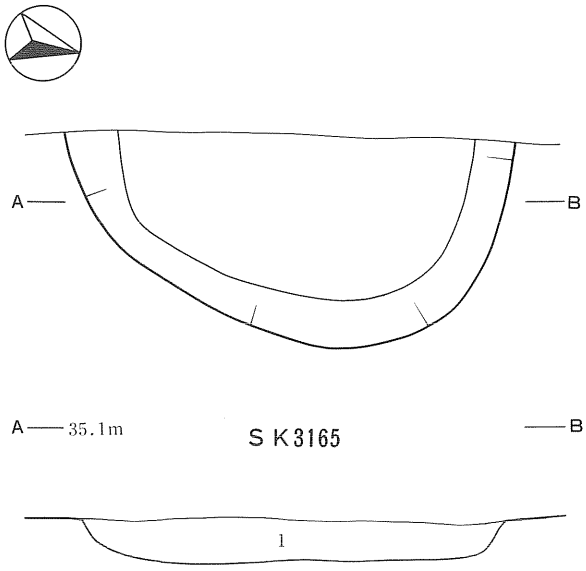


SK3156
1　黒褐色土(10YR 3/1)
炭化物粒少　地山土粒少
粘性中　しまり弱

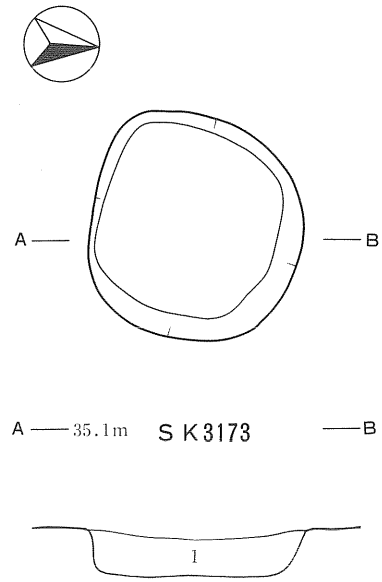
SK3155
1　黒褐色土(10YR 3/1)
炭化物粒少　地山土粒少
粘性強　しまり弱

0　1m

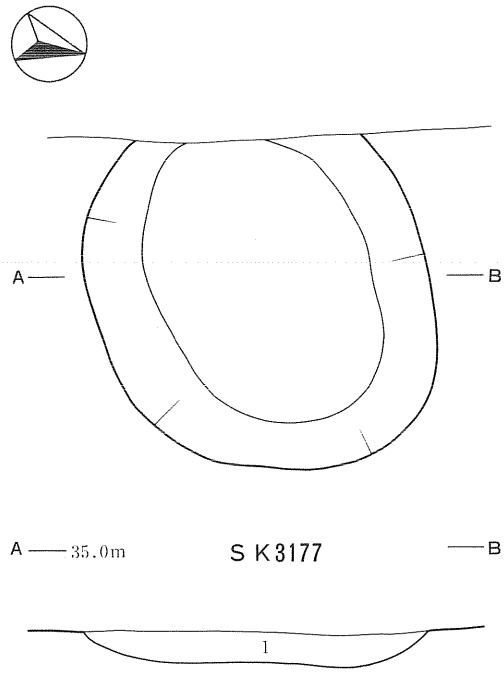
第48図　検出遺構(32)（SK3145・3151・3153・3155・3156・3157）



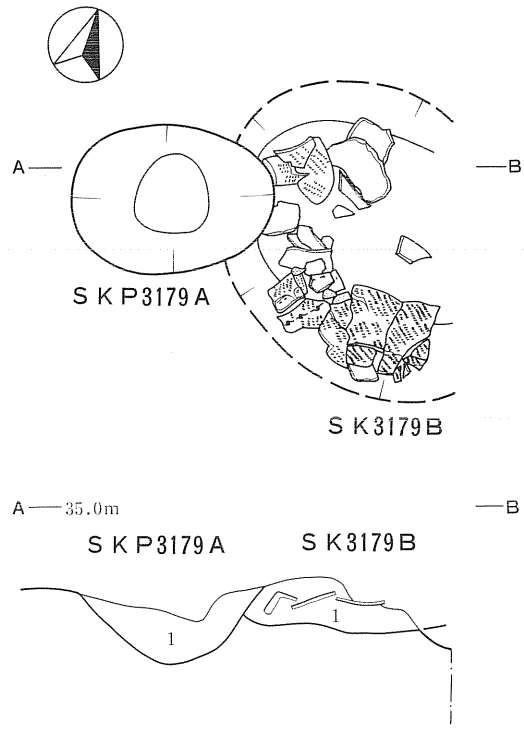
SK3165
1　黒褐色土(10YR３/２)　炭化物粒少　地山土塊少　粘性強　しまり弱



SK3173
1　黒褐色土(10YR３/２)　炭化物粒少　地山土粒中
粘性強　しまり弱

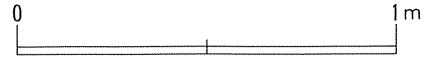


SK3177
1　暗褐色土(10YR３/４)　炭化物粒少　地山土粒中　粘性強
しまり弱

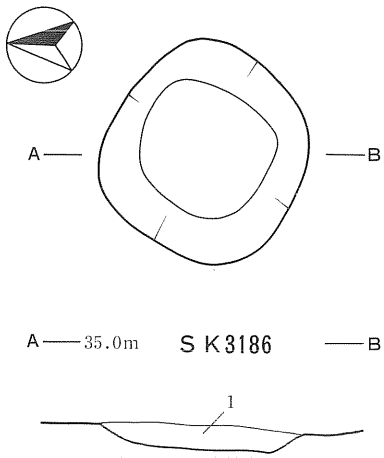


SKP3179A
1　黒褐色土(10YR３/２)
炭化物粒少　粘性強
しまり弱

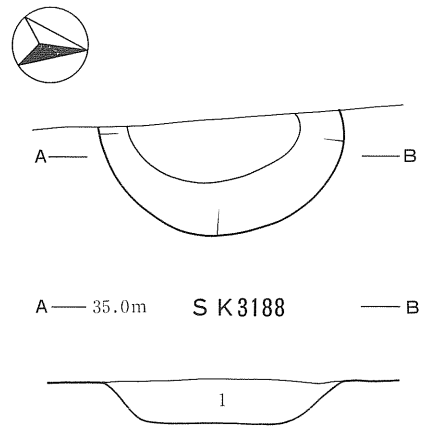
SK3179B
1　黒褐色土(10YR３/２)
炭化物粒中　粘性強
しまり弱



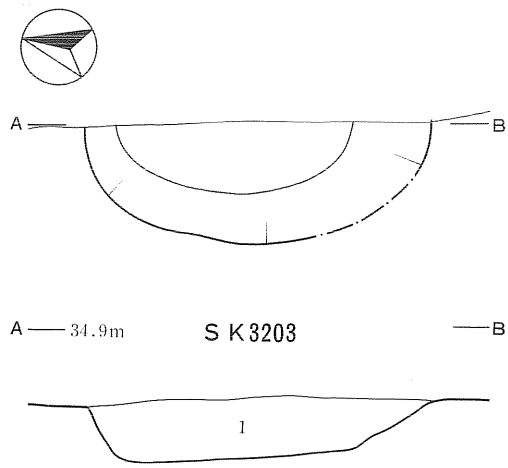
第49図　検出遺構(33)（SK3165・3173・3177・3179B、SKP3179A）



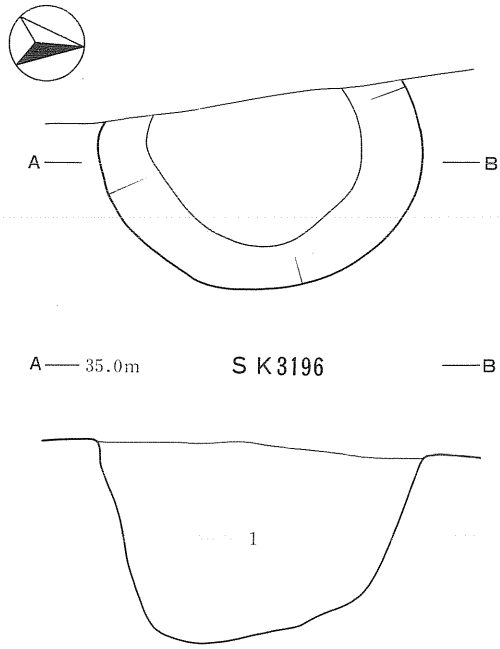
S K 3186
1　黒褐色土(10Y R 3 / 1)　炭化物粒少　地山土粒少
　粘性強　しまり弱



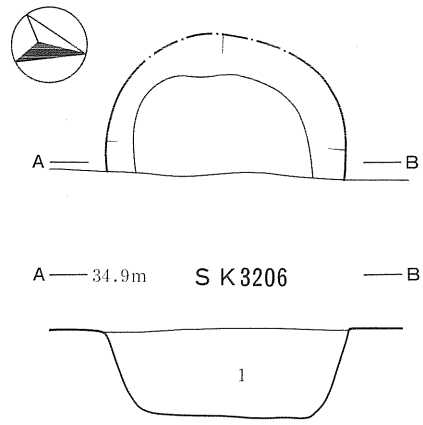
S K 3188
1　黒褐色土(10Y R 3 / 1)　炭化物粒少　地山土粒少
　粘性強　しまり弱



S K 3203
1　黒褐色土(10Y R 3 / 1)　炭化物粒少　地山土塊中
　粘性強　しまり弱



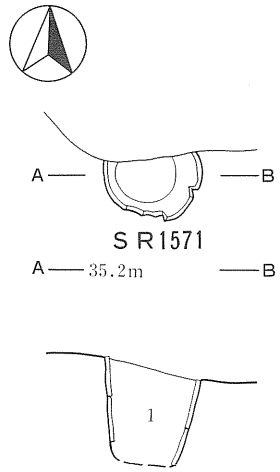
S K 3196
1　黒褐色土(10Y R 3 / 1)　炭化物粒少　地山土粒少
　粘性強　しまり弱



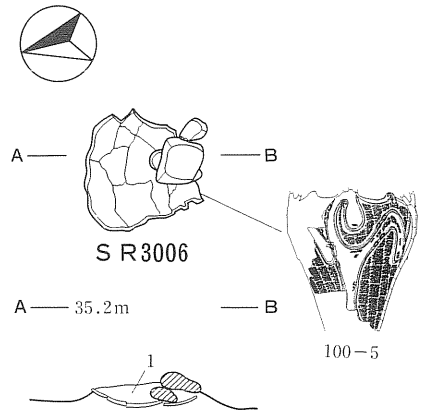
S K 3206
1　黒褐色土(10Y R 3 / 1)　炭化物粒少　地山土粒中
　粘性強　しまり弱

0　1m

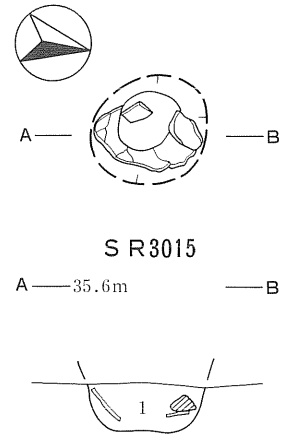
第50図　検出遺構(34)（SK3186・3188・3196・3203・3206）



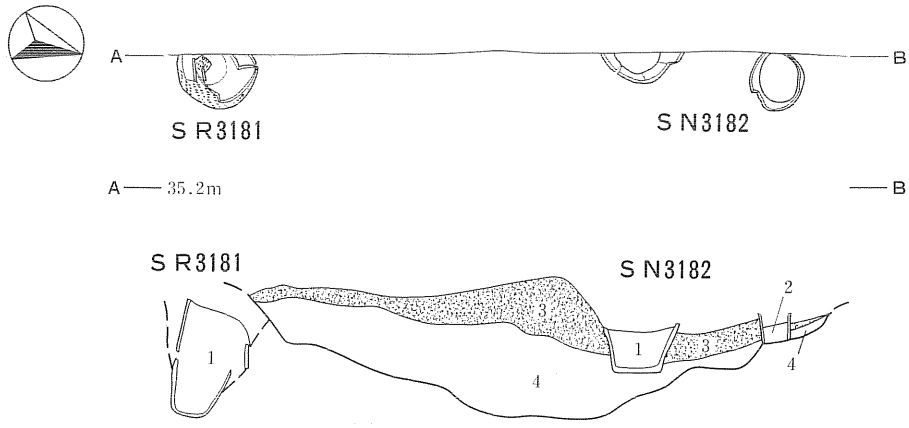
S R 1571
1　黒褐色土(10Y R 3 / 1)　地山土塊少
　粘性強　しまり弱



S R 3006
1　黒褐色土(10Y R 3 / 1)　炭化物粒少
　地山土粒少　粘性強　しまり弱

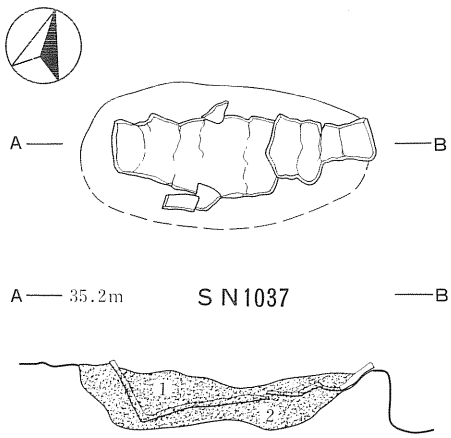


S R 3015
1　黒褐色土(10Y R 3 / 2)　炭化物粒少
　粘性強　しまり弱

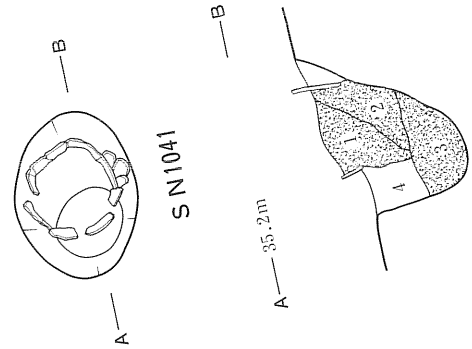


S R 3181
1　黒褐色土(10Y R 3 / 2)　炭化物粒中
　粘性強　しまり弱

S N 3182
1　黒褐色土(10Y R 3 / 2)　焼土粒多　炭化物粒多　粘性強　しまり弱
2　黒褐色土(10Y R 3 / 1)　焼土塊多　炭化物粒多　粘性強　しまり弱
3　にぶい黄橙色土(10Y R 6 / 3)　焼土層　炭化物粒少　粘性強　しまり弱
4　黒褐色土(10Y R 3 / 1)　炭化物粒中　粘性強　しまり弱



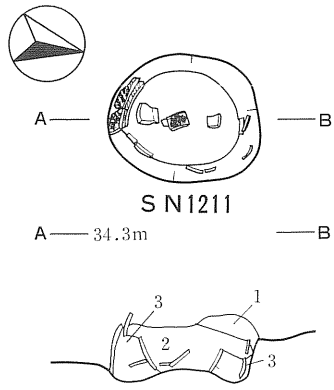
S N 1037
1　褐色土(7.5Y R 4 / 3)　焼土粒多　炭化物粒多　粘性弱　しまり中
2　黒褐色土(10Y R 3 / 2)　焼土塊多　炭化物粒少　粘性弱　しまり強



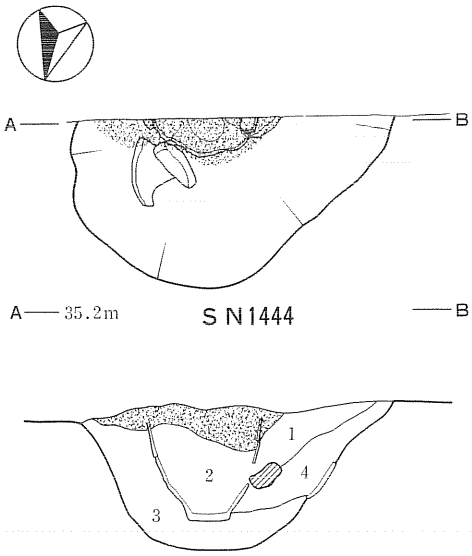
S N 1041
1　黒褐色土(10Y R 3 / 1)　焼土粒多　炭化物粒多　粘性弱　しまり弱
2　灰褐色土(7.5Y R 4 / 2)　焼土粒中　炭化物粒多　粘性弱　しまり弱
3　黒褐色土(10Y R 2 / 3)　焼土粒中　炭化物粒少　粘性弱　しまり強
4　黒褐色土(10Y R 2 / 2)　炭化物粒少　粘性中　しまり中

0　1m

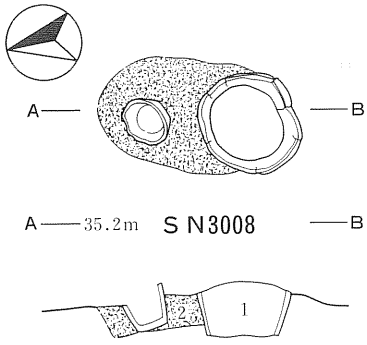
第51図　検出遺構(35)（SR1571・3006・3015・3181、SN1037・1041・3182）



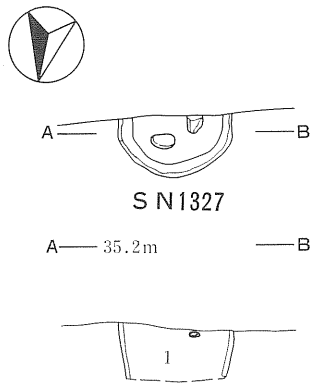
S N1211
1　黒色土(10Y R1.7/1)　焼土粒多　粘性中　しまり強
2　黒褐色土(10Y R 2/2)　焼土塊多　粘性中　しまり弱
3　黒褐色土(10Y R 3/1)　粘性中　しまり弱



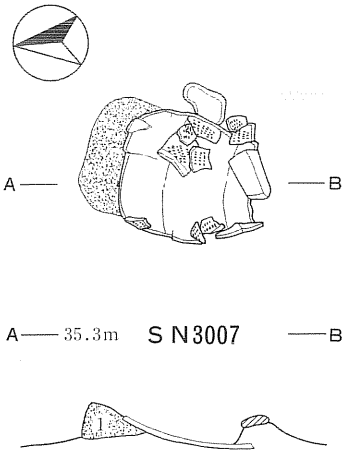
S N1444
1　にぶい黄褐色土(10Y R 4/3)　焼土塊多　炭化物粒少　粘性中　しまり弱
2　黒褐色土(10Y R 3/1)　炭化物粒中　粘性中　しまり弱
3　黒色土(10Y R 2/1)　炭化物粒少　地山土塊少　粘性強　しまり弱
4　灰黄褐色土(10Y R 4/2)　焼土塊多　炭化物粒中　粘性中　しまり弱



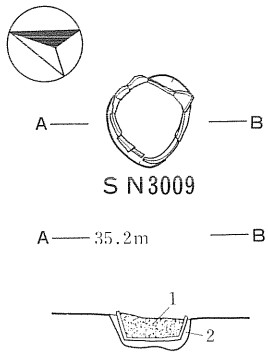
S N3008
1　黒褐色土(10Y R 3/2)　焼土粒少　炭化物粒少
　粘性中　しまり弱
2　黒褐色土(10Y R 3/1)　焼土塊中　炭化物粒多
　粘性強　しまり弱



S N1327
1　黒褐色土(10Y R 3/2)　焼土粒少　粘性強
　しまり弱

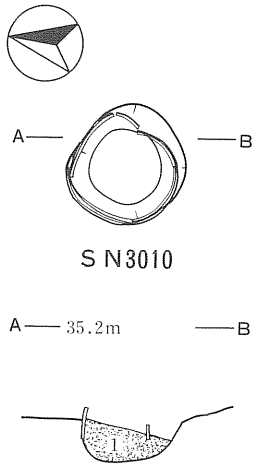


S N3007
1　褐色土(7.5Y R 4/3)　焼土層　炭化物粒少
　粘性弱　しまり弱

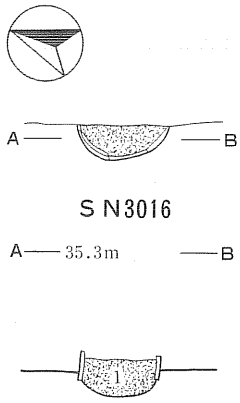


S N3009
1　黄褐色土(10Y R 5/6)　焼土塊多　炭化物粒中
　粘性強　しまり弱
2　黒褐色土(10Y R 3/2)　炭化物粒少　粘性中
　しまり弱

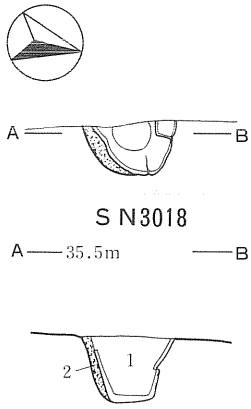
第52図　検出遺構(36)（SN1211・1327・1444・3007・3008・3009）



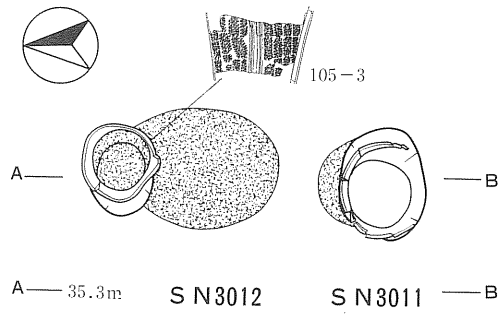
S N3010
1　暗褐色土(10YR 3/3)　焼土粒少　炭化物粒少
　粘性中　しまり弱



S N3016
1　暗褐色土(10YR 3/3)　焼土塊多　炭化物粒少
　粘性強　しまり弱

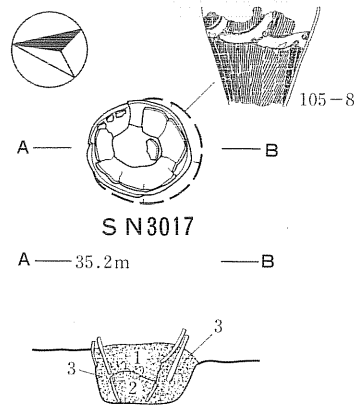


S N3018
1　黒褐色土(10YR 2/2)　炭化物粒少　粘性中
　しまり弱
2　褐色土(7.5YR 4/3)　焼土層　炭化物粒中
　粘性中　しまり弱

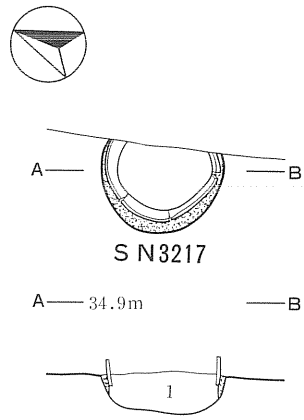


S N3012
1　暗褐色土(10YR 3/3)
　炭化物粒中　粘性強
　しまり弱
2　暗褐色土(7.5YR 3/3)
　粘性中　しまり中

S N3011
1　黒褐色土(10YR 3/1)
　炭化物粒少　粘性強
　しまり強
2　暗褐色土(10YR 3/3)
　上面炭化物粒薄層状堆積
　焼土層　粘性弱　しまり弱



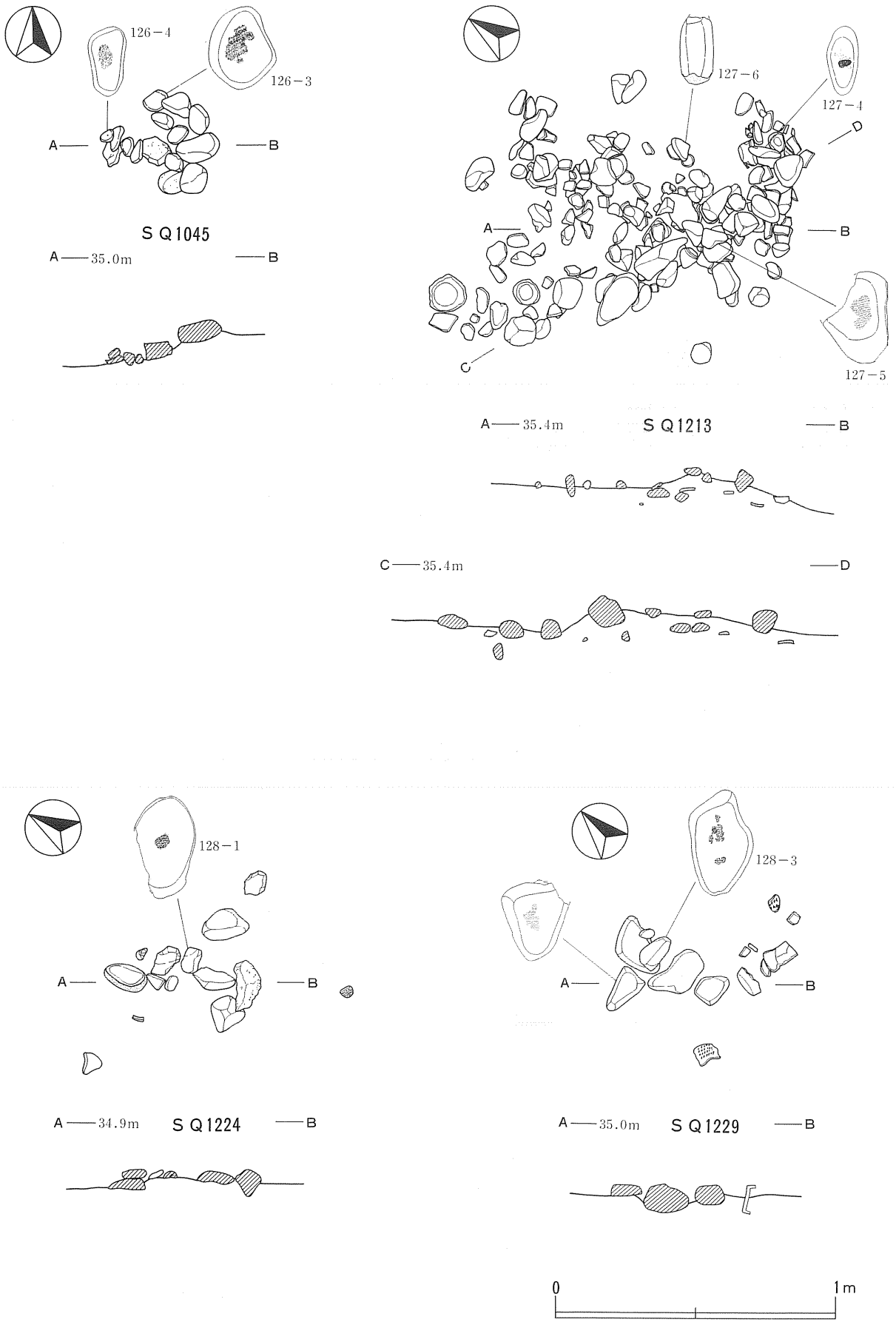
S N3017
1　にぶい黄褐色土(10YR 4/3)　焼土粒多　炭化物粒少　粘性強　しまり弱
2　暗褐色土(10YR 3/3)　焼土粒多　炭化物粒少　粘性強　しまり弱
3　にぶい黄褐色土(10YR 4/3)　焼土粒中　炭化物粒少　粘性強　しまり弱



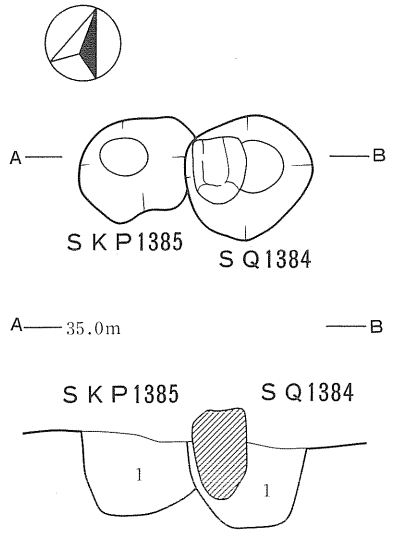
S N3217
1　黒褐色土(10YR 3/2)　焼土粒中　炭化物粒中
　地山土粒少　粘性強　しまり弱

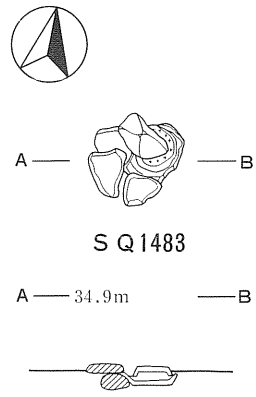
0　1m

第53図　検出遺構(37)（SN3010・3011・3012・3016・3017・3018・3217）



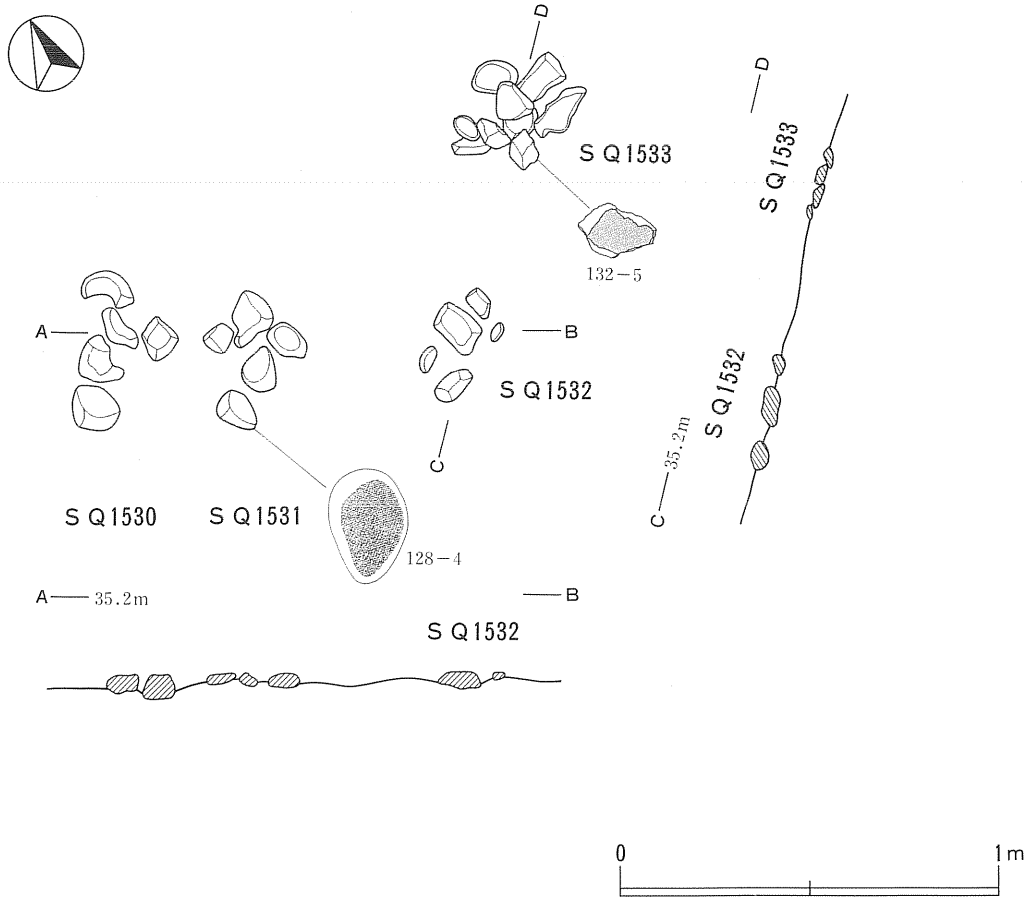
第54図　検出遺構(38)（SQ1045・1213・1224・1229）



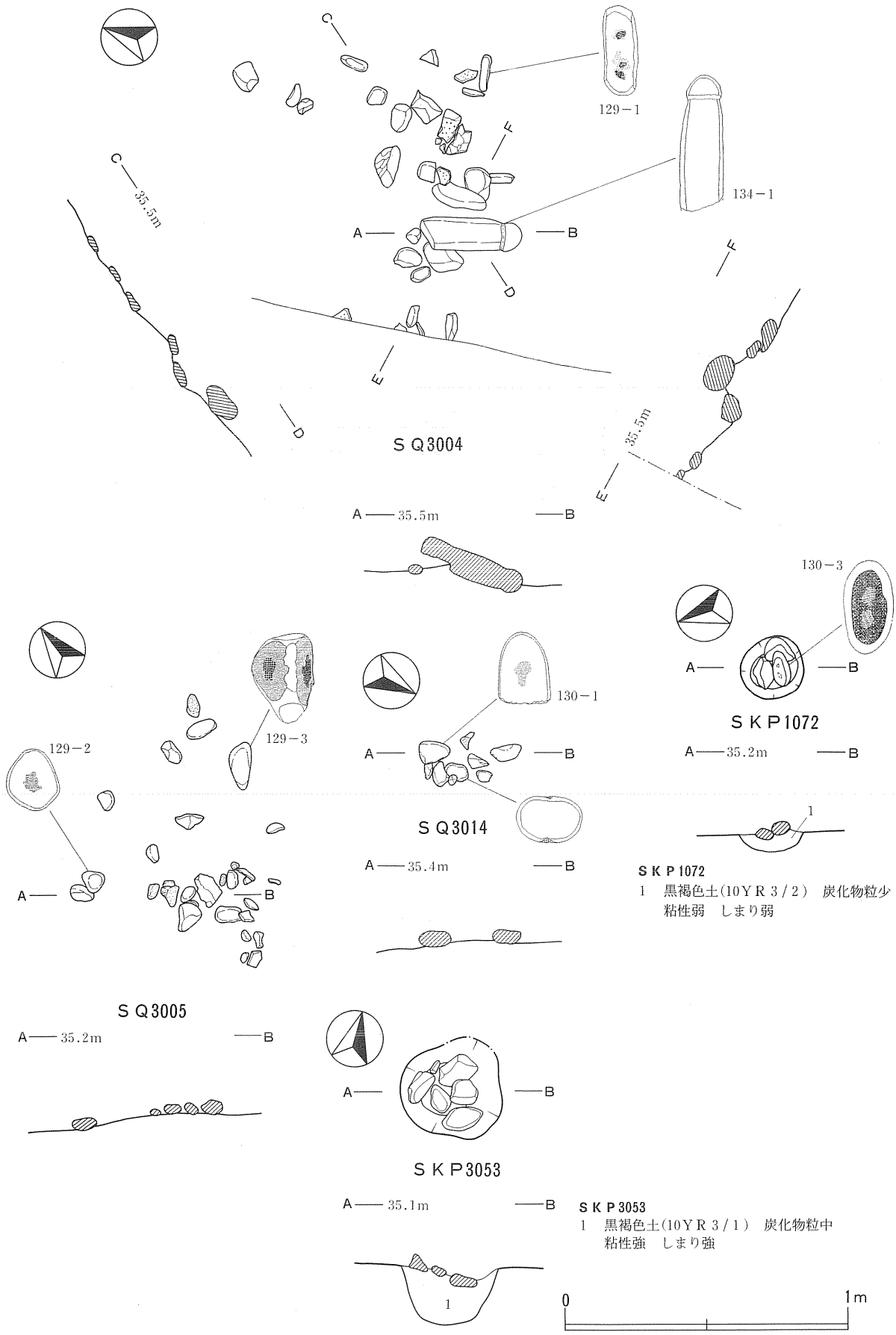


ＳＫＰ1385
1　黒褐色土(10ＹＲ３/１)
　　炭化物粒少　粘性中
　　しまり弱

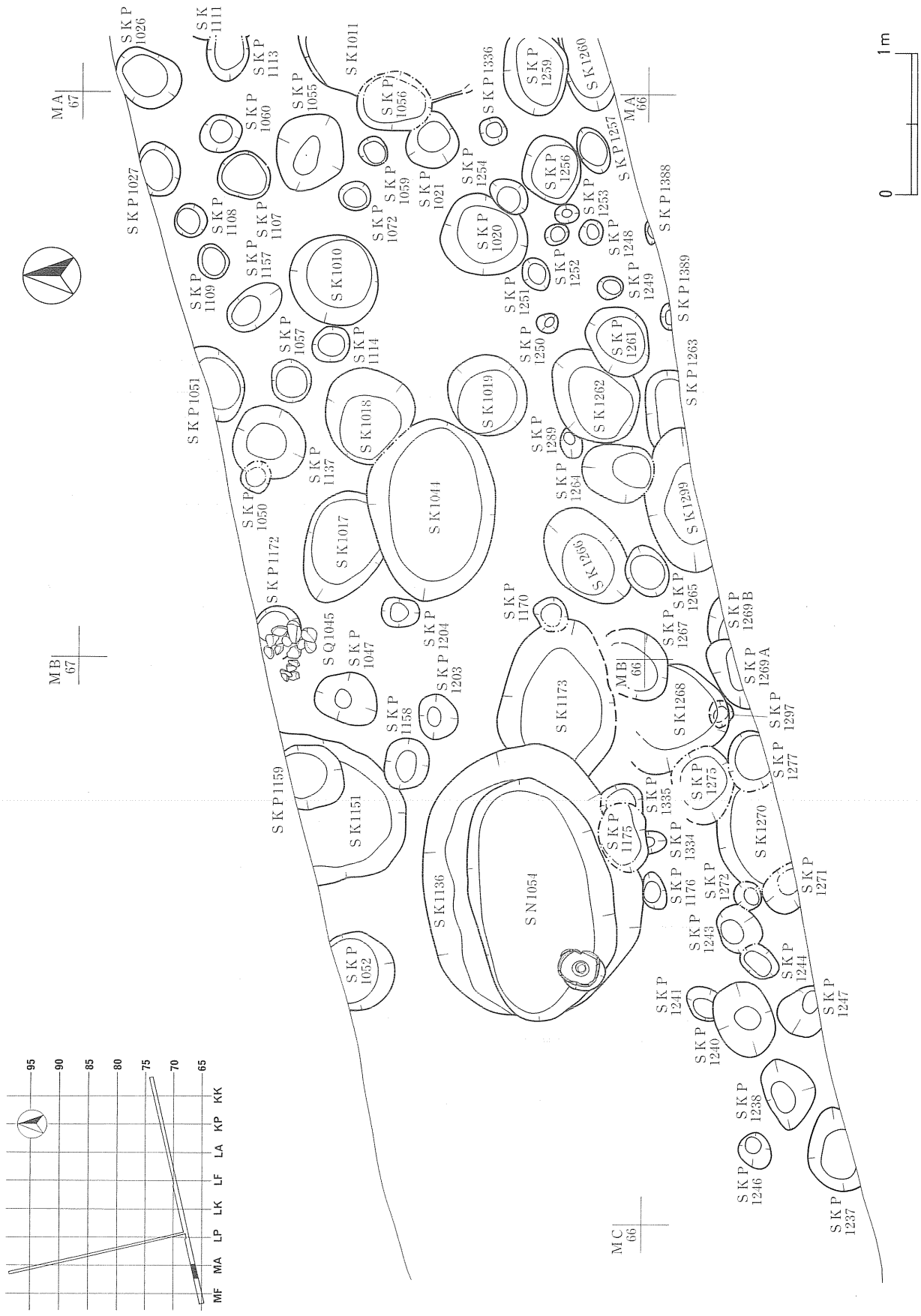
ＳＱ1384
1　黒褐色土(10ＹＲ３/１)
　　炭化物粒少　粘性中
　　しまり弱



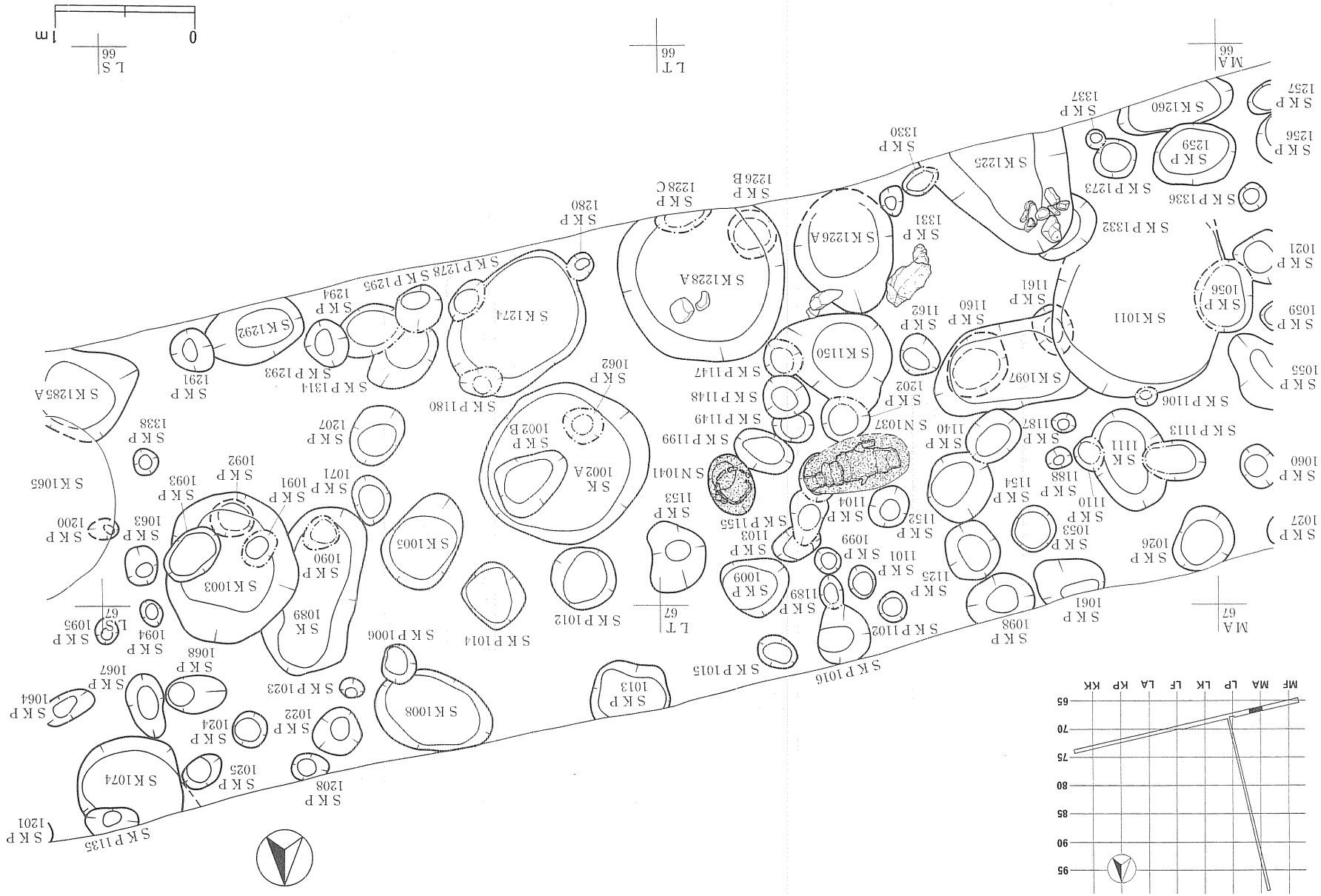
第55図　検出遺構(39)（SQ1384・1483・1530・1531・1532・1533、SKP1385）



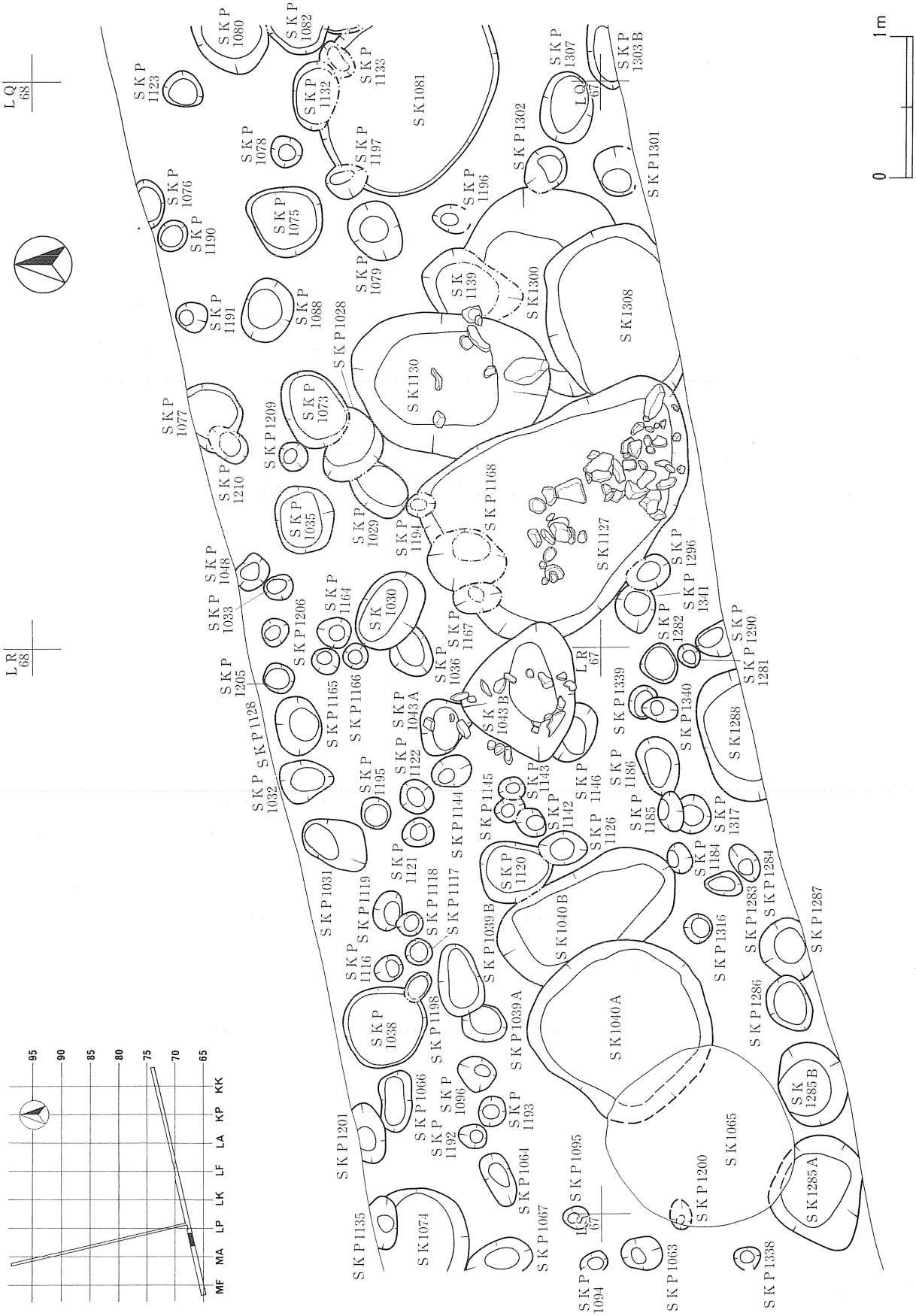
第56図　検出遺構(40)（SQ3004・3005・3014、SKP1072・3053）



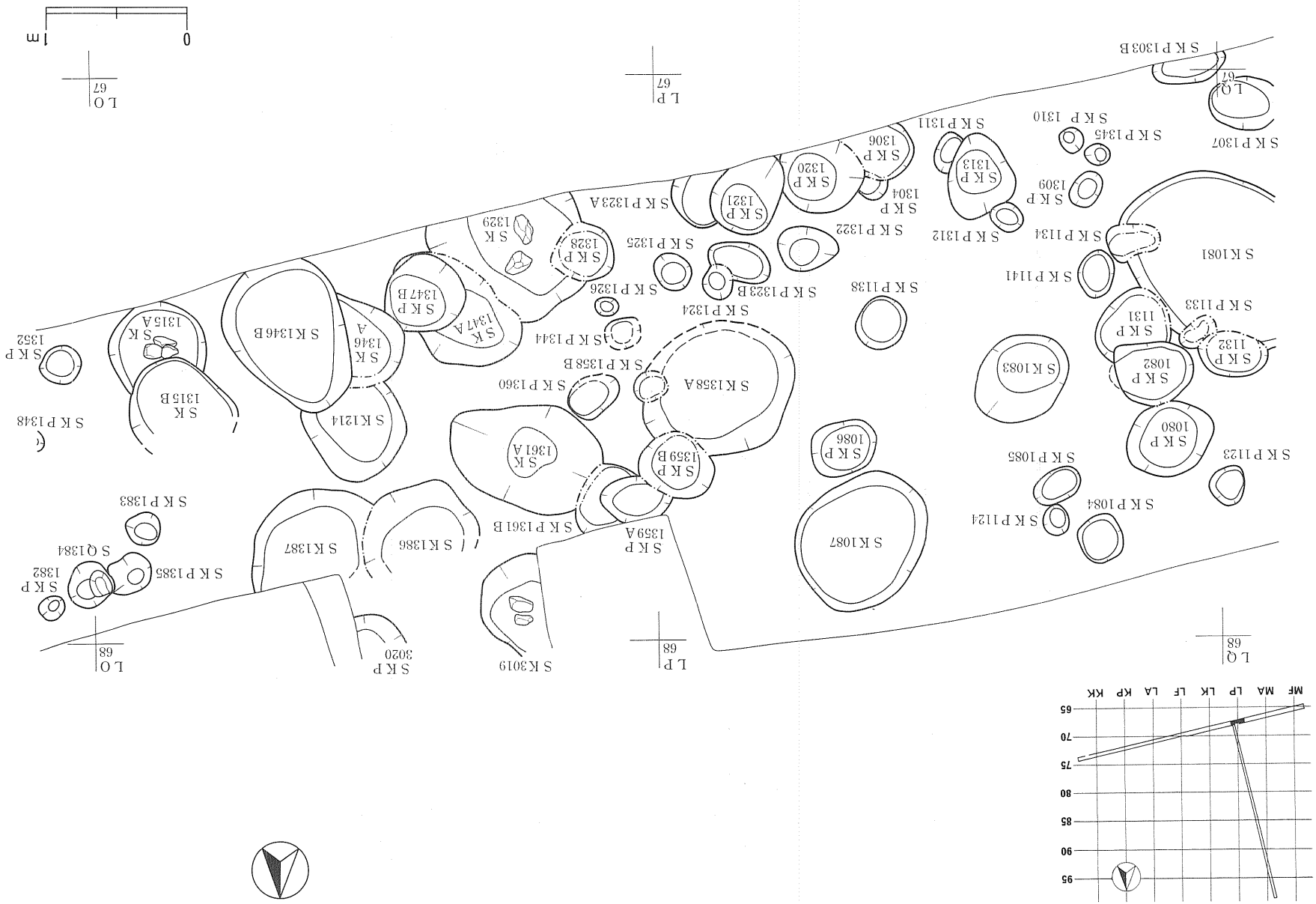
第57図　Ｉトレンチ遺構配置（１）



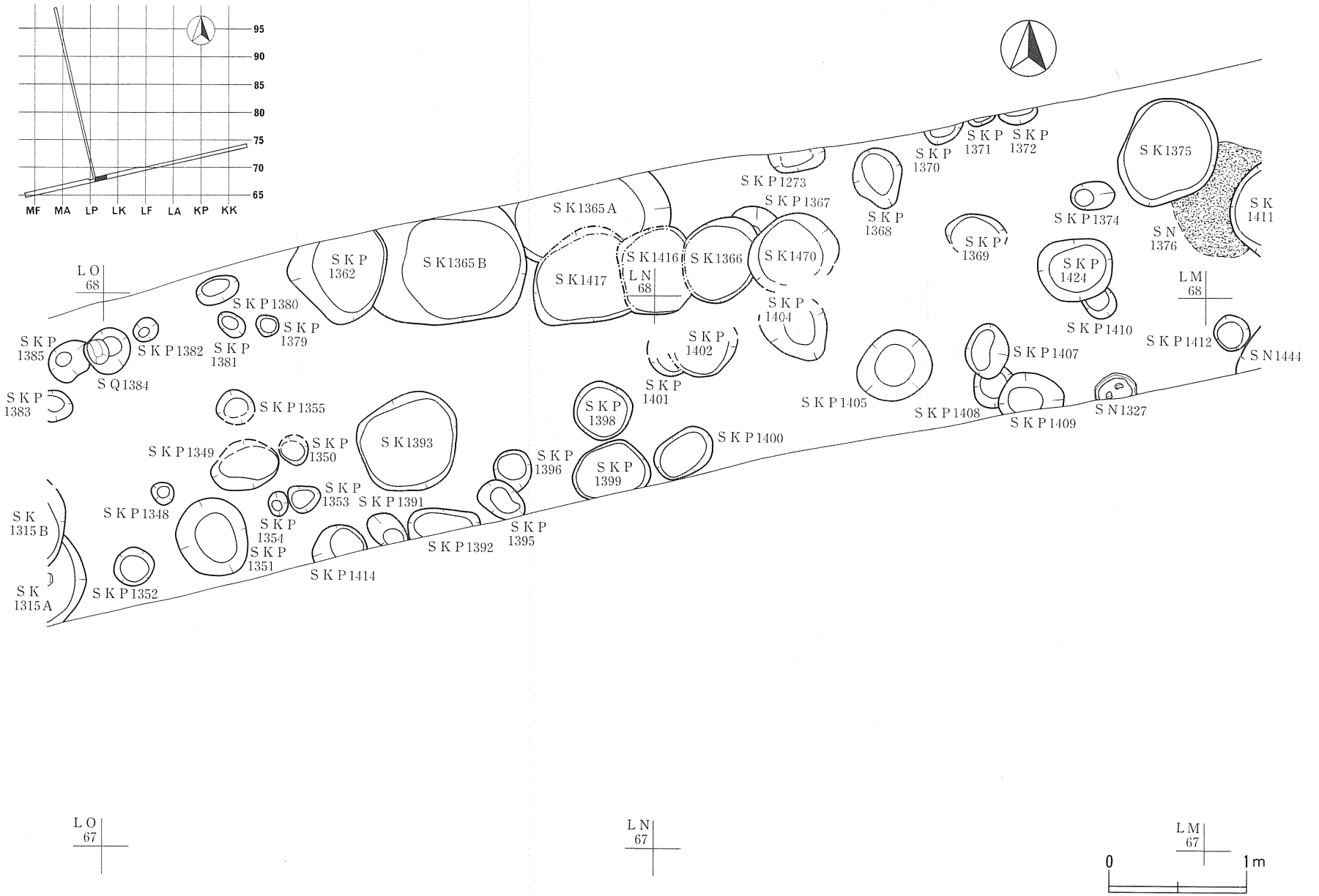
第58図　Ⅰトレンチ遺構配置（２）



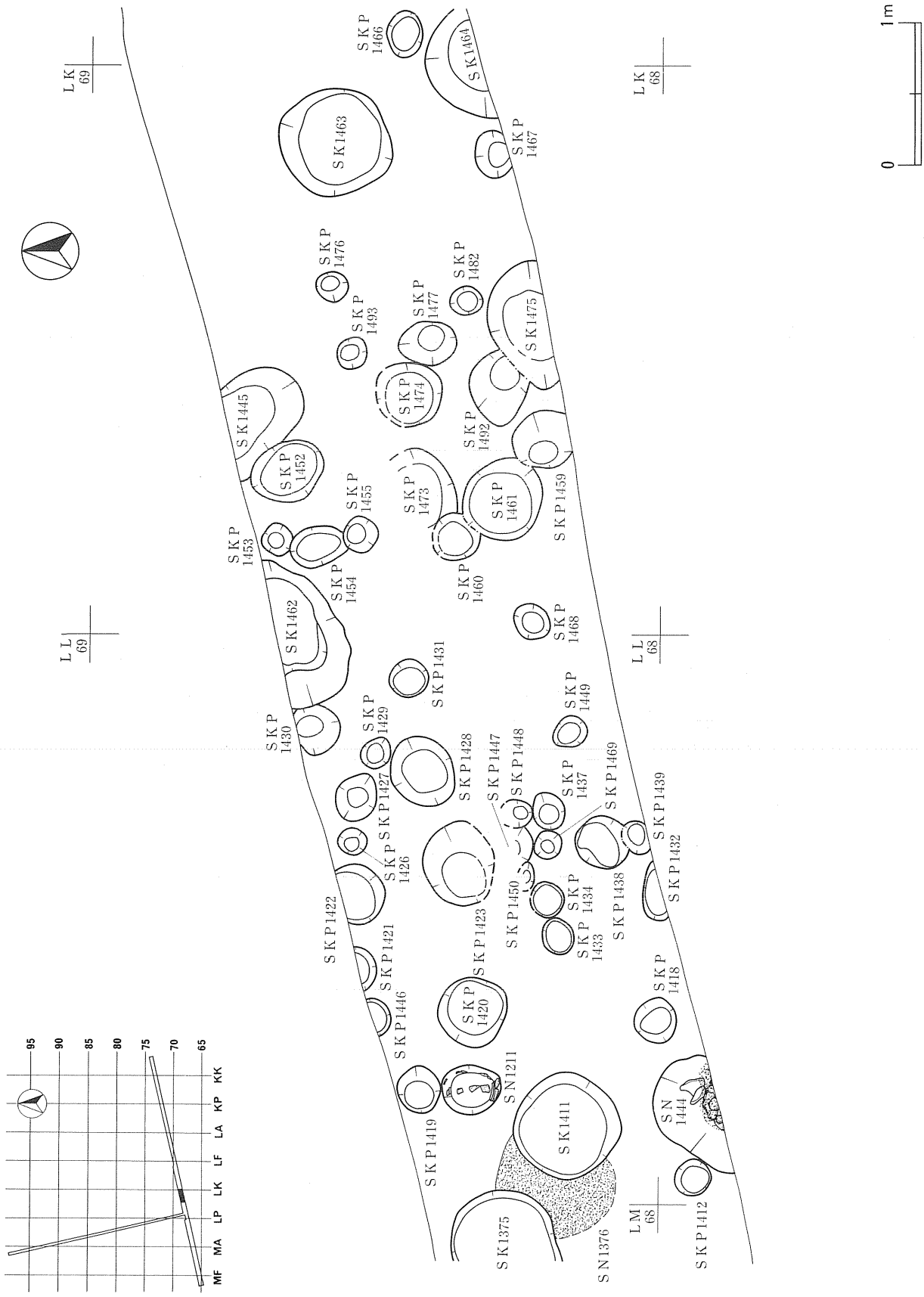
第59図　Ｉトレンチ遺構配置（３）



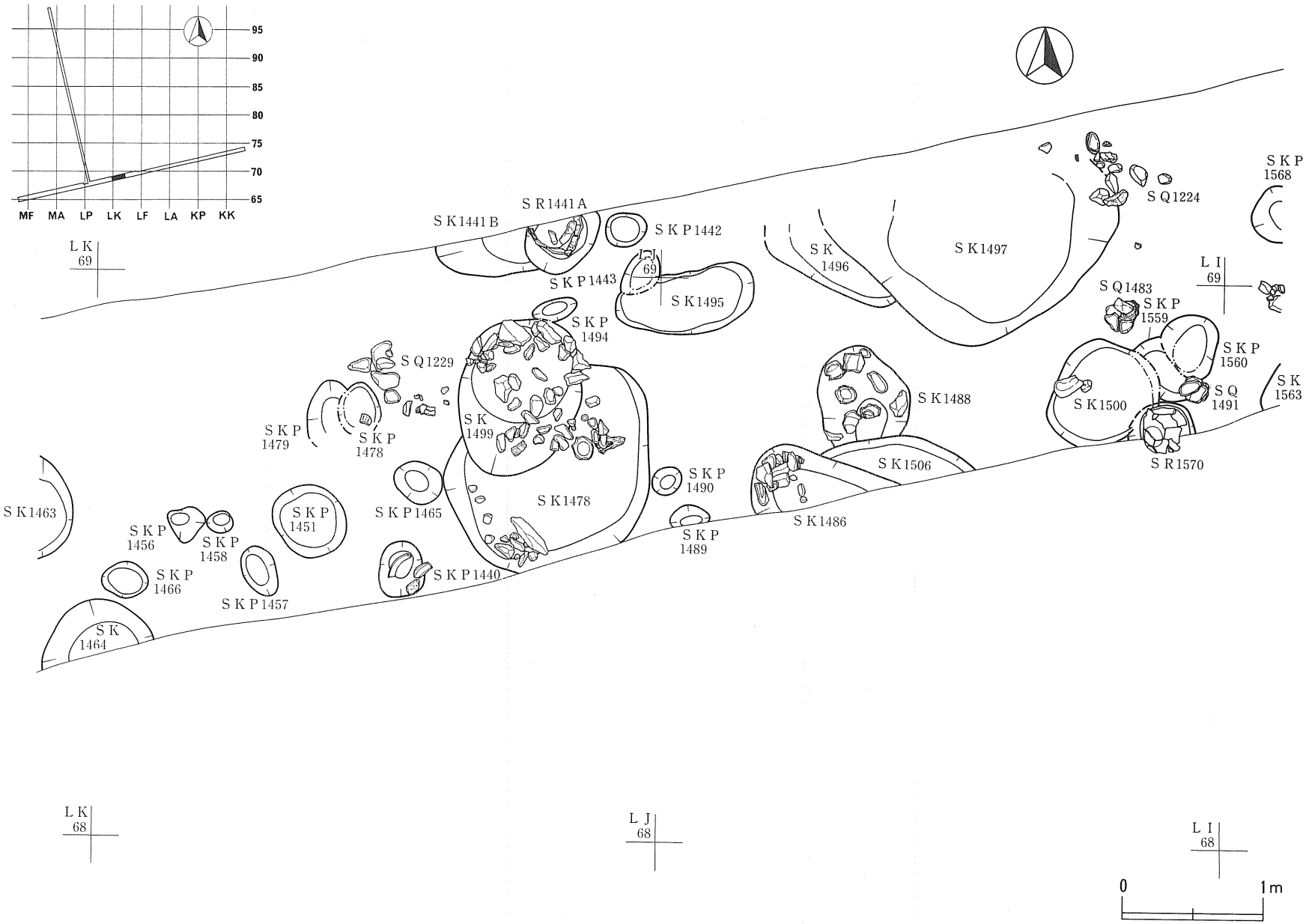
第60図　Ⅰトレンチ遺構配置（４）



第61図　Ⅰトレンチ遺構配置（5）

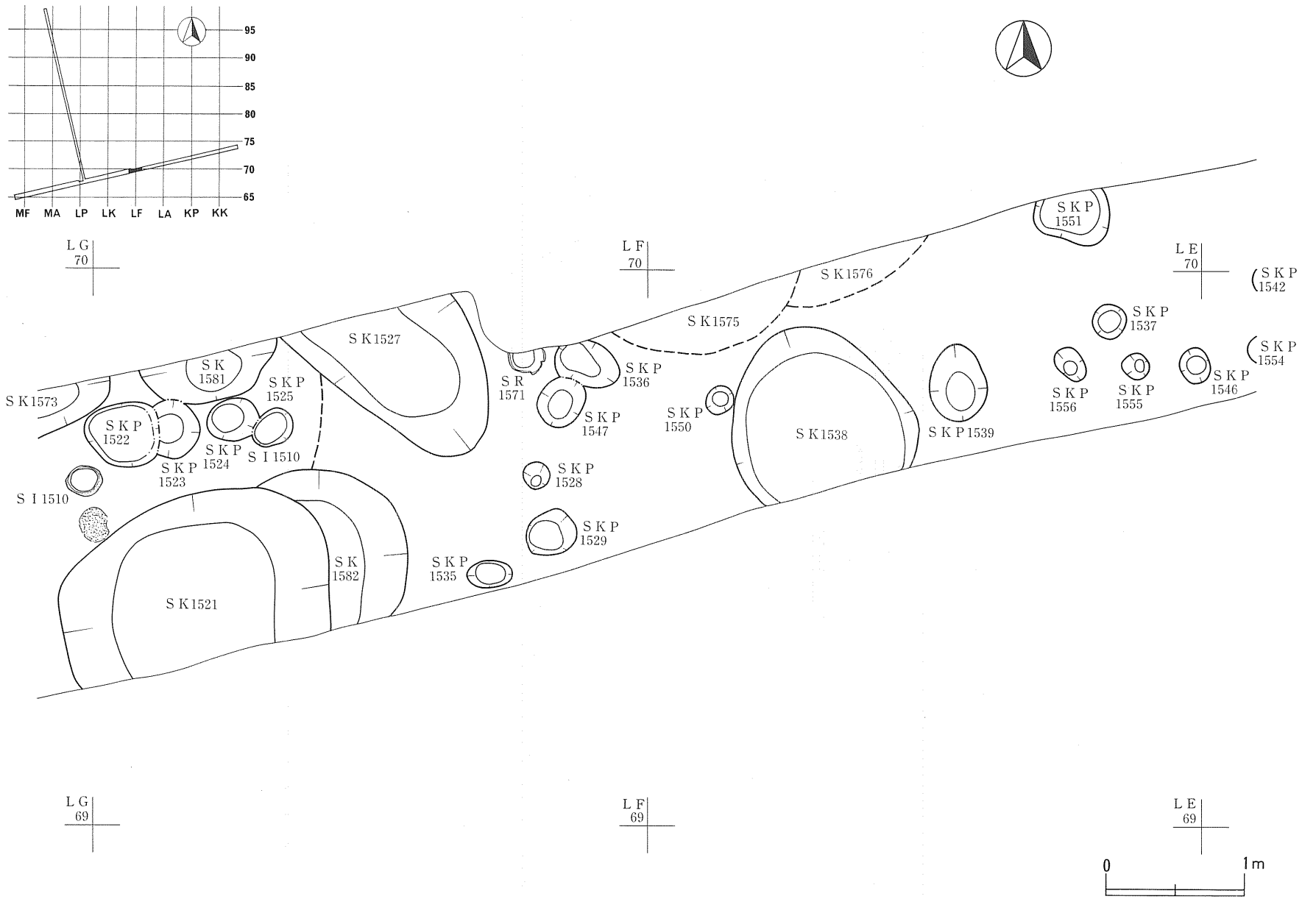


第62図　Ｉトレンチ遺構配置（６）

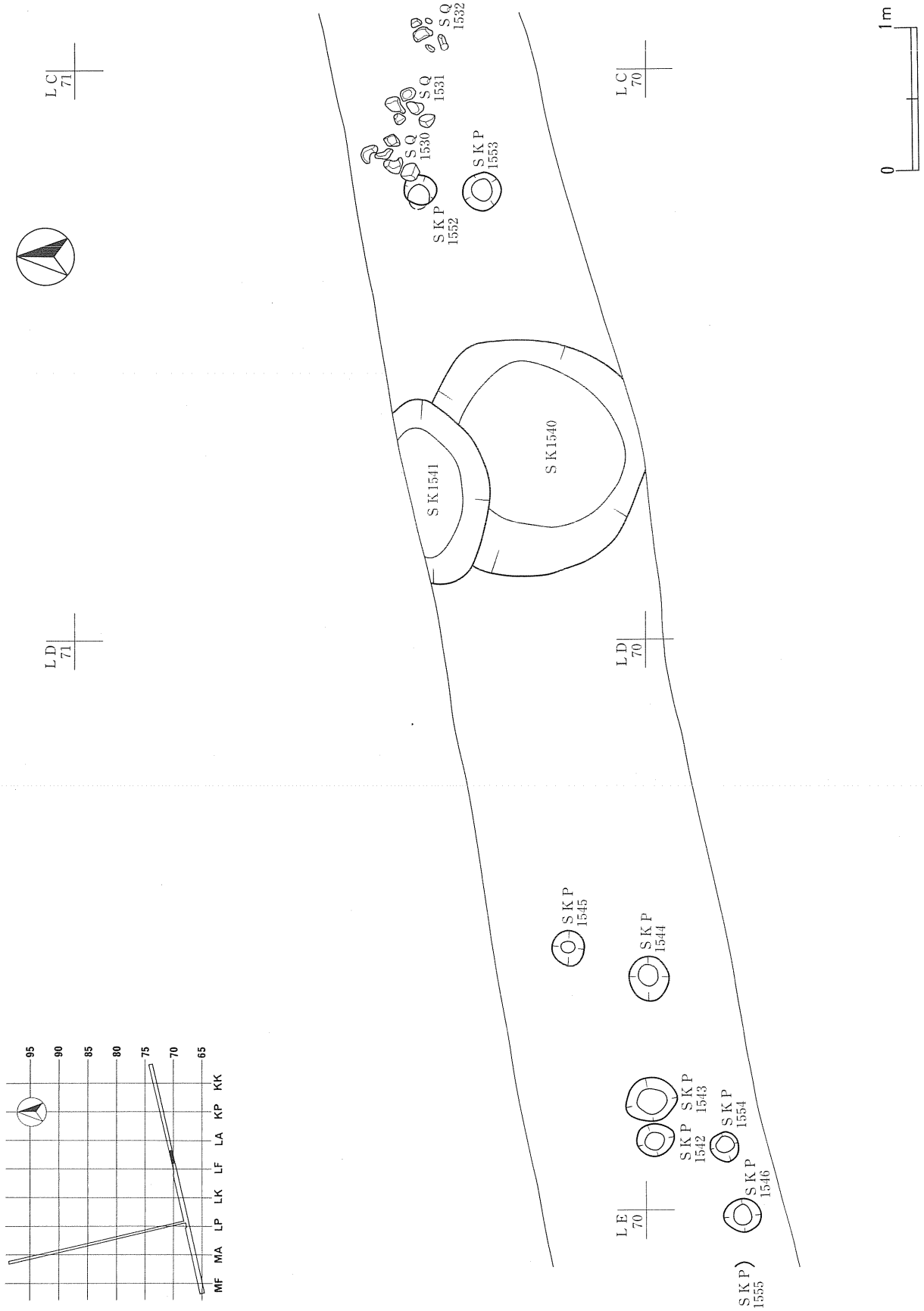


第63図　Ⅰトレンチ遺構配置（7）

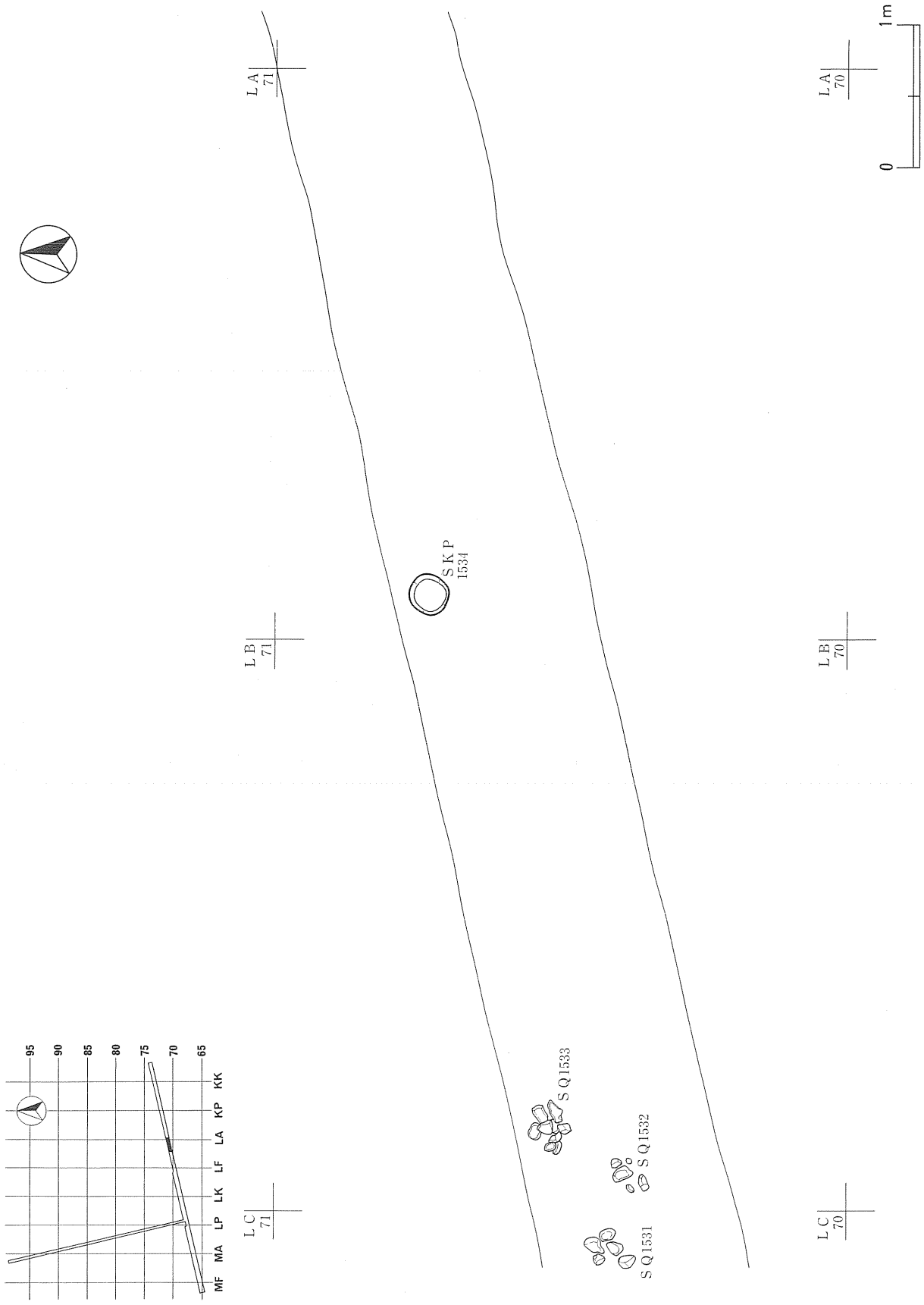
第64図　Ｉトレンチ遺構配置（８）



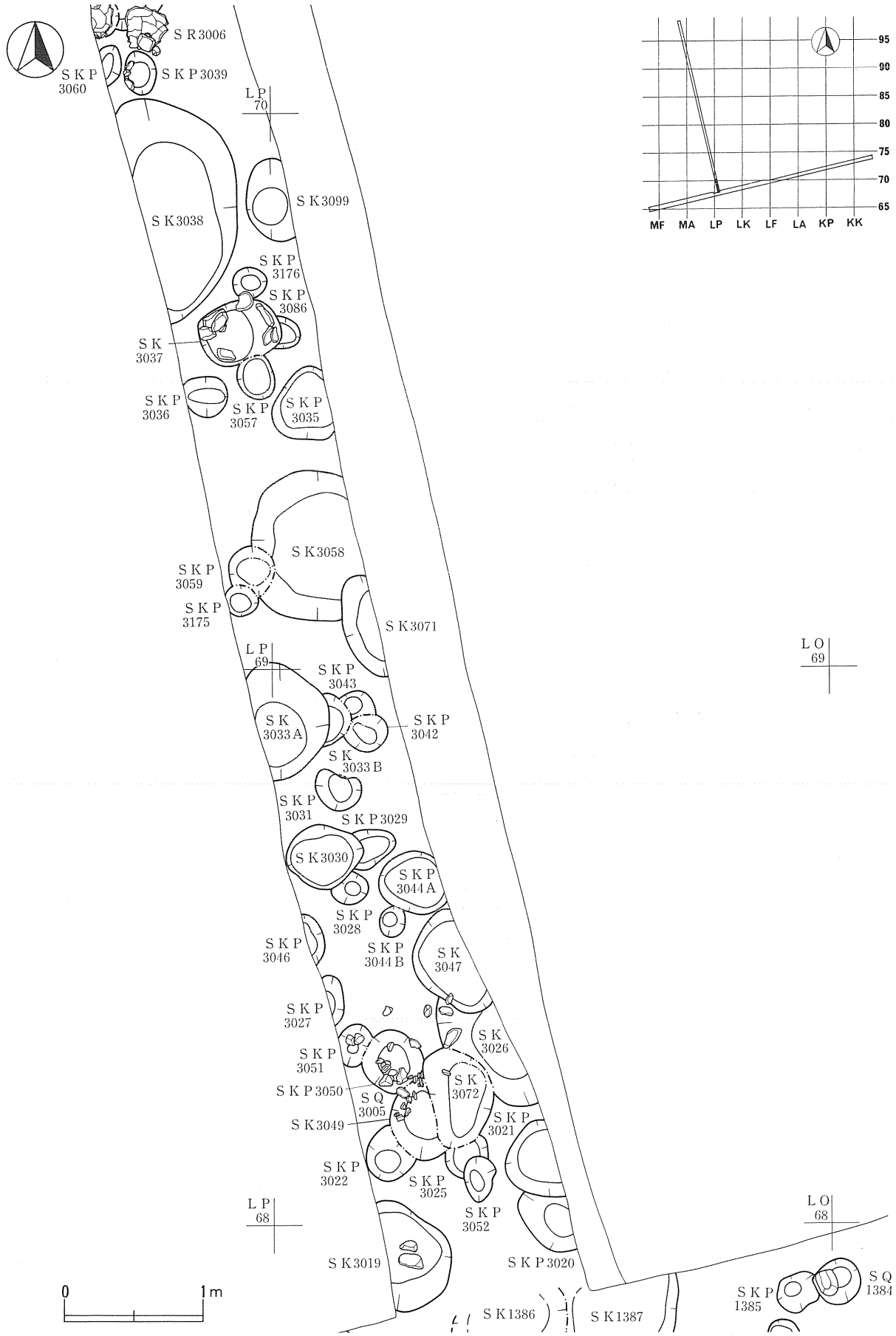
第65図　Ⅰトレンチ遺構配置(9)



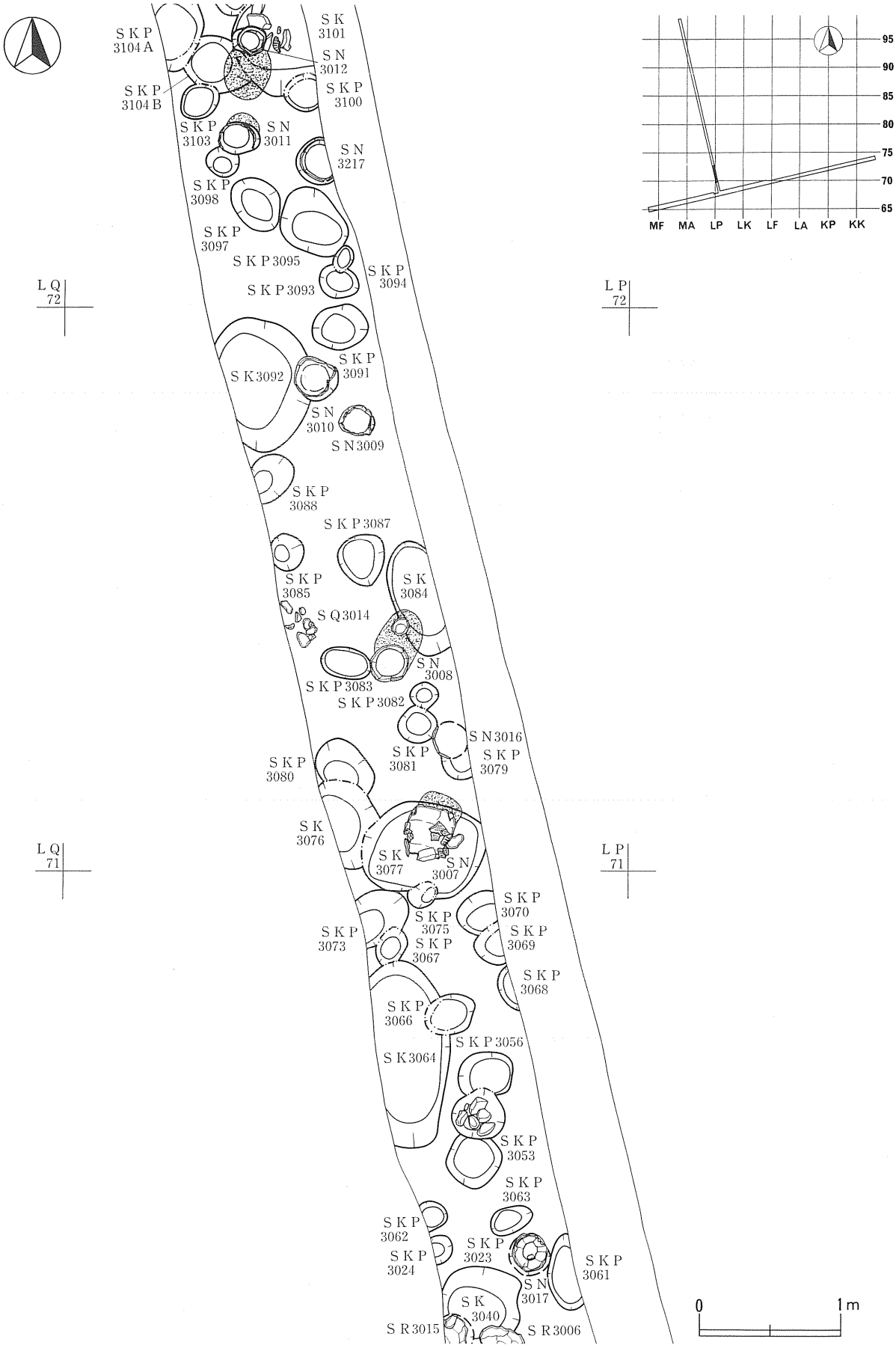
第66図　Ｉトレンチ遺構配置(10)



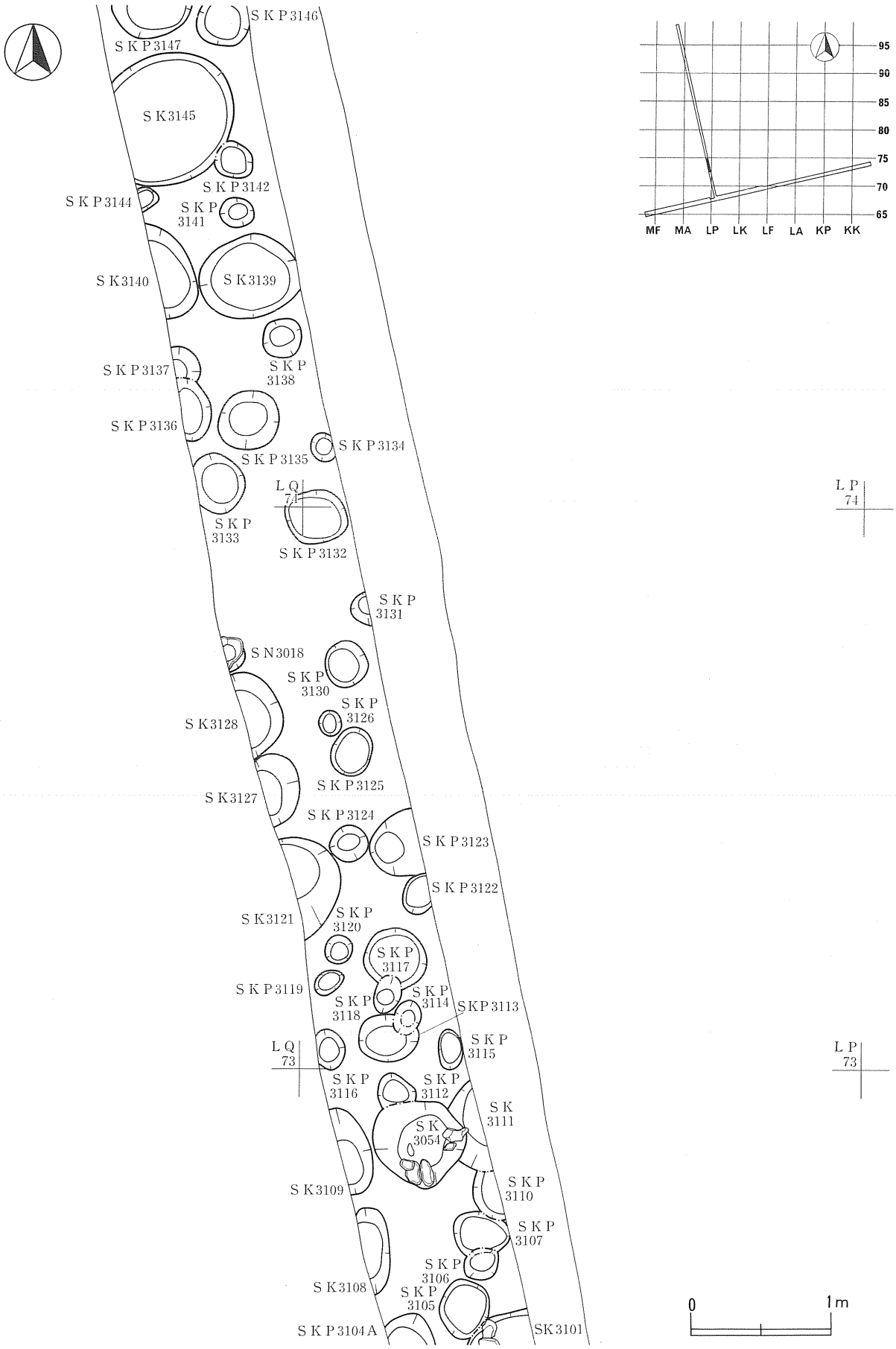
第67図　Ｉトレンチ遺構配置(11)



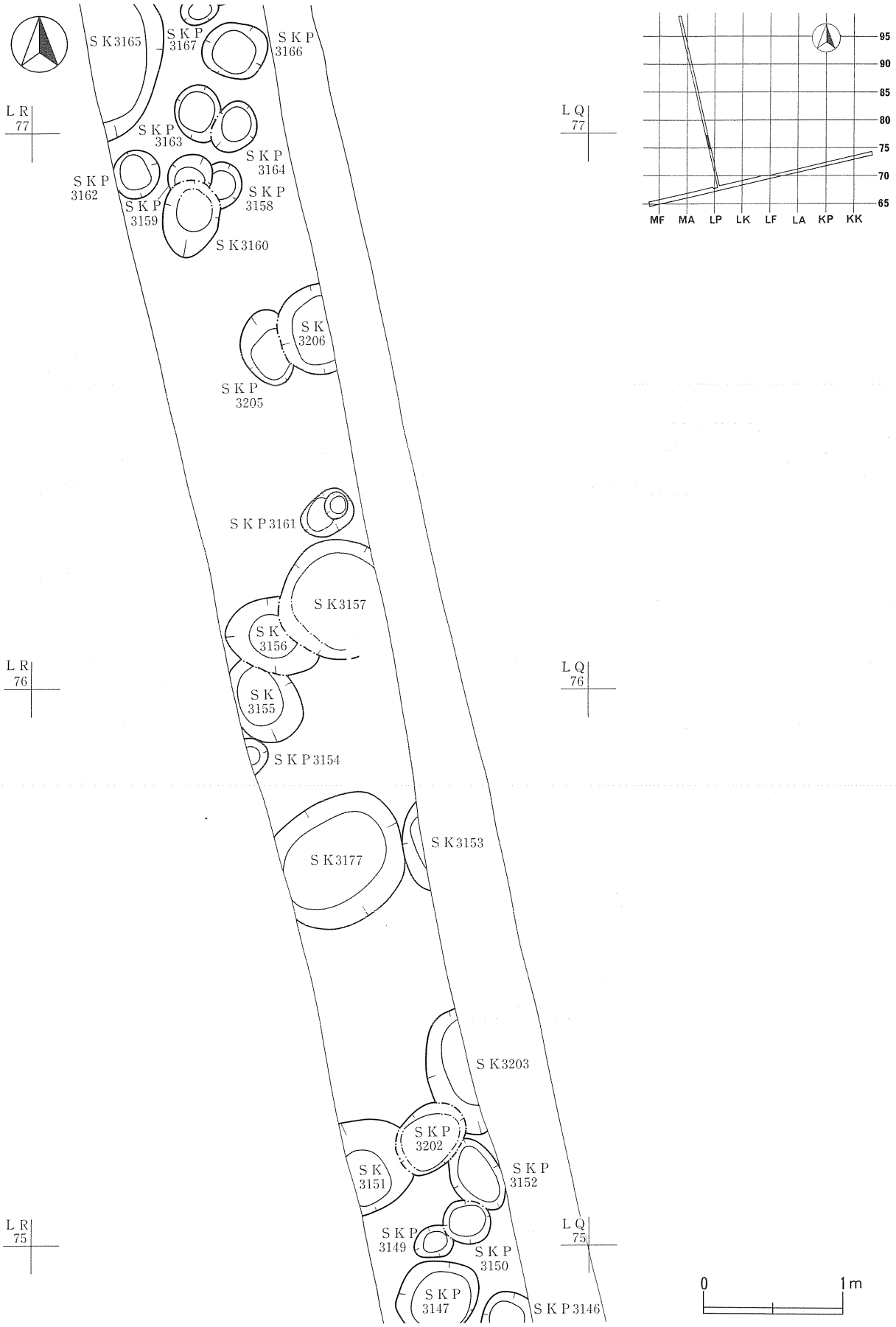
第68図　Ⅲトレンチ遺構配置（１）



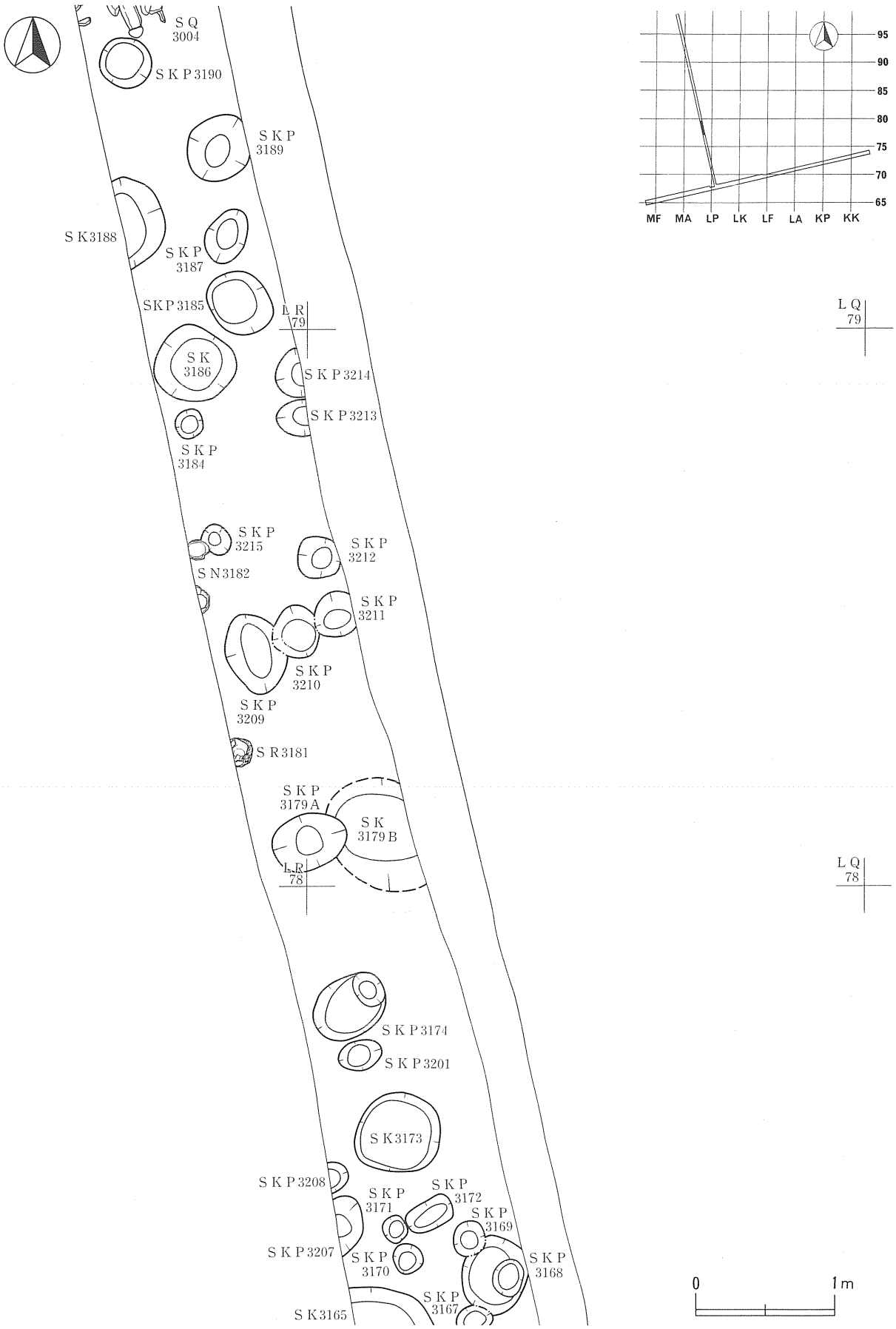
第69図　Ⅲトレンチ遺構配置（２）



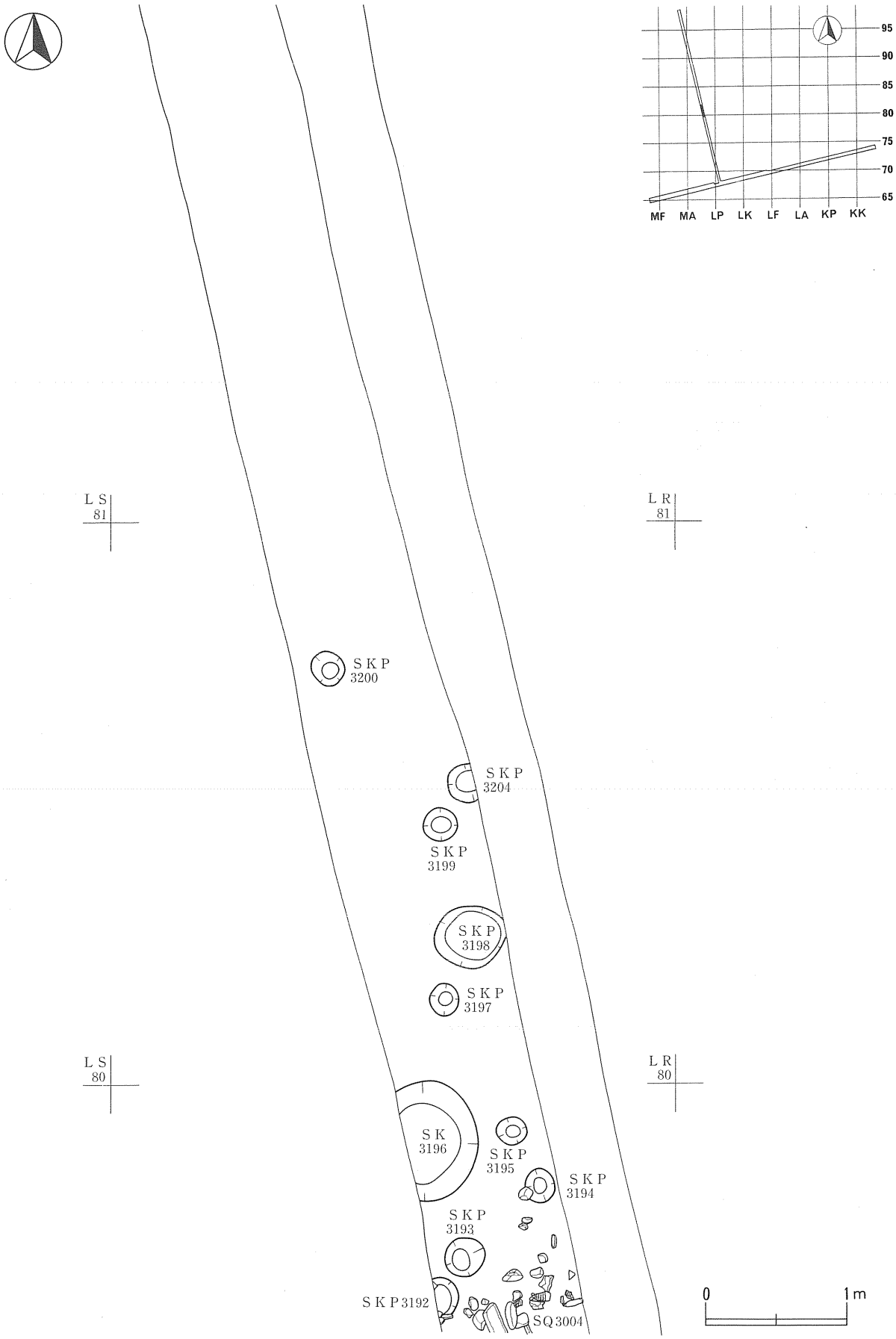
第70図　Ⅲトレンチ遺構配置（３）



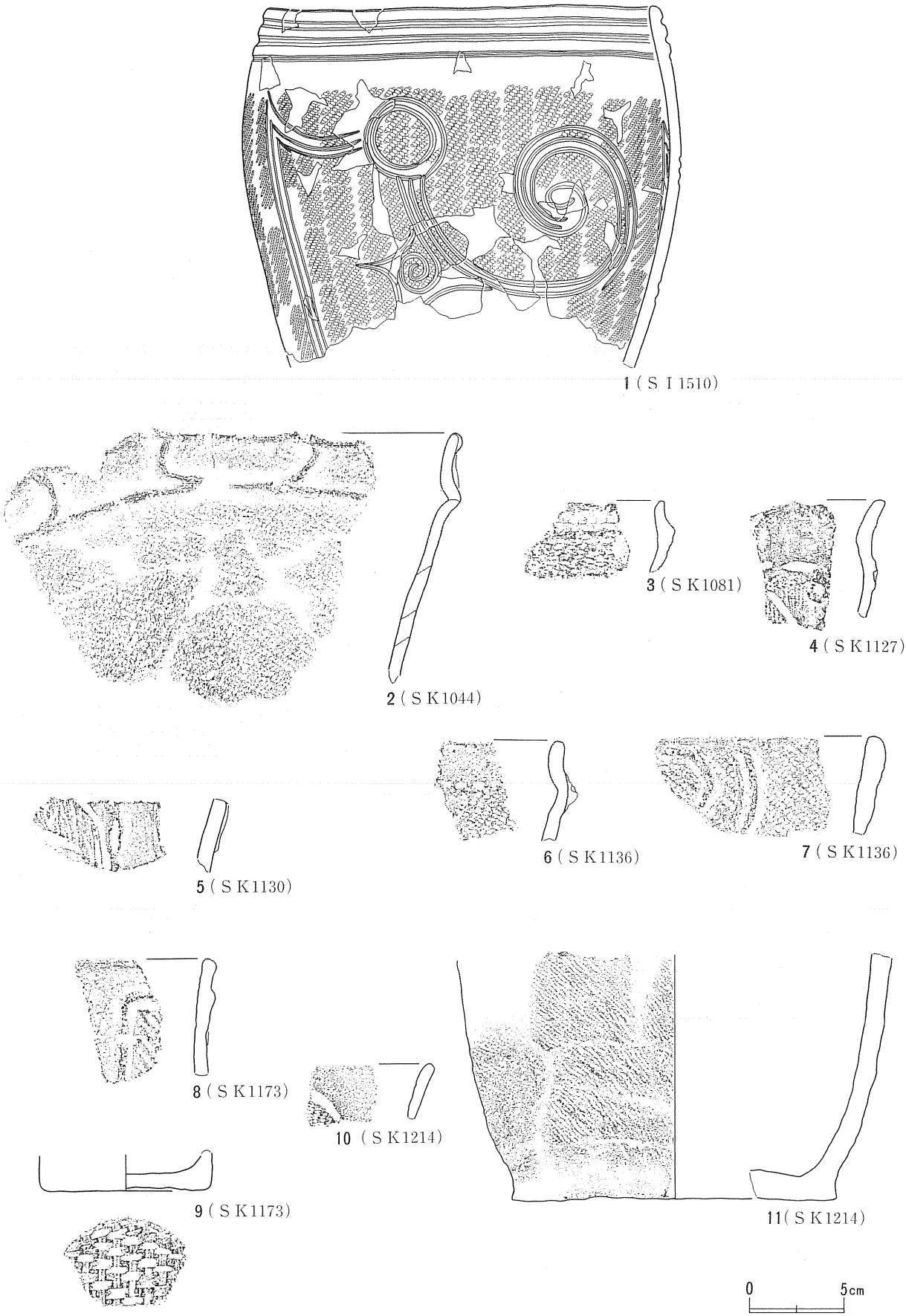
第71図　Ⅲトレンチ遺構配置（４）



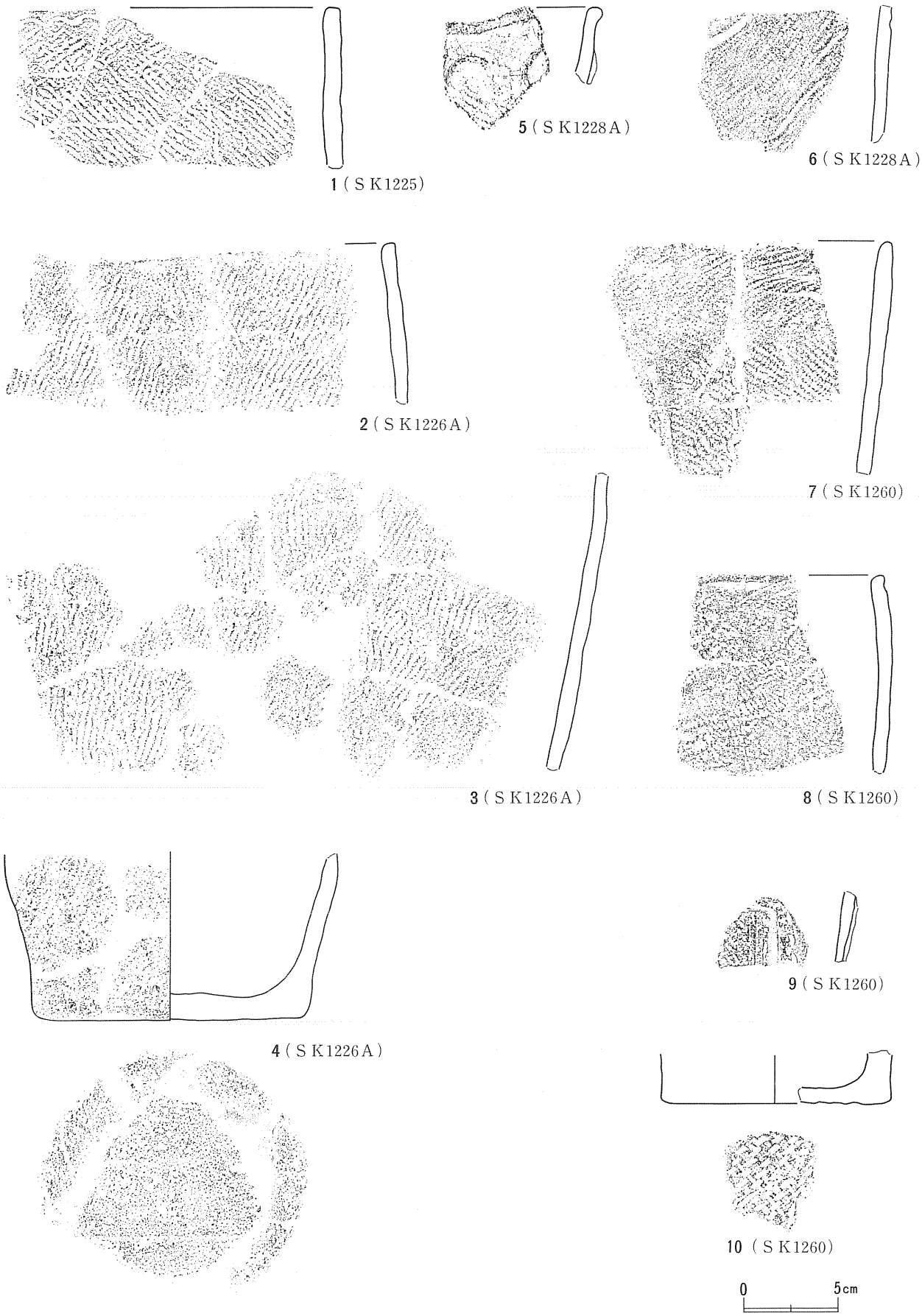
第72図　Ⅲトレンチ遺構配置（５）



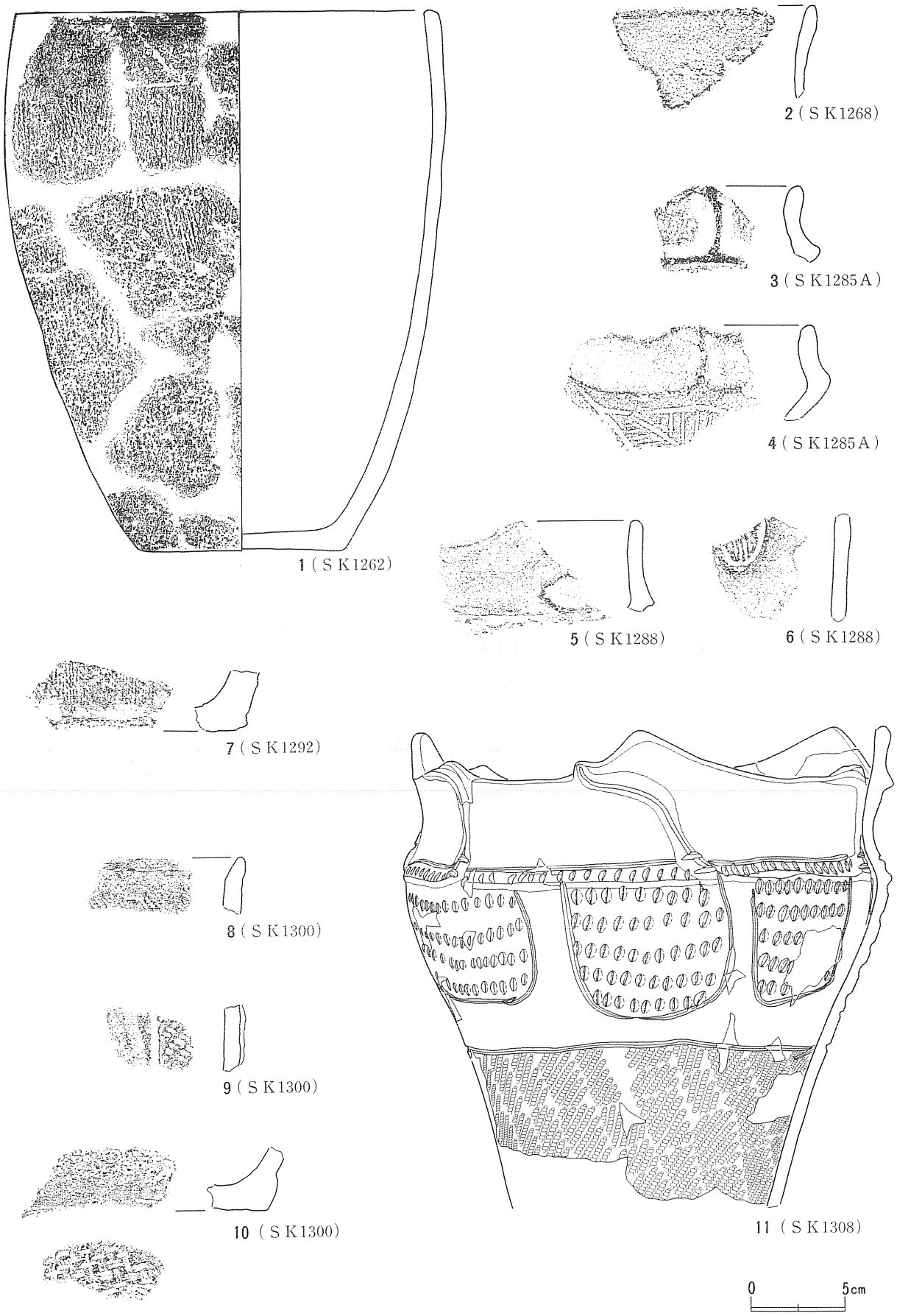
第73図　Ⅲトレンチ遺構配置（６）



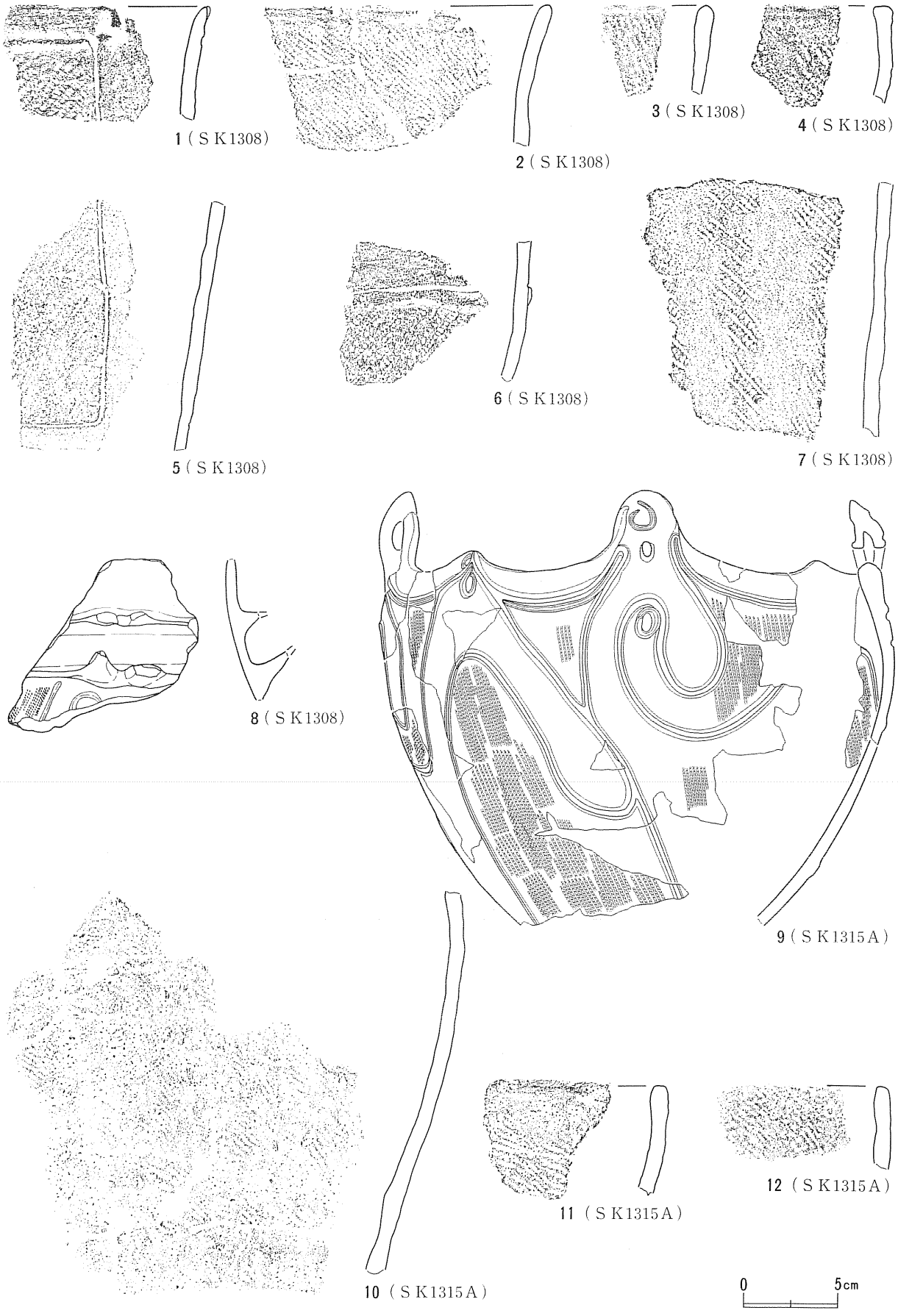
第74図　遺構出土土器類（１）（SI1510、SK1044・1081・1127・1130・1136・1173・1214）



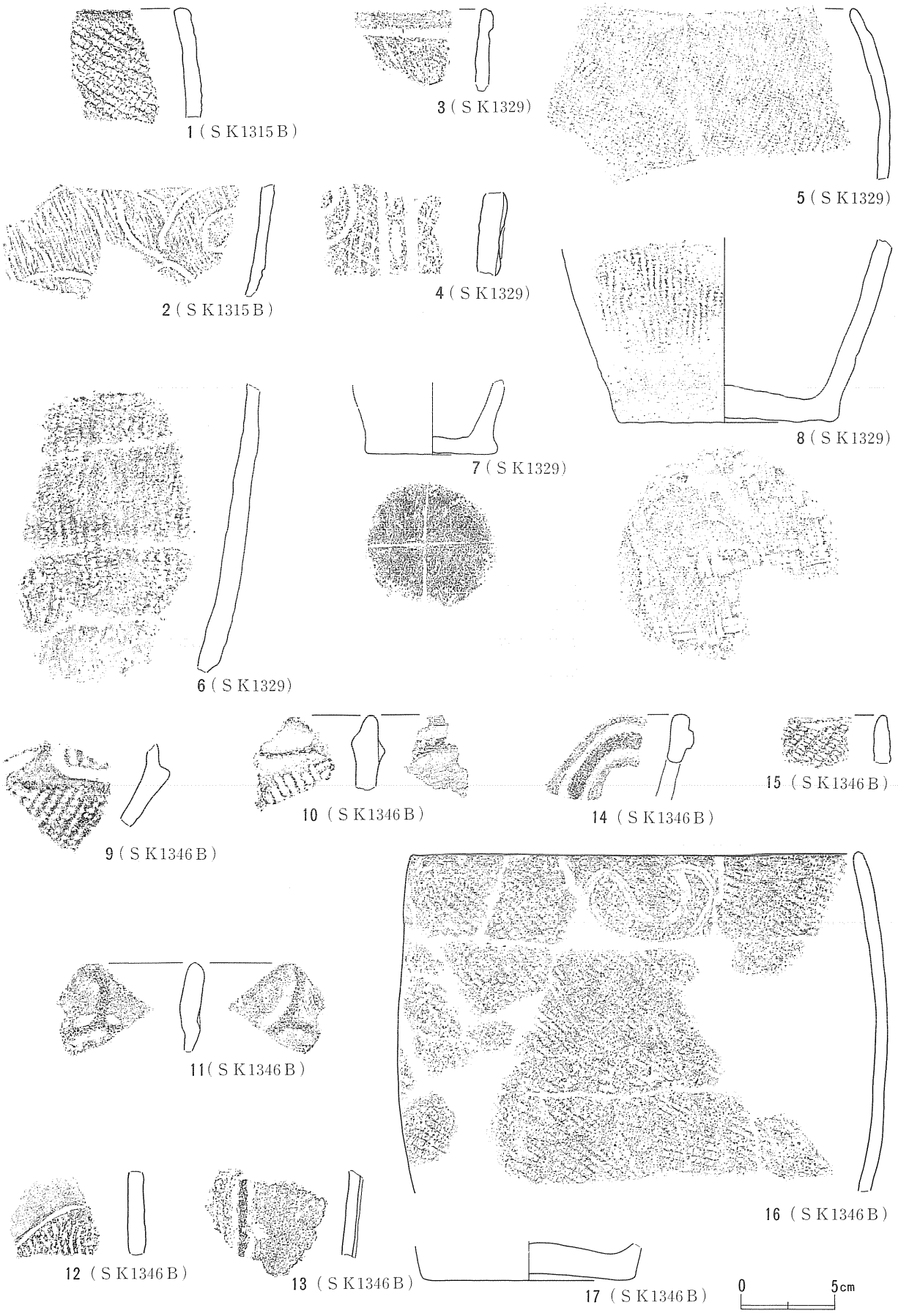
第75図　遺構出土土器類（２）（SK1225・1226A・1228A・1260）



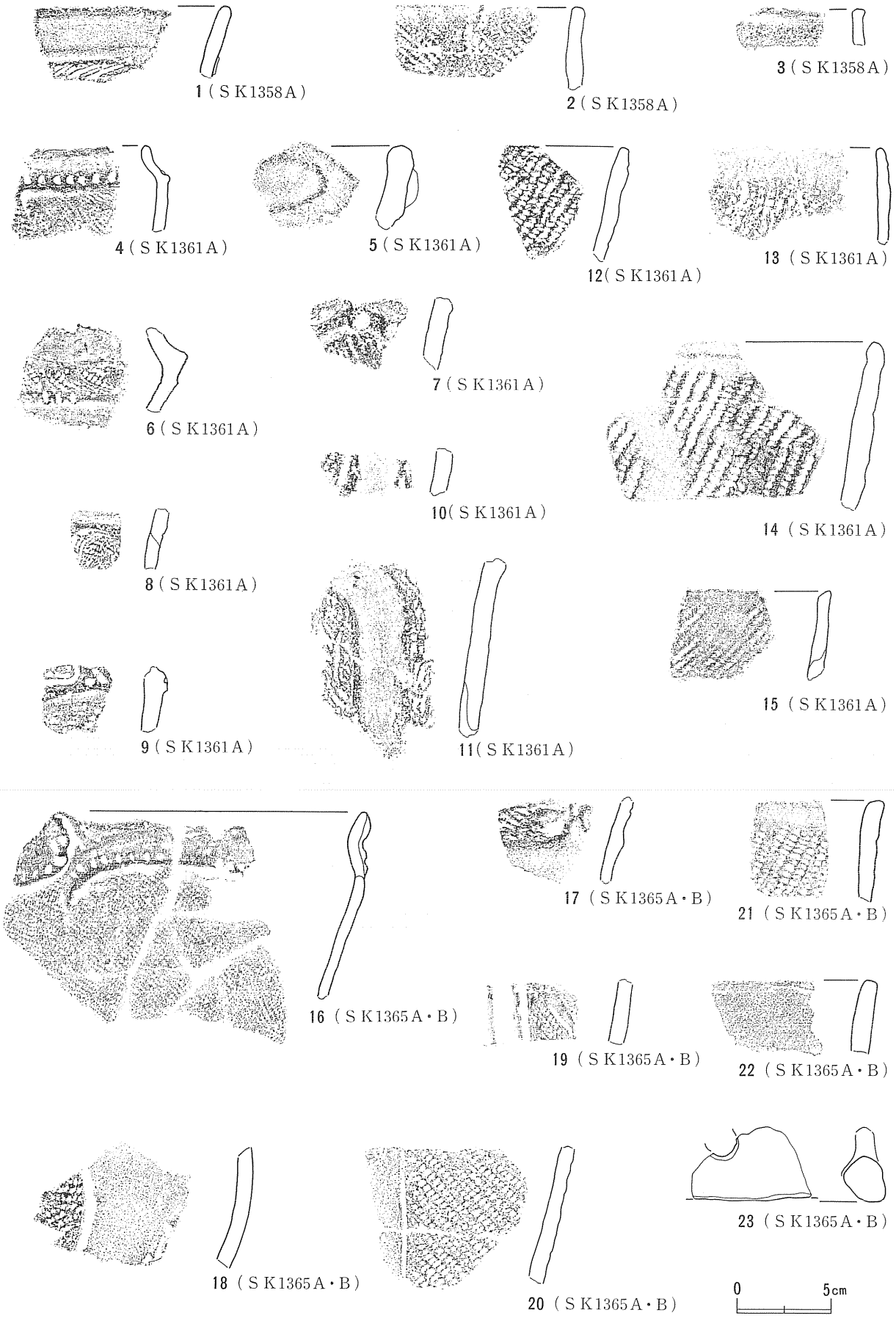
第76図　遺構出土土器類（３）（SK1262・1268・1285A・1288・1292・1300・1308①）



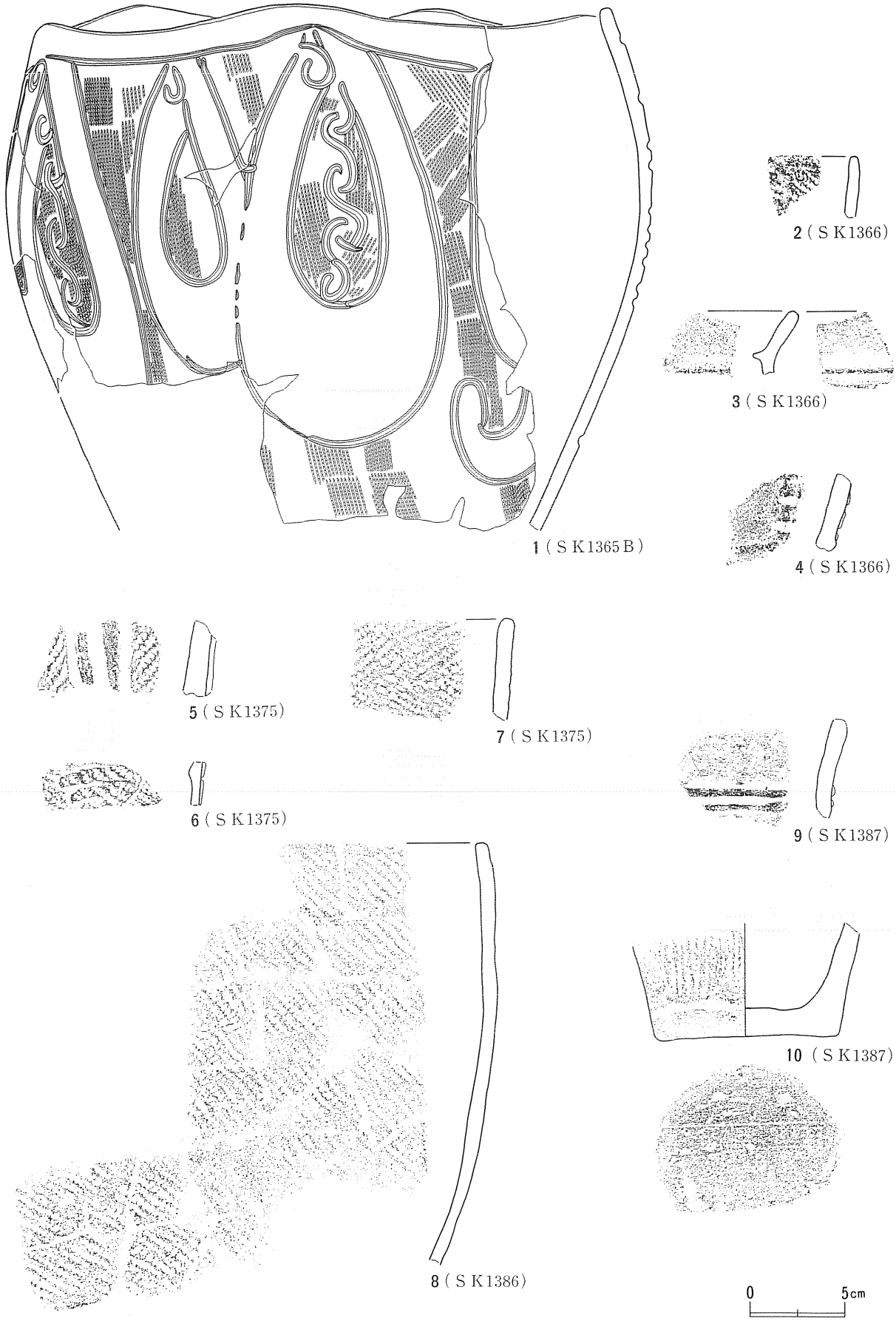
第77図　遺構出土土器類（４）（SK1308②・1315A）



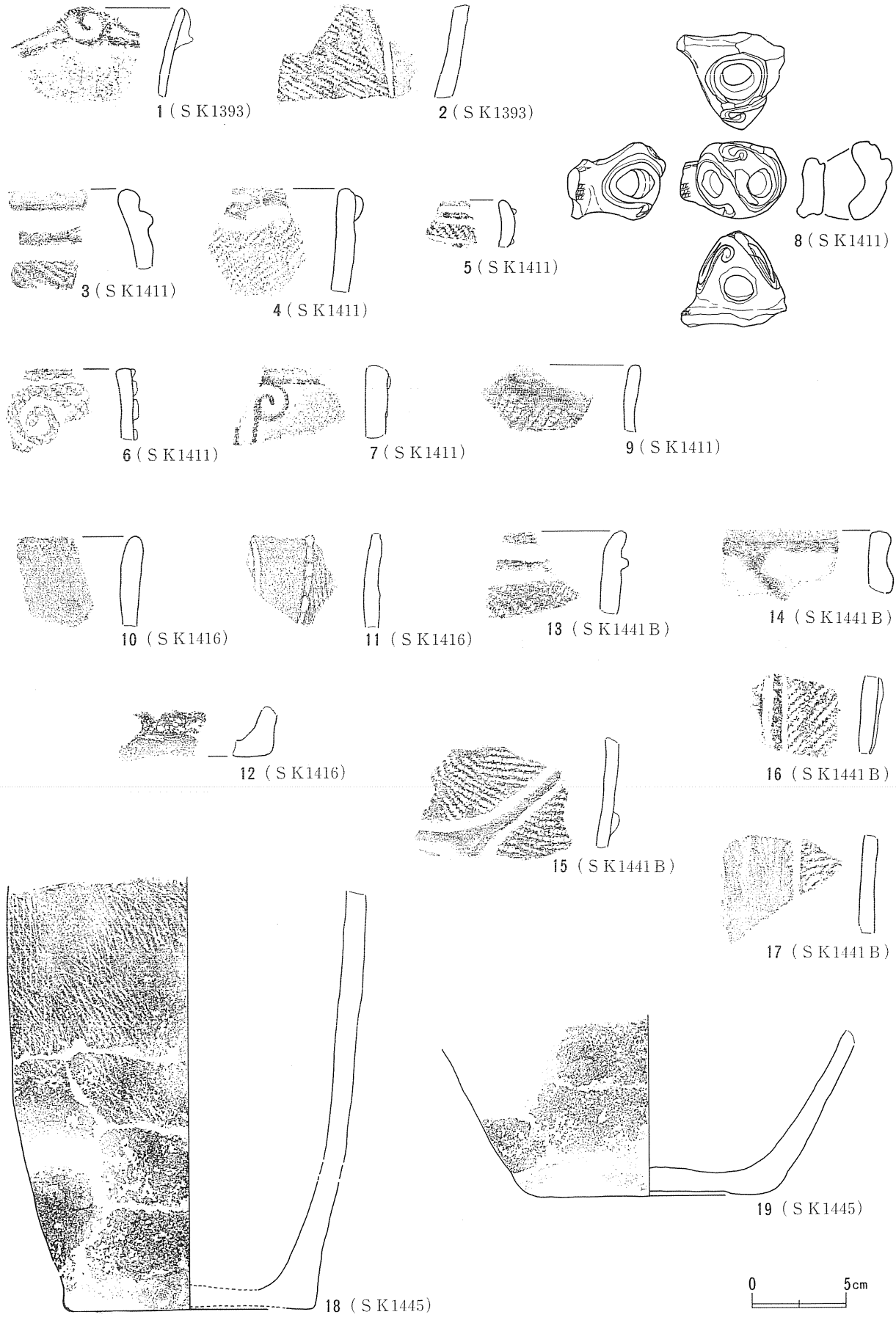
第78図　遺構出土土器類（５）（SK1315B・1329・1346B）



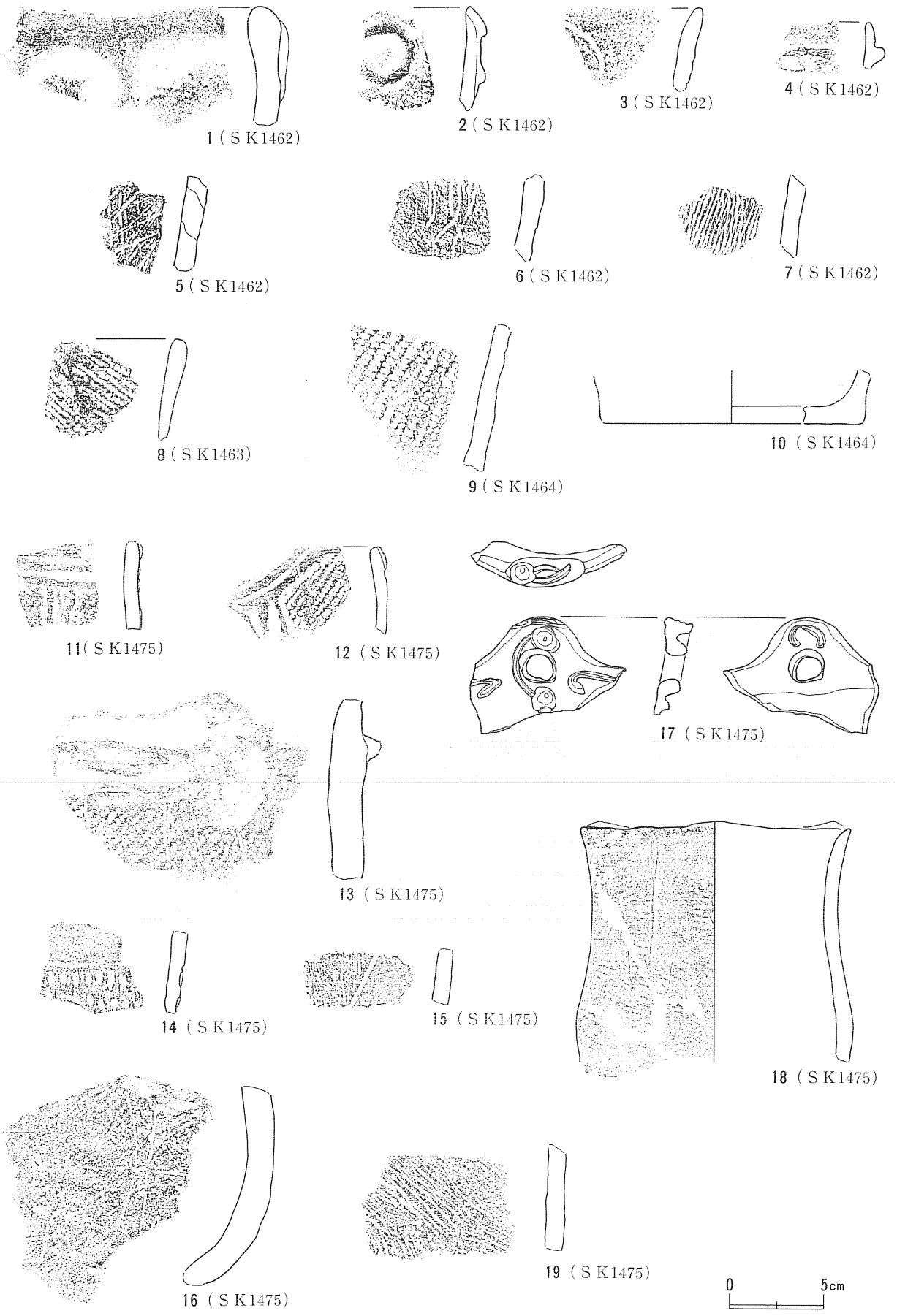
第79図　遺構出土土器類（６）（SK1358A･1361A･1365A･B）



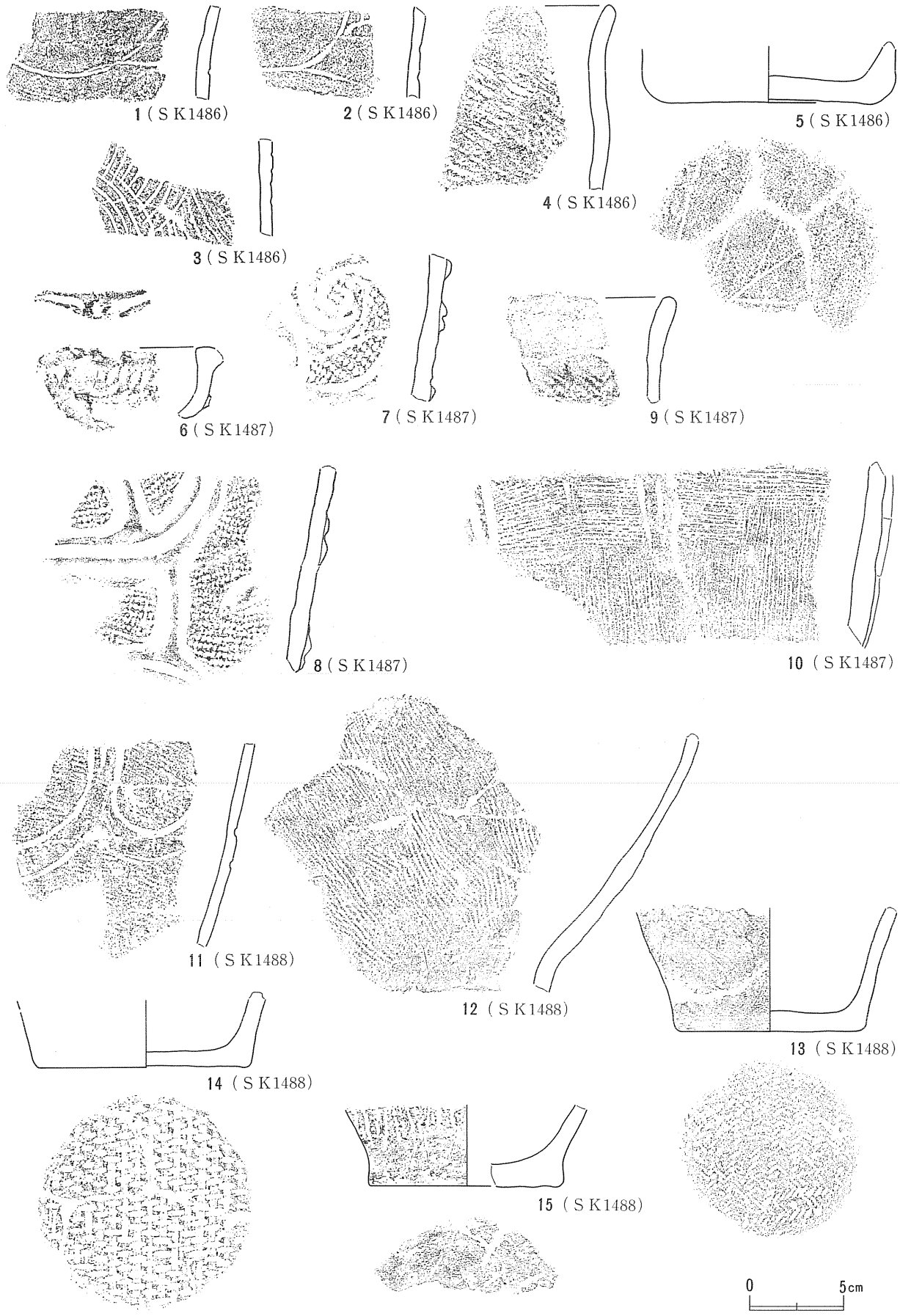
第80図　遺構出土土器類（７）（SK1365B・1366・1375・1386・1387）



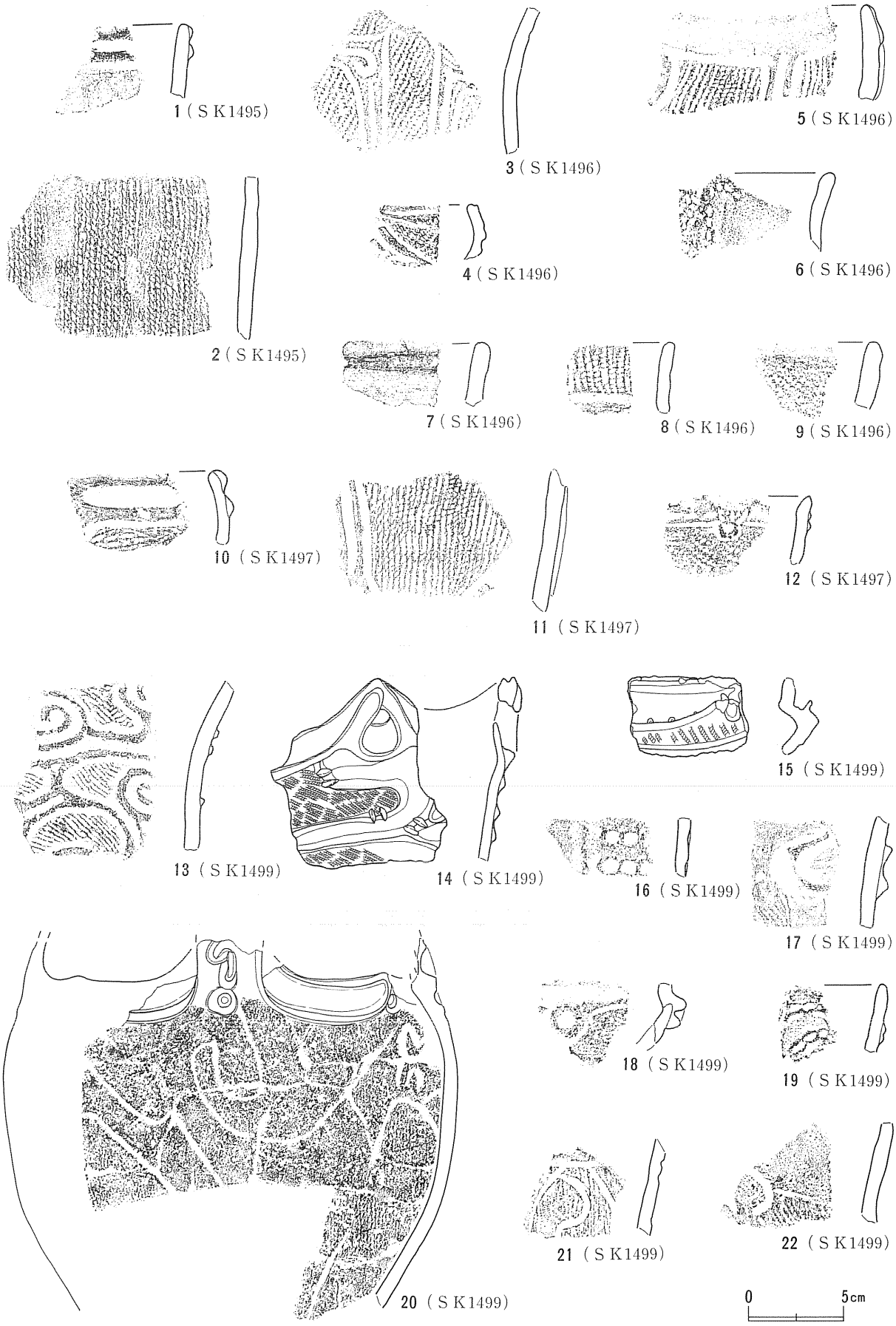
第81図　遺構出土土器類（８）（SK1393・1411・1416・1441B・1445）



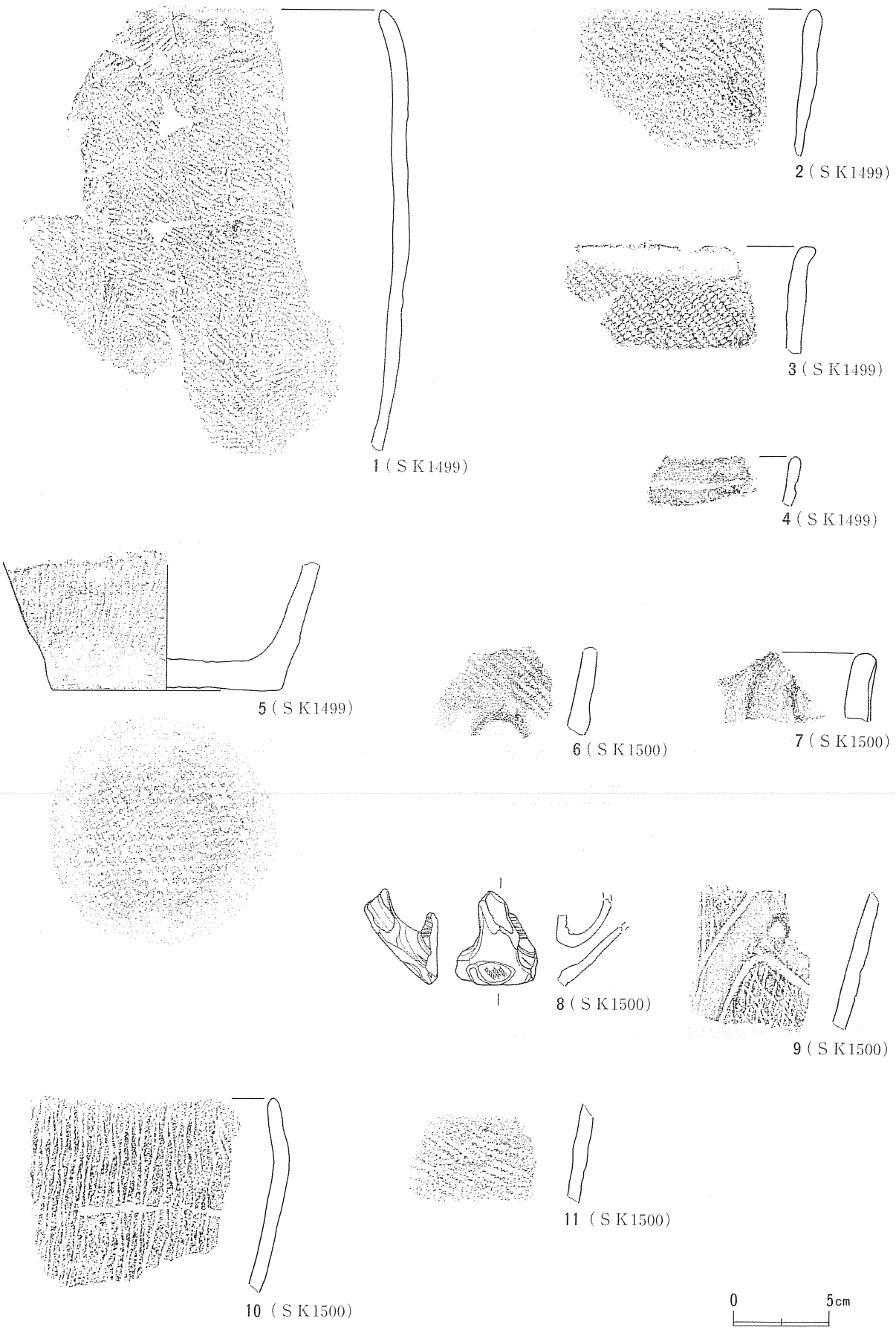
第82図　遺構出土土器類（９）（SK1462・1463・1464・1475）



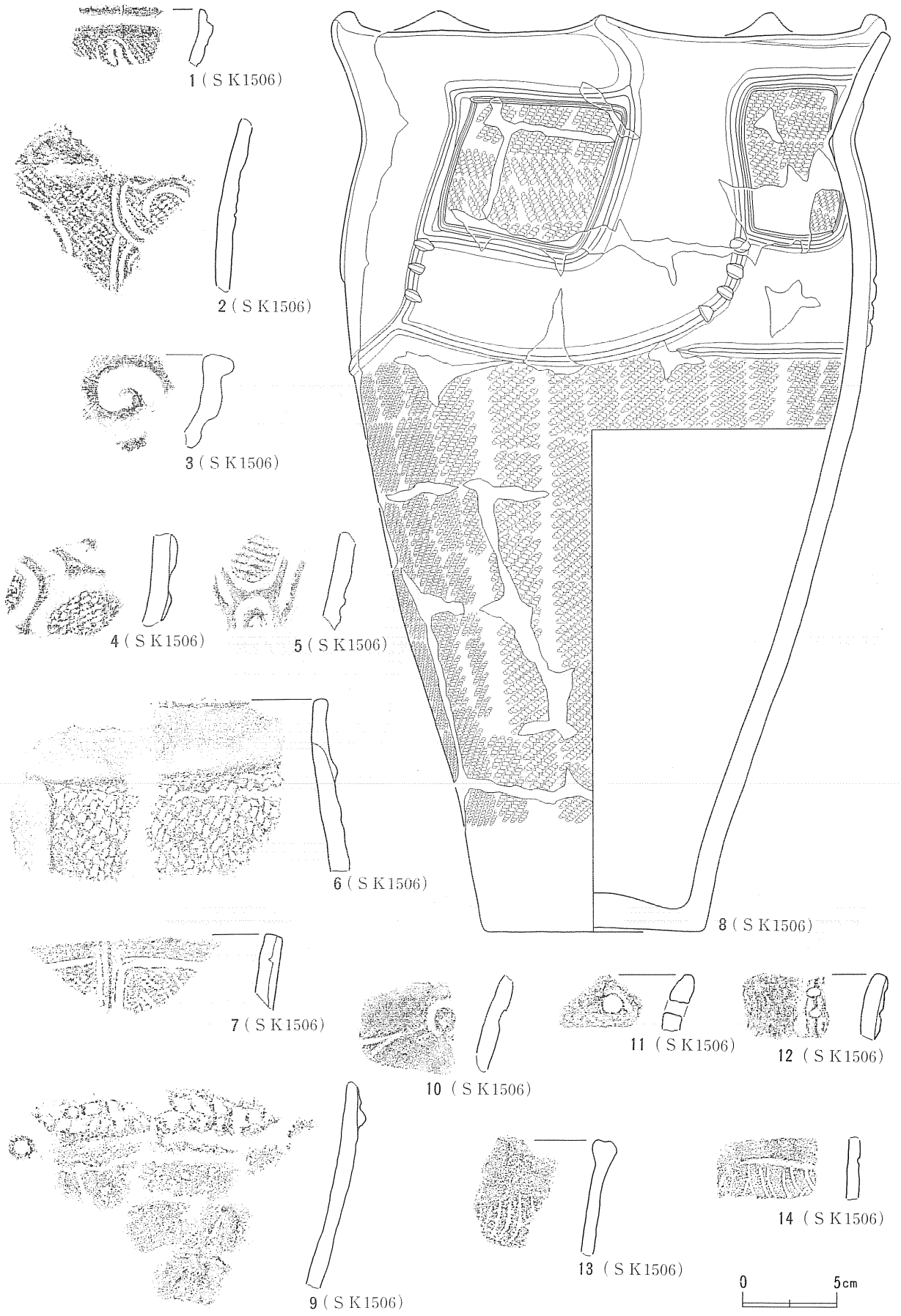
第83図　遺構出土土器類(10)（SK1486・1487・1488）



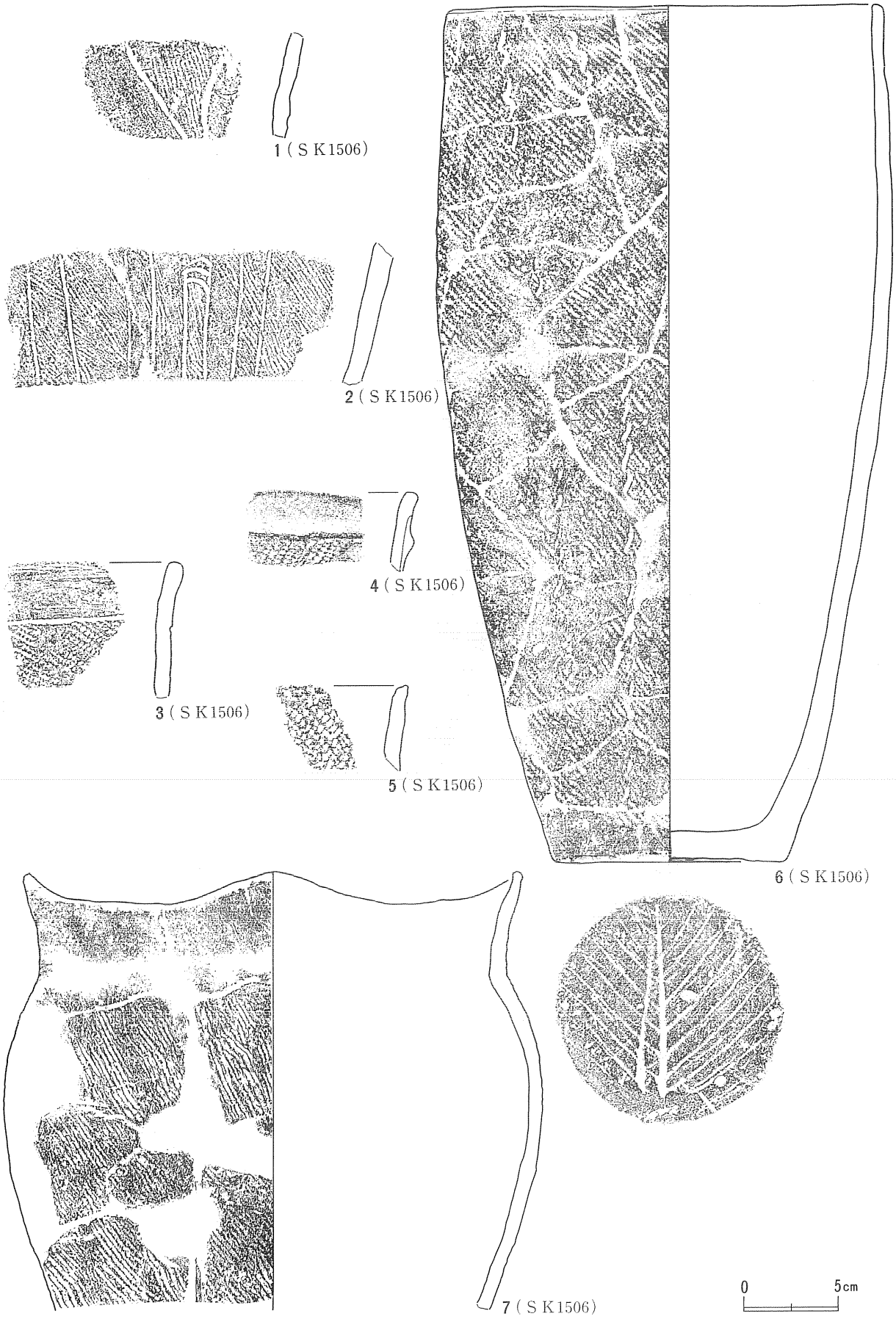
第84図　遺構出土土器類(11)（SK1495・1496・1497・1499①）



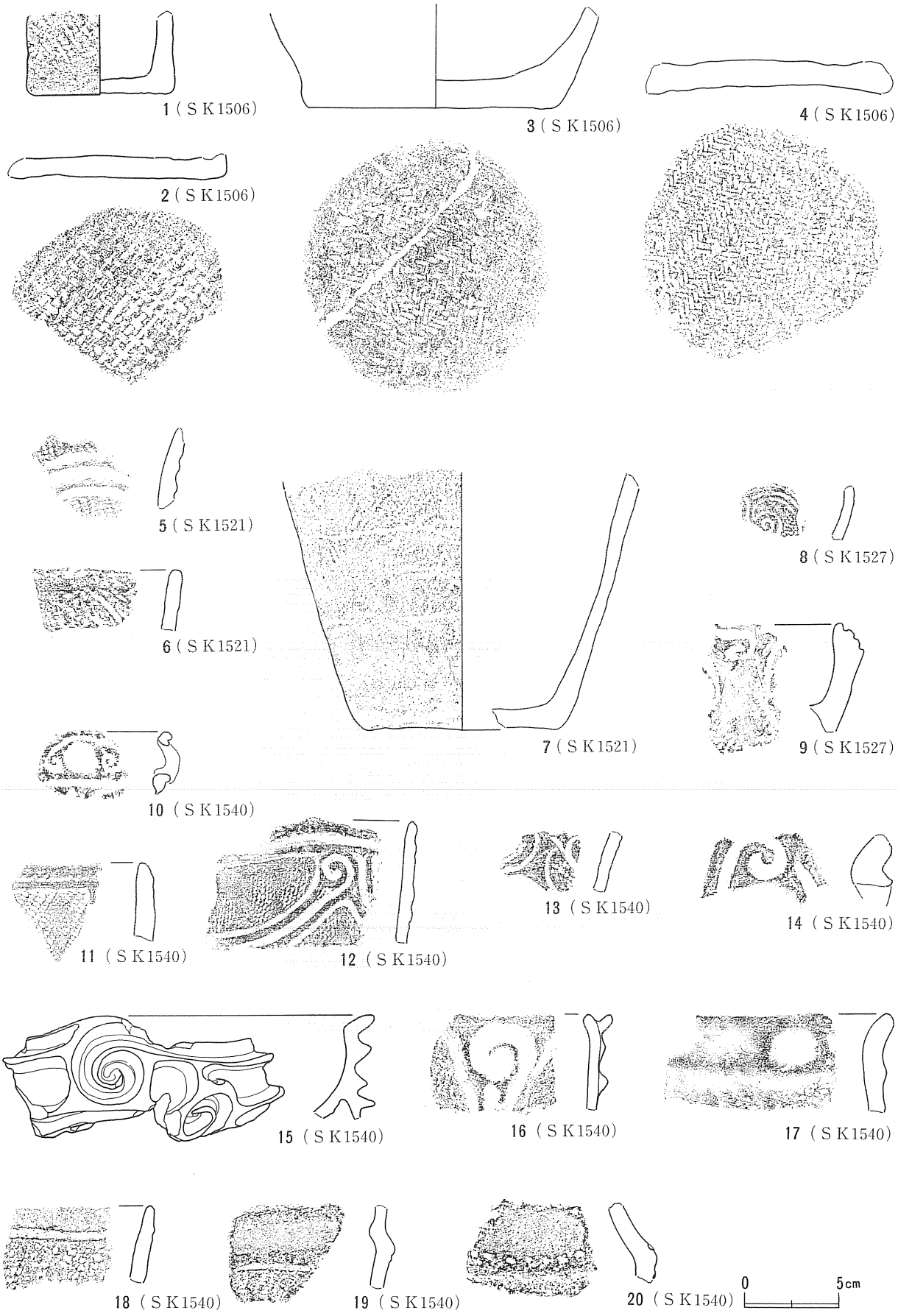
第85図　遺構出土土器類(12)（SK1499②・1500）



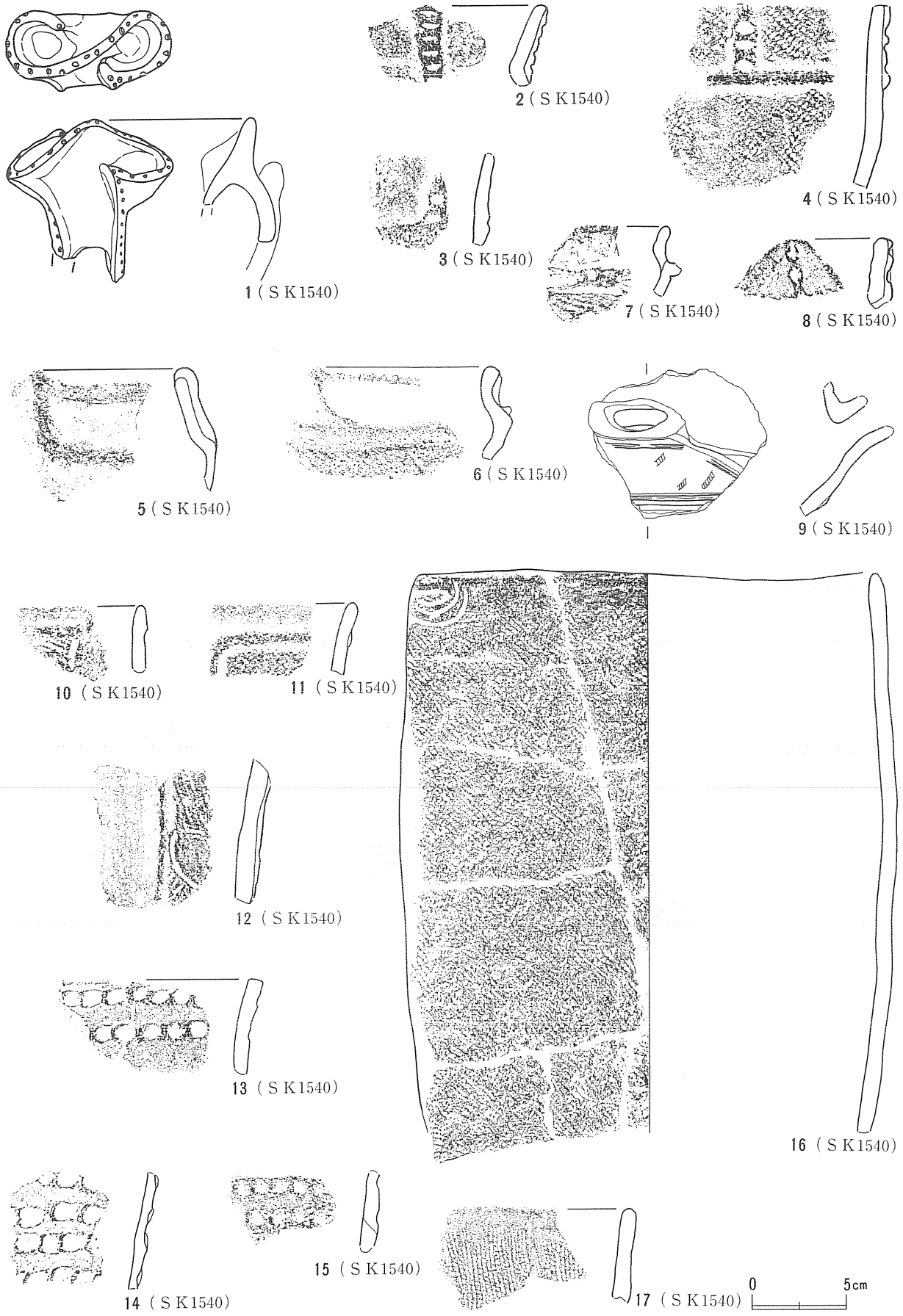
第86図　遺構出土土器類(13)（SK1506①）



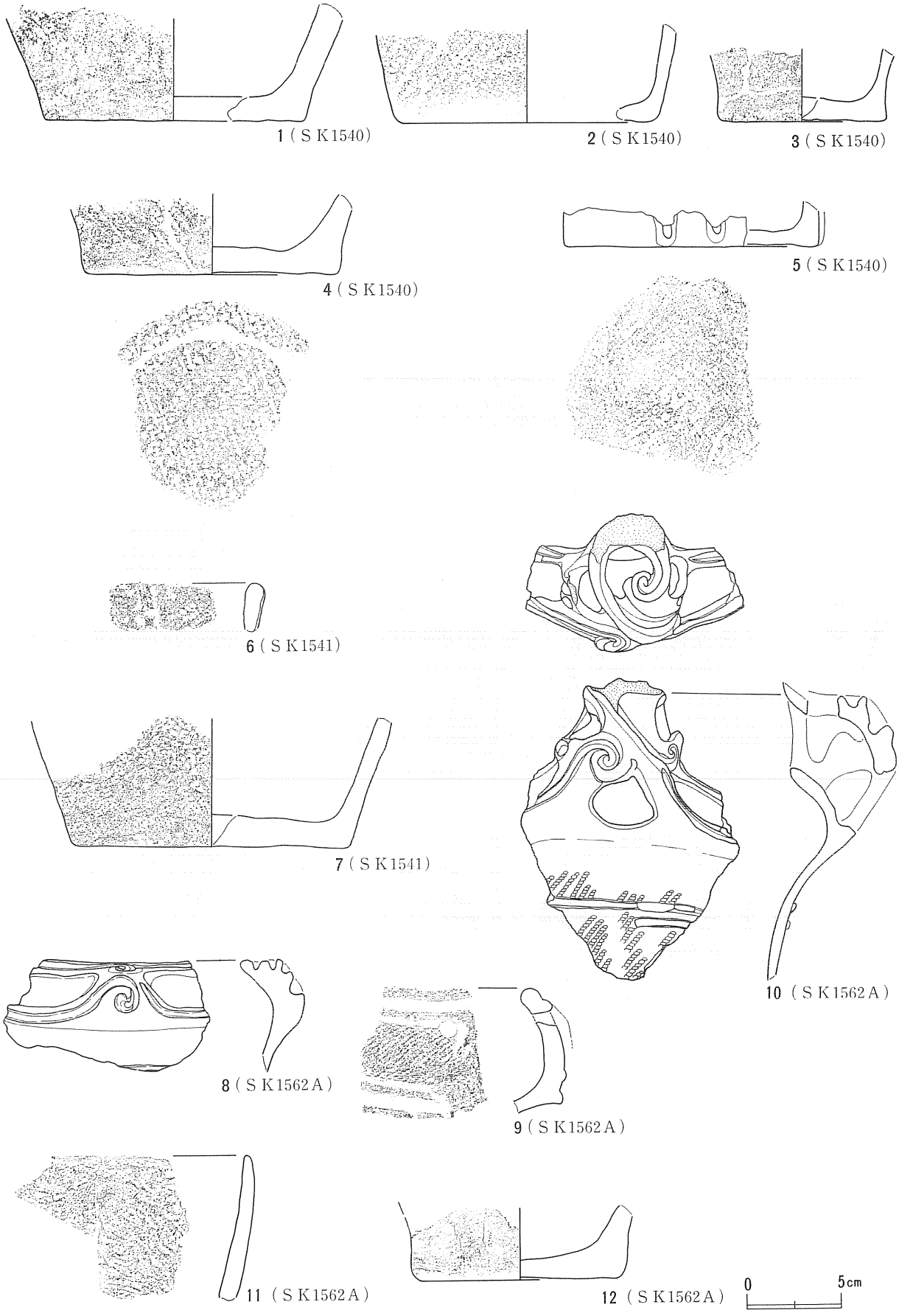
第87図　遺構出土土器類(14)（SK1506②）



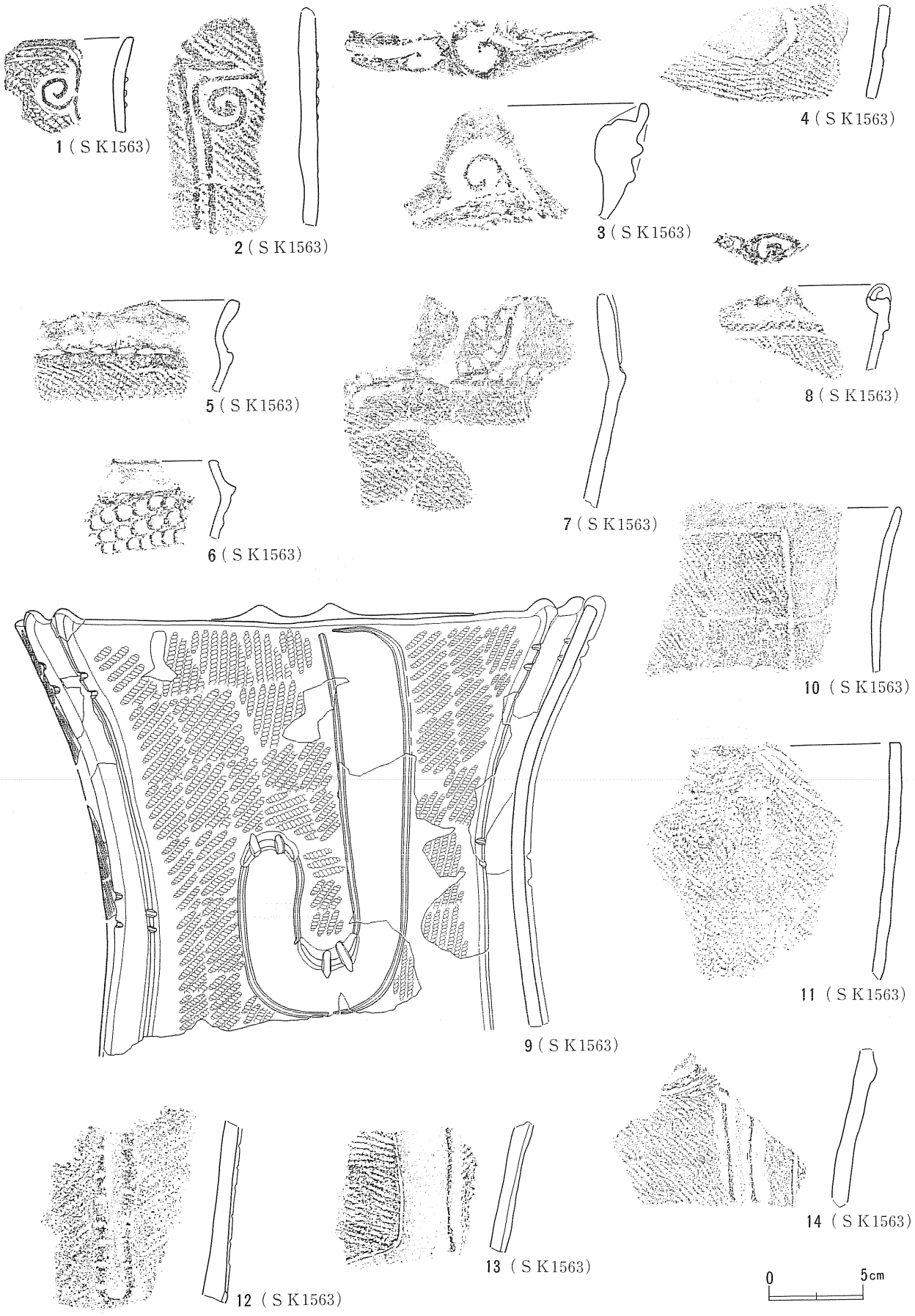
第88図　遺構出土土器類(15)（SK1506③・1521・1527・1540①）



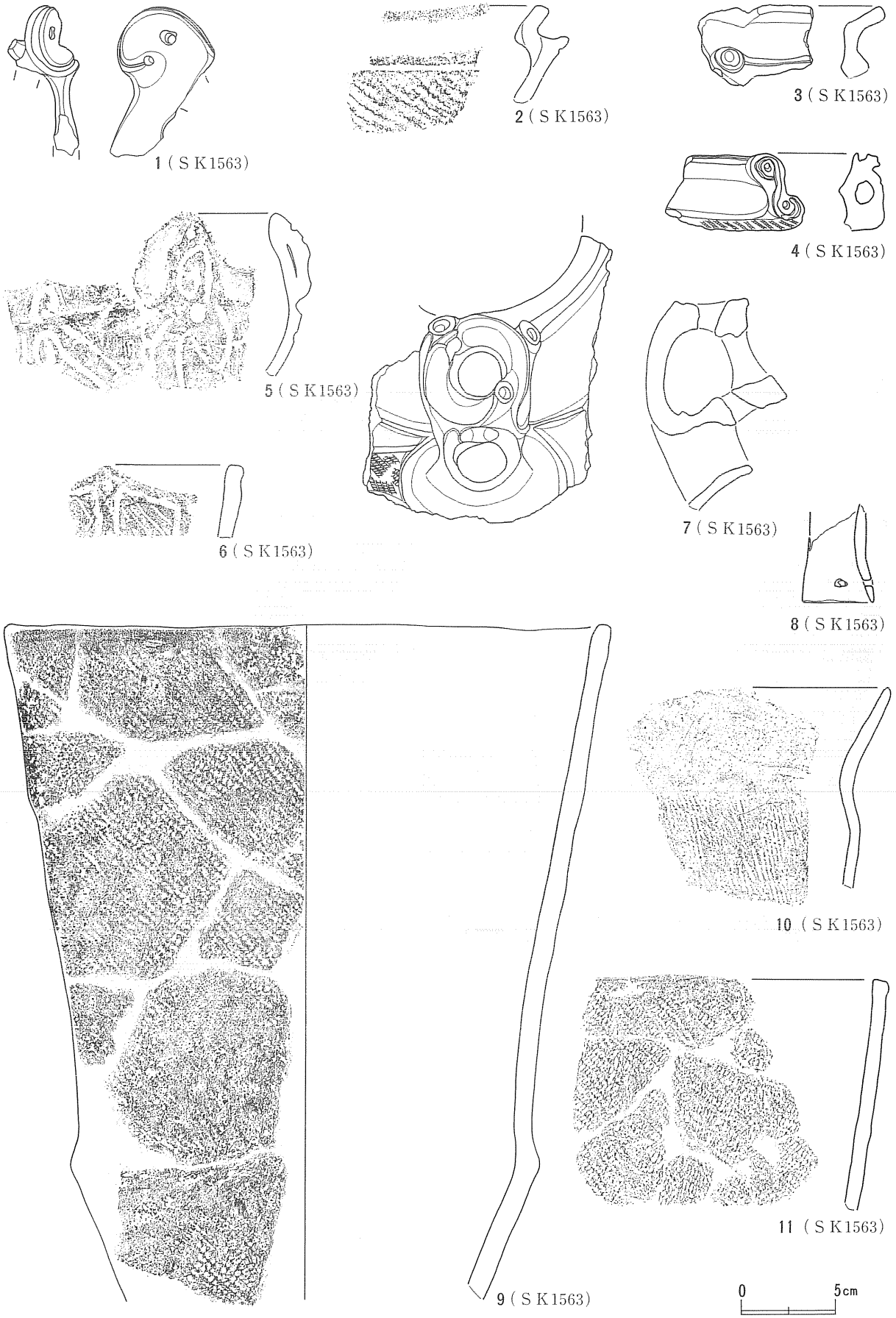
第89図　遺構出土土器類(16)（SK1540②）



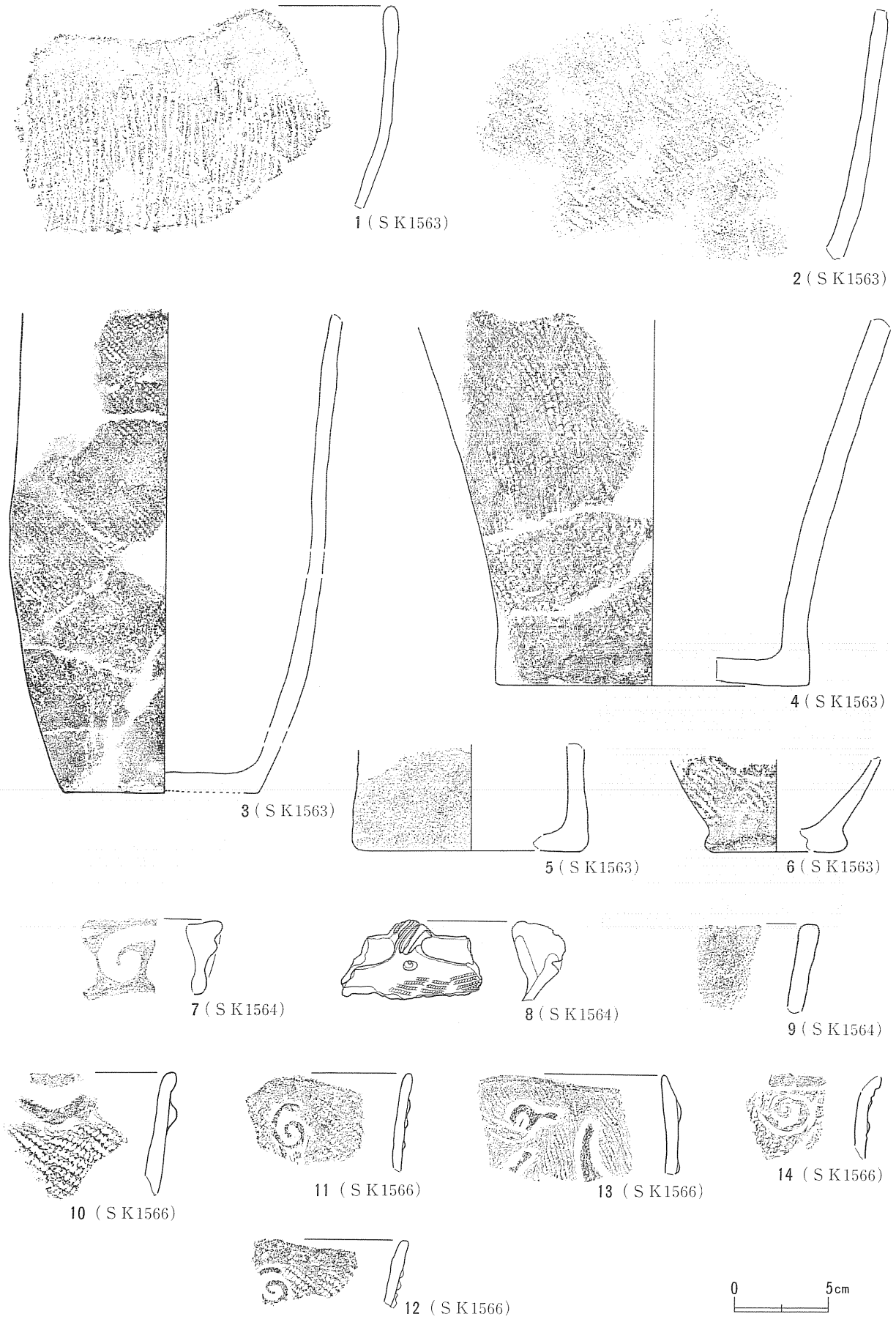
第90図　遺構出土土器類(17)（SK1540③・1541・1562A）



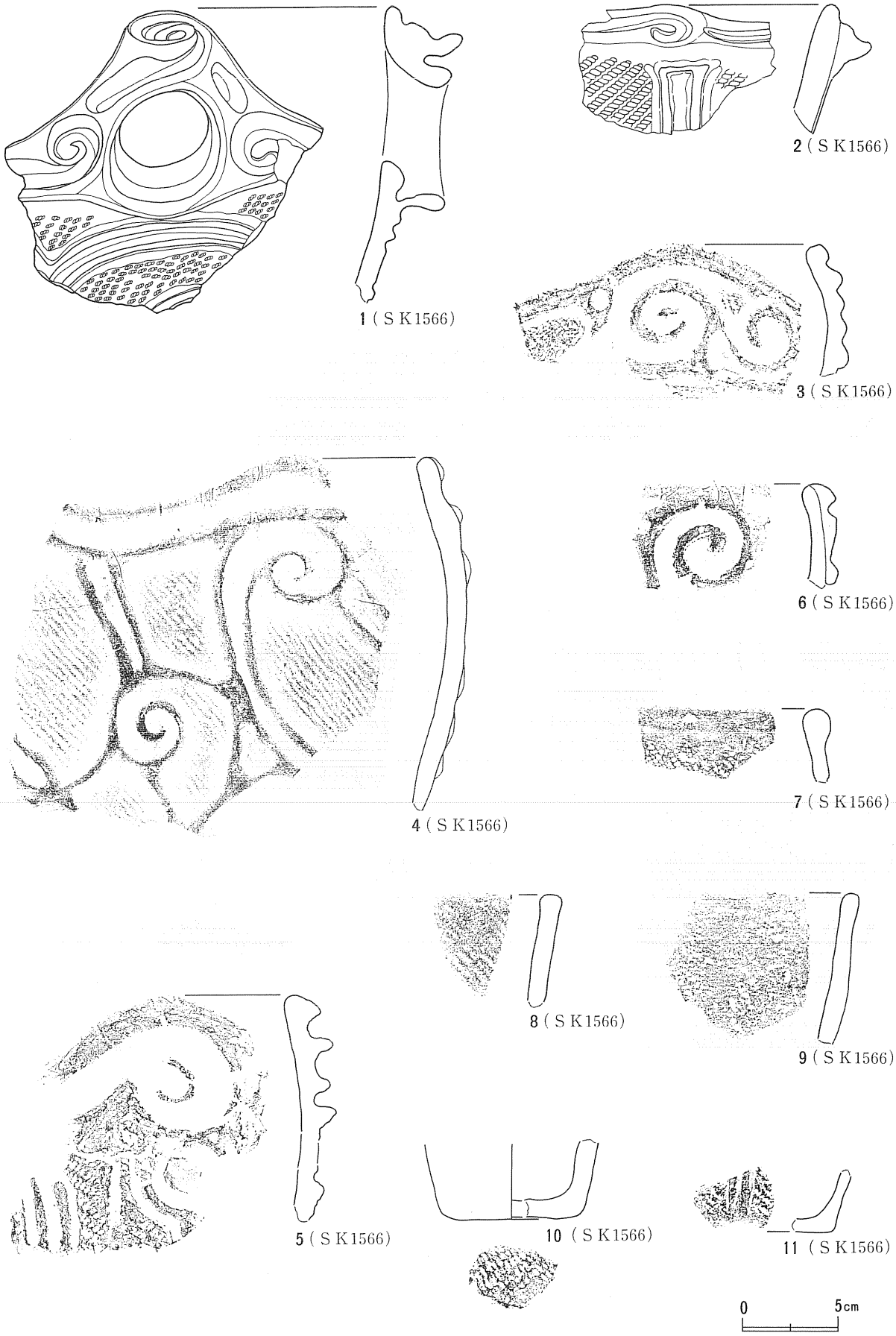
第91図　遺構出土土器類(18)（SK1563①）



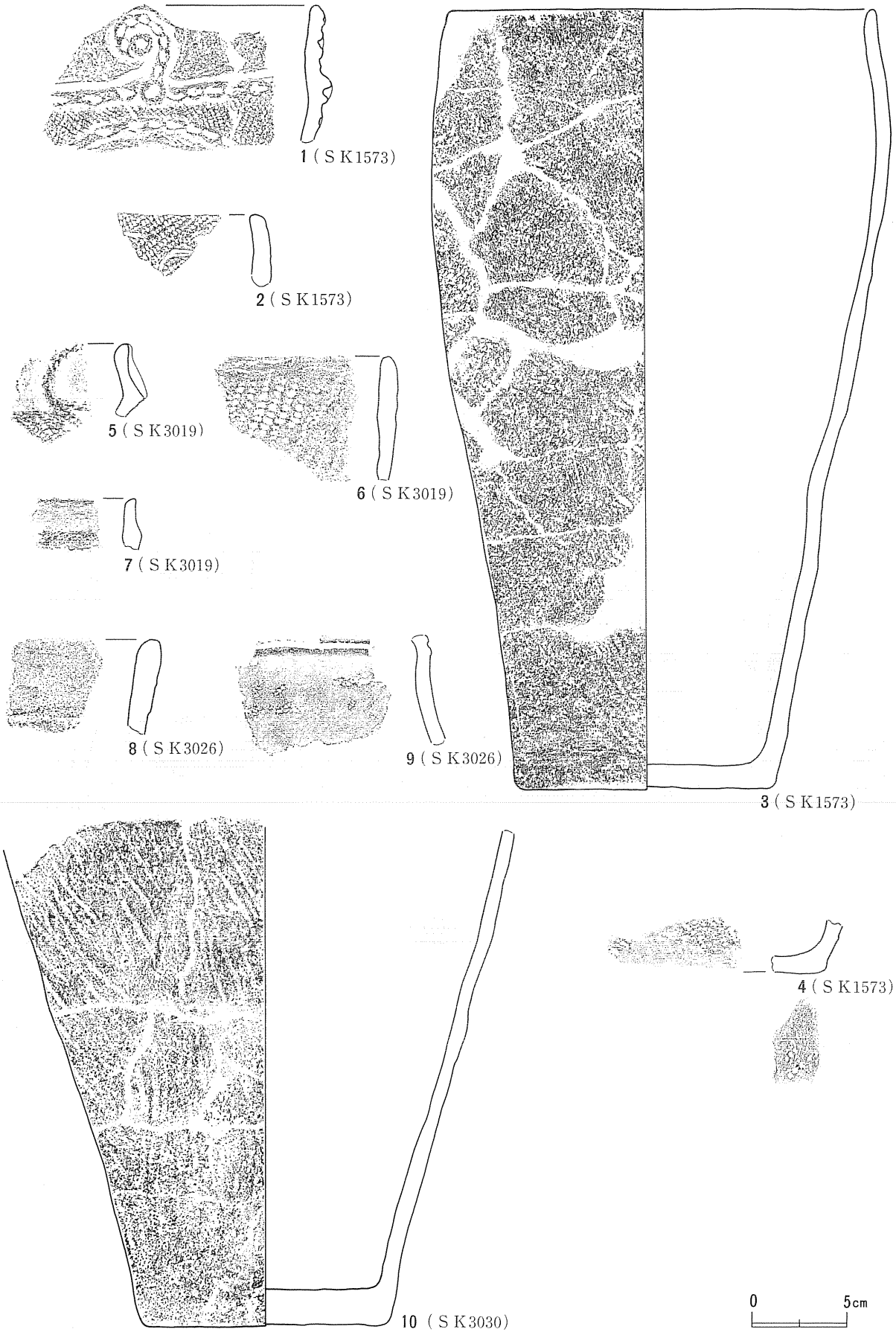
第92図　遺構出土土器類(19)（SK1563②）



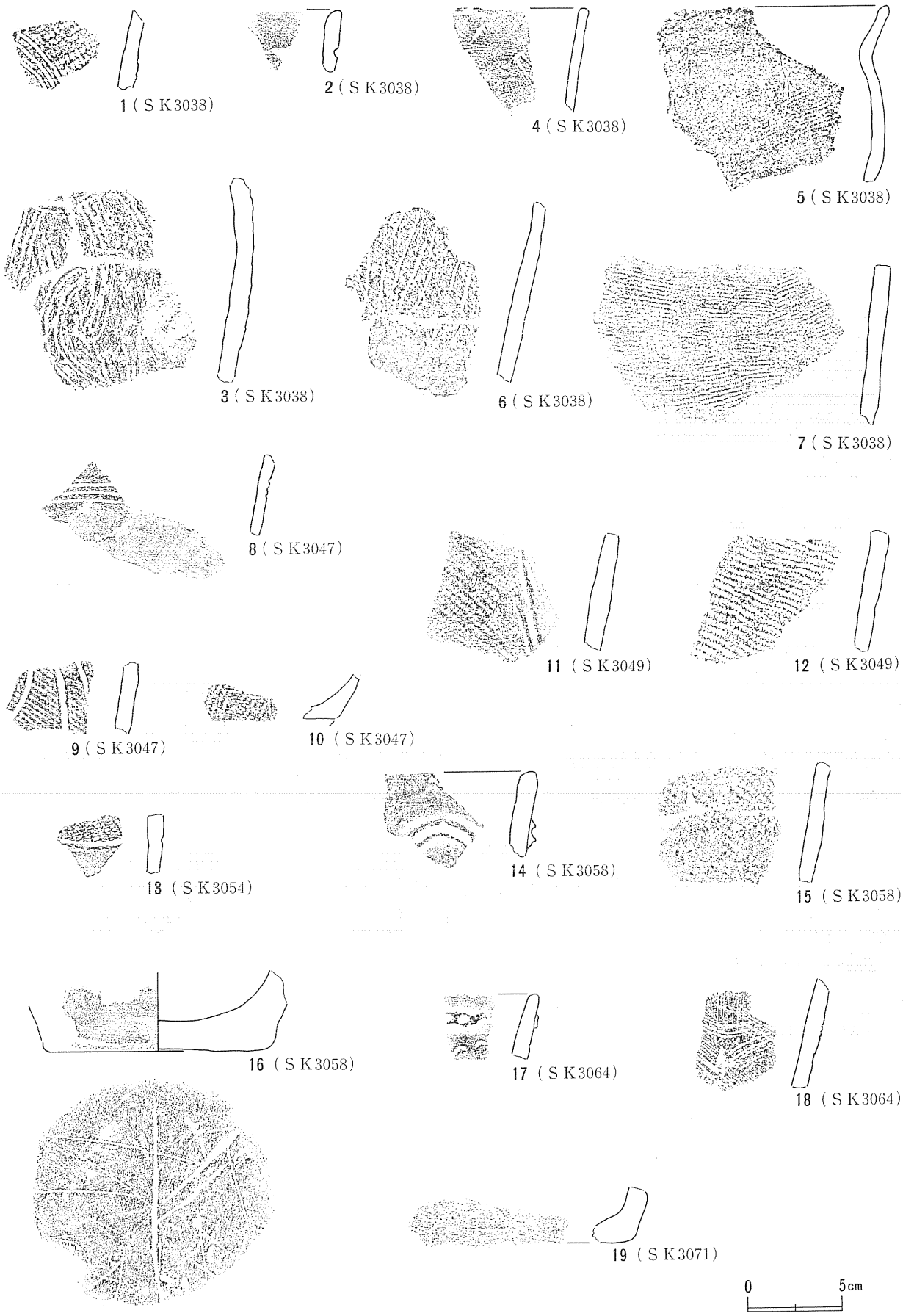
第93図　遺構出土土器類(20)（SK1563③・1564・1566①）



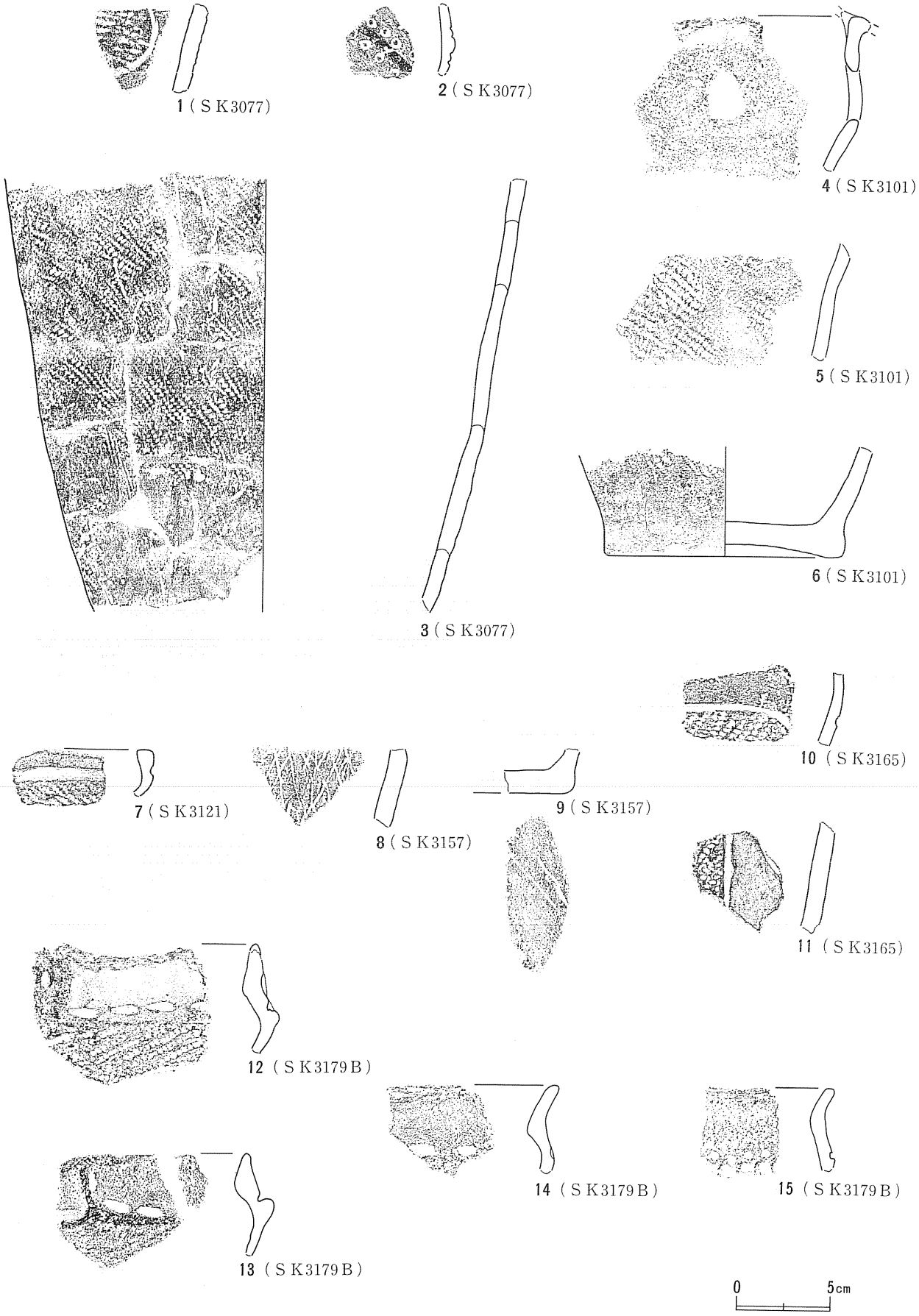
第94図　遺構出土土器類(21)（SK1566②）



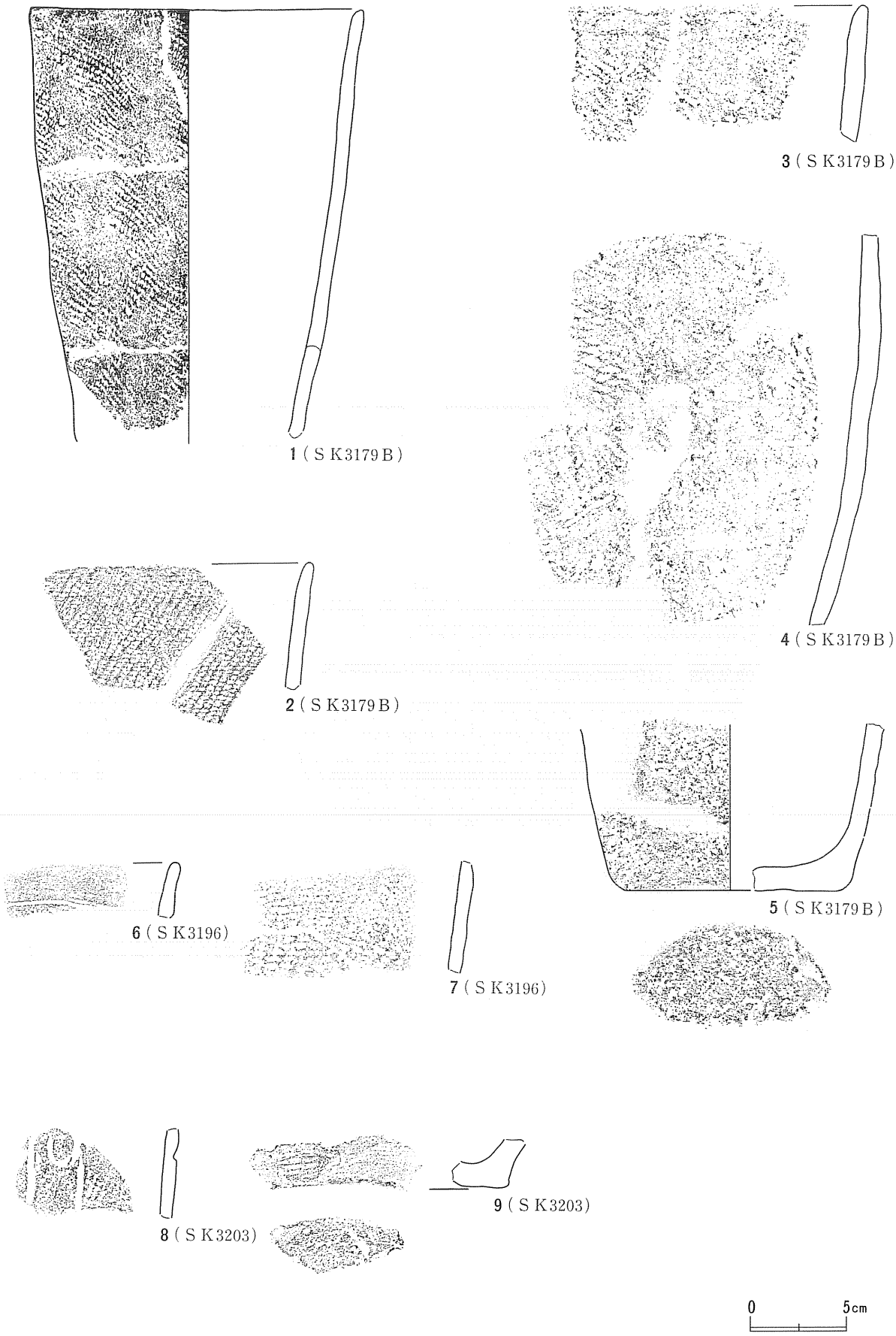
第95図　遺構出土土器類(22)（SK1573・3019・3026・3030）



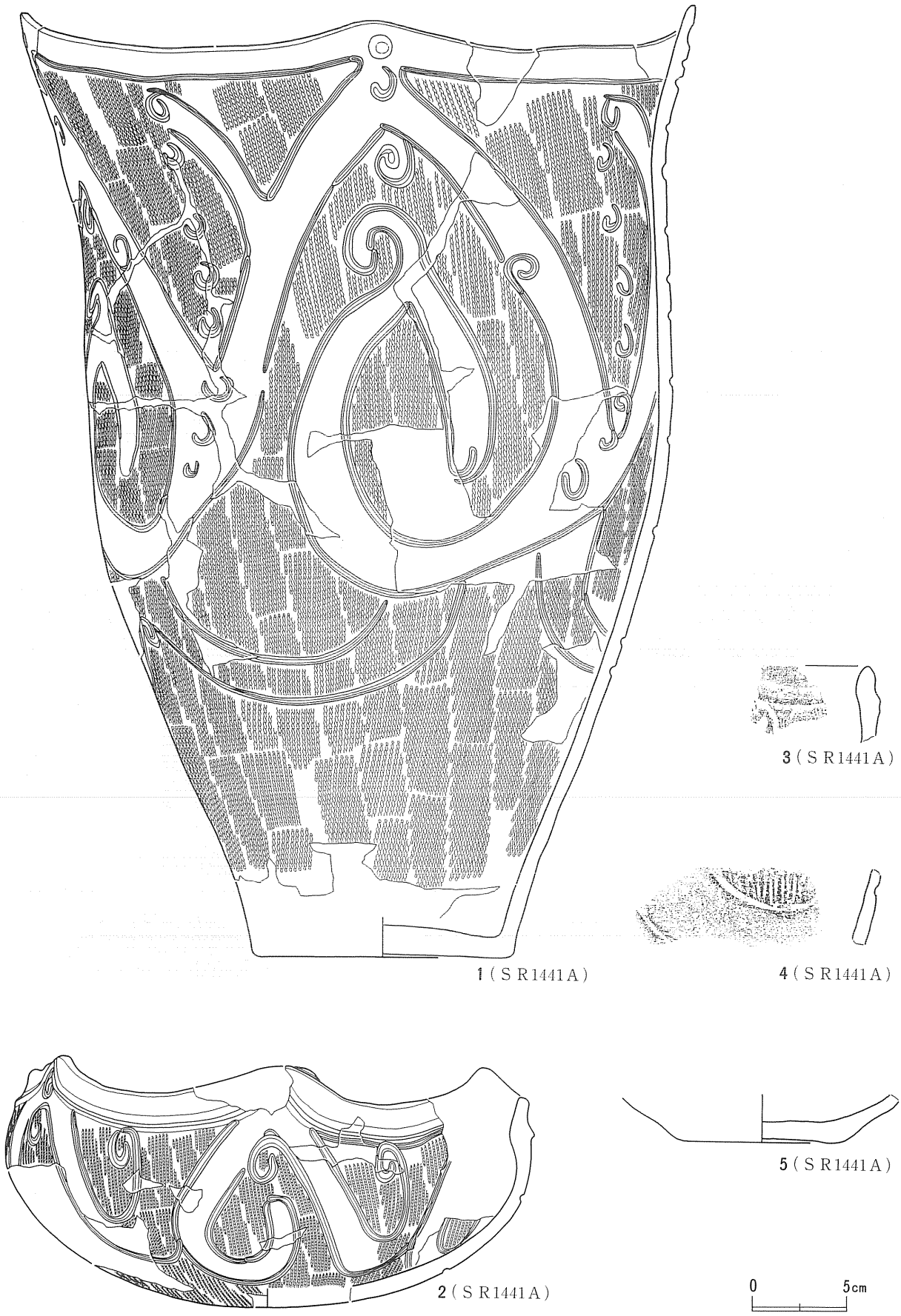
第96図　遺構出土土器類(23)（SK3038・3047・3049・3054・3058・3064・3071）



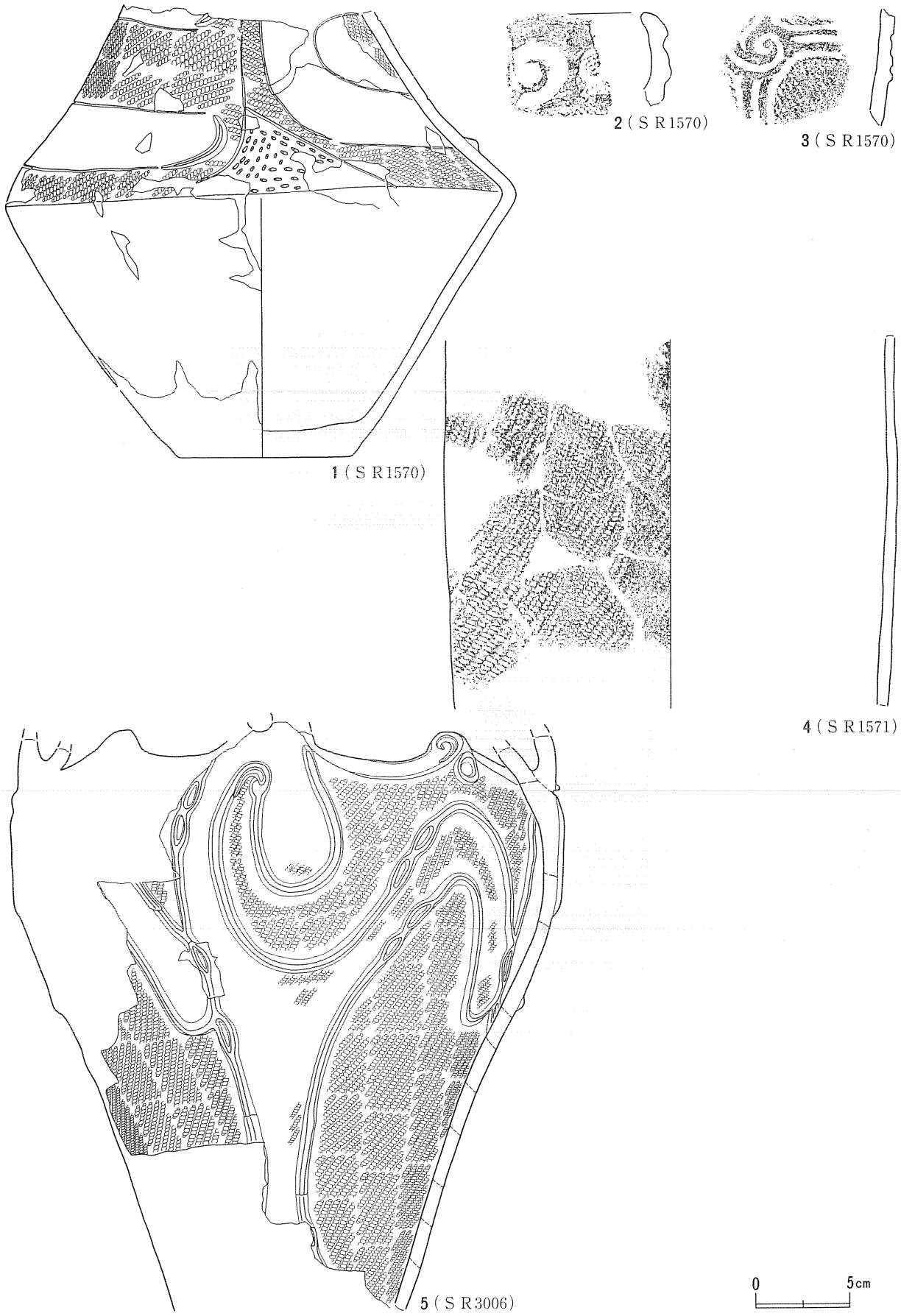
第97図　遺構出土土器類(24)（SK3077・3101・3121・3157・3165・3179B①）



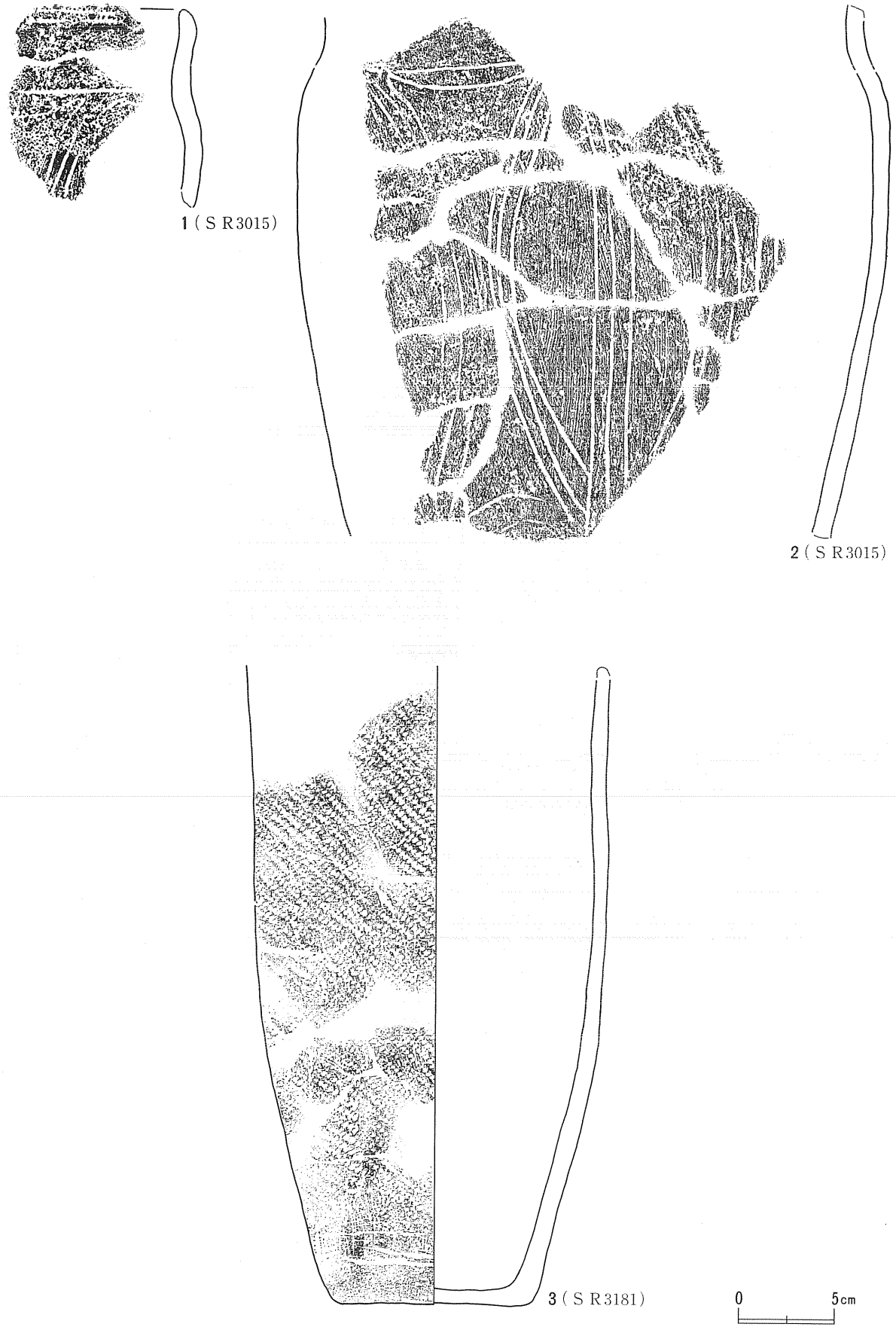
第98図　遺構出土土器類(25)（SK3179B②・3196・3203）



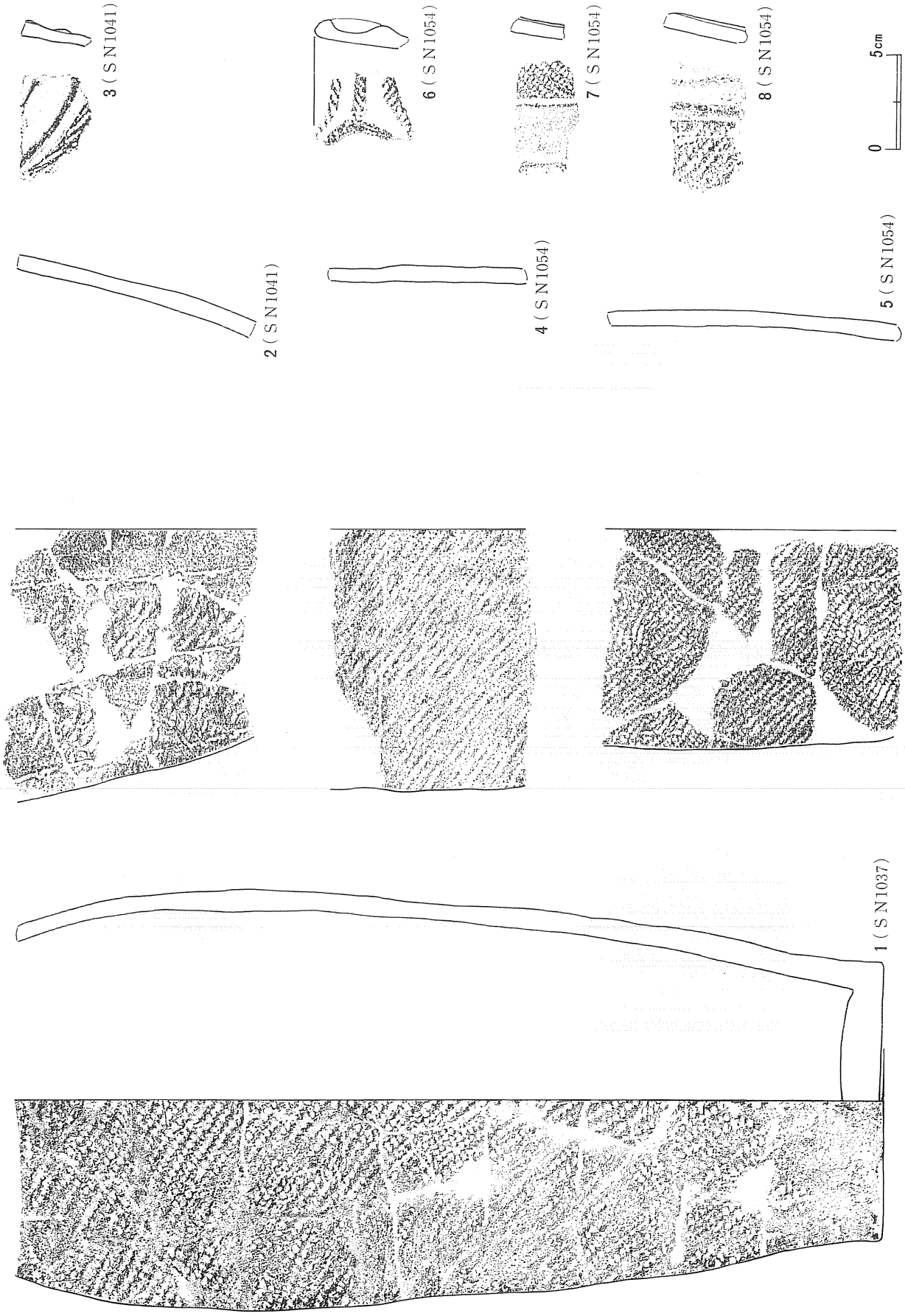
第99図　遺構出土土器類(26)（SR1441A）



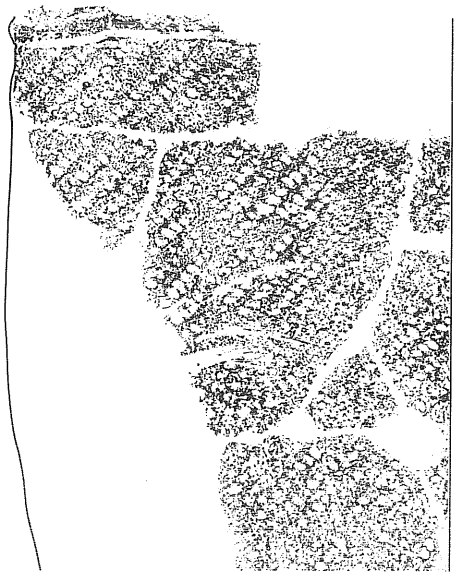
第100図　遺構出土土器類(27)（SR1570・1571・3006）



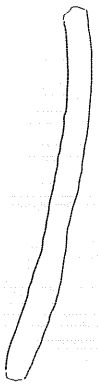
第101図　遺構出土土器類(28)（SR3015・3181）



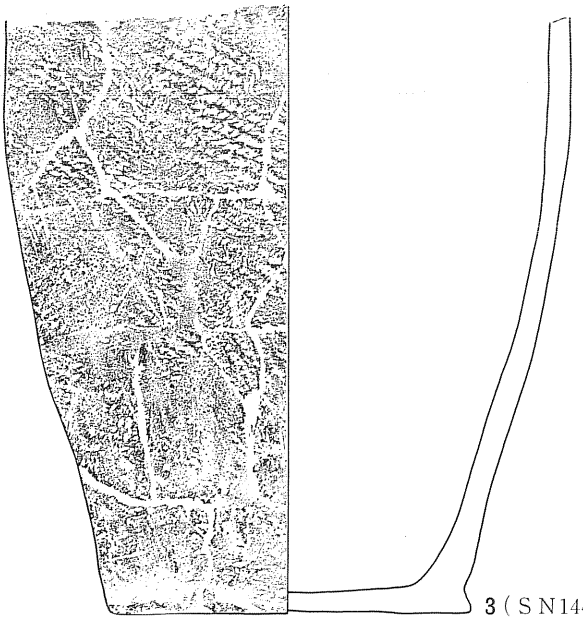
第102図　遺構出土土器類(29)（SN1037・1041・1054）



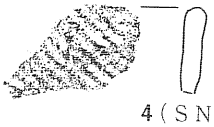
1（ＳＮ1211）



2（ＳＮ1327）



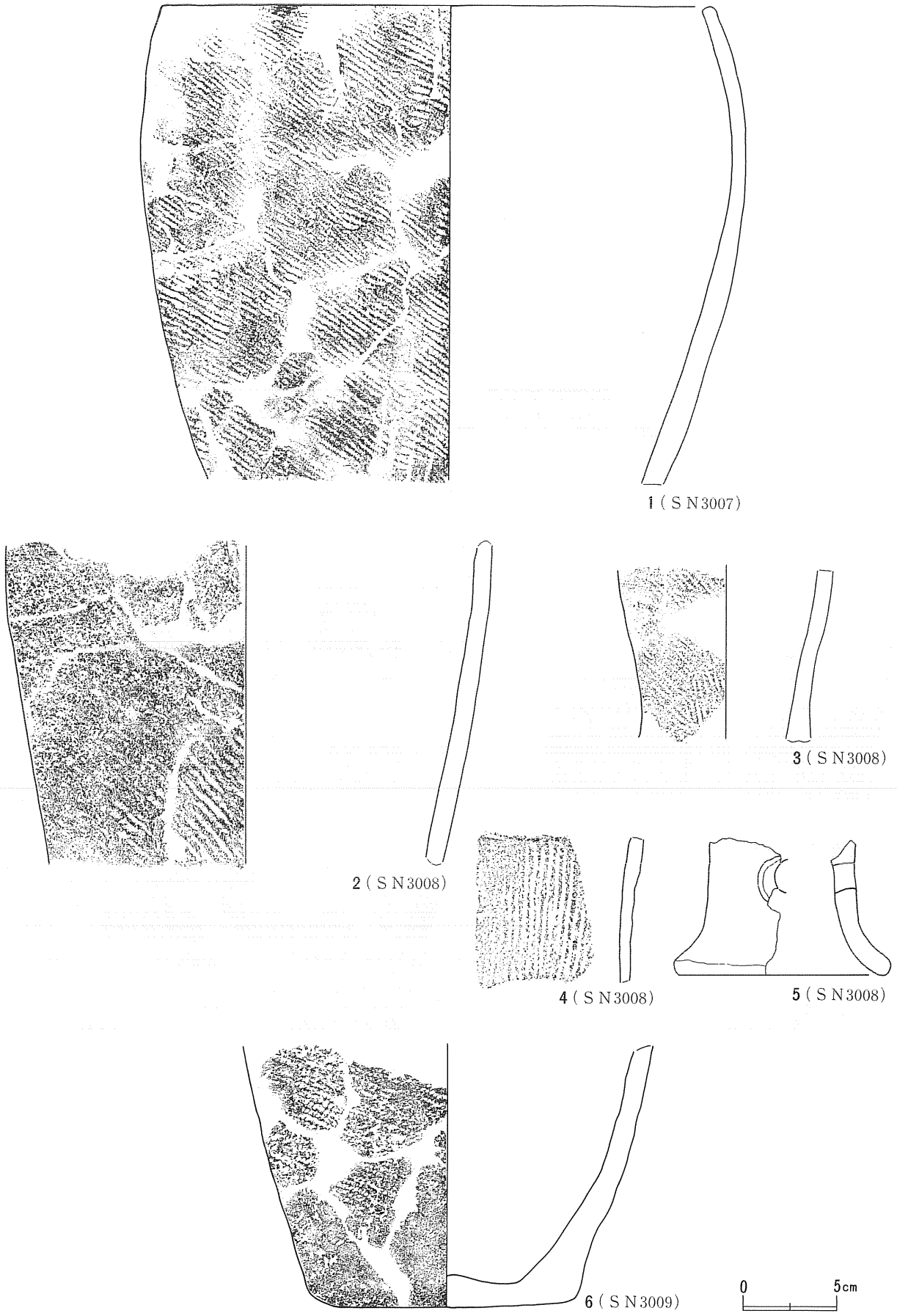
3（ＳＮ1444）



4（ＳＮ1444）

0　5cm

第103図　遺構出土土器類(30)（SN1211・1327・1444）



第104図　遺構出土土器類(31)（SN3007・3008・3009）